
ハルラン～雨を呼ぶ猫の歌～

春日彩良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルラン～雨を呼ぶ猫の歌～

【ノード】

N9237M

【作者名】

春日彩良

【あらすじ】

空が晴れたら、僕を忘れて…。韓国、ソウル市街　雨の日
しか営業しないという謎の店『ペニー・レイン』。警察大学校出身のミンホは、仮配属された捜査課でコンビを組まれた捜査のチヨルスと共に、とある捜査のために店を訪れ、そこで【ナビ】と呼ばれるボーイに出逢う。気まぐれな猫のようなナビに振り回されながらも、次第に惹かれていくミンホ。だが、やがて彼は知ってしまう。ナビの秘密と、哀しい雨と罪の記憶を。　毎週水曜日更新

冊子の構成 (概要)

握りこぶし、ひじこづけ……

だつて、僕は雨だから。
ほんの一瞬、肩先を濡らして。
おろしたてのステッツが血無じで、
ツイてないけど、
悪くない。

そんな雨だから。

空が晴れたら、僕を忘れて。

通り雨に、降られたんだつて

「いや、ひとつくるかもな」

ガードレールにもたれて、無意識にここ何日か剃り忘れていた無精ヒゲの感触を確かめながら空を見上げた男は、そう呟いて顔をしかめた。

ついさっきまで、サングラスが必要かと思つての田差しだつた。夏休みに浮かれる世間とは違い、季節に関係なく働かれる自分には、癪に障るような晴天だった。

それなのに……

夏の天気は気まぐれだ。

男の視線の先で、怪しい雲行きの空の合間からこぼれる陽光が、ソウル駅のガラス張りの駅舎に反射して輝いた。

「……遅いな」

何度もとなく確かめた『3番』と書かれた停留所の番号を、再び振り仰いで確認する。

やはり、場所に間違いはない。

仁川国際空港から、ここソウル駅まで直通のリムジンバスの到着を、彼はもう有に一時間は待っていた。

約束の時間を過ぎても、田当ての相手を乗せたバスは一向に現れない。

こんなことなら、職場を出る時に、あの口やかましいクムジャ姉さんの忠告通り、傘を持つて来れば良かった。

待ち合わせた相手が持つていればいいが、会つ前に降り出してしまつたら、自分は濡れぬみになつてしまつ。それで風邪でも引いた日には、姉さんに「それ、見たことか」とバカにされ、しばらく笑い者にされるのは目に見えている。

もう一度空を見上げて溜息をついた時、ターミナルの向こうから、ようやく待ちかねていたバスが姿を現した。

『KALリムジン』と印字された、水色にブルーのラインが入った車体が停車すると同時に、プシューと空気が漏れるような音を立てて開いたドアから、荷物を抱えた若い男が、転がるように飛び降りて來た。

「兄貴ッ！ チョルス兄貴ッ！」

バスから吐き出された人ごみの中に紛れても、頭一つ抜け出た長身の彼は、行く手を遮る人波を掻き分けて、手に引いたトランクをガタガタ言わせながら、一歩一歩向かってくる。

「遅いよ、ミンホ！」

男はガードレールから腰を浮かせ、向かってくる若い男を待ち受けた。

「「めんなさ」」つー渋滞に巻き込まれて

ようやく人ごみを抜け、息を切らせながら詫びる彼が田の前まで辿り着くと、待たされた方の男は彼の右肩に自分の右肩をぶつけて、それからギュッと強く抱きしめた。

「お帰り、ミンホ。よく帰つて來たな」

抱きしめられた若い男の方も、男の背中に手を回すと、ギュッと力を入れてその背を掴んだ。

「ありがとう、チョルスピヨン」

その時、チョルスと呼ばれた男は、若い男の後ろで息を切らせている少女に気がついた。小さな彼女は、長身の若い男の影になつていて、彼からは今まで全く見えずにいた。

「おっヒー。悪い。そちらが、例の……」

「あ

若い男が気付いて振り返る前に、その少女はピヨコンと勢いよく

頭を下げる。

「パク・ミジュですっ！ 初めまして」

クセのない長い黒髪が、サラリと揺れる。
その拍子に、手にしていた大きなキャリングケースが倒れそうになり、若い男が慌てて支えた。

「ごめんなさい、オッパ」
「気をつけて」

慌てて謝る少女に、若い男は柔らかく微笑む。

「最初から見せつけてくれるねえ」

男が呆れた声を出すと、少女は途端に赤くなつて「すみません」と頭を下げる。

「いやいや、君が謝ることなんてないよ。だけど、兄さんを差し置いて、留学先でこんな可愛い婚約者を捕まえて帰つてきた可愛い妹には、後でたっぷり事情聴取させてもらわないとな」

ニヤッと笑つて、若い男の手からトランクを奪う。

「さ、行こうか。早くしないと、ひと降り来そうだしな。そこで、タクシー拾つから」
「タクシーなんて、久しぶりだな」

若い男は息を吐きながら、周りの人ごみを見渡す。

「何だよ、アメリカはタクシーもないような田舎だったのか？」

男がからかうと、若い男は苦笑しながら首を横に振った。

「そうじゃないけど。向こうじゃ、自家用車がないと生活できないから。銀に青のライン（一般タクシー）が懐かしいです」

「可愛い弟の一年ぶりの凱旋なんだから、黒に黄色（模範タクシー）ぐらい奮発するぜ。相乗りしたいってんなら、別だけどな」

「それも悪くないですけど」

若い男がそう言つと、男はヒュッと甲高い口笛を鳴らしてから、大げさに田を見開いて見せた。

「変わったなあ、お前。昔は、他人と相乗りなんて真っ平ゴメンのお坊ちゃんだったのに。どこの国の王子様だよつて、みんなで笑つたの覚えてるか？ アメリカで相当揉まれて来たのか？ え？」

肩をぶつけて笑う男に、若い男も同じように笑いながら、逞しく張つた肩をぶつけて応戦する。

「揉まれたのはアメリカで、じゃないですよ。たつたの三ヶ用だつたけど、補職の僕を、本職以上にじごいてくれたのはチャ尔斯ヒヨンでしょう？」

「こき使われたって書いてえんだろ？」

人差し指で額を小突いて、男は無精ひげの下の唇を歪めて笑う。若い男は小突かれた額を擦りながら、周囲の喧騒を見回した。

「それにしても、懐かしいな。この人『』……三年前まで、本当にここで働いてたなんて信じられない」

「おーおー。西海岸でのんびりしそうしたんじゃねえか？ 警察大学校出のヒーローの名前が泣くぜ。しばらくはリハビリが必要か？ しつかり稼がないと、後ろのカワウイコちゃんに愛想尽かされるぞ」

男の言葉に、二人の後を小走りで追いかけてきていた少女が頬を染める。

「式はいつなんだ？」

「まだ、決めてないんですね」

「ソウルでやるんだろ？」

「そのつもりですけど……」

その時、男の方ばかりを見て話していた若い男の肩が、すれ違いざまに誰かとぶつかつた。

「あっ！ すみません」

若い男は肩を押さえて慌てて立ち止まる。

ぶつかつたと思われる相手が、ほんの一瞬だけ男を振り返る。

小柄な身体に、目深に被つた野球帽から覗くその輪郭はほつそりと華奢で、襟足に伸びた黒髪が、汗で白い首筋に張り付いていた。

「……いえ」

短くそれだけ言つと、彼は再び帽子のつばに手をやり、男に背を向けた。

「……」

「うわーー！」

か細い鳴き声とともに、不意に足元をフワリとした感触が撫で、男は思わず飛び上がった。

「こいつた返すロータリーの

「うつた返すロータリーの人ごみを縫うようにして、先ほどの野球帽の彼の背中を追いかけていく。

その時、若い男の足元に、ふいにキラリと光る何かが転がつてき
た。

「あう……」「

思わず腰を屈めてそれを拾う。

そう言つて顔を上げた時には、既に彼と猫の姿は雑踏の中に消えた後だった。

「どうした？」

前を歩いていた男が振り返る。その時男の額を、ポツリと一滴、空から降ってきた雨が叩いた。

「……降り出したな」

空を見上げて、溜息をつく。

(知らないの?)

「早く行け……ミンホ？」

（猫は、雨を呼ぶんだよ……）

男はうずくまつたまま動じない若い男の元へ歩み寄った。側まで近付いて見た時初めて、若い男の手の中に、小さく輝くダイヤのピアスが握られているのが分かった。

「それは？」

先ほどから若い男の視線は、そのピアスに注がれたまま動かない。

「オッパ？ どうしたの？」
「え？」

後ろから追いついて来た少女が、若い男の隣りに屈みこむ。

「そこ、血が出てる」

少女が指差したのは、男の右の耳たぶだった。男が手をやると、確かにヌルリと血の滑る感触がして、男の指先を濡らした。いつ怪我をしたのか、まったく心当たりのない傷だった。

「痛いの？」
「いや……どうして？」
「だって、オッパ……泣いてる」

少女の言葉と同時に、冷たい雨がひとしづく、男の頬を打った。

男は反射的に、手の甲で雨の落ちた頬を拭った。しかし、すぐに新しい雨が、乾く間を与えず男の頬を濡らし続ける。

握りこんだピアスが、手の中でキラリと輝いた。

降りだしたのが、廻の店の圖々……

薄いシャツの胸元を押さえて、先ほどから一度二度と深呼吸を繰り返す。

狂ったように早鐘を打つていた鼓動は、先ほど腕の内側に落とした痛みのために、大分和らいでいた。

それでも、一時は吐き気まで伴つた程の緊張感が短時間で完全に去ってくれる訳もなく、少しでも気を逸らすため、視線を落とし、足元のアスファルトの田地に集中した。

「おいつー！」

その時、アスファルトに反射していた、路地から漏れるネオンの明かりが突然陰ると同時に、粗野な声に背中を押され、少年は飛び上がった。

「何ビクついてんだよ。情けねえな」

少年が身を隠していた路地裏に、無理やりその大きな身体をねじ込むように入ってきた若い男は、バカにしたように鼻を鳴らしながら彼の肩を小突いた。

ただでさえ狭いこの空間には、途中から割り込んできた男のお陰で、ますます暗く籠つた空気が満ちた。

「ほら、これ

そう言つと、突きつけるよつこ、少年の胸に千切られたノートの切れ端を押し付ける。

「“お前の番”だよ。嬉しいか?」

「……あ」

渡された紙切れを開いた少年の手が俄かに震えだす。

「ジスクは?...」

「は?」

叫ぶように尋ねた少年に、紙切れを渡した男は呆れ顔で振り返る。

「あの冽えないお前の女か? 知らねえよ。どうせ、もうすぐ“やこ”で会えるだろ」

「お……お前は、おかしいと思わないのか?」

震えながらも、少年は男の太く逞しい腕に縋つつき、食い下がる。

「何で、誰も帰つて来ない! 今まで“あそこ”に行つた奴ら誰も

……

「おこ、いい加減にしろよつー。」

男は苛立たしげに腕を振り上げ、それを掴んでいた少年ごと路地の壁に叩き付けた。

息を詰まらせて崩れ落ちそうになる少年の髪を掴んで、後頭部を固い壁に押し付けて顎を上げさせる。

「誰も帰つて来ない? それは、帰つて来たくないからさ。お前の女も、夢中でシャブつてるか、ともなきや今頃、ブツを金に換えて、新しい男と海外に高飛びでもしてるかもな」

「つな?...」

「どうしたじる、俺の知ったことじゃない」

その時、不意に男の厚い胸板を揺らして、胸ポケットに入れた携帯が震えだした。

「どうした？」

少年の髪を掴んだ手は離さぬまま、顎と耳に挟んで携帯に応答する。

「何だつて？！」

漏れてくる受話器の向いの声はよく聞き取れないが、酷く慌てている様子だけは少年にも伝わってきた。それを受けた男の方も、見る見る顔から血の気が失せてゆく。

「バカどもがつ！ だから、あれほど待てって、俺が……ツクソ！」

男は吐き捨てると同時に、乱暴に少年の髪を掴んでいた手を離した。

「…………どうしたの？」

「一斉摘発だよつ！ 番生つ。こんなに早く……ハメられた」

男は悔しげに歯噛みして、手にしていた携帯を壁に叩きつけ頭を抱えた。

戸惑うばかりの少年を残して、悪態をつきながらその大きな体躯を翻して男が路地へ出ようとしたその時、これまでの薄暗く淀んだ空気を一掃するような、強いサーチライトが、一直線に路地裏に入り込んできた。

「うわっ……」

床に折り重なって倒れつめき声をあげる若者の上に、巡回から床つたばかり警官は、思わず驚きの声を上げた。拘置所内に入りきらないそれは、廊下にまで溢れかえっている。

「…………なあ…………くれよ…………頼むよ…………」

地獄の亡者のように長い髪を振り乱した若者の一人が、警官の足に縋り付いてきた。

「離せっつ…… つたぐ」

足で踏みつけて署内の奥へと進む。

「ああ、お疲れ、ハ警査」

同じじよひに群がる若者を足蹴にしていた同僚の一人が振り返る。

「一体何なんだよ、これは?」

同僚の元まで辿り着くにこも苦労しながら尋ねると、彼は拘置所の柵の向ひうを顎でしゃべった。

「ソン先輩とチョルスのヤマだよ。ほら、何ヶ月も前から追つてただろ？ 学生の間で出回つてたクスリの……」

「いい加減にしろっ！ タツサと吐けッ！」

その時、拘置所内に耳をつんざくような怒声が響き渡つた。

「クスリはどこで手に入れた？ どうから仕入れて、大学で流したのか聞いてるんだ」

「……へへ……エーテン……フフフ」

「本当の天国に送つてやろうか？！ ああっ？！」

床に伸びた若者の襟首を掴んだ中年の警官は、乱暴にそれを揺さぶつた。若者はされるがままに首をガクガクと前後に揺らし、氣味の悪い笑い声をあげている。

「素直に吐いたほうが身のためだぞ。どうせ、就職は絶望的だ」

もう一人の若い警官が、軟体動物のように揺れる若者の首を支えて、中年の警官と一緒にその若者に詰め寄る。

「親にあんなに高い学費を出してもらはにながら、廃講堂でクスリ打つて乱交パーティーなんて、まったく羨ましい」身分だぜ

若い警官が、若者の頭を拳固で小突けば、若者は頭をダランと垂れ下げて笑う。

「あんまりナメるなよ、小僧。俺らはソウル市警の中でも氣が短いので有名なんだ」

中年の警官が若者の背後にいる若い警官に田配せすむと、若い警官は若者の襟首を後ろから掴んで締め上げた。

「……」

息を詰まらせ、顔色を変える若者の耳元に、若い警官は鋭い切れ長の瞳を光らせ囁いた。

「いつまで意地を張れるかな？ 早く答えないとい、脳に血がいかなくなるぜ。賢い頭が、もつと賢くなっちゃうな」

若者が、自分を締め上げる警官の腕を苦しげに呂く。

「吐く気になつたか？」

若者は青い顔のまま頷く。

「よし、聞いてやる。チヨルス、もう離せ」

苦しげに呻く若者を見下ろしていた中年の警官がやう指示を出すと、若い警官は言われたとおりに若者の襟首を解放した。

「さあ、どうから話してもら……」

しかし、若い警官が言い終わらない内に、首の戒めを解かれた若者は、警官の靴の上にゲロゲロと盛大に嘔吐した。

「」の野郎……」

警官の激高を他所に、周囲からは他人事の忍び笑いが漏れた。

「お前、絶対に許さねえからな」

再び若者の襟首を締め上げた警官は、吐しゃ物のすえた匂いも相まって、思い切り眉間に皺を寄せながら、同僚の間でも特段に『目付きが悪い』と評判の、睨みをきかせる。

だが焦点の合わない視線をさ迷わせるだけの相手に、怠慢の眼光が効く訳もなく、彼の鋭い視線は若者を通り越して、先ほどから拘置所の隅で膝を抱える、陰気な空気をまとった少年の元に迫り着いた。

「何だよ？」

若い警官は、最早ただの軟体動物と成り果てた若者の身体を床に投げ出して、少年に向き合つた。

「先輩、あいつ……」

「明洞の路地で、最後に拾つた奴だ」

若い警官の耳打ちに、中年の警官が答える。

「よお、こいつらと違つて、お前は随分寡黙なんだな」

若い警官は吐しゃ物で汚れた靴もそのままに、カツカツと床を踏み鳴らして少年の元に向かつた。

長身の彼が座つた姿勢のままの少年を見下ろせば、随分な威圧感が生まれる。それを充分分かつた上で、更に胸を張り、少年を威嚇する。

「お前も見てただろ？あのバカじや話にもならない。床に倒れてる奴らも同じだ。見たとこ、お前は少しさまともそうじやないか？せつかく大学行つておベンキヨしてんだ。ここは賢く、先に吐いちまた方が、今後のタメつてもんじやねえか？」

「……お、俺……」

「ん？」

若い警官とは逆に、中年の警官は座り込み、顔を傾けて、俯いた少年の表情を覗き込む。

威圧と懐柔。

ターゲットに合わせて、使い分ける戦法。

長年コンビを組むこの二人の警官の間では、今更打ち合わせなどしなくとも、呼吸するくらい自然になせる技だった。

「……お……俺え」

だが、何事かを吐くかと思われたその少年は、自白の代わりに目に溜めた大粒の涙を零しながら、ただガタガタと震えるばかりだつ

た。

「ダメだ。こりや」

しばらく少年の言葉の続きを待つてみたものの、先に渾れを切らしたのは、若い警官の方だった。

「時間の無駄です。先輩、もう一人、適当なヤツ締めましょう」

座り込んだ中年の警官の腕を引いて、重い身体を立ち上がらせるための手助けをする。

「オラッ！ 拘置所は眠る場所じゃねえんだぞ！」

少年に背を向けて、汚れたままの靴で床に転がる若者を二三人蹴り上げながら、道を開ける。

その時だった。

少し後ろを歩いていた中年の警官が、突然バランスを崩して前につんのめった。

「ソン先輩？！」

驚く若い警官の前で、中年の警官は床に転がった若者の一人を巻き込んで、拘置所内の冷たい床にベシャッと音をたてて倒れた。

肉付きのいい中年の警官の下敷きとなつた若者は、クスリが切れたこととは異なる種類の、悲痛な呻き声をあげている。

「ソン先輩、大丈夫ですか？！」

下敷きになつた若者そつちのけで、若い警官は慌てて床に倒れこ

む先輩の身体を抱き起こそうと、その背中に手を差し伸べた。

その瞬間、ヌルリと嫌な感触に手が滑り、そのまま若い警官の指は冷たい金属に触れた。

その時初めて、若い警官は、先輩の腰に深々と突き立てたナイフに必死の形相でしがみついている、先ほど陰気な顔をした少年の姿に気がついた。

「何してるんだ、お前つ！」

若い警官は、慌てて腰に張り付くその若者を引き剥がそうとした。

「…………」

少年は意味のない嗚咽を繰り返すばかりだったが、骨と皮のようなその華奢な風貌からは想像できないほどの狂氣めいた馬鹿力で、中年の警官に取りすがっていた。

「離れつつ、お前つ！」

少年の身体をやつとの思いで引き剥がすと、少年はもんじつつて拘置所の端の壁まで転がった。

「……畜生、狂つてやがる」

肩で息をしながらそう吐き捨てる警官の前には、見るも無残な先輩の姿が横たわっている

溢れ出した血の海の中に腰から下を沈め、取りすがるために穿たれた楔のよう、腰から直角に突き出たナイフがきらめいていた。

「誰か、誰か来てくれ！ 早くつ！」

若い警官が大声で叫ぶと、拘置所内は騒然となつた。

「全治、三ヶ月の重症だ」

二日後、署長室に呼び出された若い警官 チャン・チョルスは、眉間に皺を揉みながら、疲れた表情でそつ紹げる、署長の言葉を聞いた。

「神経を切つててな。治つても、元のよつて歩き回れるよつてなるには、長い時間のリハビリが必要だそつだ」

「俺、待つてます」

即答するチョルスに、署長は苦い表情を浮かべた。

「待つてどつする？ 半年か、一年か、いつ終わるかも分からないリハビリの間、お前は遊んで暮らすのか？」

「署内の雑用でも何でもします。ソン先輩のリハビリも手伝います。ソン先輩以外とコンビを組むつもりはありませんから」

チョルスの言葉に、署長はゾンツと強くデスクを叩いた。

「事件はどつする？ せつかくシッポ掴んだヤマだらつ。ヤマが悠長に、ソンが回復するまで待つてくれると想つのか？」

「でも……！」

「これは、命令だ」

署長がピシャリと、チョルスの言葉を遮る。

「明日、お前の新しい相方を決める。分かったな？ 分かったらさつと出て行け。用は済んだ」

怒りに震えるチョルスを冷たく一瞥すると、署長は厄介者を追い払うように、所長室のドアを指差した。

チョルスは鋭い眼光で署長を睨みつけると、奥歯をグッと噛み締めて踵を返した。

「……ったく、狂犬が」

署長はチョルスが部屋を出て行く前、わざと聞こえるようにそう言つた。

＊＊＊

見舞いの花束を持つて、病室の前に立つ。

警察官になつてから、随分と危ない橋を渡つて來たが、幸運にも病院のお世話になるような事態に至つたことはない。

無機質な警察病院の白い部屋が、ドア一枚を隔ててそこにある。その部屋の中央に置かれたベッドの上には、自分がこのソウル市警で働くようになつてからずっとコンビを組んできた、粗野で教養はないが、警察官としてのほどほしむ情熱を持つた先輩の姿がある。

チョルスは意を決して、病室のドアを開けた。

中では、ベッドの脇で彼を見守つていた彼の妻と幼い娘が、入ってきたチョルスに気付いて振り返つた。

「……チョルスさん」

チョルスは一人に向かって、丁寧に頭を下げた。

「先輩の様子は、いかがですか？」

彼女は夫の身体にかかった、白い掛け布団を直してやりながら答えた。

「今はぐっすり眠っています。痛み止めの点滴が効いたみたい」

妻は微笑むと、娘の手を引いて言った。

「私たち、洗い物をするために一旦家に帰ります。何のおもてなしも出来なくて「ゴメンなさい」でも、ゆっくりしていってくださいね」

男同士の話もあるだらうからと、彼女なりに気を使ってくれたのが分かつて、チョルスは申し訳なく思い、再び深々と頭を下げた。

「後、よろしくお願ひします」

そう言つと、妻は娘を連れて病室を出て行つた。

チョルスは持つてきた花束を慣れない手つきで枕元の花瓶に挿すと、ベッドの脇にあつたパイプ椅子に腰を下ろした。

田の前で目を閉じて眠る男は、こうして改めて見ると、出会つた頃よりも、随分と年を取つてしまつたんだということを実感する。年中外を歩き回つて日に焼けた黒い肌も、病院の白すぎるベッドの上では、くすんでしまい、生気がないよう見えた。

「……チョルスか？」

その時、横たわる男が、片目を開けてチョルスを見上げた。

「大丈夫ですか？ 先輩」

チョルスが覗き込むと、男は気恥ずかしいのか、照れたように顔を背けた。

「お前、何でこんなところにいる？」

「何でって、先輩のお見舞いに来たんですよ」

「バカヤロ、あのヤマはどうした？ こんなとこで油売つてる場合じゃないだろ」

「だつて、先輩がいないのに」

「ガキみたいなこと言つてるんじゃないねえよ」

男はベッドの中から手を伸ばして、コチンとチョルスに拳固を見舞いした。

「……痛いですよ、先輩」

「痛くしたんだから、当たり前だ」

涙目になつて額を押されたチョルスに、男は続けて言い放つ。

「お前は俺がいなきや何も出来ないのか？ デカイ団体して、赤ん坊と同じか？ 18の年から俺がお前に叩き込んできたのは、何だつたんだ？」

高校を卒業してすぐ、ソウル市警に入つたチョルスは、巡査から今まの巡警の職に上つたまで、底辺から叩き上げてきた警官だった。同じように高卒で、事件の場数を踏んでドロ臭く生きてきたこのソンという男が、入庁して以来のチョルスの相棒であり、教育係だつ

た。

親子ほど年の離れたこの野放図な先輩を、チヨルスは本当の父親のように慕っていた。

「先輩以外と、コンビを組めって言われました
「ヤマは待つてくれないからな」

恨めしげなチョルスの咳きに、男は平然と頷いた。それから少し表情を緩めて、駄々つ子のような目で自分を見つめるチョルスの頭をクシャクシャに撫でながら言った。

「俺が今まで教えてきたこと、お前はちゃんと分かってる筈だ。今度はお前が、後輩に教えてやる番だ。俺に義理立てる気持ちで他のヤツとのコンビを嫌がるなら、それは違うぞ、チョルス。そう思うなら、しっかり先輩としての役割を果たして、俺を安心させてくれ」

チョルスはまだ納得がいかないという顔をしていたが、子どものよつに頭を撫で続ける男のために、やがてコクリと小さく頷いた。

「お前の相方が決まった」

再び呼び出された署長室で、チョルスは相変わらず冷たい署長の声を聞いた。

「名前は、ハン・ミンホ。今日の午後、署に到着する予定だ。顔合

わせが済んだら、早速事件の概要を教えて明日からでも捜査に入れ
「概要つて言つたつて、いきなりは無理でしょ? どこの署で
経験があるんですか?」

無茶な指示にチョルスがムツとして問い合わせる。

署長はチョルスと目を合わせることなく、撫然として言い放つた。

「経験はないが、ココはいい筈だ」

そう言って、コメカミの辺りを指で指し示す。

「何でそんなこと分かるんですか?」

「新米だが、肩書きは『けいえい警衛』。意味、分かるか?」

嫌味な調子でそう投げかける署長の言葉に、チョルスの目が点になる。

「……『警衛』つて、まさか……」

「そう。警察大学校出身の正真正銘のエリートだ」

署長は鼻で笑つてチョルスを見た。その目が、言外に「お前とは違つて」と語つていた。

韓国の国家警察機構の中において『警察大学校』とは士官学校的な意味合いを持ち、卒業後は幹部候補生としての輝かしい将来が約束されている。

それ故に、当然入学に当たつてのハードルは高く、全大学受験者数の上位5%ほどしか合格出来ないという狭き門だった。

通常、大学進学する男子が高校卒業後に身体検査を受け、学校を

休学して兵役につくところ、彼らは警察大学校卒業後に、機動隊や参謀本部での一年間の兵役義務を課せられる。その後『循環補職』として、三ヶ月から半年程の短期間で生活安全課や刑事課等の様々な部署で補佐的な勤務につき、適正が認められた部門に配属されていくのである。

今回、負傷したソンの後釜として配属されるのが、その『循環補職』の座にある幹部候補生とあつては、チョルスが動搖するのも無理はなかつた。

入庁以来十年、ソンとコンビを組んで現場の最前線を駆け回つて来たチョルスに、身近で警察大学校出身者を挙げる機会などなかつた。同じ警察官とは言え、鉄砲玉のように挿げ替えのきく下つ端であるチョルスたちと、警察機構の中核を担うために教育された彼らとしては、そもそも住む世界が違うのだ。

チョルスは部下を持つたことさえなかつた。

それなのに、ソンの負傷という不可抗力の結果とは言え、初めて持つ部下が（一時的な『補職』であることを考慮したとしても）階級では『警査』^{けいさ}である自分より明らかに上位である『警衛』^{けいえい}であることなど、チョルスには想像も出来ない事態だつた。

「幹部候補生つて言つたつて、ついてこの前ようやく兵役が終わつたばかりの甘ちゃんだ。事件の場数を踏んでるお前には適わないだろ。しっかり指導して……期待してるぞ」

言葉とは裏腹に、署長の目は意地悪く光る。高卒叩き上げの鉄砲玉に、エリート予備軍の手綱が握れるのかお手並み拝見 その目は、そう言つていた。

「どんな子かしらねえ」

チョルスのデスクの上に淹れたてのコーヒーを置きながら、ベテラン婦人警官であるクムジヤが呟く。

「『循環補職』ですって？ 長いこと勤めてるけど、同じ職場で働くなんて初めてよ。あーん、可愛い子だつたらいいけど」「仕事に可愛いか可愛いかは関係ないでしょ、姉さん」

チョルスがマツとしてコーヒーを啜りながら言つて、クムジヤは田を吊り上げた。

「毎日毎日、こんなむさ苦しい男たちに囲まれてる私の身にもなつてよ！ 田の保養くらい求めたつてバチは当たらないはずよ」「むさ苦しくて、悪うございました」

チョルスはクムジヤに聞こえないように小声で反論すると、マグカップの影でベーツと舌を突き出した。

「もう来る頃よね？ あんた、下まで迎えに行かないの？ あんたの相棒になる子でしょ」

「何で最初から、そんな特別扱いしなきやいけないんですか？ 幹部候補生だか何だか知らないけど、新米は新米……」

チョルスとクムジヤが言い争いを始めたその時、油の切れた検査課の部屋のドアが、キイツと音を立てて開いた。

部屋にいた皆の視線が、一斉にニアのところに集中する。

「……あの、捜査課はいらっしゃるか？」

入ってきた青年は、まずまずと部屋の者たちを見回して口を開いた。

「今日から、ここのお世話をしなるようになりました、ハン・ミンホと申しますが……」

「……つまー？」

その言葉を聞いて、真っ先に声をあげたのはクムジヤだった。頬を染め、口元を手で押さえて、青年を見つめる。

「……おい、嘘だろ？」

対するチヨルスは、そんなクムジヤの横で、ポカンと口を開けたまま青年を凝視した。

捜査課の空気が、一呼吸置いて急激に色めきたつ。スラリと伸びた長い手足。

捜査課の中では長身を誇っていたチョルスよりも、恐らく高いであろうその身長。彫刻のように整つた目鼻立ちに加えて、ぞいぞいの貴族と言つても通用しそうな、気品溢れる佇まい。

一言で言えれば、彼は埃っぽく薄汚れた捜査課には、およそ場違いな人物だった。

「掃き溜めに、鶴だわ……」

「掃き溜めは言こすきでしょ、姉さん」

思わず呟いたクムジャの言葉に、突つ込むチョルスも、心なしかいつもの元気が感じられない。

「ほら、チョルス……」

周囲につつかれて、チョルスはようやくぎこちない仕草で青年の前に歩み出た。

「あ……えつと……うん……あ、よく来たな。俺は、今日からお前と組んで捜査を担当することになった、チャン・チョルス警査だ」「よろしくお願ひします」

チョルスが手を差し出すと、ミンホは大きな手でその手を握り返し、直角に腰を折り曲げて、深々と律儀に頭を下げた。

「じゃあ、とりあえず署内を案内するから。付いて来な」

チョルスは軽く咳払いをすると、捜査課の皆の視線を浴びながら、このむやみやたらに目立つ新人警官を連れて、廊下へ出た。

一時間ほどたつて一人で戻ってきたチョルスは、ドッカリと自分の席に腰を下ろし、疲労困憊といった様子で頭を抱えた。

「ねえ、ねえ、ミンホ君は？ どうしたの？」

「帰しましたよ、今日はとりあえず。明日から取り調べの時、俺の側に張り付けます」

「すつごいハンサムだつたわよねえ。背も高いし、俳優さんみたい。

明日から楽しくなるわあ」

「冗談じゃないですよ！」

能天気なクムジャの言葉に、チョルスは「テスクを叩いた。

「俺たちは潜入捜査だつてしなけりやならないんですよ！ あんな目立つヤツ、すぐに顔覚えられて、オトリ捜査にもならないじゃないですか。さつき、ちょっと署内を歩いただけでも、みんなが振り返るんだから」

「やっぱりねえ。ちょっとやそつとの美形じゃないものねえ」

「……姉さん、人の話聞いてます？」

「つゝとつと目を細めるクムジャの横で、チョルスは大きな溜息をつき、再び頭を抱えた。

翌日、出勤してきたミンホを連れて、チョルスは取調室に向かつ

た。

「今追つてゐる事件の資料は読んだか?」

「はい」

素直なミンホの言葉に頷くと、チョルスは続けて言った。

「俺と、お前が来る前に負傷した先輩で、ずっと追つてたでかいヤマだ。長い時間かかって、ようやく麻薬密売グループの学生組織のシッポを掴んだ。だが、まともな自供はまだ一つも得られてない。これから自供させられるかどうかは、俺たちの腕一本にかかる事だ」

「はい」

ミンホは神妙に頷いた。

「よく見ておけよ。お前がこれからやる仕事つていうのは、『ううう仕事だ』

チョルスは鋭い瞳で一瞬ミンホを振り返つて言った。

「よお、久しぶりだな!」

取調室のドアを足で蹴破るなり、チョルスは殺伐とした室内のデスクの前に座つた少年に向かつて声をあげた。

「今日は顔色がいいじゃねえか。あの辛氣臭い面はどうした?」

チョルスはパイプ椅子を乱暴に引き寄せると、デスクに頬杖をついて怯えたような目を向ける少年と真正面から対峙した。

ミンホはどうじついいか分からず、チョルスの隣りに立ちすくんでいる。

「何も、話すことなんてない」

少年は盗み見るようなオドオドした様子で声を上擦らせながらも、チョルスに向かつて言つた。

「おいおい、それはないんじゃねえか？」

チョルスは薄く笑うと、いきなり少年の、伸びかけた地毛で根元が黒くまだになつた髪を鷲掴みにした。

「俺の先輩は、お前に刺されて重傷を負つたんだぜ？　俺の目の前で」

「……あの時のことは、よく覚えてないんだ」

髪を引っ張られて、少年が苦しげに顔を歪める。チョルスは髪を掴んだまま、少年の顔をデスクに勢いよく押し付けた。

「いいが、よく聞けよ坊や。こつちも仲間をやられてんだ。取調べ中の事故なんか、日常茶飯事なんだぜ。人間の肋骨は、何本だつたかな？　俺は頭悪いから、一本一本、折つて数えてやるうか？」

チョルスの手の下で、少年がヒツと息を飲む。それに続けて、別のところからゴクリと唾を飲む音が聞こえてきて、思わずチョルスが振り返ると、ミンホが青白い顔でチョルスを見下ろしていた。

チョルスは軽く舌打ちして少年に向き直ると、再度頭を強く押さえつけて言った。

「何で、あんなマネした？」

口を割らない少年に、押さえつけるチョルスの手に更に力がこもる。

「ダンマリを決め込んで、ここで肋骨全部折られるか、それとも潔く白状して、少しでも監獄暮らしを短縮するか。お前に選ばせてやる。制限時間は、三秒だ。三、二、一……」

「え？ あ……」

「はい、タイムアウト。」

チョルスは言つなり、今度は少年の頭を掴んで引き起こすと、椅子に座つた自分の腿の上に少年を仰向けに倒れこませた。

立てた膝に少年の背骨を当てたまま、髪を掴んでいた手を若者の肩に置き直し、もう片方の手は腰に置く。

そこから、一気に力を加えれば、チョルスの膝を支軸にして宙に浮いた少年の背中は、一気に逆方向へ押される」とによつて、メキと嫌な音を立てた。

「う……うわあああああああ……止めてくれ……言つ、全部言つからつ……」

少年も恐怖の前ではプライドも何もかなぐり捨てて、顔をグシャグシャにして泣きじやくりながら訴えた。

チョルスは再び少年の髪を鷲掴みにし、グッと後ろに反らせて顔を近づけた。

「どこで、クスリを手に入れた?」

「……俺はまだ、手に入れちゃいない

「何だと?」

不可解な言動の続きを促すように、チョルスの手に力が加わり、少年は華奢なノド元を見せて更に反り返る。

「本当だつ! ほんの一回“溜まり場”に残つてたおこぼれをもらつたことがあるだけで、“本物”を挤んだことなんかない。他のヤツみみたいには……」

「他のヤツみみたいには? 何だ?」

一瞬、若者は唇を噛み締め答えを躊躇する。だが、チョルスの目

に鋭さが加わり、自分の髪を掴む指が微かに動いた瞬間、既に一度学習している彼は、叫ぶように続きを吐き出した。

“溜まり場”にあるだけじゃ足りなくて、貰いに行こうとしてたんだ。もつとキメられる、上質の

「貰いに、だと？」

「でも、俺は行く前に捕まつた。探しに行かなきゃいけないのに！ジスクが戻つて来な……」

「ちょっと待てっ！」

無理な体勢のまま、タガが外れたように話し出す少年をチョルスが止める。

「お前は、どこへ行こうとしてたつて？」

「みんな、そこに行けばもっと質のいい『エデン』が貰えるって。でも、選ばれた人間しか行けない場所なんだ。みんな“溜まり場”から、選ばれるのを待つてた」

「だから、“そこ”がどこかつて聞いてるんだよっ！」

肝心なところで噛み合わない会話に、苛立ちながらチョルスは少年の身体を搖する。

「次は俺の番だつた。ジスクも5月に……」

「おい、お前。いい加減にしろよっ！」

チョルスは少年の胸倉を掴んで、その薄く頼りない身体を宙に浮かせたまま噛み付くように言った。

「選ばれた人間？『樂園』？ご大層な名目と名前つけたつて、ヤクはヤクだ！お前らは選ばれた人間なんかじゃない。列を成し

て誘惑に屈する反吐が出るくらいの甘いやん野郎どもが

チョルスは掴んでいた少年の胸倉を乱暴に離し、その身体を床に転がした。

「お前らみたいな馬鹿を先導してん奴は誰だ？ その『樂園』とやらはどこから出でる？」

少年は転がった姿勢のまま、膝を上げたチョルスの固い靴裏が、真っ直ぐに自分の喉元を狙つている光景を捉えた。

「||.……|.|……|……|」

「『ペニー・レイン』だつ！ そこに行けば、『ヒーリング』が手に入るつて…」

先ほどと同じ、不気味なカウントダウンが終わる前に、少年は血の氣を失つて叫んでいた。

「……何だつて？」

チョルスの目が細められる。

「でも、ジスクが帰つて来ないんだ！ 『ペニー・レイン』に行つたきり、もう一月以上経つのに」

足を下げるチョルスに、少年は必死でしがみつき訴える。

「それで、何で先輩を刺した？」

冷たく降つてくるチョルスの声に、制服のズボンの裾を掴む少年

の手が思わず萎縮する。

「……早くジスクを探しに行きたいのに、邪魔するから」「お前、俺らに見つかる前、^{明洞}の路地裏で何やつてた?」

始めから答えの分かつている問いを、チョルスは更に冷たく浴びせかける。

「一緒にいた男……聖智大の、ペク・ギヨウンだな?」

なぜそれを? と言いつよいに少年が田を見開く。そんな反応にチョルスは嘲笑で答えた。

「ヤツがどうなったか、覚えてるか?」

少年は今度は力なく首を横に振る。

「気が動転してたから……」

「一人で逃げたよ。“選ばれた人間”であるはずのお前を置いてな。気が動転してた? 覚えてない理由はそれじゃないんじゃないか?」

チョルスはしゃがみこんで、少年の顎を掴んだ。

「捕まる直前にも、ヤクをやつてた! そりなんだろ」

チョルスの怒鳴り声が取調べ室にこだまする。

「違う! ヤクなんかやつてない。だつて、尿検査も陰性で……」「そりか?」

つられて大声を出した少年に、とぼけた顔でチョルスは笑う。

「じゃあお前は、素面の状態で、先輩を刺したってことだな。ヤクのせいで普通の精神状態じゃなかつたなんて、言い訳は立たなくなつた。お前が犯したのは、立派な殺人未遂だ」

「そんなつ！」

今更チョルスに嵌められたことを悟つた少年は、慌てて言い募る。

「俺はジスクを助けるためにっ」

「“警官を刺せ”つて、天啓でも下りたことにするか？ ヤクの代わりに、イカレた精神状態を立証してみるか？」

掴んだ頬の肉を通して、チョルスの握力で歯が圧迫されてミシリと音を立てたのが分かつた。少年の顔が苦痛に赤く染まる。

「今の、記録取りましたね？」

チョルスは少年から手を離さぬまま、先ほどから、暗い取調室の片隅でペンを走らせていた、年老いた警官を振り返った。闇が微かに動いた気がして、その書記官が頷いたのだと分かった。ミンホはその時初めて、書記官の存在に気が付いた。それほど、完全に気配を消し去つて、その書記官は取調室の闇に溶け込んでいた。陰鬱な空気に、まるで幽霊に遭遇したかのようだ、ミンホの背中を冷たい汗が伝つ。

「“溜まり場”の奴等じや、ダメだ……」

「ああ?」

ボソッと呟いた少年の言葉に、チョルスが耳を寄せた。

「“溜まり場”の仲間じやない俺が、やつと……やつと頼んで、ようやく『ペニー・レイン』に行けるようになつたんだ。俺が、ジスクを助けに行かなくちゃいけないんだ」

「何、ワケの分からぬことを言つてゐるんだ?」

チョルスは呆れたよつて返答する。

「お前は誰のことも助けたりできない。これから気が遠くなるほど長い時間を、塀の中で過ごすんだ」

少年を乱暴にうづき捨てて、チョルスが立ち上がる。

「行くぞ」

苛立たしげにミンホに声をかけ、取調室を後にすると、廊下を歩きながら、ミンホを振り返ることなく言った。

「ボーッとするな。俺らの仕事がどうにか分かっただろ?」

答えに窮するミンホを見て、チョルスは冷たく笑った。

「お前、俺が怖いか?」
「……いいえ」
「人を殴つたことは?」
「……あります」
「どうで?」
「大学のテコンドーの授業で、手が滑つて……」

情けないミンホの答えに、チョルスは思わず失笑した。

「ここは大学でもなければ、今は授業中でもない。これから何度も、手を滑らせなきやならねえ時が来るぞ」
「……はい」

「大丈夫かあ? ボクちゃん」

一瞬、思わずムッと鼻白んだミンホを見て、チョルスは声をあげて笑った。

「まあ、いいや。今にお前も、素手で人を殴るのを何とも思わなくなる」

そう言つて踵を返すと、チョルスは自分より背の高いミンホを從えて歩きながら、思案するように顎に手をやつた。

「……だが、よりによつて『ペニー・レイン』とはな

「え？」

聞き返すミンホに、チョルスは足を止めずに告げる。

「厄介だつて言つたんだよ……そのうち分かるや」

＊＊＊

暗く重く、今にも落ちてきそうな空に、おみそ不釣合いな明るい
歌声が吸い込まれていく。

ハスキーな子どものよつな声はよく響き、気分の乗つてきた彼が
勝手なアレンジを加えてシャウトすると、通りで残飯を漁つていた
猫たちが、ビクツと身体を震わせて逃げ出した。

その様子を見ていた彼は、ちょっと心外だといつよつに歯を尖ら
せて、再び鼻歌の続きを歌い始めた。

彼の手にはモップが握られ、足元には水の入つたバケツがある。
先ほどから彼は、大きく道路一面に広げられた黒いビニールシート
の上を、熱心に擦つて掃除している。これは、彼の大切な商売道具
で、組み立てれば、大きな黒いテントに早変わりする代物だった。

身体を揺らす度に、彼の左耳に下されたドロップ型のピアスが
キラキラと輝く。腰を軽快にスイングさせながらモップを操る彼は、
黒いステージの上を自在に動き回るエンターテイナーだった。何度
目かのターンを決めて振り返つた時、さつき逃げられたとばかり思
つていた猫たちの中に、ただ一匹だけその場に居残り、ジッと彼を

見つめている猫がいた。

アバラが透けて見えるほどに瘦せていて、灰色にくすんだ毛並みは、元がどんな色だったのかさえ分からない。

「さつすが、オンマ！ お前はジャズの何たるかを分かつてるー！」

感心して指を鳴らす彼に、猫は興味無さげに、ボリボリと耳の後ろの、もう大分薄くなってしまった毛を搔いた。

その時、ふいに落ちてきた冷たい雨が一粒、上機嫌な彼の頬を打つた。

「つあ」

思わず手を止めて空を見上げる。

限界まで雨を溜め込んだ雲が、辛抱できずに抱えた雨を地上に落とし始めた。

「……雨だ」

彼は手にしていたモップを投げ出ると、ビニールシートの横に止めてある大きなキャンピングカーに向かつて走り出した。

「兄貴！ 兄貴！ 降ってきたよ」

車に近付くほどに、うまいそうな肉の焼ける匂いが漂つてくる。

「天気予報、外れたな」

ジュー・ジューと肉の焼ける音の合間から、低く楽し気な声がそれに答えた。

「急げよ、ナビ。開店準備だ」
「イエッサー！」

飛び上がつて手を叩きながら、肉の匂いが充満したキャンピングカーのステップに足をかける。

そこで彼は思い立つたように、地面に広げたままの黒テントの向こうを振り返つた。

「おいで！ オンマー！」

彼の声に誘われるまま、雨の中で身づくりしていた灰色の猫は駆け足で黒テントを横切り、ステップを上がって彼の脇をすり抜けた。

猫が車内に入ったのを確認すると、彼は一人と一匹を雨から匿つたキャンピングカーのドアを閉め、中へと消えて行つた。

降りだしたな

捜査課の自席に座つて、何とはなしに窓の方を見つめていたミンホは、あつと/or>う間に窓にこくつもの筋を作り出していく雨の様子を眺めていた。

警察署内は、たとえ真夏日であつても、いつもどことなく薄暗くて湿っぽい。

ましてこのような雨の口だつたら尚更だ。

先ほど先輩婦警のクムジヤに淹れてもらつたばかりのコーヒーに口をつけると、無意識に大きな溜息が漏れた。

こんなに暗いと、赴任早々に受けた取調室での洗礼を思い出す。 気配を完全に消した、取調室の闇の中に住む書記官　　彼の名はノ・ヒチョルと言い、若い頃は腕利きで知られた刑事だつたそうだが、薄い髪に彼がまとつた幽霊のような陰鬱な空気は、廊下ですれ違うだけでもミンホをゾッとした。

そして、チャン・チョルス

相手が容疑者とは言え、暴力を振るつことに何の躊躇も見せなかつた。あの日は、決して脅しなどではなかつた。あのまま少年が自由しなければ、本当に骨の一本や一本簡単に折つていただろう。

狂犬

他の警官が影で囁くのを聞いた、チョルスの影の通り名。

不名誉な名に違いないが、彼にはピッタリだと思った。
相方と言われても、あの鋭い眼光には、未だに慣れることが出来
ずにいる。

「おい、一人で黄昏れてないで、出掛けれるぞ」

そんなことを考えていた矢先にいきなり声をかけられて、ミンホ
は思わず飛び上がって、コーヒーの入ったマグカップを取り落とし
てしまった。

「大丈夫？ ミンホ君？！」

派手な音に、真っ先に飛んできたのはクムジヤだった。

「あ、ごめんなさい。僕、片付けます」

「いいのよ、私に任せて。洋服濡れなかつた？」

甲斐甲斐しく世話を焼くクムジヤの後ろで、チョルスは呆れたよ
うに言った。

「声かけたぐらいで何ビクついてんだよ、お前。さては、勤務中に
エロイこと考えてたんだろ？」

「あんたと一緒にするんじゃないわよつー！」

ミンホが否定する前に、クムジヤが猛烈にチョルスに喰つてかか
る。

「だいたい、あんたはね」

クムジヤのマシンガンのようなダメ出しが始まり、チョルスが一

歩一小歩後ずさりを始める。

(おこ、早く出るわ)

チョルスは声を出すらずに口の形だけでミンホにやつせざると、クムジヤが息を継いだ瞬間に身を翻した。

「行くぞ、ミンホ。急げっ！」

ミンホもチョルスの後に続いて駆け出す。

「あつ！ ちよつと、待ちなさいよ、あんたたち！」

クムジヤの悔しそうな声は、捜査課のドアが閉められる同時に止んだ。

チョルスはそのまま、警察署の地下駐車場まで降りていき、そこで皮ジャケットのポケットに手を突つ込むと、車のキーを取り出した。

「乗れよ」

黒いセダンの前に立つと、ミンホを振り返り、助手席を顎でしゃくった。

「どこへ行くんですか？」
「来れば分かる」

それだけ言つと、チョルスはさつと運転席に乗り込んだ。
ミンホも言われたとおりに助手席に滑り込み、きちんとシートベルトを締めた。

その様子を横目で見ていたチョルスは何も言わなかつたが、口の端が不自然に歪んで、笑いを噛み殺しているのがミンホには分かつた。

荒い運転で地上へ出ると、本降りになつた雨がフロントガラスを叩き出した。

「「」」

チョルスがハンドルを握りながら、ニヤリと笑う。

「いい具合で降つてるから、開店してるのは間違いない」「もしかして、あの取調べの時言つてた……」

「『ペニー・レイン』だよ」

ミンホの言葉を受けて、チョルスが答える。

「「」」あるんですか？」

「さあ」

「さあ？」

怪訝な顔で聞き返すミンホに、チョルスは口の端を更に吊り上げて笑つてみせた。

「営業時間も、場所も、誰も知らないのさ。分かつてゐ」とと言えば、ただ雨が降つた時に営業するつてことだけ。神出鬼没、いつどこに現れるか分からぬ。せいぜい雨が止まないよつに、祈つてろ」

そう言つと、チョルスは乱暴にアクセルを踏み込み、雨の降るソウルの街を疾走していった。

激しく振り出した雨が、黒いテントを叩く。勢いよくビニールの屋根を弾く雨音は、しかし、店内の喧騒には適わず、中にいる者は届かない。

ただのテント屋台に毛が生えた程度のお粗末な外観に反して、二十畳ほどの店内は意外に広々としている。店の壁には往年のジャズの名曲のレコードジャケットがディスプレイされ、静かに流れるピアノ曲のBGMと相まってこの店の経営者の趣味の良さを感じさせるが、薄暗い空間に「じつた返す客の声で、そのほとんどは意味のないものになつっていた。

「せんせえー、まだ飲みたりなあい」

「あん、せんせえ、私もおー」

「いいよ、いいよ。好きなの頼みなよ」

一番奥のテーブルでは、ソファーに深く腰をかけた男が、左右に座らせた露出度の高い服を着た女の肩に両手を回し、上機嫌で笑っていた。

斜めに被つた英國貴族のような帽子がいかにも気障な印象のその男は、女の肩越しに軽く手を上げて、通りかかったボーイを呼び止めた。

「ねえねえ、オーダー頼んでいい?」

きつちりとアイロンがけされた白いシャツに黒いベストを羽織つたボーイは、チラリと男を振り返った。店の暗い照明の中では、金色に近い明るい茶色の髪が却つて引き立ち目立つていた。片耳だけ

に飾られたピアスが、彼が動くたびに光を反射してキラキラ揺れる。

「先生、お金あるの？」

首をかしげて小生意気な視線を送つて寄りすそのボーイに、男はますます笑みを深くした。

「心外だなあ。俺、ツケで飲んだことなんかないよお
「それは、知つてるけど」

ボーイは困つたように眉を寄せ、渋々ズボンの後ろポケットから、オーダー表を取り出した。

「1」注文は？

ボーイが尋ねると、男は女たちに回していた手を解き、真つ直ぐボーイを指差して言つた。

「ナビちゃん一つ、お願ひします
「はあ？……つわつわ……ちょっとー」

言つが早いか、男はボーイの手を掴んで、そのままグイッと引き寄せた。

ボーイは女と男の膝の上にダイブするような形になり、女の方から抗議の悲鳴があがる。

「ちょっと、君、どうしてくれない」

さつきまで隣りにはべらせて喜んでいたくせに、男は笑顔で女に席を立つよう促し、開いたスペースにボーイを座らせ、先ほど女に

していったよつに、彼の肩に手を回した。

「どんなお酒よつ、俺はナビに酔いたいな

「つな？！ ちょつと、離してよつ！」

「ほつんと、いつ見ても、可愛いよねえ」

いつの間にか両手をボーイの肩に回して抱きしめると、横からボーイの頬にキスするような勢いで顔を近づけてくる。

「ちょ…… 本埠に、止めて！ 兄貴！ 兄貴、助けてつ……」

タコのように脣を尖らせて、ボーイの膨らんだ頬に吸い付こうとしている男を力いっぱい両手で突っぱねて、ボーイは店の奥に向かって叫んだ。

その時、男の頭の上でスコーンと小気味良い音が響いた。衝撃で、男の被っていた帽子が前にはじけ飛ぶ。

パークを当てたまま放つておいた伸びかけの髪が、柔らかくカールして男の横顔を彩る。

「困りますね、お密ひん。ウチは、そういう店じやないんで」

男の背後には、ボーイと同じようにマイロンの利いた白いシャツとベスト だが、その上に白いエプロンを巻いた 姿の男が、片手にフライパンを持って立っていた。

「ジユビン兄貴！！」

ボーイは救われたというよつに、男の手を振りほどいて、そのHプロン姿の男の背後に隠れた。

「ウチの大切な従業員を、あんまりいじめるなよ」

「いじめてなんかいないよ。軽くチューくらい、アメリカじや当たり前のスキンシップよ」

「生憎」には、儒教の国、韓国だぜ？」

ニッコリ微笑むその顔は、背筋がゾツとするほどの中の美しさだ。どこか作り物めいて冷たく見えるのは、あまりにも整いすぎた顔立ちのせいだろう。薄暗い店の照明に反射する瞳は、色彩が薄く、灰色がかって見える。

「今度うちの弟に触つたら、ペナルティ料金取るから」

「へえ？ お金払つたら、触つてもOKなワケ？」

男も負けずに笑顔で言い返すが、フライパンを持った男と睨みあうこと数秒 それで、完全に勝負はついた。

男はガツクリと肩を落とし、手をヒラヒラと振つた。

「分かった、分かりましたよ！ 本当、ツレナイんだから」

ブツブツ言いながら、既に氷が解けて味の分からなくなつたブランデーを手に取る。

その時、テーブルの下で睨みを利かせていた灰色の猫と目があつた。

「やだなあ。おたくまで牽制することないんじやない？」

猫の機嫌を取るように、男はテーブルに載つていたチーズを千切つて投げてやる。

だが、猫は醒めた目付きで一瞥しただけで、尻尾を降りながらク

ルリと方向転換してしまった。

「ツレなさ加減は、飼い主に似るのぉ？」

嘆きの声を上げても、憲りずに身体は再び皿をつけたあのボーイの元に向き直る。

「あー、でも、ナビヤア（ナビちゃん）。何か困ったことがあったら、いつでも俺を頼つてね。例えば、妊娠したりとかあ」

「するかっ！…」

真っ赤になつて叫びながら、ボーイは男に向かつてオーダー表を投げつける。それは見事に男の頭にクリーンヒットした。

その時、店のドアが開き、店内にザーッといた雨の音が入り込んだ。

「……やつと、見つけた」

店の入口には、ずぶ濡れになりながら、肩で息をする一人の男が立っていた。

二人とも一八〇センチはゆうに超える長身で、入口に立っているだけで相当な威圧感があった。

「あれえ？ 珍しい顔」

オーダー表の攻撃を受けた頭を擦りながら顔を上げた男は、突然乱入してきたこの珍客に目を細めた。

「久しぶりだね、チヨルス」

すると、フライパンを片手に持つた男もそれに気付いて、まだ入口に佇む男に微笑みかけた。

「……雨が降つてゐうちに、見つけられてよかつたぜ」

入口に立つた二人 チヨルスとミンホは、雨の霖を全身からポタポタこぼしながら、店の中に入ってきた。
ボーイが慌ててタオルを取りに奥へ走る。

「相変わらず、神出鬼没もいいとこだな。まさかこんな高架橋の下で、店広げてるなんて。車で探してたら、見つからないはずだぜ」「最近は取り締まりが厳しくてね。チヨルスのお仲間が、頑張ってくれてるから」

フライパンを持った美貌の男は、サラリと笑顔で皮肉を口にする。それに反応して、チヨルスの切れ長の目も心なしか吊り上がった。

「……」しつやあ、随分繁盛してそういうじゃないか。いつ開店するかも分からぬよつたな店に、どこからこんなに客が集まつてくるんだ？」

「ああ？ それは俺にも分からなによ。雨に聞いてみたら？」

完全に一枚も一枚も上手の美貌の男に、チヨルスはギリッと唇を噛んだ。

「でも見つけ出しちゃつあたり、執念だよねえ。オマワリの執念深れは、本当尊敬に値するよ。」

その時、突然話に割つて入つたソファーの男に視線を移したチヨルスは、皮肉気に唇を歪めた。

「これは、これは、オーサー・リー先生じゃありませんか」

両手を広げて、わざと恭しく頭を下げる。

「やめてよー、オマワリに『先生』なんて呼ばれたくないよ。嘘寒くなるから」

ふざけた口調だが、笑つているのは口元だけだった。

「相変わらず、オマワリがお嫌いですか『リー先生』」

「俺から未来の輝かしい『先生』の称号を取つ払つてくれたのは、あんたたちだからね」

「その割には羽振りが良さそうじゃねえか」

「お陰さまで。本当の『先生』にならうがなるまいが、俺がどこでも引っ張りダムなのは変わらないみたい。ほら、俺、腕だけは確かにから」

オーサーと呼ばれた男は、先ほど美貌のこの店のオーナーにフライパンで叩かれた際にはじけ飛んだ帽子を拾い上げると、また気障な仕草で自分の頭に載せた。

「『ペニー・レイン』の常連客になれるなんて、あんたくらいのもんだ。一体、どこで嗅ぎつけてる？」

チョルスの言葉に、オーサーはクスクスと笑つた。

「イヤだなあ。ただの勘に決まつてるじゃない」

「随分、都合よく働く勘だな」

「もししくは、『愛』かな」

そう言つと、オーサーはタオルを手に戻つてきたばかりのボーイに向かつてウインクしながら言つた。

「そこの、可愛いナビちゃんへの、ね」

チョルスの視線がボーイを捕らえ、その鋭さにボーイの身体が一瞬強張る。

「あーあ、可哀相に。ナビちゃん、怖くないでさよー、このお兄さん、怖いのは顔だけだからあ」

「ふざけるなよ、先生」

チョルスは座つたままのオーサーの肩を軽く押して威嚇する。オーサーの顔から笑みが消えた。

「最近、学生の間で出回つてるタチの悪いクスリの噂は知つてるよな？」

「何のこと?」

「今さらとぼけるなよ」

チョルスはオーサーを見下ろしたまま、低い声で呟いた。

「あんたなら、どんなクスリでも都合付けられる筈だ。一介の医学部生だった時から、その手の黒い噂が耐えなかつたあんただ」

「イヤだなあ。『潜入』捜査の『潜入』つて、『先入観』の『先入』だつたの?」

二人の間に緊張が走る。

その張り詰めた空気を壊したのは、タオルを手にしたまま立ち去っていたこの店のボーイだった。

「……あのお

そこにいた皆が、一齊にボーイを振り返る。

「取り敢えず、拭いてからにしませんか?」

ボーイはチラリと、チョルスとミンホの足元を見た。

二人の足元には、立派な水たまりができていた。

「あ、すみません」

先に謝つて、ボーイからタオルを受け取ったのはミンホだった。続いてチョルスも、受け取ったタオルでびしょ濡れになつた頭や身体を拭いた。

「捜査途中で、この店の名前が出た」

身体を拭きながらチョルスはボソッと低い声で、この店のオーナーである美貌の男に向かつて言った。

「例のクスリを流してゐ本拠地だとな」

「“例の”？」

「『エデン』だよ。分かつてゐだる」

「さあ、何のこと？『エデン』なんて、初耳だよ」

チョルスは唐突に本題を切り出して男の表情の変化を見て取ろうとしたが、あつさり流され、効き田は無かつた。

チョルスは更に問い合わせる。

「だつたら、言い方を変えてやる。学生の間で出回つてゐるクスリの流通ルートを培り出したい。証言に基づけば、ここもそのルートの一つだ。だが、証拠がない以上、お前らを今すぐしおつ引くワケにもいかない。だから、尻尾を出すまで張らせてもらつ

「何言つて……いきなり来て、勝手すゝめるよつ！」

男の代わりに猛抗議しようとカウンターの中から身を乗り出してきたボーイを見て、チョルスは内心ほくそ笑んだ。

「やましいことがなければ、この程度の捜査協力なんてわけないはずだ」

冷たく突き放すチョルスに、更にボーイが何事か言い返そつと開きかけた口を、背後から男が塞ぐ。

「いいから、ナビ」

口を塞がれたまま、ボーイが心配そうに美貌の男を見上げれば、男は反対側の手でボーイの頭をポンポンと叩いて、大丈夫だ、と言いうように微笑んだ。

子どものように過剰反応してみせるボーイとは違つて、チョルスの言葉に、男は動搖する風でもなく、フワリと微笑んで言った。

「俺は構わないよ、別に。張られて困るようなことは何もないから」

ボーイは男の腕の中から、恨めしげにチョルスとミニンホを睨みつけている。

「ただ、一緒に動くのは勘弁してよ。『雨の日にだけ出現する、神出鬼没の黒テント』それが、我が『ペニー・レイン』の『ペニー・レイン』たる所以だからね。どこに店を出すかは企業秘密だし、警察と言えどそれを知つて先回りされたら、店の営業妨害になるから『僕らが犯人つて、決まったわけでもないのに！ オマワリなんかにウロウロそれで、売り上げ落ちたら、どう責任取つてくれるのさ

！』

自分の口を塞ぐ手が緩んだ途端に、男に追従して、ボーイが子どものような甲高いハスキーボイスで叫ぶ。

チョルスは何かを言おうとしたが、グッと言葉を飲み込んで、渋々頷いた。

「……分かった。だが幸い、季節は梅雨だ。これから何度も、寄らせてもらつぜ」

「どうぞ。得意客が増えるのは嬉しいよ」

美貌の男が微笑むと、チョルスはフンッと鼻を鳴らして踵を返した。

「帰るぞ、ミンホ」

「え？ もうですか？」

驚いたミンホが、慌ててチョルスの後を追つ。

「チョルス！」

その時、立ち去ろうとするチョルスの背中に向かって、男が声をあげた。

チョルスがゆっくりと振り返る。

そんなチョルスに向かって、男が一步踏み出す。その時、ミンホは微かだが、男が左足を引きずっていることに気が付いた。

「だけど、いつか手錠をかけられるなら、俺はチョルスがいいよ」

妖艶ささえ漂わせて、男が微笑む。その笑みは、同じ男性であることを意識しても尚、正気を持っていかれそうな程の艶やかさだつ

た。

隣りで、チョルスがゴクリと唾を飲む音が聞こえた。

「行くぞ！」

チョルスはそう言ひつと、自分の頭の中の男の幻影を振り払つように首を振つて、店の出口に向かつた。

「またのじ来店、お待ちしてまーす」

一人の背中を、嫌味たつぷりなハスキーボイスが追いかけてくる。ミンホが一瞬振り返ると、オーナーと揃いの金色の髪をしたボイイが、舌を出しながらシッシと手を振つていて見えた。

「さつきの店のオーナー、知り合いなんですか？」

帰りの車中で、むつりと押し黙つてハンドルを握るチョルスに向つて、ミンホは尋ねた。

「……まあ、古いな」

チョルスにしては歯切れの悪い口調だった。

「昔ちょっとした事件があつて、その関係者だつた

「あの、オーサーつて人もですか？」

「ああ、あいつは別件」

チョルスはハンドルを切りながらスピードを上げる。

（オーサー・リーという彼の名と英語読み（韓国語での本来の発音は季である）についてミンホが尋ねると、チョルスは彼が韓国系アメリカ人なのだと教えてやつた。

「あいつは、いいとこのお坊ちゃんでな。元は名門医学部期待のホープだったんだよ。だけど、色んな黒い噂塗れで、結局はインターになる前に退学になつて、地下に潜つた。医者としての実績は、無免許状態で積んできたクセモンだ。ナヨナヨした外見に騙されんなよ。外科に内科、半分趣味も兼ねた婦人科に美容整形外科、おまけに精神科まで、腕は玄人裸足の超一流どきてる。全く、ふざけた野郎だよ」

「あの人ガ、怪しいと？」

「さあな」

チョルスの答えに、ミンホは意外な顔をした。店での様子からも、チョルスはすっかりあのオーサー・リーという男ガ、怪しいと踏んでいるものだとばかり思つていたからだ。

「確かに今まで何度も、色々な事件の容疑者候補になつてる奴だし、裏社会では知らない奴のいない有名人だ。だが、医学部を退学になるきっかけになつた事件以外で、今までただの一度も逮捕されたことはない。頭の切れる奴だから、簡単に尻尾出すような真似はしないんだ」

チョルスは片手をハンドルから離し、親指の腹で思案するように鼻を擦つた。

「クスリの横流し、しかも学生相手なんて、わざわざそんな派手でリスクの高い方法を、あの男が選ぶなんて考えにくいんだがな」「じゃあ、どうして張り込みを？」

「ただ、あいつが犯人にしろそつじやないにしろ、アレだけ派手に店でやりあえба、本当のホシへの警告にもなるだろ?」主犯じやなかつたとしても、あの男が関つてる可能性は捨て切れない」

狂犬の名前そのままで、勘だけで動いているのかと思われたこの男が、意外にも冷静に事態を観察していたことに、ミンホはほんの少し敬意の情が生まれるのを感じていた。

「……僕に、今できることはありますか?」

突然のミンホの言葉に、チョルスはキヨトンとした顔で助手席のミンホを見たが、やがてニヤリと笑つて言つた。

「てるてる坊主逆さにして、警察署の軒先に100個呪ふしだ」

「降ってきた！ 行くぞ！」

最近のミンホの日課は、警察署の窓から空を見上げることになりつつあった。チョルスが『冗談で言つた『てるてる坊主100個』は、律儀なミンホによつて本当に仲良く100人並んで、軒先で逆立ちしている。

雨が降り出せば、朝でも昼でも夜でも、時間は関係なくチョルスと一人で外へ飛び出した。

『ペニー・レイン』の出没先は大変手強く、初日に見つけた高架橋の下には一度と姿を現すことはなかつた。いつも分かりにくい場所にひつそりと現れ、一度現れた場所には一度と出店することはなかつた。

運良くすぐに見つかることがあれば、一晩ソウルを走り回つても、見つけ出せないこともしばしばだつた。

「チョルスヒヨン！ バック、バック！」

助手席から、細い路地裏の奥に僅かな明かりを捕らえたミンホが叫ぶ。

チョルスは急ブレーキを踏んだため、後ろの車から盛大にクラクションを鳴らされた。

「テントが見えました」

「つたく、いつもいつも、変なところに現れやがつて」

チョルスは車の窓を開け、威嚇していくる後ろの車に暴言を吐くと、路地の一つに頭から突っ込んで、ヒターンの準備をした。今日の雨は霧雨で、路地全体が灰色にくすんで見えた。

「いらっしゃいませー」

店のドアを開けると、聞き慣れたハスキーボイスが出迎えてくれた。

「何日か耳にしただけで、頭から離れなくなる不思議な声だ。ミンホはいつも、泣きすぎて声が枯れた子どものようだと思つ。

「あれー？ 今日は随分早く見つかっちゃったね」

屈託無く微笑むのは、この店のボーイ、ナビだった。

初日に会つたばかりの時は、強引に捜査を進めようとするチョルスたちに、毛を逆立てる猫のよう敵意剥き出しでいたのに、一度三度と二人が店を訪れる内に、徐々に彼元来の人懐っこい笑顔を見せるようになつた。

「ジヨビニヒヨーン、お二人さん、ご来店だよー」

店の奥に向かつて声をかける。

一応潜入捜査ということになつてゐるから、一人が警察官であるといつことはこの店では秘密になつてゐる。

チョルスとミンホは、最近の一人の定位置であるカウンター席に腰を下ろした。

今ナビがいるカウンターの中は、奥の出入口でキャンピングカーと繋がつていて、車の中が厨房の役割を果たしていた。

「はい、タオル」

ナビがカウンター越しにタオルを手渡してくれる。いつもナビが渡してくれるそれは、洗剤の香りなのか、甘く柔らかな匂いがする。

「…………ありがとうございます」

ミンホはそれを受け取つて、思わずナビをジッと観察する。

「…………ん？」

真面目なミンホからすれば、『髪が可哀相ですよ』と忠告してやりたくなるほど、徹底的に色を抜いて少しパサついてしまった金色の頭頂部の髪を『♪』と揺らして、ナビが目を上げる。

「…………いえ、すみません」

ミンホが慌てて目を逸らすと、ナビは眉根を寄せて怪訝な顔をしたが、それ以上特に気にする様子もなく、再びカウンターの中で目洗いを始めた。

ザーザーと派手に流れる水音、ガシャガシャと目が鳴る音……良く言えば豪快、悪く言えばガサツ極まりないその手つきで、ミンホは内心ハラハラしながらナビの手元を見つめる。

『ペニー・レイン』に通えば通うほど、ミンホにとってこのボーイは不可解極まりない存在になっていた。

店に通い出して暫りく経ち、捜査と言つても徐々に向ひの警戒心も解けてきた頃、店のオーナー、ジョンソンは、初めてミンホに自己紹介をしてくれた。

それによれば、ナビはジョンソンの弟で、9年前両親が亡くなつた

のをきっかけに、この移動テントの店をオープンさせて以来、兄弟二人肩を寄せ合って暮らして来たと言つことだつた。

だが、ジョビンと揃いの金色の髪にしているものの、よく見れば顔立ちは似ても似つかない。

色素の薄い灰色の瞳や、高い鼻筋、男とは思えないような抜けるような白さの肌を持つ長身の兄ジョビンに對して、弟のナビは、小柄で華奢で、小さな顔の輪郭にはまだふくらとした幼さが残り、可愛らしくはあつても、ジョビンを形容するのに相応しい『美貌』という言葉では、お世辞にも括れないタイプだつた。

哀れそうなミンホの眼差しを感じ取つたのか、ナビはプツと頬を膨らませて、手にしていた布巾を放り投げて言つた。

「何だよ？ デビせお前も、僕がジョビーヒコンに似てないって言いたいんだろ？」

「いえ……僕は、そんな別に……」

図星を突かれてうろたえるミンホに、ナビはますます唇を尖らせて言つた。

「お前、グリム童話知らないの？ 『醜いアヒルの子』って言つてしまよ？ 僕は成長前の白鳥なんだつて、ジョビーヒコンも言つてるもんね」

「『醜いアヒルの子』は、グリムじゃなくて、アンデルセンなんじや……」

「とにかくつ！ 僕もジョビーヒコンの年になつたら、モムチャン（筋肉マン）でオルチャン（イケメン）になるんだからー！」

「……はあ」

鼻息荒くそう捲くし立てられては、返す言葉も見つからない。

呆気に取られるミンホの前で、ナビは冷蔵庫から取り出した牛乳を、腰に手を当てて、これ見よがしにミンホの前で一気飲みして見せた。

まるでビールでも飲み干したように、ブハーッと息を吐きながら白く汚れた口元を拭うと、ミンホの胸元に人差し指を突きつけて言った。

「お前より、デカくなつてやるからなつ！」

宣戦布告のようにそう告げると、ナビはフンッと鼻を鳴らし、空になつた牛乳瓶をシンクに投げ入れた。

「どうあなた、本当の名前は何て言つたのです？」

機嫌を損ねたついでに、ミンホは前から聞いてみたかったことを思い切つて切り出した。ナビはカウンターの向こうで、キヨトンとした顔でミンホを見ている。

「まさか“ナビ”が本名なワケないでしょ？ 猫につける名前じゃないですか（韓国では日本語の“タマ”と同様のユーモアで使用される名前）」

「おっ前！ 本当に失礼なヤツだな！」

今にもカウンターを飛び越えて行きそうなナビを、背後からこれまでの一人のやり取りをクスクス笑いながら見ていたジェビンが止める。

「まあまあ。ナビはナビだよ。風変わりだけど、覚えやすくていいだろ？ それに、こいつに呑つてる。そう思わない？」

そう言って艶やかに微笑まれてしまえば、ミンホも頷くしかない。確かに、クリクリとよく動く黒田勝ちの瞳に、落ち着きはないが俊敏によく動き回る様は、猫のそれによく似ていた。

「こいつしゃい、チョルス、ミンホ」

カウンターの奥のスライド式のドアが開いて、この店のオーナー、ジェビンが顔を出した。最初にこの店に訪れた時に田に留めたジ

ビンの左足について、ミンホが複雑な表情で見ているのに気が付いて、ある日ジェビンは『昔からの古傷だから、気にしないで』と微笑んだ。自分がそんなにも不羨な視線を送っていたのかとひどく恥じ入るのと同時に、ミンホは改めて人の視線や気持ちの動きに敏感なジェビンという男の不思議を垣間見た気がした。

「早かつたね」

そう言つて、ジェビンが微笑む。

「三日前はとうとう見つからなかつたからな」

チョルスも負けずに、ニッコリと微笑む。

「ハハハ、じゃあ辿り着いたお祝いに、これはオレからのオゴリ」

そう言つと、グラスを一つチョルスとミンホの前に置き、続けて戸棚からブランデーのボトルを取り出した。

「……あ、僕は、勤務中ですから……」
「いだぐよ

ミンホの声を遮つて、チョルスがグラスに手をかける。

ジェビンは笑いながら頷くと、一つのグラスにブランデーを注いだ。

「チョルスヒヨンッ！」

ミンホが小声でたしなめ、チョルスの膝を打つても、チョルスは涼しい顔でブランデーを一気に煽つた。

「相変わらず、いい飲みっぷりだね」

ジョビンは目を細めて微笑んだ。

「お前も、付き合へよ」

チョルスはそう言つて、ジョビンからブランデーのボトルを奪つた。

ジョビンは挑発に乗るよう、自分の分のグラスを取り出し、カウンターに置いた。

見詰め合う二人の間に、殺伐とした空気が流れる。

「チョルスヒヨン」

気が氣ではないミンホだが、一人は濃厚なブランデーの匂いを撒き散らしながら酒をついで飲みあうだけで、特にそれ以上掴み合いを始めるような雰囲気もなかつた。

その時、他のテーブルから、だいぶ出来上がつた状態の集団が声をあげた。

「おーい、さつき注文した酒、まだ？」

カウンターの中で洗剤の泡を飛ばしながら皿洗いに没頭していたナビが、ハッとしたように顔を上げる。

「あつ！ すみませんっ！ ただいま！」

ミンホのすぐ横で、カウンターに手をかけ、それをヒラリと飛び越えたナビを、ミンホは畠然としたまま口を開けて見送つた。

身軽 だが、メチャクチャだ。

本物の猫じやあるまいし。

カウンターに置いてあるグラスやら何やら、一歩間違えば全部なぎ倒してしまつてもおかしくないのに。

だが、ナビの兄である前に雇い主であるはずのジョビンは、相変わらずチョルスとの無言の攻防に意識を集中させていいるのか、弟に注意する様子もない。

ナビは手にしたステンレスの盆の上に注文されたカクテルをいくつも乗せ、危なつかしい足取りで若者のいるテーブルに向かう。ミンホは一度チョルスとジョビンの様子を振り返つてから、思い切つて席を立ち、ナビの後を追つた。

「お待たせしましたあ」

少し舌足らずな声で、ナビが客のテーブルに到着する。

「えーっと、これが『思い出のサンゴ礁』、そんでもつてこれが、『夏の夜明けのハーモニー』……」

詩的なかクサイだけなのか、そのセンスも微妙な長々しいカクテルの名前を、ナビはポケットに入れたアンチョウを隠そつとせず、堂々と取り出して読み上げた。

「(ノ)注文は、お揃いでじょうか?」

言い終えた満足感に胸を張つた時には、既にテーブルを囲んだ男たちはカクテルに口をつけていた。

ナビが開いた皿やグラスを盆に載せて帰らつとした時、不意にナビの動きが止まつた。

ナビの背後で、少し離れたところからそつと様子を窺つていたミンホの目に、不自然な動きで、モジモジと腰を揺するナビの姿が見えた。

「追加、頼むよ」

ナビにやう話しかけているのは、テーブルの一番端の席にゆったりと陣取った、この集団のリーダーらしい男だつた。周囲を取り巻き連中が囮んでいる。

「長つたらしいカクテルなんかじゃなくて、もつとキメられる、強い酒ないの？」

その男を見つめるナビの顔が、無表情のまま、みるみるうちに赤くなつていいく。様子がおかしいので、ミンホは人ごみを搔き分けてナビの側まで寄つてみた。

すると、不自然に身を捩るナビの腰から尻にかけたラインを、男の手が執拗に這い回つていた。

「テキーラでいいですか？」

「何でもいいよ。兄ちゃんも、一緒にソニーに座つて飲めよ」

「仕事中ですから」

「構わねえだろ、金は払つてやるんだから」

「……」

男の手がナビのベルトにかかつた。

ミンホが思わず飛び出そうと身構えた時、パリンッとグラスの割れる乾いた音と、水が飛び散る音が聞こえた。

「うわっ！ 何すんだ、この野郎！」

先ほどまでナビの尻を触っていた男が立ち上がり、大げさに声をあげた。テーブルに置いてあつた飲み残しのグラスが床に落ちて割れ、そのグラスに残っていた酒が、見事に男の足元を濡らし、男が着込んでいたスーツの色を変色させていた。

「すみません、手が滑りました」

ナビは無表情のまま、そつけなくそつ言つて、男の足元にテーブルに置いてあつたおしほりを投げた。

「弁償してくれるんだろうな？」

男はナビに一歩グツと詰め寄ると、ナビの細い顎に手をかけて力を加えた。

「すぐ拭いたら、取れますよ」

ナビも負けずに睨み返す。それで刺激されたのか、男はますます声を荒げた。

「そんなモンで済まさると思つてんのか？ 弁償つて言つたら、やつぱりこれしかねえだろ？」

そう言つと、ナビのシャツの胸元を乱暴に掻んだ。その拍子に弾け飛んだボタンが、床に転々と転がつていく。

ハラリとはだけた胸元に、無遠慮に侵入してくる手をナビが振り払う前に、横から伸びてきた腕が、男の手を強い力で取り押さえた。

「……つい？」

「恥ずかしくないんですか？」

突然手首を押さえられ、そのまま背中側にねじ上げられる。

「僕は、見てましたよ。あなたがあんな破廉恥な真似をしなければ、そもそもこの人だって、グラスを引っくり返すことはなかつた」

男の腕をガツチリと固めたまま、ミンホは厳しい口調で言つた。狭い店内で、客たちの注目も自然にこの騒動に集まる。

「つな？！ 何が破廉恥だ！ そいつの方から色使つてきやがつたんだ。俺は誘いに乗つただけだ」

「ウソつきは、モテないよー」

その時、店のドアが開いて、雨の音とともに、あの気障な帽子を被つたオーサーが現れた。

「先生つー！」

ナビが思わず声をあげると、オーサーはナビに向かつてニッコリ微笑んだ。

「遅くなつてゴメンね、ナビヤア。ちょっと取り込んでじゃつてて」

そう言つと、オーサーはミンホに取り押さえられている男の元までゆっくりと歩いて行き、面白そうに男の顔を覗き込んだ。

「ナビが色目使つてきたつて？」

「そ、そうだよつー！」

「うーん、有り得ないね」

「何だと？」

「猫は、そんなに気安い動物じゃないわよって言つてんの」

柔らかい口調で言いながら、男を見据えるオーサーの目は冷たく尖っていた。

「この色男の代表格、オーサー・リー先生だって誘われたことなんかないのに。ちなみに、おたく、鏡見たことある?」

「つな?！」

途端、男は顔を真っ赤にして、オーサーに向かつて飛びかかつて行こうと暴れ出した。それをミンホが更に強い力で抑えつける。

「兄貴つー！」

男の取り巻きたちも腰を浮かせて騒ぎ始める。

「失礼します、お客様」

その時、人垣の間を搔き分けて、この店のオーナー、ジョビンがスッと男の前に歩み出た。

「従業員が、大変失礼をいたしました」

男に向かつて、深々と頭を下げる。

「本当にどうなってんだ、この店はー！」

男はミンホに抑えられたまま、唾を飛ばして砲えた。

「僕がなつてないんだよ！ 密にこじんな真似して、どう責任取つてくれるんだ」

すると、ジョビンは、ズボンのポケットから皺くちゃになつた一万ウォン札を数枚取り出して、男のシャツの胸ポケットにグイッと突つ込んだ。

「これで、『勘弁を』

そう言つと、ポケットの上から、紙幣で膨らんだ男の胸を軽く叩いた。

「それで、一度と来るな」

カツと男の頬が怒りに紅潮する。『兄貴』をバカにされた取り巻きたちも、一齊に席を立ち、ジョビンたちに襲い掛かつてきた。

「やつと、俺の出番だぜ」

このタイミングを待つていたかのように、先ほどジョビンが出てきた人垣の間から、チョルスが勢いよく飛び出してきた。

そのままの勢いに乗つて、長い足が宙を切り、ジョビンに向かつてきた取り巻きの一人の喉元にヒットした。

「……ウグッ」

声も出せないまま、後ろの集団をドリノ倒しのよつに巻き込んで、床に倒れこむ。

「加勢じろつ！ ミンホッ！」

「はいっ！！」

チヨルスが叫ぶやいなや、ミンホも男の腕を固めて両腕の自由が利かない状態で、次々に襲い掛かってくる男たちに強烈な蹴り、頭突きをお見舞いした。

最後の一人が倒れた頃には、チョルスもミンホも流石に息を切らしていた。

「どうする？ おたく、一人になつたけど」

チョルスがミンホに取り押さえられたまま振り回され、苦しげに息を切らしている男に向かつて言つた。

「勝ち目ないつて、分かるよな？」

男は悔しげに歯を嚙んで、チョルスを見上げる。

「兄貴つ……」

その時、突然店のドアが開き、先ほどよりも強くなつた兩音が、ダイレクトに店内に流れ込んできた。

「……覚えてるよ、お前ら」

男は苦々しい口調で吐き捨てる、乱暴にミンホの腕を振りほどいた。

チョルス、ミンホ、オーサー、ジェビン、ナビに取り囲まれたまま、一步一步出口へと向かつて歩かれる。

あと一步で店の外へ、というその時、男が不意に立ち止まつた。振り向いた瞬間、一番近くにあつたテーブルの上の殻になつたワインボトルをして、大きく頭上に振り上げた。

その狙いの先には、その時男の一番側にいたナビの顔があった。

「危ないっ！！」

一瞬の出来事に、誰もが　ナビでさえも固まつて動けない中、ミンホは咄嗟に男とナビの身体の間に飛び込んでいた。

バリーンッ！！

グラスが割れる派手な音が、店内に響き渡る。

「ミンホッ！！」

チョルスが叫ぶ。

割れたグラスの破片を浴びながら、ミンホの顔や服は真っ赤なワインで流血したように汚れた。

「この野郎っ！」

言つなり、チョルスは地面を蹴つてそのまま男のアゴに強烈な回し蹴りを食らわせた。衝撃で、男の身体が床に倒れる。倒れた男の襟首を捕まえ、チョルスはそのままズルズルと床を引き摺り、店の出口から男を雨の降りしきる外へと放り出し、音を立ててドアを閉めた。

「だ、大丈夫？！　ねえ！」

チョルスが振り返ると、うずくまるミンホを、すっかり狼狽しながら覗き込んでいるナビの姿が見えた。

「おい、平氣か？」

チョルスもミンホの元に駆け寄りその様子を覗き込む。

「……大丈夫です。ちょっと……軽く、眩暈がする……だけ」

チョルスはワインでベタベタに汚れたミンホの髪の中に手を突っ込み、ボトルの破片のガラスを拾つてやつた。

「出血はないみたいだな。石頭で良かつたな。せつきの頭突きも、何気に効いてたみたいだし」

チョルスが笑うと、ミンホも痛みに顔をしかめながら片頬を引き攣らせて笑つた。

「とにかく、手当てしなきや。」

ジヨビンはチョルスに田で合図をしてから、カウンターの方へと誘導した。ふらつきながら身体を起こすミンホに、ナビが素早く肩を貸した。

「……ふうーん」

ナビとミンホの背中がカウンターの中に消えるまで後ろ姿を見守っていたオーサーは、二人の姿が見えなくなると、顎に手を当て、意味深な溜息を漏らした。

「何だよ、先生。もぐりとは言え、あんた医者だろ？ 早く行つて、ミンホの手当をしてやつてくれよ」

「やだ」

「はあ？！」

チョルスが背中を押すと、子どものよつて足を突つ張つて動こうとしない。

「ライバルに、塩を送るよつなマネ、したくないもんね」「ライバルだあ？」

チョルスはワケが分からぬと言つ顔で、オーサーを見た。オーサーはプツと頬を膨らませた後、自分のそんな態度に自分でウケたらしく、クスクスと声を漏らして笑い始めた。

「差し詰め、ナビちゃんの『ナイト』ってところかな。こりや、全く油断できないね」

肩を揺らして笑いながら、よつやくカウンターの方へ向かつて歩き出す。

「……相変わらず、変な野郎だ」

チョルスは首をかしげながら、ほんの少し氣味の悪いものを見るような目でオーサーを見ながら、その背中を見送つた。

大学ではテコンドーを始め、一通りの護身術や武術は仕込まれてきたのであらう。実践に不慣れとは行つても、先ほどミンホが見せた乱闘の様子はなかなか様になつていて、チョルスを驚かせた。

しかし、それ以上に驚かされたのが、ミンホがナビを庇うためにとつた咄嗟の行動であつた。

男がワインボトルを振り上げた瞬間、ミンホは誰よりも早く、男とナビの間に割り込んでいった。

防御の体制も何もとらずに、ただ身体一つでナビの盾となつたのだ。

あの『僕ちゃん』然としたミンホからは、想像もつかない行動だつた。

まともにワインボトルの攻撃を食らつ無茶な行動で、決して褒められたものではないが、意外に骨のあるヤツだと、チョルスはほんの少し、ミンホを見直していた。

カウンターの奥のドアから繋がつた、大型のキャンピングカーの中で、ミンホはワインでベタベタの身体のまま簡易ベッドに寝かされていた。

「うーん、軽い脳震盪のうしんとうだね。切り傷は無いみたいだし、少し休めば大丈夫でしょ」

「先生、本当なの？」

「やだ、ナビ。俺のこと信用してないの？」

「ちょっと、くつつかないでっ！ もつとちゃんと見てよ」

横たわるミンホを覗き込んだまま、ふざけた攻防を続ける一人に、ミンホのコメカミこめかみが知らずにピクリと動く。ハスキーダがよく響くナビの声は、頭に強か衝撃を受けた今の自分には、いささか神経に障る代物だった。

「念のために、大きい所で、脳波見てもうりつといいよ」

オーサーはいくら言つても信用してくれないナビに、少しショボリと肩を落として立ち上がった。

「ナビ」

その時、キャンピングカーのドアが開いて、何枚もの白いバスタオルを持つたジェビンが顔を出した。

「はい、タオル」

そう言つて、一番上の一枚を投げて寄こす。

「兄貴、店は？」

「ああ、今日はもう閉店。いま、チョルスが手伝ってくれてる」

そう言つて、親指でドアの後方、カウンターの向こうの店内を指差す。

「ほりあ！　帰つた帰つた！　もう出すモンねえよ」

店内からは、チョルスの少々荒っぽい閉店を告げる声が聞こえてくる。

ね？　そう言つて、ジエビンは小首を傾げて笑つてみせた。

「……大丈夫、なんですか？」

思わず、ミンホの方が心配になつてそう尋ねる。どう McConnell に見ても、自分の兄貴分は、商売に向いていとは思えない。彼の店締めのせいで、一度と客が寄り付かなくなつたらどうするのか。

そんなミンホの心中を察したのか、ジエビンはニシ「ひとつ微笑んで言つた。

「大丈夫でしょ。一度と来るか！」って言われたつて、來たくても來れないお客様の方が多いからね。うちの常連客は、そこのお医者さんと、最近の君ら一人くらいのもんだから」

当の店主は、誰よりもあつけらかんとしたものである。

「ジッとしてて」

すると、突然何の前触れもなく、大判のバスタオルがミンホ目がけて降ってきた。

「え？ あ？！」

抗う間もなく、ミンホの視界は真っ白に閉ざされる。

「わっ？！ ちよっ……ちよっと痛いですっ！…」

悲鳴を上げるミンホにお構いなしに、バスタオルでミンホの顔を覆つたナビは、そのままガシガシと音がするぐらい乱暴に、彼のワインで汚れた顔や頭を拭き始めた。

「そんな……強くっ！ あ” 一、もひっ！…」

我慢出来なくなつたミンホは、ベッドの上に勢いよく身体を起こすと、顔にかけられたタオルとナビの手を同時に払いのけた。

「何だよお、キレイにしてやつての！」

「そう言つのは、キレイにしてるとは言ひませんっ！ だいたいあなたは、荒っぽすぎるんですよ。ここ何日か見てきたけど、皿の拭き方だつて運び方だつてなつてないし……」

「ふうーん、随分ナビのこと見てるみたいに言つんだねえ」

壁にもたれたオーサーが、腕を組んだまま一ヤーヤと笑う。

「見てるつて言つた……だつて、危なつかしいでしょ？ 誰が見たつて」

ミンホはうろたえながらオーサーを振り返る。別にやましいことは何もないのに、この医者の笑い方は力チンとくる材料には充分だつた。

「それに、あなた！！」

見透かすようなオーサーの視線への苛立ちを、そのまま田の前のナビの手首を掴む力に変換させる。

「痛つ……」

今度はナビが悲鳴を上げる番だった。

「あなた、本当は未成年でしょ？　お酒を提供する場なんだから、今日みたいな危ない目に合つことだつてあるんだし。あなたも、仮にもこの人の保護者なら、一体どういつもつりで彼を店に出てるんですか？」

ナビの手首を掴んだまま、ミンホはジエビンを振り返る。生真面目な口調に、一瞬そこにいる皆が黙り込んだが、次の瞬間、ジエビンとオーサーは腹を抱えて笑い出した。

「うははははははは……」つやいにや……

オーサーは手を叩き、田に涙さえ浮かべて爆笑している。

「ちよつ……何で、笑うんですか？　僕は、真剣に……」
「ナビ、教えてやれよ。お前、今年で幾つ？」

ジエビンも肩で息をしながら、美しい顔を惜しげもなく破顔させ

てナビを指差す。

当のナビはと詰つと、ムスースといつ効果音がぴつたりの子ども染みた表情で頬を膨らませている。

「おっ前！ 本当に失礼なヤツだな！」

いつか聞いた台詞と全く同じ悪態をつくと、ナビはミンホの腕を振りほどいて、キャンピングカーのロフトスペースになつた一階へと繋がる梯子を駆け上り、何かゴソゴソとカバンをひっくり返していたかと思うと、またすゞい勢いで駆け下りてきた。

「これが田に入らぬかー！」

居丈高に胸を張り、ミンホの田の前に小さなカードのようなものを突きつける。あまりに近付きすぎて、焦点が合わず、それが一体何なのかさえ分からぬ。

ミンホはナビの手首ごと掴んで、正常に視界に收まる位置までそれを後退させる。

「……住民登録証？」

それは、ミンホもよく見慣れた とこりよりも、五千万の大韓民国国民なら、誰もが例外なく持つてゐる住民登録証だった。ミンホも、勿論、財布の中に入れて常に持ち歩いている。

「よく見ろー。」

ナビはグイグイと、ミンホの顔の前にそのカードを押し付けてくる。ミンホは両手でナビの手首を押さえて、ともすれば顔に貼りつかんばかりに近づけられるそれを、必死に防ぐ。

「住民登録証の、最初の6ケタは？」

「本人の、生年月日」

「はい、正解。じゃあ、よく見ろー。」

ナビはカードをコラコラ揺らしながら、ミンホの目の前でカードを誇示する。

その時初めて、ミンホの目にカードに刻まれた数字が飛び込んできた。

「……え？」

見間違いではないかと、カードを掴んだナビの手首」と呟き寄せる。

「どうしたの？」

ナビはしてやつたつと言つよひ、「ヤーヤヤ笑いながら、カードを揺らす。

「……まさか」

6ヶタの最初。そこに刻まれた西暦を現す2文字が信じられなくて、ミンホは何度もカードとナビの顔を見比べた。

「……年上？」

そこには、自分の財布の中の住民登録証番号よりも、一年若い数字が刻まれていた。

「分かつたかあ？」

顔色を失うミンホを見て、田の前のナビは満足げに腰に手を当てた。

「兄貴ヒヨウと呼べー」

更に反り返るくらい胸を張り、続ける。

「お兄様ヒヨウでもいいぞー」

そう言つと、自分で自分のセリフにウケて、ガハハと笑つた。

「どう? 刑事さん。違法な雇用じゃないって、認めてもらえたかな?」

ジヨビンが悪戯っぽく笑うと、ミンホはまだ納得できないと言つ様に、ナビの手首を掴んで言つた。

「何かの間違いなんじゃないですか? その顔で、その……態度で、

25歳? 僕より年上?」

「お前今、カード見なかつたの?」

ナビは不満げにミンホの手を振り払おうともがく。

「もう一度、ちゃんと良く見せてください」

「もうダメだよ。時間切れ！」

ナビの手にある小さなカードを奪い取^{ひき}り^{くる}ミンホと、そのまま^{まことに}するナビの攻防が続く。

だが、ナビの方が素早くミンホの隙を突いて身を翻した。

「怪しい物じゃなかつたら、もう一度見せてくれたつていいでしょ^う」

「さつき散々見ただろ？」

「じゃあ何ですか？ あなたは、25歳にもなつて『醜いアヒルの子』とか言つてたんですか？ もうとっくに成人も超えてるのに、モムチャン（筋肉マン）だのオルチャン（イケメン）だの、これ以上どう成長しようと？ 牛乳飲んで背を伸ばそつなんて、小学生の発想ですよ！」

「おつ前！ 本当に失礼なヤツだな！」

「第一、軍隊は行つたんですか？ こんな子どもみたいな体格で？ 配属は一体どこに……」

「つぬきこなつ！ ちょっとビデカイからつて偉そう^うつ！」

もはや定番と化したミンホとナビの言い争いを見ていたジエビンが、よみがへ助け舟を出しに動いた。

「そろそろ許してもらえないかな？ 取りあえず、酒場で働けない年齢ではないことは兄の俺が保障するよ」

ジエビンにそう冷静に言われて、ミンホは顔を赤くして俯いた。

「……はい、すみませんでした」

「怒られたー」

ジョービンの後ろで、ナビはイシシと笑つた。
たしなめる様にジョービンが後ろに手を回してその尻を叩くが、ナ
ビは身を捩つてそれをかわし、更にアッカンベーをして見せた。

「タメ口利くなよー」

ナビは上機嫌でそつまつと、パンツの尻ポケットにカードを押し
込んだ。

＊＊＊

「……ショックです」

車の中で、ミンホはうなだれた。

「お前は、老けすぎ、あのボーイは幼すぎだもんなあ」

チョルスはハンドルを握りながら、にべもない言葉をくれる。

「老けすぎつて、僕、そんなに老けてますか?」

「顔の話してんじゃないよ。何て言うの、その……お堅い雰囲気が、
な。俺のジイさん(ハラボジ)にそっくりだよ
「ジイさん(ハラボジ)って……」

ミンホはますますガックリと肩を落とす。

「おじおじ、落ち込んでる暇はねえぞ。しっかり店探せよ。だいぶ、鼻が利くよくなってきたんじゃねえの？」

ミンホは車の窓越しに、今日も相変わらずドンヨリと重たい、ソウルの空を見上げた。

雨を追うように、後を追い続ける『ペニー・レイン』だったが、未だにあの薬物中毒の若者の証言を裏付けるような出来事はなかつた。

何せ、オーサー・リーという医者以外、ほとんどが偶然店を見つけて入った一見さんなのだ。そもそも、どこに開店するのか分からない状態では、クスリの取引場所にするには適わない。あの、ジエビンというオーナーが手助けでもしないかぎり。

だが、ここしばらくの張り込みで、ジエビンやボーリーのナビにもそんな様子は微塵も感じられなかつた。

気のみ気のまま、一人とも世間知れした自由な雰囲気はあつたが、犯罪に手を染めて暗躍するような人間には見えなかつた。

だが、そう考えるのは甘すぎただろうか。

現にチョルスは、『ペニー・レイン』への張り込みをやめようとしない。相変わらず雨が降りそうな日は、ソウル中を駆け巡つて『ペニー・レイン』を追つている。

「ところで、聖智大への聞き込みの成果は？」

「あー、はい」

ミンホは慌ててダッシュボードから、口元何口かで調べ上げた調査結果をまとめた資料の束を取り出した。

「あの学生が言つてた、『ジスク』って子の件ですが」

「ああ、『神隠し』にあつたつて言つて、あの坊やのコレか？」

小指を立てて見せるチョルスに、ミンホは複雑な顔で話の先を続ける。

「どうやら、そうでもないみたいで」

ミンホは、拘置所内で警官を刺した少年がずっと訴えていた『ペニーレイン』から帰つて来ないという少女の足取りを追うため、彼女が籍を置く聖智大学女子寮を訪れた時のこと思い出していた。

「どんな些細なことでも構いませんから、知つてることを教えてもらえませんか？」

インター ホンを鳴らしてからややあつて、ドアが開く。

聞き込みの途中で閉め出されなにように、相手が部屋から出でてき

たらまづ靴の爪先をドアの間に挟めとチヨルスに教わった通り、ミンホは長い足を突き出してドアの間に踏み込んだ。しかし、部屋から出てきた女学生はミンホの予想とは大きく外れた行動をとった。

彼女はミンホの顔を見るなり、ドアを閉めるどころか全開に開け放して、彼の腕を取つて部屋に招き入れるよつた体勢をとつたため、ミンホは逆に下着姿に等しい彼女一人の部屋に踏み込まないよう、突き出した足に力を入れて踏ん張らなければならなくなつた。

「ちょっと……話は、ここでも出来ますからっ！」

「あんた、本当に刑事さん？ すんごいいい男

女学生は自慢の胸を擦り付けるよつてミンホの腕にしな垂れかかつてくるので、ミンホの額からは嫌な汗が噴出した。こんなところを誰かに見られたら、誤解されて痛い目に合つのは自分の方だ。長年積んできた経験から導き出す、自分の容姿が招く様々な災難のシヨミレーションを瞬時に頭の中で組み立てて、ミンホはドアに手をついて、彼女の身体を部屋の中に押し込んだ。

代わりに自分は、見えない壁でもあるかのよつて、一歩も部屋に入らずドアの前に仁王立ちになる。

「あなたと同室だった、ナ・ジスクさんのことですが……」

ミンホは咳払いをしてから、氣を取り直して、改まつた口調で本題を切り出した。

「やつぱり、その話。一斉摘発があつたからね。来るだらうなあとは思つてたのよね」

部屋の中にミンホを招き入れることに失敗した彼女は、うんざり

したように肩を竦めた。

「コ・ジョンヒョンといつ名に聞き覚えはありますか？」

ミンホが問うと、女学生はハッと嘲笑するように息を吐いた。

「知ってるも何も、ジスクのストーカーじゃない
「ストーカー？」

ミンホが出したコ・ジョンヒョンといつ名前は、拘置所内で警官を刺したあの少年のものだつた

「ジスクさんは、彼の恋人だつたんでは？」
「恋人お？」

ミンホの言葉に、女学生は大げさに目を見開いてから、次いでゲラゲラと笑い出した。

「あいつは恋人なんかじゃないわよ。ジスクが高校生の頃、隣りの工業高校にいたあいつに、帰り道でも待ち伏せされて随分迷惑してたつて聞いたわよ。大学に入つてからも何かといつちや付きまとつて。この部屋にも何度も押しかけてきて、ウザいつたらいいつての。まあヤツも、ガリ勉でダサいジスクなんかのどこがそんなに良かつたのか分からぬいけど」

ねえ？ そう言いながら「私の方がいいでしょ」と言わんばかりに、薄い部屋着に隠しきれない豊満な肉体をさりげなく誇示しようとする彼女を、ミンホはさらりとかわしながら話の先を促す。

「5月から、彼女が帰つていないと聞きましたが？」

今は6月の半ば。少年の話が本当ならば、もう一ヶ月以上もルームメイトは帰ってきていないことになる。普通で考えれば特異な状況であるはずなのに、少しも動搖した様子もない女学生を、ミンホは探るような目で見つめる。

「さあね。駆け落ちでもしたんじゃないの？」

「駆け落ち？」

あまりにも突飛な発言に、ミンホが思わず食いついた。その反応を心良く思ったのか、女学生は一気に身を乗り出して話し始めた。

「『ジ』だけの話、ジスクには他にいい男がいたわけ。同じ大学のヤツなんだけどね。成績は良くて将来有望、定職もないジョンヒョンなんかとは大違い」

ミンホの耳に息を吹きかけんばかりに唇を近づけて、女学生は続ける。

「そんな彼が消えたのは、4月。後を追いつつに、ジスクが消えたのがその一ヶ月後。ね？ 怪しいでしょ」

女学生は更に一歩ミンホに近づいて囁く。

「去年から、『学生自治会メンバー』の駆け落ちが流行ってるのよ。ジスクも、ジスクの彼もそうだしね。前から、自治会メンバーでクスリやってるんじゃないかつて噂にはなってたけど、まさか本当だつたとはね。この前の一斉摘発は、結構衝撃だったわよ」

好奇心を隠そつともせず目を輝かせて語る彼女に内心辟易しながら

らも、ミンホはもう少しで引き出せそうな有力情報のために、不快感を堪えて食い下がる。

「その駆け落ち騒動とやらを、もう少し詳しく教えてください」「だから、『自治会メンバー』って、男も女もジスクみたいなガリ勉タイプが寄り集まってるから、傍から見たら気持ち悪いくらい、結束力が固いわけ。だからこそ、昔からカップル率も高いんだけどね。そんな中でデキてたカップルが、去年から何組か続いて駆け落ちしてるの。男と女と、微妙に時間差を開けてるから、表向きは分からぬんだけどね。だけど、大体男の方から先に姿を消してるから、逃げる準備を整えて、女を呼び寄せてるんだと思うわ」「なぜ、逃げる必要が？」

仮にも名門の呼び声高いこの大学で、金に不自由しているとも思えない、ましてや『自治会メンバー』になるほどの優秀な学生カップルが、逃げなくてはならない理由などミンホにはどうしても思いつかなかつた。

「馬鹿ね、刑事さん」

女学生は初心なミンホの胸を小突いて笑った。

「察しが悪すぎるわよ。理由なんか、『テキちやつたからに決まってるじゃない』

「『テキ……？！』」

途中まで言いかけて、よつやく意味を理解したミンホは途端に力ヶと頬を染めた。

「妊娠したから……逃げたと？」

「そうよ。みんなそう言つて噂してる。気持ち悪いくらい、結束してる奴らだつて言つたでしょ？ まあ、真面目な顔して、クスリ使つて乱交パーティなんかするよつな連中だから、誰の子だか分かりやしないけど」

思いも寄らないような衝撃的な内容に絶句しているミンホの前で、女学生が指を折つて何やら数え始めた。

「……六、七、八……去年から姿を消した“自治会メンバー”的数よ」

「同じ大学で、そんなに大勢の学生が消えたら、家族だつて黙つていないでしょ？ なのに、警察に捜索願も出でていないなんて」「甘いわよ、刑事さん。うちの大学をどこだと思ってるの？ ソウルでも一を争つ、ブルジョアの集まり、“ザ・世間体”を何より

大事にする一族出身の奴らばかりよ

「うう見えて、私もね。

そう言つて女学生は艶っぽく笑う。

なるほど、彼女も“自治会メンバー”を馬鹿にしながらも、『他聞に漏れず、親元を離れてハメを外している典型例なのだと、ミンホは納得した。

「それに、家族へのフォローは、駆け落ちコーディネーターがソソなくこなしてゐるから」

「駆け落ちコーディネーター？」

「ペク・ギョウンよ。ヤツだけ逃げのびてるでしょ？」

ミンホの記憶の回路が、女学生が出した名前を瞬時に弾き出す。それは、明洞の路地裏で、ジョンヒョンと一緒にいるところを取り逃がした男だった。

「ヤツが、駆け落ちカップルの家に行つて事情を話して丸く治めてきたのよ。幾ら貰つてゐるんだか知らないけど。捜索願いなんか出して騒ぎ立てて一族の恥を晒すより、どこかでひつそりと墮ろして帰つて来てくれた方が、家族にとつてもありがたいのよ。本音のところではね。男と別れさせるなり、責任取らせるなりは、帰つてきてから話だしね」

女学生はいい加減しゃべり疲れたと言つよつに、欠伸混じりミンホを見上げた。

「ところで刑事さん、最初にジョンヒョンのことを聞いてたわよね。あいつ、今どこにいるの？」

「彼は、拘置所の中です。摘発の日と、一緒に」

ミンホがそう言つた途端、女学生は「ツツ」と噴き出した。

「バツカみたい！　あいつ、“自治会メンバー”どころか大学生でもないくせに。まあ、バカだけど、ジスクに付きまとつた結果と思えばヤツも不幸よね。巻き込まれたようなもんだから」

（“溜まり場”の奴等じゃ、ダメだ……）

（“溜まり場”の仲間じやない俺が、やつと……やつと頼んで、ようやく『ペニー・レイン』に行けるようになつたんだ。俺が、ジスクを助けに行かなくちゃいけないんだ）

取調べの際に、ジョンヒヨンが訴えていた不可解な言葉が蘇る。

「最後に一つ聞きたいんですけど」

ミンホは真つ直ぐに女学生を見つめて言つた。

「『ペニー・レイン』といつ名前こ、聞き覚えは？」

「今の学生つてのは何を考えてやがるんだか」

ミンホの報告を受けたチヨルスは、ハンドルを握つたまま、呴えていたチビた煙草を苦々しげに噛んだ。

「“学生自治会”は、大学創立当初から見られた由緒ある組織で、

簡単に言つてしまえば、購買等の管理から始まり、学園祭等の学校行事の統率、大学全体に関する学生の自治権行使する学生団体だそうです。各学部から成績優秀者が集まることでも有名だそうです「それで、自分たちでクスリを回してパーティも主催するって？大した自治権の行使だな」

鼻で笑うチョルスに構わず、ミンホは続ける。

「聖智大学の失踪者は、昨年の9月から始まって、今年の5月のナ・ジソクまで、計八人、四カップルです。いづれも捜索願いは出ていません。それどころか、家族から休学願いが出ています」

「ブルジョアってのは、何を考えてやがるんだか」

先ほどと良くなじた悪態について、チョルスは開けた窓から、唾と一緒に吸い切った煙草をペッと吐き出した。

「ナ・ジスクのルームメイトの彼女は、『ペニー・レイン』の存在を知りませんでした」

「どううな。だが、墮胎手術だつたら『リー先生』のお得意分野だろうよ。その『駆け落ちコーディネーター』だつていう、ペク・ギヨウンと組んで、馬鹿な学生どもの手助けをした可能性は大だな」

「チョルスヒヨン」

「ん？」

ミンホは真面目な顔で、ハンドルを握るチョルスの横顔を見つめた。

「どうしても、コ・ジョンヒヨンが拘置所で言つてた言葉が気になりますが」

「溜まり場の仲間じゃない俺が……」つてヤツか？」

「はい」

ミンホは頷く。

「彼は“溜まり場”、つまり“自治会メンバー”の連中の内、選ばれた者だけが、上質な『エデン』を貰うために『ペニー・レイン』へ行けるって言つてましたよね」

「上質な『エデン』とやらが本当に実在するかは怪しいぞ。仲間の手前、堂々と「墮胎しにいく」とも言えないだろう。『エデン』は失踪の口実じゃないのか。本当に『エデン』を手に入れに行つたら、一人くらい仲間の元に帰つて来て、その上質なブツを撒いたつて良さそうなもんだ」

「僕もそう思います。だけど彼は、メンバーでない自分がようやく行けるようになつたと言つてました。それが本当なら、墮胎に困ったカツブルでもない彼が『ペニー・レイン』に呼ばれる理由が分からりません」

ミンホの言葉に、チョルスはニコチンの苦味が残つた口元を曲げて、うーんと唸つてしまつた。

そのまま考へ込んでしまつた一人の沈黙を破つたのは、ミンホだつた。

「……あつ」

助手席の窓から外を見ていたミンホがチョルスを振り返る。

「ヒョン！ 見つけました」

それは、最初にミンホたちが『ペー・レイン』を訪れた時、開店場所に選ばれていた高架橋の下だつた。車からはほとんど死角になつてゐるので、最初の時には気付かず素通りしてはいた場所だつた。今回は、前回のことがあつたので、ミンホは微かに漏れるテントの明かりを察知することが出来たのだつた。

「同じ場所に戻るなんて、珍しいな」

チョルスは急ハンドルを切つて、路地の隙間に頭から突つ込む。ギュルギュルとタイヤの音をさせて、今来た道を逆戻りする。

「あ、ヒョン！ あれ」

そう言つて、ミンホが指差した先には、橋の下に広げられた黒いテントの店の前で、細身のデニムのポケットに両手を突つ込んで、煙草を咥えながら所在なげに立ち尽くしているオーサーの姿があつた。

「今日もあの野郎が先回りか。開店場所は企業秘密だなんて言つてるが、あのお医者さんは、場所を予め知つているとしか思えないな」「誰が来ます」

その時、ミンホの指差す方向に、一人の男がフラフラと歩いて来るのが見えた。傘も差さずにずぶぬれになりながら、男はオーサーの元まで辿りつくと、彼の胸に縋るようにして何かを訴えているようだった。

当のオーサーは、めんどくさそうに煙草をふかし続け、やがて全部を吸い終わると、ゆっくりと雨の中にその吸殻を投げ捨てて、男に向き直つた。

オーサーのシャツを掴み、苦しげに何事かを訴える男の頬を、オーサーはいきなり何の前触れも無く思い切り張り倒した。

男は足元の水溜りに派手な水飛沫を上げながら転がつた。

冷たく踵を返し、歩き出そうとするオーサーのジーンズの足元に、男は必死で取り縋る。

「……ミンホ」
「はい」

チョルスが低く呟くと、二人同時に車のドアを開ける。
車を置いて高架橋の下へ駆け下りると、距離を保つてオーサーと男の様子を見守つた。

オーサーは濡れた手で容赦なく掴まれた事によつてどんどん水気を吸つしていくジーンズに苛立つていたようだが、やがて地面に寝そべる男の腕を持ち、強引に立ち上がらせた。

引きずるように男を連れて、雨の中を歩き出す。

チョルスたちも、気付かれないように足音を忍ばせながら後を追う。

やがてオーサーと男は『ペニーレイン』から離れること数百メートルのところにある、朽ちかけた廃材置き場の影に消えた。

「チョルスヒヨン」

チョルスは無言でミンホに向かつて頷いた。腰に下げた銃の在りかを確認すると、一人はチョルスと男が消えた廃材置き場の脇まで静かに忍び寄つて行つた。

「早く……早くくれ。お願ひだ……先生」

「それが、人にモノを頼む態度？」

材置き場の中からは、途切れ途切れに、男の切迫した掠れ声と、相変わらず人を食つたようなオーサーの声しか聞こえてこない。

「洋服、それに着替えて」

「……そんなことより、早く……」

「あれ？ もう忘れちゃつた？ もう一度、ここに来るための条件。俺の言う事は、何でも聞くんじゃなかつたの」

ピシャリと言い放つたオーサーに、男は渋々言つ通りにしたようだつた。耳を澄ますと、衣擦れの音が微かに聞こえてくる。

「パンツも忘れないでね」

オーサーは楽しげに、歌うように言つた。男が軽く舌打ちしたのが分かつた。

「……何を、してるんでしょうか？」

「さあな。黙つて、聞いてる」

チョルスは廃材置き場の壁に耳をつけて、ジッと中の様子をつかがっている。

「着替えたら、そこの水飲んで。全部ね」

「おいつ！？ いい加減に……」

「じゃあ止めようか？ 僕は一向に構わないけど……」

「分かつたつ！ 分かつたから……言つとおつにすればいいんだろ？」

「？」

そう言つと、男が喉を鳴らして水を飲み干す音が聞こえてきた。

「はい、よく出来ました」

部屋の中で、オーサーがパチパチと拍手する渴いた音が響き渡つた。

「じゃあ、準備完了だね。隣りの部屋に行って。ベッドで待つてね

「ベッドオ？…」

思わず素つ頓狂な声をあげそつになつたミンホの口を、慌ててチョルスが塞いだ。

「バカツ！ お前、大声出すなつ！」

「…………だ……だつて、チョルスヒヨン…………あの医者…………クスリの見返りに…………まさか…………身体を？」

「お前の言つとおりだつたら、『非合法墮胎』に『密売』に『買春』の三重の罪でしょつ引けるだろつけど、最後のはどうかな？ 同意の上なら、個人の趣味にとやかく言えない」

「あれが、同意の上に見えるんですかっ？！」
「シツ！ 声が大きいっ！」

チョルスはミンホの口を押さえたまま、ズルズルと立ち上がりて廃材置き場の中を覗き込んだ。一人は奥の部屋に消えたらしく、ここからは見えなかつた。

「うわっ？！ 何するんだよっ！」

その時、奥の部屋で男の叫び声があがつた。同時に、力チャ力チャと、金属の擦れる音、それに続けて、ベッドが軋むような音が聞こえてきた。

「や……やめ……つ、つ……ぐううう」

最後の方の男の叫びは、猿轡でもかまされたのか、ぐぐもつて声にならなかつた。

「チヨルスヒヨンッ！」

ミンホが自分の口を塞ぐチョルスの手を振り払つて叫ぶ。

「賈春なんでもんじやない。あれじゃ、完璧に強……」

もうこれ以上は傍観できないと、部屋の中に踏み込んでいく姿勢を見せるミンホに、さすがのチョルスもミンホの後に続いて乗り込もうと踏み出したその時、雨に震んだ暗がりの向こうから、ゴロゴロとこちらに向かつて近付いてくる明かりが見えた。

遠くの方で明かりを灯す『ペニー・レイン』と、高架橋の上を行き交う車のライトくらいしか周辺に目立った光源はないため、その揺れながら近付いてくる明かりは酷く目立つた。

不安定に左右にユラユラ揺れながら、徐々に近付いてきたその明かりが自転車のライトだということが分かるまで、しばらく時間がかかった。

油が切れているのか、キコキコと軋んだ音をさせながらその自転車をこいでいたのは、『ペニー・レイン』のボーイ、ナビだった。

傘を差しながらの片手運転のため、あんなにもフラフラコラコラ危なつかしい走行だったのだと納得する。その上、自転車の前の買物カゴには、パンパンに食材を詰め込まれたタッパーがうず高く詰まれ、それがますます彼の自転車のバランスを奪っていた。

鼻歌を歌いながら自転車をこぐ彼は、廃屋の前でキュッとタイヤを鳴らして自転車を止めた。

かごの中のタッパーを取り出し、相変わらず危なつかしい足取りでフラフラと歩くナビは、真っ直ぐ廃材置き場の入口へと向かった。ナビの位置からは陰になっていて、チョルスやミンホの姿は見えていないう�だつた。

「つあー。」

思わず声をあげたのは、チョルスだった。
ミンホが闇の中を飛び出し、真っ直ぐナビの元へ飛んでいくと、
背後からナビの口を塞いだ。

「……んぐう？！」

驚いたナビは、手にしていた食材の入ったタッパーを全て取り落とした。

「ん……んんう！…」

抵抗するナビの口を塞いだまま羽交い絞めにして、ミンホはナビを入口から遠ざけるためにズルズルと引き摺つて、チョルスと二人で身を隠していた廃材置き場の影に連れ込んだ。

「お前っ！ 勝手に何やつてるんだ！」

ナビを引き摺つて戻ってきたミンホに、思わずチョルスの怒声が響き渡る。

「シツ！ チョルスヒョンッ！」

ミンホにたしなめられて、チョルスも慌てて口を噤む。

「だつて、もしかして、中で予想通りの……あの……いかがわしいことが行われてたら、そんな現場を、この人に見せるわけにはいかないでしきう？」

「だからつて、俺の指示も仰がないで勝手な真似しやがって……」

ブツブツと説教を始めようとしたチョルスだつたが、ミンホに口を塞がれ、顔を真っ赤にして苦しげにしているナビに気付き、ミンホの腕を叩いた。

「おこひー。早く離してやれー。」

ミンホもソレでよつやく我に返つ、よつやくナビの身体を拘束していた腕を解いた。

「ふはつーー。」

口を塞ぐミンホの大きな手が離れた途端、ナビは大きく息を継いだ。

「こきなり何すんだよつー。」Jの野郎つー。」

振り返ったナビがミンホに掴みかからうとしたその瞬間、再びミンホの手でそのハスキーナ甲高い声を発する口を塞がれてしまった。れたら、Jの手を離します」

「んんーつーー。」

「お願ひだから、静かにしてくだわー。静かにするつて約束していくんだよ。」
ナビは再び顔を真っ赤にしながらミンホを睨みあげたが、息苦しさには適わぬ、口を塞ぐミンホの手を品いて頷いた。
ミンホの手が、そつと離れる。

「一体、何なわけ？ 何で、あんたたちがこんなとこでいるんだよー。」

「それは、Jのセリフだ、ボーケさんよ」

ミンホを押しのけて、チヨルスがズイツと前に乗り出す。

「あんたこそ、店を離れてこんなとこに何しに来た？ 自転車で

運んでたあの食料は？

「僕は、出前に来ただけだよ」

「出前だと？」

ナビは眼光鋭いチョルスにも臆することなく、唇を尖らせて胸を張った。

「仕事中の先生に夜食を運んでるんだよ。ジーベニヒヨンの特性弁当だよ。あんたたちのお陰で全滅だよ。ビーフしてくれんの？ 僕が兄貴に怒られるんだからね」

「先生の仕事つて……お前、この中でヤツが何してるのか知ってるのか？」

チョルスの問いかに、ナビは口を噤んで、曖昧に目を逸らした。

「おひつ！ 質問に答える。お前も、ジエビンも、ヤツが何してるか知つて協力してるんなら、同罪だぞ」

「同罪？」

ピクリとナビのコメカミが動く。

「ドーフィングの密売と……」

言いかけて躊躇するミンホの肘を、チョルスが突く。

「強姦の帮助です」

「……密売と……強姦？」

ガラス玉のように澄んだ目が、キヨトンと見開かれる。自分よりも年上だと知つてからも尚、ミンホはいたいけな子どもに大人の汚

い世界を覗き見させたような、嫌な感覚を抱いていた。だが次の瞬間、ナビは弾かれたように笑い出した。

「ブハハハハハツ！ 先生、本当に信用ないんだね。だけど、よりによつて、強姦つて……ツク……フハハハハハハ」

両手で口を塞いで必死に笑いを堪えているが、ほとんど効果は無いようだ、ナビは身体を二つ折りにして、こみ上げる笑いの発作を耐え忍んだ。

「何が可笑しいんだ？」

怪訝な顔をするチヨルスとミンホに向かって、ナビは笑いすぎて目に涙を溜めながら、きつぱりとした口調で言った。

「先生は密売や強姦なんかしてないよ。確かに、変態だけど、あんたたちが思つような犯罪者じやないよ」

そう言って、ナビは立ち上がった。

「来れば分かるよ」

ナビはクイツと指を曲げて、一人に着いてくるように促した。チヨルスとミンホは仕方なく、ナビの後について廃材置き場の中に入ることにした。

「せんせー」

ナビが奥の部屋に向かつて呼びかけると、中から汗だくになつたオーサーが出てきた。

「ナビ……ッ?」

オーサーはナビの後ろに控えている、チョルスとミンホの姿を見て、一瞬鋭く目を細めた。

「オマワコさんたちね、そりで会つたの」

無邪氣な口調でナビが続ける。

「ジョビーヒヨンのお弁当持つてきたのこり、そこの、デカいオマワリさん襲撃されて、撃沈。せんせー、責めるんなりこのオマワリさんを責めてね。ジョビーヒヨンにも謝つてもらつんだから」

ふうっと頬を膨らませて、相変わらず恨めしげにミンホを睨む。

「つけられてたってワケ? 僕としたことが、不覚だつたな」

「奥にいる男は何だ?」

チョルスがナビの前に踏み出して、オーサーに詰め寄る。

「彼に何をした?」

オーサーは諦めたように肩をすくめた。

「その田で見てくれば？」ソロリと来たら、隠しても仕方ないよ

チョルスがミンホを振り返ると、ミンホも頷き、チョルスの後に従つて、オーサーが出てきた奥の部屋へと足を進めた。

薄暗く蜘蛛の巣だらけの部屋の中は、あちこちに廃材が転がっている以外には、部屋の真ん中に粗末なパイプベッドが一つ置いてあるだけだった。

その上で、男が大の字になつて寝かされている。
いや、正確には寝かされている のでは、ない。

両手はどこで手に入れたのか手錠をはめられ、鎖部分をパイプベッドの頭の部分に通され固定されていた。両足はロープでベッドにグルグル巻きに縛りつけられている。

「……これは」

近寄つて覗き込んだ男は顔面蒼白で瞳孔が開きかけ、猿轡を噛まれた口の端からは、白い泡を吹いていた。

ビクンシ、ビクンシと身体を震わせ、その度にベッドを激しく軋ませている。

「禁断症状でしょつか？」

恐る恐るチョルスの顔を覗き見たミンホに、チョルスは唾を飲み込みながら答えた。

「間違いないな」

「あんまり、長居しないほうがいいよ。これからが本番だから」

いつの間にか、部屋の入口に佇んでいたオーサーが、壁に背をもたれさせ、腕組みした姿勢で言った。

「クスリ抜くのは想像を絶する苦痛だからね。発狂しそうな叫び声を一晩中聞いてたら、あんたたちの方がおかしくなるよ。しばらく、夢にも出てくるしね」

「……お前」

チョルスの視線を受けながら、オーサーはゆっくりとベッドの男の枕元に近寄った。

「それにこいつは、『抜き』の途中で耐えられなくなつて逃げ出した出来の悪い患者でね。結局禁断症状に耐えられなくなつて戻つて来たはいいけど、逃げてる間にしこたま粗悪品をシャブリつくして来たから、ちよつと手間取りそつなのよ。紳士な俺からしたら、乱暴にするのは、本意じやないんだけどね」

軽くウエーブのかかった髪を頬に垂らしたその横顔は、相変わらず女性受けする優しげなラインを描いているが、前髪の間から覗くその目は、ギラギラと冷たく光りながら、ベッドの男を捕らえていた。

「何してるか分かつたら、出てつてくれない？　ここからは、俺のワンマンショーだから」

オーサーがミンホたちを振り返つてニーッコリと微笑んだ瞬間、ベッドの男が突然痙攣するように身体を激しく揺さぶつて、粗末なベッドはガタガタと宙に浮くほど軋みだした。オーサーは男の肩を押さえてベッドに乗り上げると、そのまま男の腹の上に跨つて、髪を振り乱しながら男を押さえつけた。

「早く出て行けッ！ 幻覚が見えてるんだよ。あんたたちがいると、ますます暴れるつー！」

男を押さえつけながら、オーサーが叫ぶ。
その時、男の口を塞いでいた猿轡さるくわが外れた。

二十九

オーサーは軽く舌打ちすると、片手を男の口の中に突っ込んだ。

早く行けっ！」

チヨルスとミンホは慌てて、言われるままに部屋を出た。

閉めた扉の向こうでは、聞いている方が気が変になりそうな叫び声があがる。その声に共鳴するように小屋全体が揺れ、軋んだ音を立てる。

「分かつたでしょ？」

部屋から出てきたチョルスとミンホに、ナビは言った。

「先生は、密売や強姦なんかしないよ。ヤク中になつた学生を、救つていいんだ」

その時、廃材置き場の外で「うわっ！」という短い悲鳴が聞こえた。

「ナビッ?! 僕の特性弁当、どうしてくれたんだよ?」

続いて聞こえてきた声に、ナビはヒッと息を飲んで、慌ててミンホの背後に隠れた。

「え? ……あの……ひょっと」

困惑するミンホをよそに、ドスドスと低く重量感のある足音が響いてきて、突然小屋の扉が開いた。

「ナービーヤー」

低く、地の底から響き渡るよつた声で、その足音の主がヌツと姿を現した。

「……お許し下さい。神様、助けて、お守り下さい」

ミンホの背で、ナビはガタガタ震えながら十字を切り出す。

「食べ物を粗末にするやつは……」

「こいつです! 兄貴、僕は無実ですっ!」

「え? あ、えええつ? ……」

ナビは勢いよくミンホの背中を突き飛ばして、静かな怒りに震えるジヨビンの元に突き出した。

「ここでの闇討ちのせいだ、兄貴の大事な弁当が全滅でしたっ！以上！」

「や、闇討ちって……」

反論しようと口を開きかけた瞬間、ジョビンの凍るような視線に射抜かれて、ミンホの心臓も止まりそうになる。

「お前ら、一人とも天誅つ！」

やつまつや否や、どこから出したのか、銀色に輝くお玉で、一人の頭をリズムよく、スコンシスコンシと叩いた。

「……っ……」

「ギャンッ……」

二人仲良く悲鳴を上げて、頭を押さえる。

「ジョビン、悪かったよ。俺からも謝るから。捜査の途中で、このボイイさんが来たもんだから。ミンホも悪気はなかつたんだ。勘弁してくれよ」

見かねたチヨルスが間にいると、ジョビンはよつやくお玉を引っこめた。

「ソレで張つてたつことは、もうバレてるんだろ？」

ジョビンは溜息をつきながら、相変わらず黙じみた叫び声の耐え

ないドアの向こうを見やつた。

「場所を移そうか？」ソーリー話もできないから」

数分後、四人の姿は早々と店仕舞いした『ペニーレイン』の中にあつた。

「どーから話せばいいのかな？」

カウンターの中で、ジョビンはナビにティーカップを用意させ、自分はアールグレイの缶を取り出しながら静かに言った。

「最初から、全部だ。全部話せ」

急かすように先を促すチョルスに苦笑しながら、ジョビンは言った。

「さつかけは、ある日偶然、さつきの廃材置き場で、たむろしてた学生の集団を見つけたことから始まつたんだ」

ナビが用意したカップにゅっくりと紅茶を注ぎながら、ジョビンが続ける。

「去年の9月くらいだつたかな。その時も、秋の雨を避けるのに一度よくて、この高架橋の下にテントを広げようとしてた。それで、ナビに周囲を点検しに行つてもうつたんだ。いつもやることだけど、俺らみたいな水商売には厳しい繩張り争いもあるからね。知らずに誰かのシマを荒らしたりしないように、店を広げる前に下見は欠か

さないのね」

その時、カウンターの向こうへ、テントとキャンピングカーを繋ぐ通路から、まるで話に加わりうつでもするかのよう、灰色の猫が現れた。

「オンマが最初に見つけたんだよ」

ナビは瘦せきすの猫を抱き上げて、そっと優しくそのみすぼらしい毛並みを撫でた。

「夕方、開店前にオンマと一緒に探検してたら、学生の集団がゾロゾロあの廃材置き場に入つていいくのを見たんだ。身なりもしつかりしてて、髪を染めてるよつたなヤツもいなくて、眞面目そのものの普通の大学生。最初は、サークルか何かのキャンプかと思つたんだ。だけど、あんな廃屋でキャンプやってるのなんか見たことないし、そいつらの様子も、妙にコソコソビクビクして、怪しかつた。だからこいつそり、窓から覗いてみたんだ」

また、あなたは！

ミンホは思わずそうしたしなめたくなつたが、周囲の手前それをグツと我慢した。好奇心旺盛なのは結構だが、こんな場面では時としてそれは命に關る。

「変な匂いがした」

その時のことを思い出すよつて、ナビが顔をしかめる。

「匂い？」

「開いた窓の隙間から漏れてきた。お香に似てるけど、すこしく嫌な匂い」

その時、ナビの腕の中で大人しくしていた猫が、急に身じろぎをしてナビの手から逃れ、対角線上にある店のソファーの上に陣取ってしまった。

「今みたいに、匂いに反応したオンマが暴れたんだ。それで、覗いてたのがバレちゃった」

実際にその現場に居合わせた訳でもないのに、ミンホはドキドキと胸が騒ぐのを感じた。

何て無茶な人なんだろう。

「逃げようとしたけど、捕まつて……そしたら、オンマが兄貴のところまで、助けを呼びに行つてくれたんだ」

灰色の猫は赤いソファーの上で、「当然だ」とでも言つよつて、元気な仕草で耳の後ろを搔いた。

「オンマはいつも、僕を助けてくれるんだよ」

そんな猫の姿を見て、ナビも誇らしげに微笑む。

話の本筋からずれ始めたナビの話を、ジェビンが引き取つて続ける。

「それで、その時店に来てたオーサーも一緒に、廃材置き場に駆けつけた。奴らを見て一目で、クスリをやつてるって分かつた。でも、そこまでなら、別に珍しいことでもなかつた。客の中でも、何人もヤク中の奴らは見てきたからね。小奇麗な身なりをしてたつて、ヤ

クをやる人間の田はいつも同じだから。 そうだよな？」

ジョビンがそう言つと、いつの間にか入口のところに立つていたオーサーが、音もなく店の中に入つてきた。全身、雨のせいに汗のせいがびしょ濡れだつた。

「あの男はどうした？」

チヨルスが立ち上がりつてオーサーを振り返ると、オーサーはナビから投げてもらつたタオルで顔を拭きながら、ぐぐもつた声で答えた。

「今は眠つてる。安定剤が切れたから、取りに戻つたんだ。長丁場になるから、ちょっと休憩しなきゃ俺も持たない」

タオルから上げた顔には、疲労の色が滲んでいた。

「それで、その学生たちとはその後どうしたんだ？」

「早速取り調べ？ 容赦ないな」

オーサーは苦笑しながら、奥のテーブル席のソファーにグッタリと身体を投げ出した。

「まずは、ナビを返してって言ったよ。当然だろ？ だけど、ヤツらだつてバカじやない。ヤバい場面を見られて、大学にチクられてもしたら終わりだ。ナビちゃんは大事な人質つてわけだから、簡単には返してくれない。だから、粘り強く交渉してみることにした」

「交渉？」

「そ。まずは、友好の証に、そのキメてるクスリをお裾分けしてくれないつてね。俺も同じ穴のムジナだつて教えてあげたわけ。ヤバいことを喜んで共用するんだから、俺らが奴らをチクることはないつて、安心させるためにね」

「……ちょっとだけ、吸つた」

ナビが小声で、言ひにくそうに呟く。

「でも、ちょっとだよ！ 僕を助けるためにしたんだから、そのくらい多めに見てくれるよね！」

「ナビ、今は取り敢えず、それは置いておこう」

ジヨビンに遮られ、渋々ナビも押し黙る。

「だけど、キメるまでもなかつた。本当は、吸う前から匂いで見当はついてたけど」

「見当？」

チヨルスの問いに、オーサーが答える。

「やつらがキメてたクスリは『ヒテン』なんて呼ばれてたけど、そ

んなご大層な名前が似合つ代物じやない。混ぜモンの粗悪品だ。気持ちイイのは、最初だけ。常習すれば強い頭痛、吐き気、死にたくなるような幻覚……簡単に命も持つてかれる。まあ、あの世へ直結つて意味では、確かに『エデン』かもしれないけど。問題は、俺が以前にも似たようなクスリを見たことがあるつてことだ

「何だと？」

チョルスとミンホの顔色が変わる。

「九年も前の話だけね。今回の『エデン』そつくりな、混ぜモンの粗悪品がある大学を中心に出回つて、死人も出した」

「死人も？ 待てよ……そんな記録あつたか？……」

「メカニミを押されて、警察の過去の事件を思い出そうと考え込むチョルスに対して、オーサーは鼻で笑う。

「いくら考えたって思い出せつゝないよ。『無かつたこと』になつてる事件だから」

「一体どう言つことだ？ 何で、お前がそんなこと知つてる？」

謎かけのようなオーサーの言葉に、苛立ちを募らせたチョルスが詰め寄る。

目を剥ぐチョルスに、オーサーはクスクスと手の甲で口元を押さえながら笑う。

「九年前、『ある大学』を中心にそのタチの悪いクスリが出回り始めた頃、俺は知り合いに頼まれて変死した女子大生の周辺を洗つてたんだ。警察発表では既に“心筋梗塞”として処理されてたけどね。だけど、途中で依頼主が死んで、調査は頓挫した。結局、肝心のクスリの出所も掴めないまま、真相は闇の中だ」

オーサーの目が暗い光を放つ。ミンホは、今さらながらこの医師が、普段見せているような柔軟で軽くいい加減なイメージは、カモフラーージュなのだと実感した。

「似てるんだよ。九年前と、クスリの出回り方が。素人の甘ちゃん学生集団相手に商売してるようだが、もっと大きな土壤を隠すためだと俺は思ってる。俺らが見つけた“聖智大学”以外にお宅らが摘発した大学はいくつある?」

チョルスが答える前に、ミンホはチョルスから預かつた資料に書いてあつた数値を反芻する。

「ソウル市内だけで、5大学、学生数にしたら50弱」

「一大学10人弱の計算だ。数にしたらそう多くも無いが、そいつらに、間も切らせずクスリを運ぶには、組織だつた販売ルートが必要なはず。だが、肝心の大本は、功名に姿を隠していて分からない」「まるでトカゲの尻尾だな。いくら下つ端の尻尾を捕まえたところで、胴体には辿り着けない。俺たちが手をこまねいていたのもそこだ」

チョルスの言葉に、オーサーは意味深な笑みを漏らした。

「そう悲観するものでもないよ。尻尾だつて、一本一本丁寧に辿つていけば、どれか一本くらいは胴体に繋がっているもんさ」

「それは、どういう……」

眉を潜めるミンホに、オーサーは子どものよつに無邪気な、満面の笑顔で答えた。

「君らと違つて、俺には時間も暇も売るほどあるからね。シッポちやんたちを一人一人集めて、逆から追つてやることにしたんだ。廃材置き場で捕まえた学生の一人に吹き込んだ。今よりもっとキメられる、特製の『エデン』を持つてるって。だけど、本当に特製だから、一度にちょっとしかあげられない。君と、君の彼女の分くらい。他の仲間には秘密。じゃないと、殺到しちゃうからね。俺の“お気”に”の子しか呼ばないよつて念押ししたら、噂はあつという間に広まつた。みんな『ペニー・レイン』に気に入られようと、競争を始めた。『ペニー・レイン』の“お気”になる方法はたつた一つ、胴体に繋がる情報を持つてくること。俺は彼らに競争させて、一人一人別々に『ペニー・レイン』に呼び出した。大抵の場合は男の方から先に呼んで、彼女を呼び寄せたいがために頑張らせたつてわけ。クスリを抜いた後じやないと、彼女も呼ばせないし特製の『エデン』もあげないよつてね」

「じゃああなたは、墮胎のはつじよ帮助をしていた訳ではないのですね？」

「あれ、何？ そんな噂になつてるの？」

ミンホの問いに、オーサーは目を見開いて、面白そうに口の端を歪めた。

「そつか、時間差でもカッフルで消えれば、そつ怪しまれても仕方ないかもね。男女で呼んだ理由は簡単だよ。男の子は女の子のためなら、頑張っちゃうでしょ？ 君にも経験あるんじゃない？」

バチンとミンホに向かつてウインクしながら、さつ氣なくその目はナビの姿を追う。

「ジロジロ見るなよつー」

思わずオーサーの視線の先を追つてナビと皿が合つてしまつたミンホに、ナビから厳しい一言が飛ぶ。

「別につ！ あなたなんか、見てません」

苦し紛れにそう反論しながら、第一、あなたは“女の子”じゃないでしょ？と、モゴモゴと口の中を呟いた。

「ちょっと待て！ お前はじゅあ、学生から集めた情報で、黒幕の正体を知ってるのか？」

どんどん話の本筋と脱線する周囲の状況を引き戻そうとチヨルスが声をあげると、オーサーは首を傾げながら、「半分正解で半分不正解」と笑つた。

「決定的な証拠は無いよ。俺が持つてるのは、トカゲの尻尾ちゃんたちから集めたリストだけ」

そう言つて、胸ポケットから折りたたんだ紙切れを取り出す。

「名づけて、シッポちゃんリスト」

「そのまんまだし！」

緊迫した空氣を忘れてしまつたかのように、ナビが明るい声で突つ込みを入れる。

事実オーサーが長い指の間に挟んでいるその紙切れには、几帳面な小さなハングルで『シッポちゃんリスト（末尾にはハートマークまで付けて）』と記されていた。

「それ、見せる！」

「別にいいけど。もう、隠す必要もないし」

オーサーが興味なさげにテーブルの上にその紙切れを投げ出すと、チヨルスがそれに手を伸ばすよりも早く、ナビが飛んできた。

「待つて！」

ナビはオーサーの紙切れを奪い、胸に大事そうに抱えてジッとチヨルスとミンホを見据えた。

「ジェビニヒヨンのことも、先生のことも、もう疑ってないよね？
先生はわざと麻薬密売人みたいな真似をして、何人も麻薬中毒の
学生を救つて来たんだよ。ジェビニヒヨンも、そんな先生を応援して
いただけ。人助けをしたんだよ。だから、逮捕したりしないよね
？」

「それは、全部の取調べが済んでからだ。こんな大事なこと勝手に
警察に黙つて進めてたんだ。しょっぴく理由が完全に無くなつたわ
けじやない」

「やだつ！」

「やだつて、お前なつ！」

青筋を立てながらナビに手を伸ばしてきたチヨルスを、ナビはひ
らりとかわして、店の中を駆け出した。

やつぱり猫だ。

兄貴分が目の前でてんてこ舞いする様子を見ながら、ミンホの脳
裏はそんな不謹慎な思考を紡ぐ。

「この野良猫つ！ いいから、早くそのリストを寄こせー！」

チヨルスも同じことを感じている。

妙なところに関心している間にも、チヨルスは店の床をキュッと
靴の底で鳴らして、そんな猫を追いかける。

『狂犬』と『野良猫』の追いかけっこ。

思わずクスリと笑いを漏らしそうになつ、ミンホは慌てて椅子から立ち上がつた。

「待つてください」「ツキヤンツー！」

こきなり目の前に立ちふさがつたミンホの胸に弾かれて、よろける猫の腕をミンホはがつちりと取り押さえた。

「何すんだよつー！？ 離せ、デカイのつー！」

「僕は『デカイのつ』て名前じゃありません。ハン・ミンホって名前があります」

「そんなの知らないよつー！」

ナビは必死に身を捩つてその腕を振りほどこうともがくが、ミンホはビクともしない。

「落ち着いてください。僕らも、あの人がやつていたことを、ついつき目の前で見ました。だから、絶対に悪いようにはしません。だけど、あなたがそうやって必要以上に捜査の妨害をするなら、僕らも黙つているわけにはいかないんです」

ミンホはナビの手首を握つたまま、その幼顔を覗き込む。

「あなたが、オーナーや先生を大切に思つてることくらい、僕にも分かりますよ。だからこそ、僕らのことを信じてください。僕らはあなたたちを、捕まえたいんじゃない。ただ、事件の手がかりを知りたいんです」

ね？

そう言つて、首を傾けるミンホに、ナビは尚も悔しそうに唇を噛み締めていたが、やがて真っ赤な顔をしたまま、渋々コクリと頷いた。

「……ありがとう」

ミンホはそう言つて、ナビの強く握り締められた拳を少しづつ開いていく。拳の中でグシャグシャになつたオーサーのリストを受け取り、ミンホはチョルスと一人でそれを広げた。

リストには、氏名、年齢、大学・学部名、男女の別、連絡先の携帯番号など、詳細な個人情報が網羅されていた。驚いたことに、大学名は神隠し事件が流行つっていた『聖智大学』だけではなく、ソウルを代表するそつそつたる名門大学の名も記されていた。名前の横には赤鉛筆でチェックが入つており、所々、そのチェックが飛んでいた。

「『ペニー・レイン』に呼ばれる前に、おたくらにしょつ引かれた学生も多いよ。ついこの前の一斉摘発でも、随分情報網を持つてかれて苦労したんだから」

そう言われてみれば、リストの真ん中辺りでは、大人数のチェックが飛んでいる部分があつた。

「チョルスヒヨン！ この名前……」

ミンホはリストの中に、見覚えのある名前を見つけてチョルスを見上げた。

拘置所でチョルスの先輩、ミンホの前任であるソン警査を刺し、ここ数日ミンホが周辺を洗っていたあの彼だった。

「その子は、異色だよ。そもそもクスリの土壤になつてゐる大学の生徒じゃないからね。だけど、随分熱心にアプローチしてくるもんだから、一度呼んでみようかつて思つてたところで、おたぐらに持つてかれた」

「……それで、ソン先輩を刺したって訳か」

チョルスがリストを手で追いながら、忌々しげに舌打ちする。

「ヤクを抜くつたつて、一晩やそこいらでどうかなるものじゃないだろ？ ずっとこんな廃材置き場に置いとくわけにもいかないだろうし」

「勿論、波が過ぎたら場所を移すよ。俺の隠れ家でリハビリさせる

「隠れ家？」

「そ。俺だけの秘密のお城」

首を傾げる愛らしい仕草にも、目の奥は強かな光を放っている。

「ヤクが抜けた後、そいつらはどうなる？」

「いい子になるよ」

ふざけたオーサーの答えに、チヨルスが声を荒げる。

「真面目に答えるつ！」

「本当のことだよ。俺のリハビリが終わって帰る頃には、クスリに溺れてたことは、きれいにぱぱり忘れてる」

「忘れてるだと？」

チヨルスの眉が釣りあがる。

「そんな馬鹿な話があるか

「あるんだなあ。ほら、俺天才だから。ちゅちゅいと魔法をね

オーサーは、相変わらずクスクス笑いながら立ち上がった。

「じゃあ、俺そろそろ戻るよ」

「おい、待て！ まだ話は終わってないぞ」

「待てないよ。また発作がきて、火事場の馬鹿力で手錠切られて逃げられたらおしまいだもん。禁断症状時のヤク中患者の力つて、尋常じやないんだから」

オーサーは出口に向かいながら、ふと思いつたよつて足を止めた。

「でも、丁度良かったよ。一人一人シッポちゃんを誘き出してクスリを抜いてくのも、そろそろ限界だつたから。逃つても追いつかないと、患者は増えてる。元を断たなきや、イタチ^{イタチ}こだ」「だから、その大元がつ……」

苛立つばかりのチョルスに向かつて、オーサーは長い指を突き出した。

「リストの名前の横を見てみな。シッポちゃんたちから集めた情報だ。色んな大学を迂回しながらも、どのルートも、最終的には一箇所に集まってる」

オーサーの言葉通り、チョルスとミンホはもう一度リストの上から下まで視線を走らせる。そこには、名前の横にいくつものイニシャルが刻まれていた。

エンピツで幾度もなぞり黒く汚れたそれらには、どの名前の横にも共通するある一つのイニシャルが書かれていた。

「……M・K？」

「ソウル市内の大学で、そのイニシャルがつく大学と言つたら？」

「明慶大学つ！」

思わず叫んだミンホに、オーサーがニッコリ笑って指を鳴らす。

「『』名答一、ちなみに、俺の母校

オーサーが肩を竦める。

「そして、『無かつたこと』になってる、9年前のあの事件の舞台になつた学校だ」

それは、名門の呼び声高い、ソウルでは知らぬ者がない名前だった。

＊＊＊

「……やつかいなことを、掘り出してきてくれたな」

署長室のドアスクの前で直立不動の形をとる長身の男一人を前に、警察署長は明らさまな溜息をついた。

「オーサー・リーは本当にクロじゃないのか？ 奴が善意だけでヤク中患者のリハビリを買って出でるとは思えんが」「食えない奴なのは確かですが、実際にヤツがクスリ抜きをしてる現場を押されたので、確かです」

チヨルスの言葉に、ミンホも強く頷く。

「……だが、明慶大学か。警察幹部の中にも出身者が多いからな。

それに、この間の一斉摘発でも、明慶だけはシロだったじゃないか
「何かカラクリがあるはずです！」このまま見て見ぬフリしろって
言つんですか？」

「そつは言つてないだろ？」「

すぐに熱くなるチョルスに、鬱陶しそうに署長が頭を搔く。

「大っぴらには、出来ないと言つたんだ。潜入捜査で確かに証拠を
掴んだら、全く出来ない話じやない」

「潜入捜査？！」

思わず、チョルスとミンホの声が重なる。

「俺に、今さら大学生になれと？！」

裏返つた声で叫んだチョルスを、署長がバッサリと切り捨てる。

「薄汚いヒゲ生やした三十路男に、そんな無茶は言わん。マフィア
への潜入ならともかく、どう見たってお前に今更大学生は無理があ
るだろ？ 第一、そんなスレた目えした大学生がいるか
「……自覚してますけど。面と向かって言わると、すぐ腹立ち
ますね」

ブツブツと消え入りそうな声で文句を言つチョルスを尻目に、署
長は真っ直ぐにミンホを見据えて言つた。

「お前が行け」

「え？ 僕ですか？」

突然の話に、ミンホが目を見開く。

「つい一年程前まで本物の学生だつたんだ。わけないだろ？」「

事も無げに署長は続ける。

「本當なら、もう一人署からあてがうべきだが、あまりこの件を大っぴらにしたくない。民間人を巻き込むのは得策じやないが、仕方ないだろ？」「

「民間人つて、署長、まさか？」「

「その『ペニー・レイン』とか言つての店の関係者を、捜査に協力させるんだ」

チョルスは開いた口が塞がらなかつた。

「今のところは、中毒患者との唯一のラインだろ？　まだ隠していることがあるかもしれない。潜入捜査への協力依頼できつと、自分たちへの疑いは晴れたと思い込む筈だ。捜査の途中でボロを出す可能性も大いにある。チャンは引き続き『ペニー・レイン』周辺も洗うんだ」「

よくもそんな狡猾な手管を思いつくものだと、チョルスは舌打ちしたい気持ちになる。協力と言つ名の下で信用させ手のひらを返す。それが自分の仕事では日常茶飯事であることはチョルスも充分承知していたが、何となく『ペニー・レイン』の彼らに對して、そういつた手口は使いたくなかった。

「で？　誰かいないのか？　大学生に見えそつな奴が」「いません」

即答したのはチョルスだつた。

「オーサー・リーは？ 腹の立つこと、場末の娼婦が夢中になる
くらこのルックスだらう」

これまで幾度も重要事件の参考人になつてきただけあつて、オーサーの顔は警察署内には知れ渡つていた。署長もこれまで何度も、まるでプロマイドのようなオーサーの資料写真を目にしている。

「明慶大学のOBですよ。顔が割れています」

「じゃあ、そのオーナーの男つて言つのは？」

「ある意味、俺よりスレた目をします。それに、映画俳優みたい
なツラしますけど、ヤツだつて俺と同い年、三十路男です」

「え？！」

真横から聞こえて来た正直すぎる驚愕の声に、チョルスはミンホ
を睨みつける。

なんだよ！ 声に出でず口の動きだけでそつと聞いて、ミンホを
威嚇する。

「他にはいないのか？」

チョルスとミンホは顔を見合わせた。
あと一人、残つて居ることは確かだが……。

「いるのか？ いないのか？」

徐々に署長が苛立ち始めてきたのが分かる。

「こりには、いるんですが……」

ミンホが歯切れ悪くせつ答えると、署長は手を差し出して資料を寄こすように催促する。今回の張り込みで、ミンホがまとめた報告資料だった。そこには、ジェビンやオーサーを始め、分かる範囲での『ペニー・レイン』関係者の情報が載っている。

「……ん？ コン・ナビ？」

予想通りの展開に、チョルスとミンホはますます情をめぐらして顔を見合わせる。

「これでいいじゃないか！ 早速、交渉に行け」

二人の気持ちなど知る筈もなく、署長はミンホに資料を突き返しながら言った。

チョルスは眉間に皺を寄せて俯いたままだ。
ミンホは、一瞬目の前に、落ち着きなく店中を動き回りながら、トレーデマークの金髪を揺らして、ハスキーな笑い声を響かせるナビの顔が浮かんできて、慌てて頭を振ると、それからギュッと目を閉じた。

だが脳内に入り込んだこの猫は、現実の彼と同じく無遠慮にミンホの脳内を駆け回り、ミンホを悩ませた。

「……先が思いやられるぜ」

ポツリと呟いたチョルスの一言が、ミンホの今の気持ちを代弁してくれていた。

第一章【ペニー・ライアン】完

ラストダンスは、あなたと……

サンダルを脱いだ素足を前の座席の間に投げ出して、自慢のネイルの手入れをしていた少女は、不意に車が動き出したせいで大きく爪からはみ出してしまったマーキュアの瓶を閉じて、悔し紛れに運転席頭がけて投げつけた。

「やめろよ、コリッ！ 運転中に危ないだろ」

「急に発進するからでしょ、バカッ！」

「仕方ないだろ。朝は渋滞することくらい、毎日通ってるんだから分かるだろ。爪の手入れなんか、家でやってこいよ。毎日毎日、ギリギリまで寝てる君が悪いんだろ」

「生意気ねつ！ ただの運転手の分際で」

少女が鼻を鳴らすと、ハンドルを握っていた少年も負けじと言い返す。

「僕は君の運転手になつた覚えはないよ

「パパに言いつけてやるからね」

「僕こそ、おじさんに言いつけてやるよ。折角高い学費出してもらつてるのに、勉強もしないで……」

「やめてよ、説教はたくさん。兵役から帰つた途端、口うるさいパパが一人増えたみたい」

少女は顔の前で大きく手を横に振ると、前に乗り出していた身体を、再び後部座席へと深く沈めた。

「……つあー！」

その時、不意に窓の外を覗いた少女は、渋滞する隣りの車線に止まる車を見て顔を輝かせた。

「ヒヨンスッ！ 私ここで、降りるわ」

「え？ ゴリ？！」

言つが早いが、少女は自分で勝手にドアを開け、隣りに並んだ車の窓を叩いた。すると、全面をスモーク張りにした黒いスポーツカーの窓が開き、中からサングラスをかけた男が顔を出し、少女の首に手を回した。二人は人目もばからず、朝の通勤・通学ラッシュで渋滞する道路の真ん中で熱いキスを交わし始めた。

ハンドルを握る少年の手に、思わずギリッと力がこもる。

すぐにスポーツカーの助手席のドアが開いて、少女が滑り込む。スマートの窓が再び閉まり、少女の姿を完全に隠してしまった前に、少年は大声で叫んだ。

「ゴリッ！ 今日は八時から、おじさんと大事な会食があつただろ
？ 忘れるなよっ！」

すると、少女の代わりに、先ほどのサングラスの男が窓から顔を出した。男は窓越しに対峙した少年を見るとニヤリと笑い、サッと親指を突きたて、首を横に搔き切る仕草をすると、親指を下に向けて舌を突き出した。

少年の頬がカツと熱くなる。

男と少女の笑い声を残して、スマートの窓が閉まるとき、少年の乗る車を残し、彼らの車線が流れ始めた。

少年は距離を開けていく黒いスポーツカーの後ろ姿を見送りながら、深い溜息を漏らした。

＊＊＊

「え？！ ナビを？！」

シトシトと降りしきる雨の下、密足の途絶えた明け方の『ペーネイン』にて、ジョビンはカウンターに座るチョルスの言葉に目を見開いた。

「無茶な頼みなのは、分かつてるよ。本当は、こんなこと頼めた義理じゃないんだけど……」

「つむくチョルスに会わせて、隣りにいたミンホも深く頭を下げる。

「身の安全は、僕が責任を持つて保障します。学生闇でのクスリのルートさえ掘めれば、すぐにナビさんをお返しします」

「僕はヤダよ！」

その時、相変わらずガチャガチャと危なつかしい手つきで皿洗いをしていたナビがキュッと蛇口を捻つて水を止めてから言った。

「そりゃあ、潜入捜査なんてちょっと面白やつだとは思ひやが、そんなに何日もジョビン兄貴を放つといて店を空けたり出来ないよ」

不機嫌そうに布巾を取り上げ、これまた慣れない手つきで「ヨシヨシ」とさつき洗つたばかりのグラスやら皿やらを拭いていく。

「それに、その『デカい』の一緒つてのがヤダツ！」

子どものよひに歯を突き出し、カウンターのミンホを恨めしそうに見つめる。

「デカいのつて……僕はハン・ミンホつて名前があるつて言つたでしょ」「？」

ミンホは溜息をつきながら言つた。

「知らないよ。僕は、氣に入らない奴の名前までいちいち覚えてないもんね」

「ああ、頭に入りませんでしたか？ あなたの可哀相な脳ミソには、人一人の名前すら收まりきらなかつたんですね」

ミンホが、さも哀れだと云つように首をすくめると、ナビは言い返す代わりに、手にしていたビショビショになつた布巾をミンホ目がけて投げつけた。

ベシャツー！

と音を立てて、それは見事にミンホの顔面にヒットした。

ズルツと重い音を立ててカウンターに落ちるその布巾を、チョルスとジエビンは青い顔をして見つめる。

ワナワナと震えだしたミンホは、突然ガタツと立ち上ると、力

ウンターの中のナビを指差しながら大声で叫んだ。

「あなたねっ！ 僕がお弁当台無しにしたこと、一体いつまで根に持つてゐつもりなんですかっ！？ あれは、きちんとと謝つたでしょ。弁償だつてしまつたぢやないです。いつまで子どもみたいに拗ねてれば気が済むんですか！」

「開き直るなよっ！ あれは、ジエビン兄貴^{ヒヨン}の真心がこもつてゐるだよ！ プライスレスなんだよ！」

「ナビ、俺はもういいから」

見かねたジエビンが間に入り、一人のバトルはナビのミンホに向けた渾身の『イーダツ』で幕を閉じた。

「……ねえ、ナビ。店のことは大丈夫だから、協力してあげたらどうかな？」

思いもよらないジエビンの言葉に、ナビを初め、その場にいる三人全員がキョトンとジエビンを見つめた。

「オーサーのところに来る学生も増える一方だし、俺も今回の一連の騒動は何だか気になるんだ。チョルスたちに、力を貸してやってもいいんじゃないかな?」

「ジエビン……」

感動したチョルスが口を開こうとした時、ナビは猛烈な勢いでジエビンの肩を掴んだ。

「そんな……兄貴ツ！ 店はどうするの？ 僕がいなかつたら、どうやって開店準備するの？」

「……お前がいない間は、チョルスに手伝つてもいいよ」

「え？ 僕？！」

一ツコリ微笑むジエビンに、驚いたのはチョルスの方だった。

「こっちからも大切な人員を一人出すんだ。おあいこでしょ？ 心配しなくとも、毎日じゃないよ。雨が降りそうな時だけ、開店準備だけ手伝ってくれればいいから」

「……いや、でも……」

接客業には向いてないとよく言われる。十八の年から野獣のような叩き上げの警官の中で育つてきたチョルスに、今さら密の顔色をうかがう仕事が出来るのか。当のチョルス自身が不安になつてきた。

「お願いします。いいですよね？ チョルスヒャン」

躊躇するチョルスに代わって、ミンホがサクッと返事をしてしま

つた。

「おー、ミンホ……お前！」

「次に来る時までに、潜入用の学生証や教材その他を揃えてきます。詳しい打ち合わせもその時に。ですよね？ チョルスヒョン」

「……お、おひ」

ミンホに押され氣味のチョルスが頷く。

「その時一緒に、チョルスヒョンにも接客の何たるかを教えてぐだれい」

「任せとこい」

ジエビンはミンホの言葉に頷き、親指を立てた。

不満と不安の表情をそれぞれ浮かべたナビとチョルスは、そんな二人を見てムツツリと押し黙つた。

「……ナビ、いつまで拗ねてるの？」

完全に店じまいをして、チョルスとミンホを送り出した後、キヤンピングカーに引き上げたジエビンは、先に引き上げさせ、今は枕を抱いて、ロフトスペースでこちらに背を向けて横になるナビの背中に声をかけた。

しかし、ナビからの返事はない。

ジエビンは苦笑しながら、下にある自分の簡易ベッドに腰をかけた。右手で左足のふくろはぎを持って、やつとの思いでベッドの上

に乗せる。

すると、ロフトで不貞腐れていたナビが、まだ不満いつぱいの顔をしながらも、ジョビンの元へ降りてきた。

「……兄貴のバカ^{ヒヨン}」

顎を真っ直ぐ引いて、上目遣いで文句を言つナビは、本当に幼い子どものようだった。

「あれ？ ナビちゃん、ちゃんとお口あつたんですか？」

ジョビンはクスクス笑いながら、ナビの手を取る。そのまま引張られて、ナビはジョビンの座るベッドに腰を下ろした。すぐ側にある、ジョビンの左足に手を伸ばす。

小さめの手のひらで、固く強張つたジョビンの左足のふくらはぎから足首までを、丁寧に揉み解すよつこやかつていいく。

「……痛む？」

「んーん、今日は平^{ヒヨン}氣」

ナビが枕を壁とジョビンの身体の間に差し込んでやると、ジョビンは、ありがと、と言つてそのまま後ろに体重を預けた。

「僕がいなかつたら、誰が雨の日^{ヒヨン}、いつやつて兄貴の足をわかつてあげるのを？」

ジョビンが見下ろす先で、いつむき一心に足をさするナビの頬が赤く染まつてゐる。長年の付き合いで、これはナビが泣き出す一步手前で我慢している印だと分かる。

「あの、チョルスつてオマフコに任せるとの？」
「……まさか」

ジョビンは笑って、ナビの熱くなつた頬に手を伸ばした。

ああ、やつぱり。

ジョビンは笑い出したいような、切ないような、くすぐったい気持ちになつた。

顔を上げたナビは、予想通り、泣き出す寸前だつた。

「お前のマッサージ受けたら、他には頼めないよ。ゴールドフィンガー、ナビヤア」

真つ赤な顔から赤みが引いて、途端にパアッと効果音が付きそつた笑顔を輝かせる。

「雨が降つたら、絶対戻つてくるよ」

「……分かつた。でも、無理はするなよ」

「うなつたら、ナビは意外に頑固だ。

行つてもいいという気持ちになつただけでも、儲けものだらう。

「髪、少し切るうか？」

ジョビンはナビのトサカ頭に手を伸ばした。ハードムースで無理やり固められた、本来は柔らかい猫つ毛を、優しく解していく。

「あまり目立たない方がいいなら、色も少し染め直したほうがいいな」

「イヤだよ。ジョビーヒコンと同じ色がいいんだ」

ナビは大人しくジョビンに髪をいじられながら、唇を尖らせた。確かに、首筋まで伸びたジョビンの髪は、薄暗い『ペニーレイン』の店内でも一際目立つ艶やかな金色だった。

「お前には、もう少し落ち着いた色が似合つよ。顔が明るいから」「何それ？」

ナビの怪訝な顔に、ジョビンは手の甲を口に当てクスクス笑う。

「表情の話だよ」

ナビは両手を自分の頬に当て、首を傾げる。

「俺が、切つてやるよ。カツ」良くしてやるから……な？」

髪を撫でながら、優しく微笑むジョビンに、やがてナビも素直に頷く。

拗ねて膨れて見せたって、結局はいつも、この優しい兄に反発しあままでいることなんて自分には出来ないのだ。

心地よく髪を流れるジョビンの細い指の感触に、目を閉じて身を任せようとしたその時、不意にジョビンの手の動きが止まった。

「……兄貴？」

怪訝に思つて見上げた視線の先で、ジョビンの灰色の瞳に出逢つ。思慮深く、いつもどこか憂いを秘めた、その瞳に。

「……ナビ」

「うん？」

「……バレない自信、ある？」

不意を突いた言葉に、ナビが喉を詰まらせる。

「行けって言つたのは俺だけど、保護者としては、それだけがちょっと、な」

すると突然、ナビがバチンッと音を立てて、さっきまでジェビンの足をさすつていた小さな手で思い切りジェビンの白い頬を挟んだ。

「ナビ?...」

驚いて見開かれたジェビンの目の前に、額を付き合わせるような距離でナビの黒めがちな目が迫る。

「大丈夫だよ。兄貴の弟を信じなさい!」

大真面目な口調が可笑しくて、ジェビンはナビの丸い後頭部を抱き寄せて頷いた。

「持ってきたぞ！ あ、何だ先生。あんたもいたのか？」

スポーツバックを左右の肩にかけた上に、大ぶりのトランク二つを持ったチョルスは、ミンホに傘を差しかけてもらしながら『ペニーレイン』の中に入ってきた。

「ひどいよー。こんなに面白いこと、俺にナイショで進めるなんてや！」

オーサーはカウンターに腰かけ、頬杖をつきながら唇を尖らせた。

「ナビのコスプレ、見ーたーいー」

「コスプレって何だよ？」

呆れたチョルスが尋ねると、オーサーはシレッとした口調で言った。

「え？ 女子高潜入ハラハラ大作戦！ でしょ？ その中には、二人分のセーラーフクがー……」

「んなわけ、あるかつー！」

その時、カウンターの奥からナビが姿を現した。

「おーー！ ナビ」

その場にいた皆の視線が、ナビに集中する。

ナビはトサカの形に固めていた金色の髪を黒く戻し、サラサラの前髪を下ろしていた。

元々童顔だったが、落ち着いた髪の色と髪型のせいで、今は初々しさは残るもの、きちんと大学生に見えないこともなかつた。

「ナビヤ可愛いー」

「可愛いって言うな」

ナビは赤くなつて、髪に伸びてくるオーサーの手を振り払いながら、乱れた髪をグーのカタチにした拳で、何度も何度も撫で付けた。照れ隠しの仕草なのだと、ミンホにも何となく分かつた。

ミンホはチョルスの荷物を半分持つてカウンターの席についたが、なぜだか今日はナビの顔をまともに見れなかつた。

見慣れぬ姿が新鮮で、何だか初めて会う人物のような恥ずかしさがあつた。

「なかなか似合つてゐぜ。あとは、その左耳のピアス、取つた方がいいな。特徴になるようなモンは、なるべく身につけない方がいい」

チョルスの指摘に、ナビは左手をグーの形に握つたまま、その手でピアスを隠すように左耳の上に持つていつた。

「……これは、ダメだよ」

「ダメ?」

左耳に手を当てたまま俯くナビを覗き込もうとしたチョルスの顔の前に、突然銀色のお玉が降つてきた。

「……っな?」

「ピアスくらいしてた方が、今ドキの大学生っぽくつて、却つて目

立たなくていいと思つナビ?」

お玉の柄を掴んだジョビンの腕は、青い血管が幾つも走り、もう一度本気でそのお玉を、今度は頭上に振り下ろされたらと思つと、チョルスは震え上がり、これ以上口にすることが躊躇われた。 気を取り直して咳払いを一つすると、チョルスは用意してきた話を振つた。

「下準備もなかなか大変だつたんだぜ。いくつか考えてきたんだけど、ナビ、お前、希望の学部あるか?」

「体育学部! ! !」

即答するナビの頭を、チョルスがにべもなくペチンと叩く。

「何だよつ!」

頭を押されてナビは抗議する。

「明慶に、体育学部はありません。それに、仮にあつたとしても……だ。体力自慢の健康優良児集団が、廢人寸前になるようなヤクに手を染めると思うか?」

チョルスは目の前に突き出した人差し指を左右に振つて言った。

「二年の法学部、四年の文学部。人数も多くて顔の知らない奴が紛れ込んでも分からない。この線が潜るには丁度いいと思うんだ。二年バラバラの学年と学部で、田舎の学生を見つけて欲しい。ナビが二年……ミンホが四年……」

「分かりました」

「ちょっと待つてよつ!」

素直にナビの言葉に頷いたミンホとは違い、ナビは勢いよく手を上げた。

「はい、ナビ君、どうぞ」

律儀にチョルスに指名され、ナビはカウンターから身を乗り出した。

「何でこいつが上の学年なの？ 僕の方が年上なんだから、可笑しいでしょ？」

「……いや、でも……見た目的に？ ほら、ミンホの方が……」

「ぜーつたい、四年が僕だもんね！ お前は一年！ 年下なんだからっ！」

「別にいいですけど。あなたが卒業間近のゼミの勉強にもついていくるつて言つなら。ちなみに、潜入対象は英米文学科を選んでますから、一部には全編英語、韓国語使用禁止の授業もありますけど。それでもあなたがどうしても四年がいいと言つのなら、僕は一向に構いません」

ミンホの言葉に一瞬グツとつまつたナビだったが、すぐに体勢を立て直して言い返した。

「バカにするなよ！ 僕だって毎日新聞ちゃんと読んでるんだぞつ」

「ああ、それは失礼しました」

「お前ら、ケンカばかりするなよ。これから協力して捜査してかなきやならないんだぞ」

チョルスが呆れて口を挟む。

「と言つわけだから、不満はあるだらうけど我慢してくれ。ナビは一年の法学部、ミンホが四年の文学部でいいな？ おい、ナビ！ ちゃんと聞け！」

英語くらい、何だよ……そう言いながら、未だにミンホに恨めしげな視線を送りながら、ブツブツ言つていたナビの額を弾いて、チョルスが注意を戻す。

「連絡用のプリペイド携帯はそれぞれに渡しとく。くれぐれも、慎重にやつてくれよ。身元がバレたらお仕舞いだ」

チョルスの言葉に一人は一旦休戦を決め込んで、頷く。

「雨が降つたら、兄貴のところへ帰してね。それが、条件だよ」

先にジェビンから聞いていた、ナビの譲れない条件を、チョルスたちは承諾していたところだったので、それには素直に頷いてやつた。

「心配しないで、ナビ。俺も、ナビの検査の間はこの店手伝つ」とにしたから

その時、カウンターに座り面白そつにナビたちの様子を眺めていたオーサーが言った。

「何だつて？ 俺はそんな話聞いてないぞ？」

驚いたのはチョルスだった。

「当たり前だよ、今話したんだから」

オーサーはニッコリ微笑んでカウンターの中のジエビンにワイン
クする。

「オーサーもいたら、心強いよ」

その笑みを受けて、ジエビンも微笑んだ。

「……まああじやあ、店の体制も決まつたことだし、よろしく頼むぞ」

チョルスが無理やり自分を納得させてしまう告げると、ミンホはナビに向き直つた。

先ほどのケンカの続きかと、ファイティングポーズを取つて身構えたナビに対して、ミンホは意外にも律儀に頭を下げた。

「……色々不満があるのは、お互い様です。でも、決まつた以上は僕は警官としてあなたを守る義務があります。危険な目にになるべく合わせないように守りますから、あなたも出来る限り協力してください」

生真面目な挨拶に出鼻を挫かれたナビだったが、思い直したように胸を張つて体勢を立て直した。

「条件がある」

「……何でしょ」

この期に及んで、また何を言い出すのか。今度はミンホが身構え番だった。そんな彼に向かつて、ナビは大きな声で言つた。

「ヒヨン」

「……はい？」

ナビの馬鹿『テカイ』声で宣言された言葉の意味が分からなくて、ミ

ンホは思わず「マジマジ」とナビを見返した。

「ナビ兄貴で呼べ！」

手を腰にやり、ふんぞり返つてカウンターのミンホを見下す。

「ほり、呼べ！」

フンツと鼻息も荒く、ミンホを急かす。仕方なく、ミンホは口を開いた。

「……ナビ……」

「兄貴……」

「……ナビ兄貴」

消え入りそうなミンホの声でも満足だつたらしく、ナビは独特なハスキーボイスを響かせて笑うと、ミンホの肩をポンポンと満足気によじて言った。

「安心して、兄貴を頼れよ！」

何が、兄貴だ。高校生みたいな顔をして、行動と言動はもつと下、小学生並みだ。

それでもミンホは、これから望まずとも相棒になるナビの機嫌を損ねないように、コメカミを震わせながら無理やり愛想笑いを浮かべた。

「あーん、何で大学なの？ 折角ナビヤのジニアシローセールックにお皿にかかると思ったのに。私服なんてつまらないじゃない。あのサラサラ黒髪は可愛かつたけどお」

「まだ言つてるのか、お前」

カウンターに肘を突いた姿勢のまま、グーの形で作った手の中に皿の顎を乗せ、可愛らしい仕草で首を傾げるオーサーを、洗い物の途中にあるジョビンは冷め切った視線で一瞥する。

「何なら帰つて来てからでもさ、メイドさんの格好させてさ、給仕してもらつてのはどう？ 僕、仕入れてくるよ。お隣の日本では流行つてるらしいじゃない？ ソーゆーの」

「おい。皿が飛んでく前に、そろそろその軽薄な口閉じた方が身のためだぜ？」

潜入前の日用品を揃えに、ナビがミンホとチヨルス連れられて出て行つてから、店内に残された二人は、ずっとこの調子であった。狭いカウンターの中で休むことなく働くジョビンに対して、オーサーは手を貸すどころか内容の無いおしゃべりでその仕事の邪魔をしていた。

「前言撤回」

「え？」

「お前がいれば、心強いつて言つたこと」

ジョビンはかけていた白いHプロンで手を拭くと、そのまま身体から剥ぎ取つて、水分をたっぷり含んだそれを、丸めてオーサーに投げつけた。

「働かざるものは、食うべからず… 残りの皿はお前が洗え」

「うー、自分はせりあとカウンターを飛び越える。

「残りって、まだ半分以上残つてるじゃない」

「お前がくだらない」とばかりしゃべつて邪魔するからだ…！
一分でいいからその口閉じて、仕事してみやがれ

「いくらくれる？」

「は？」

“沈黙は金”って言つて……」

「いいから、早くやれつ！」

最後までいい終わらない内に、ジョビンの鋭い一喝が店内を奮わせた。

「はいはい……そんなヒステリーじゃ、せつかくの美形が台無し…
…はい！ 可及的速やかに片付けさせていただきますっ！」

氷よりも尚冷たいジョビンの視線に射抜かれて、オーサーはようやく姿勢を正して立ち上がった。

その時だった。

店のドアが開くと同時に、倒れこむように一人の男が店内に入ってきた。

狂ったように鳴り響く耳障りなドアベルの音が狭い店の中にこだまする。

「……ハア……あ……センセ……」

筋肉で盛り上がった背中を大きく波打たせ、脂汗を流しながらそれでもようやく顔を上げた男の顔を見るなり、オーサーの瞳から、つい先ほどまでの茶目ついたっぷりの色が消えた。

「ねえ、ジエビン」

視線は入口の男に向かたまま、オーサーは口元に冷ややかな笑みを作つて囁く。

「俺みたいな美形がカウンターの中で皿洗いなんて可笑しいんじやない？ 適材適所つて言葉があるでしょ？ 俺にはやつぱり表舞台のホールの方が向いてると思うんだよね」

見てて……そう言つて立ち上がると、大仰に手を広げて、オーサーはまだ息の整わない男の元へ踏み出した。

「いらっしゃいませ、お客様」

そのまま汗まみれの男の短い髪を掴み、グイッと男の顔を上げさせる。

「お一人様ですか？」

「……センセ……やめ……苦つ……」

喉仏を見せながら仰け反る男は、苦しそうに耐えかねてそのまま涙を滲ませる。

「お・ひ・と・り・様ですか?」

オーサーは一言一言凶切るよつに言しながら、さらに男の髪を後方へ引っ張る。

「ツ!」

真っ赤な顔をして声にならない苦痛を訴える男に、よひやくオーサーは手を離した。

激しく咽ながら、男が床に転がる。

「何で、お一人様なんですか? 友達いないんですか? なら、どうぞ一番トイレから近い席へ……」

「先生つ!」

オーサーの足に縋りながら堪らず声を上げた男の手を振り払いながら、オーサーはゾツとするよつな冷たい声で言つた。

「どの面下げて、戻つて来たの?」

途端にオーサーのズボンを掴んでいた男の手が強張る。

「最後のシッポちゃんを置き去りにして、自分だけまんまと逃げ出したんだよねえ? 宿命のライバルに一本取られて動搖した? そんなんだから、アメフトの国内選抜の枠も、大事なガールフレンド

も、根っこを持つて行かれひょりうんだよ

「そんなん……先生！」

悔しげに歯噛みしながら、男がその大きな体躯を波打たせる。その顎を片手で掴み、オーサーは男の口を封じたまま続ける。

「何か間違ってる？ その通りでしょ。お陰で、計画は大幅に変更。シシボちゃんをオマワリさんに取られちゃったせいで、この店も張られるようになつた。おまけに、俺の可愛いナビヤまで連れてかれちゃつて、俺今ものすつじぐく、機嫌悪いの。セーラー服姿も抒めないしね」

理不尽な理由も一緒に並べ立てながら、顎の骨がミシリと嫌な音を立てるまで手に込めた力を強くする。

「やめろ、オーサー。死ぬぞ」

見かねたジョンが声を上げ、男はようやくオーサーの手から解放された。

「いい？ ペク・ギョウン。一度しか言わないからよく聞いて。頭の悪い子はキライだから」

オーサーは指で拳銃の形を作ると、外れそうになつた顎の関節に手を当て涎を垂らしながら泣いている男の顎にスッと宛がつた。

「一度皿は、ないよ」

ニッコリ微笑んだオーサーの指の銃口は、真っ直ぐに男の顎を狙っていた。

重低音の音響がフロアを震わせる。

地下のダンスフロアに集まつた何百人もの若者は、皆それぞれ思いに身体を揺らし、頭を振りながら踊つてゐる。

その中に、ステージ下中央を陣取り奇声を発しながら踊る、フロアの中でも一際目立つ集団がいた。男女7、8人で構成されたその集団の中心では、腰まで伸びたストレートの髪を振り乱し、一心不乱に踊る少女の姿があつた。

「ユリ！ 今日もキメてるね

「えー？！」

「ハジケてるつて、言つたのー」

「あー」

集団の一人が、汗を飛び散らせ激しく踊る少女に向かつて言つた。少女は聞こえているのかいないのか、上機嫌で踊り続ける。

「帰らなくていいの？ オヤジさんと、夜からタルイ約束があるつて言つてたじゃん」

「知らない。関係ないし。シラけること言わないでよ」

水を差すなと言わんばかりに、少女は声をかけてきた仲間の一人の肩を押す。

「ねえ、それより、ガンホは？ セッキから見かけないんだけど」

少女がそう言つた途端に、周囲の仲間は押し黙つた。

「ちゅうとー 何隠してゐのよ」

その態度にピンときた少女は、踊るのを止めて、仲間を睨みつけた。

「言いなさいよ。あいつ、また浮氣してんだしょ？」

田を逸らす仲間たちに、少女は更に苛立ちを強め、仲間たちに肩をぶつけながら道を開けさせ、フロアを横切ろうとした。

「待つてよ、ユリー そつちは……」

仲間の制止も無視して、少女はダンスフロアを抜け出すると、『関係者以外立ち入り禁止』の札が下がつた配水室のドアを押した。案の定、鍵はかかっておらず、少女は勝手知つたる顔でズンズン奥へと進んで行つた。

「ガンホッ！ いるんでしょ。あんた、またこんなとこに女連れ込んでつ！ この前言つたわよね。一度と浮氣して『うらんなさい。殺してやるからつて！』

ヒステリックに喚き散らしながら進んで行くと、配水された水道水をビルの上層階まで汲み上げるために設置された大型の受水槽の陰に、こちらに背を向けた恋人の背中が見えた。

「ガンホッ！」

少女が更に近付くと、恋人の足元には、横たわる女の長い髪が見

えた。

頭にカツと血が上った彼女は、恋人の背中に飛び掛るよつこして喚いた。

「誰よつー。この女。また違う女連れ込んだの？！」

恋人のシャツの背中を引き千切らんばかりに掴みかかる少女の肩を掴んで、男はサッと横たわる女を自分の身体で隠した。

「何よ、今さうつー。何とか言いなさいよつー。」

「……落ち着け、コリ。静かにしろ」

「落ち着けって、バカにしてるの？！ あんた……」

そう言つて、男を押しのけいつまでも横たわったままの女を見下ろした時、少女の動きが止まった。

「……ツヒツヒ……」

思わず声を上げそうになつた少女の口を男は慌てて手で塞ぐ。

「……お前は、何も見なかつた。いいな？」

男は低い声で、少女の耳元に囁いた。

「……何もなかつた？ そだろ？ コリ」

もう一度、脅すようにドスを聞かせた声が、少女の耳の中でこだまする。少女はただ息を飲み、ひたすら頷くしかなかつた。

「うわーー！ すゞーー！ 見て見て！」

学生課で編入手続きを終えてキャンパスを歩き出してから、ナビは終始この調子だった。

薦の絡まる校舎をキレイだとウットリ眺めていたかと思えば、運動部の部室棟の向こうにサッカー場があるのを見つけて、自分がどんなにサッカーが好きで得意であるかをミンホに向かつてとくとくと言つて聞かせた。

初めの内こそ、ナビの感動に付き合つていたミンホだが、やがて面倒になり、「はあ」とか「へえ」とか、気のない相槌を打つようになった。それでもナビは気にならないらしく、あっちへフラフラつちへフラフラしながら大はしゃぎだった。

まるで小学生の遠足だ

ミンホは変装用に掛けたメガネをすり上げると、前を歩くナビの、黒く戻した髪のせいで、元々の肌の白さが目立つうなじを眺めた。子どものような言動と、小柄で華奢な危なつかしい容姿、何かあつたら本当に自分が身を呈して守らなければならない。

『ペニーレイン』でナビが密に絡まれた時、咄嗟にワインボトルとナビの間に割つて入つたあの時のように、ナビは年上だと威張るが、出逢つた時からミンホには、この子どものような男を守らなければならぬといつ、説明できない使命感のよつた感情が湧いてくるのを感じていた。

特に今は、ナビがべつたりとくつこっている、あの『ペーパーレイント』のオーナーで実兄でもあるジンから、捜査のためとは言え無理やり引き離して連れて来ているのだ。言わば、保護者から預かつて来た身。何があつても無傷で帰さなければならぬ。

「……つあ！」

そんな矢先、ミンホの視界から突然ナビが消えた　と思つたら、何もないところで思い切り転んで、ナビは顔から地面に突つ伏していた。

「あーもー、前見て歩かないから」

「いつてえ……」

顔面から突つ込んだせいで、鼻の頭が擦りむけている。
用意のいいミンホは、すかさずポケットから絆創膏を取り出した。

「じつとして」

「イイよ、恥ずかしいから」

「恥ずかしいのは絆創膏じゃなくて、あなたの落ち着きの無さです」「何をーー！」

「はー、できた」

ナビの顔の真ん中に絆創膏を貼り終えると、ミンホはパンパンと手を払つて立ち上がつた。

「ほら、まだ手続きは終わつてないんですよ。明日から早速授業に参加するんだから、今日中に教材も購買で全部揃えなきゃならないし、ホテルの部屋へ運ぶのに一人じゃ無理だから、車も借りて来ないとならないし。やることは山積みです」

雨の日は『ペニーレイン』に帰す

そういうた約束だつたが、晴れの日の寝床は、一人で安いホテルの一室を借りることになった。そこから、地下鉄の駅を一つ乗り継いで、しばらくの間大学に通う。

「……学食は?」

座り込んだままのナビが、恨めしそうにミンホを見上げる。先ほどナビは、部室棟の中にあつたカフェテリアを見て、日を輝かせていた。正直ミンホにとつては、自分が通つた警察大学校のカフェテリアの方がよほどキレイであつたし、また、学食のメニューなどたかがしれていて、その辺のファミレスと大差ないことも知つていた。だから、この程度のものに日を輝かせるナビが理解出来ないとは思いつつも、この程度のものでもこんなに楽しみを見出せる彼を少し羨ましく思つた。

敢えて今日寄らなくても、これから毎日通えば、嫌でも学食に入る機会はあるのだろうが、ナビのワクワクしている今の心中を察してミンホは言つた。

「購買で教材を買つたら、お昼にしましょ?」

ミンホの言葉に、ナビは立ち上がりつて「いやつほうー」と叫ぶと指を鳴らした。

「早く行こうぜ、ミンホ!」

ついたままで自分が座り込んでいたくせに、再びテンションを上げて歩き出そうとする。

「ナビヒヨン、待つて！ 中庭通つて行つた方が近道です」

ミンホはナビの肘を掴んで方向転換させる。できれば、兄貴などと呼びたくはないが、年上には違いない、ナビもそれに物凄くこだわるので、未だに舌を噛みそつになりながら、『ナビ兄貴』と呼ぶように意識している。

中庭を通ると、休講情報や学生への事務連絡などが張られた掲示板の前に、何人かの若者がそれぞれグループを作つて、ビラを巻いていた。

好奇心旺盛なナビは、自分からそのグループに近付いて行き、ビラをもらつて来た。

ナビが手にしたビラのうち、一枚は『聖書講読会』、一枚は一週間後に開催されるという学内ダンスパーティーの案内チラシだった。

「ダンスパーティーって、HIPHOP？」

「僕、得意！ そう言つて目を輝かせるナビに、ミンホはバッサリと言つた。

「社交ダンスでしょ。どう考へても」

「何でさ？ HIPHOPの方がノリノリで楽しいじゃん」

「あなたみたいに、お一人様で楽しむ分にはね。男女ペアで踊るのが目的なんですから。あなたには、今まで縁のないダンスだったかもしれないけど」

思わず毒づくミンホに、ナビはムキになつて言い返す。

「じゃあ、お前はあるわけ？ 社交ダンスの経験が？ 女の子と？」

「ありますよ」

シレッヒンホは答える。

「大学の卒業パーティーでは、踊るのが恒例になつてましたから」

圧倒的に男子学生が多い警察大학교의卒業パーティーでは、その際に恋人をダンスのパートナーとして呼ぶのがステイタスになつていった。特定の恋人はいなかつたミンホだが、相手には不自由しなかつた。結局、隣りの女子大でもナンバー1の美人と評判だつた相手の方から、猛烈なアタックを受け、ペアを組んだ。卒業パーティー後もその女性からは熱烈なアプローチをもらつたが、二年間の參謀本部での兵役義務についたミンホに女性を構つ余裕などなかつた。

いや、これは性格の問題かもしけないと、ミンホは冷静に自己分析する。現に、大学の同期たちは皆、韓国の若いカップルが直面する過酷な兵役期間の間での別れを経験しながらも、兵役を終えて半年もしないこの間で、それぞれ仕事もこなしながら、ちゃつかり彼女も作つているのだから。

「……あの、すみません」

その時、ナビとミニホの元に、ビルを配っていた学生たちとは違う、年配の女性が近寄ってきた。手にはやはり、大量のビルを持っている。

「娘を探しているんです。一週間前に、大学へ行つたきり、行方が分からんんです。どんな小さなことでもいいですから、何か娘について知つていてることがあつたら教えてください」

そう言つと、その女性はナビとミニホに一枚づつビルを手渡し、丁寧に頭を下げる。女性は行き交う学生一人一人に頭を下げて、ビルを配り続けていた。

ナビは手にしたビルに手を落とす。

「……ノ・ミラ。経済学部経営学科四年。6月3日 大学へ行くと行つて家を出たまま行方不明……」

ミニホも神妙にそのビルの記事を手で追いつ。

「……氣の毒に」

ナビがポツリと呟いて、必死にビル配りを続ける女性の後ろ姿を見つめる。

「おばさんっ！ 僕も手伝います！」

すると、突然ナビが手を上げて、女性の元へ走り出した。

「え？！ ちよつと、ナビヒヨン？！」

慌てたのはミンホだ。女性はナビの突然の申し出に驚いた様子を見せたが、すぐに頭を下げてナビにビラの半分を渡した。ナビはあの独特の掠れた大声で、まるで市場の呼び込みのように道行く学生に声を張り上げる。さつきまでとは打って変わって、皆場違いに元気いっぱいなナビの声に引き寄せられ、何事かと立ち止まるので、ナビと女性の周囲にはあつといつ間に人だかりができる。

「ああっ！ もひっ！ あれだけ、目立つマネはよして下さって言つたのに…！」

ミンホは歯噛みしながらも、ナビの取つた行動を責める気持ちにはなれず、仕方なく人ごみを掻き分けてナビの元まで辿りつくと、自分も一緒にビラを配り始めた。

この人と一緒にいると、すっかりペースを乱される。

そう舌打ちしながら。

＊＊＊

「じゃあ、いいですね。ナビヒヨン。待ち合わせはお昼、あなたの大好きなカフェテリアで。あー、くれぐれも、昨日みたいなマネはしないでくださいよ。なるべく、地味に、目立たなく。授業は分からなかつたら聞いてなくても構いませんが、ノートぐらいは取つてくださいね。後でレポート提出があつた時、ノートもないと僕も手助けできませんから。それから……」

「ああ、もつりー！ 分かつてゐよ。つるをいなあ。僕に、まつかせなさいーー」

登校初日、ミンホは自分と同じように変装用のメガネをかけさせたナビの早速歪んでいるシャツの襟元を直しながら、注意事項を一つずつ言い念めた。広範囲の検査を目的に、学年も学部も分かれて潜入するため、いくら危なつかしいとは言え、授業中まで付き添つている訳にはいかない。心配でしようがないが、当の本人は至つてマイペースで、この調子だ。

何が、まつかせなさいだ

ミンホは朝からもう何度も田になるか分からぬ溜息をついた。そんなミンホの田の前で、ナビの鼻からツーッと赤い筋が跡を引いて行く。

「まひ、まだ血が出てる

ミンホは新しいシャツが血で汚れる前に、素早くポケットから取り出したティッシュでナビの鼻をかんでやつた。

ミンホの脳裏に、購買で大量の教材を買い込み、ホテルの部屋に引き上げてからの昨晩のナビとの、呆れるよつなやりとりが浮かぶ。ホテルの部屋はミンホの予想以上に狭いものだったが、キャンピングカー暮らしに慣れているナビにとっては贅沢な程だったようで、部屋に入るなり彼のテンションは最高潮に達していた。

（僕、窓際のベットッ！）

（あー、はいはい。好きにしてください）

嬉しそのあまり、靴も脱がずにはしゃいで窓際のベッドにジャン

（「ナビ、ちから！」ちが、僕の陣地だからね！　絶対、入って来ないでよ！　覗くのも禁止！）

ナビは舞い上がる埃の中で膝を立てて起き上ると、一人のベッドの間に、『ペニーレイン』から唯一持ってきた小さなトランクケースを立て、更にその上に枕を置いて即席のバリケードを築きながら声高に宣言する。

（入ったら、どうなるんです？）

もう一方のベッドに腰掛けているミンホが、呆れ顔で振り返る。

（「トーペンの刑に処す！」）

片手を瞑つて指を弾く真似をしてみせるナビと、ミンホはスゥッと手を細めて微笑んだ。

（入るなって言うなら入りませんけど、あなたはどうするんです？　この部屋の構造上、部屋を出る時は、あなたは僕の陣地をどうしても通らなきやならない）

クリクリとよく動いていたナビの大きな瞳が固まる。しまった　と思つた時にはもう遅い。

（「トーペンの刑……ですよね？　やつぱり）

自分のベッドに片足を乗り上げて、長い指で輪の形を作ったミン

ホガにじり寄つて来る。

(やつぱりの無し！ 陣地交代！)

(嫌ですよ。あなた、靴のままベッドに上がつたでしょ？ 僕そういつところ纖細なんで)

(男のクセに、軟弱なこと言つてんな！)

(どつちが？！ あなたこそ男のクセに、覗くの禁止！ なんて、思春期の女の子の台詞ですよ)

(何をあつ！)

売り言葉に買ひ言葉。

途端にベッドの上で枕投げの攻防が始まる。

(もうこいつ！ お前の陣地通らなくたつて、僕は部屋を出られるとんね)

(はあ？ どつせりて……)

ミンホが言い終わらない内に、ナビはベッドのスプリングを軋ませて大きくジャンプした。

(うわーー ちょっと待つ……)

氣づいた時には頭上を掠めて、ナビの小さな身体がミンホのベッドを飛び越えて飛んでいくと思つた矢先、ナビの足がミンホのベッドのシートに絡まり、派手な音を立ててホテルの床に顔から落ちた。

(……ウ、ウ、ウ、ウ……)

(あの……ちよつと、ナビヒョーン?)

床に顔面を押し付けたまま、泣き声とも唸り声ともつかない低い声をもらすナビを、ミンホが恐る恐る振り返る。

(だ……大丈夫……?)
(ウワーンンッ!…)

途端、火がついたように泣き出したナビに、オロオロしだしたのはミンホの方だった。慌ててベッドを跨いでナビの身体を助け起こす。

元々そんなに高くない小作りな鼻が、氣のせいか衝撃でペシャツともつと低くなつたように感じる。

痛々しく鼻血と涙で顔を汚すナビを笑つてはいけないと自分に言い聞かせ、ミンホは唇を噛み締める。

それでもナビが赤ん坊のように泣けば泣くほど、どうにも不細工で愛らしいその顔がツボにハマつて、ミンホは噛み締めた唇を奮わせるのだった。

(本当に、あなた20歳超えた大人ですか？ 今時、小学生だってこんな真似しませんよ)

(……ウ、うるひやい)

ミンホに鼻筋を押さえられたまま上を向いたナビは、涙声で弱々しく抗議する。

結局ナビは泣き疲れたまま眠ってしまい、グシャグシャになつたベッドを一から直したのも、顔の血と涙の跡をキレイに拭いてやつて、そんなナビをベッドまで運んでやつたのもミンホだつた。

やうこいつしている内に、予鈴の鐘が鳴り響き、ミンホはハツと我に返つた。

「じゃあ、ナビヒヨン！ また後で」

「おう！ お前もしつかり勉強しろよー」

ナビは上機嫌で、スキップでも踏みそうな勢いで校舎へと入つて行く。

「ちよつと… そんな急に動くと、また鼻血が……」

たしなめようと声を上げた時には、既にナビの背中は小さくなつていた。ミンホはそんな背中が完全に校舎の中に消えるのを見届けてから、自分も小走りにナビとは違う校舎の教室へ向かつた。

キヨロキヨロしながら、ナビは人の流れに沿つて、これから法学部の授業が行われる講堂に入つていつた。旧校舎と呼ばれるここは、大学開設当初から校舎として使われていたもので、建物自体が有形文化財の指定を受けるような歴史的な価値の高い校舎だつた。

梅雨のジメジメした気候の中、周囲の学生たちは冷房も聞かないこの旧校舎を嫌がり、ミンホが潜入した文学部が主に使う、去年建てられたばかりの新校舎を羨ましがつていた。

しかし、ナビにとつては、例え熱いのを我慢したつて、断然この古びた趣のある校舎の方が好きだつた。

ここにはどんな歴史が刻まれているのだろう。

例えば僕が座ったこの席には、今までどんな人たちがどんな思いで腰掛け、学び、巣立つていったのか。

そういうことに一つ一つ思いを巡らすことが、ナビにとっては楽しくてしかたなかつた。

そんな時には、わくわくすると同時に、大学はおろか学校すらもまともに行けなかつた自分の境遇に思いを馳せてしまい、ほんの少しやりきれない気持ちになる。だが、持ち前のポジティブ精神で、すぐに今日の前のワクワクに気持ちを切り替える。

ナビは講堂の一番前の席に陣取り、ミンホが昨日買つて持たせてくれた教材を一つ一つ確かめるように机の上に並べた。

布製のペンケースを開けると、中には律儀にきちんと削られた鉛筆が並んでいた。シャーペンでないところが、いかにもミンホらしい。昨日ケンカしてふて寝した自分より遅くまで起きて何をしていたかと思えば、夜中に一人でナビのための鉛筆を削るミンホの姿を想像すると、ナビは思わずブツと吹き出してしまつた。

その拍子に、忘れていた鼻筋に意識が向かつ。

血を止めるため、ミンホの指で押さえられたそこは、まだ少しジンジンしていた。

そつと、その場所に触れてみる。

「あんな、デカイ手のクセに……」

田の前には、キレイに削られたエンドツが並んでナビを見上げている。

「……器用なヤツ」

ちょっと癪に障つて、ナビは寝そべるエンペラーの一つを指先で弾いてやつた。

一方のミンホは、時間ギリギリまでナビを見送つていたせいで、始業時間直前に教室に駆け込む羽目になつた。

新校舎のガンガンに冷房の効いた教室は、走つて汗だくなつたミンホにはありがたかった。

自由に居眠りをしたり内職をすることができる後ろの席から埋まつていくのは自分自身の大学生時代の体験からも熟知しているので、ミンホは諦めて前の席に座つた。

幸い、講師はまだ来ていなかつた。

冷房にさらされても收まりきらなかつた汗をハンカチで拭うと、教室全体が妙にザワついているのに気が付いた。

本業は警察官であるミンホの、職業病とも言えるクセで、咄嗟に何が起こっているのか、その原因を突き止めるべく周囲に意識を張り巡らせた。

さりげなく、後ろを振り向く。

すると、気のせいいか先ほどよりざわめきが大きくなつた。

何だ？

ミンホは眉間に皺を寄せ、再び向き直る。文学部は女性徒の方が圧倒的に多いので、ざわめきは自然、甲高い彼女たちの声で占められていた。

気にせずカバンから教材を取り出し、昨日ナビのを削つてやるついでに自分もきれいに削つた鉛筆の入ったペンケースを取り出す。

科目は何であれ、学業に励むのは嫌いではなかつたため、昨日購入した教材にも一応全て目は通していた。

真新しいテキストの表紙を開いた時、机の隅に置いてあった消しゴムに手が当たり、床に落としてしまった。

拾おうと座つたまま手を伸ばしたミニホのその手の数センチ先を、白く華奢な手が掠め、ミニホの消しゴムを拾い上げた。

恥ずかしそうにミニホの机に消しゴムを載せた女生徒に、ミニホは頭を下げる。

「どうも、ありがとうございます」

その途端、ざわめきは一気に黄色い悲鳴に変わった。

「……」、「いいですか？」

ナビが頬杖をついて講堂の中をキョロキョロと見回していた時、不意にヒョロッと痩せて頼りない印象の男子学生が現れ、ナビの前に立つた。

「ジリモジリモ、座つてよー！」

ナビはパアツと顔を輝かせて、造り付けの椅子を引いてやつた。

「誰も隣りに来てくれないからさ、寂しかったんだよね」

そう言って振り返るナビの背後五列には、一人の生徒も座つていなかつた。

広い講堂の中、一番前の席にナビとその男子学生、そのすぐ後ろ五列を空けて、最後列から順に学生の集団が出来ていた。

「」の授業、退屈で眠くなるつて有名だから。みんな眠りに来てるようなものなんだよ。僕がこの授業取つてから、最前列でノート広げてる人を見るのなんて、君が初めてだよ」

男子学生の言葉に、ナビはキョトンと不思議そうな顔をした。

「えー？ 眠つたりしたら勿体ないじゃん。一番前の方が先生の声も聞こえやすいし、中身なんか分かんなくたって、こんな素敵な校舎の匂い嗅いで、難しそうな講義聞いてるだけで、僕って勉強して

るんだーって、気分になるじゃない。眠かつたら、僕、家に帰つて寝るよ

「勉強してる、気分?」

「そう、気分だよ、気分。僕、今は学生なんだーって、思うだけで楽しいじゃん」

「今? ジュはすっと、学生でしょ?」

男子学生の言葉に、ナビは慌てて口を噤んだ。そうだ、浮かれて妙なことを口走つてしまつた。

「もしかして、兵役帰り? 僕も、この4月に除隊になつたばかりだけど」

「そ、そそそそうつ! あの辛い生活から抜け出して、僕は今“学生”なんだつて……敬礼もしなくていいし、夜間訓練で起き起つられることもなくて……」

必死に取り繕うナビを見て、男子学生は突然プツと吹き出した。

「確かにね。でも、君つて面白いね。変わつてるよ」

「……そ、そう……かな?」

今さらになつてマゴマゴし始めたナビを尻目に、男子学生はクスクス笑い続ける。

「「」の授業は初めて? 見ない顔だから」

「ぐ、編入してきたんだ。前の大学でも、法学部だつた

ナビは、予めミニホと口裏を合わせていた嘘をついた。

「「」の時期に編入なんて珍しいね。優秀なんだね。うちの編入試験

は、競争率高いでしょう？」「

「……そ、それほどでもないよ」

ナビは冷や汗をかきながら必死に取り繕つ。それ以上突つ込まれて聞かれたら、嘘をつするのが苦手な自分にはきっと耐えられなかつただろう。

しかし男子学生はそんなナビを不信には思わず、人の良さそうな細い目を更に細めて、手を差し出してきた。

「僕は、コ・ヒヨンス。よろしくね」

「コソ・ナビだよ。」ちらりと、よろしく

ナビもニッコリ微笑んで、ヒヨンスの手を取つた。

授業が終わつた後、ヒヨンスとナビは連れ立つて学食のカフェテリアへと向かつた。

九十分に及ぶ、「睡眠薬」との異名を取る法律概論の事業だつたが、外国語のような法律用語も、ナビには魅惑的な言葉に聞こえて、ちつとも飽きなかつた。

意味は分からずとも、講師が黒板に書き殴つた文字を、講師と競争するかのようにノートに綴つた。授業始まつて以来の熱心な生徒だと、講師の方が授業後にえらく関心して、わざわざナビのところに來た程だつた。

「君つて本当に面白いよ。ナビ」

ヒヨンスは先ほどから、ずっととそつとそつと笑つては笑つてゐる。

「そうかなあ……」

ナビは襟足の短い毛をいじりながら首を傾げる。

「僕が知ってる学生の中で、間違いない最高……あつ！」

その時、不意にヒョンスの足が止まった。

「……どうしたの？」

「ユリツ……」

ナビに答える間もなく、ヒョンスは駆け出していた。人ごみの向こうで、大胆に肩を露出させたワンピースを着た小柄な少女の腕を掴んでいる様子が見えた。

「ユリツ！ 昨夜は一体どこに行つてたんだよ。おじさんも心配して寝ないで待つてたんだよ。大事な会食もすっぽかして！」

「つるさいわねっ！ どこで寝ようと私の勝手でしょ？ 離してよ。皆見てるじゃない」

少女はヒョンスから逃れようと、金切り声を上げて身を捩る。

「ユリツ……」

「人の女に勝手に触つてんじゃねえよ」

その時、ヒョンスと少女のやりとりを遠巻きに眺めていた人垣の中から、サングラスをかけた長身の男が現れた。

「手え離せよ。運転手」

男はそう言つと、ヒョンスの細い肩を掴み、乱暴に少女から引き

剥がした。反動でヒヨンスはよろけ、地面に尻餅をついた。ナビは慌ててヒヨンスの元に駆け寄った。

「ふん」

男はヒヨンスを見下ろすと、側にペッと唾を吐き捨てた。

「……このつー！」

思わず立ち上がりかけたナビのシャツの裾を、ヒヨンスが握つて押し留めた。

男はもう一度、ヒヨンスとナビを見下ろすと、少女の剥き出しの肩に手を回し、そのまま一人に背を向けた。

「あいつつ！」

「いいんだ、ナビ」

今にも男の背中に飛び掛つていきそうなナビのシャツを掴んだまま、ヒョンスは首を横に振つた。ナビに手伝つてもらつて身体を起こす。

「あの女子、君の恋人じゃないの？ あんなヤツに連れてかれちやつていいの？」

ナビの言葉に、ヒョンスは自嘲気味に笑いながら首を振つた。

「……ユリはそんなんじゃないよ。世話になつている家のお嬢さんなんだ。小さい頃から一緒に育つてきた、幼馴染なんだ」

ヒョンスはナビと共にカフェテリアまで歩きながら少しづつ話し始めた。

ヒョンスの家は、彼がわずか一歳の時に母親を亡くし、以来彼の父親が男手一つでヒョンスを育ててきたが、ヒョンスが五歳になつた年、折からの不況の煽りを受け、父の勤めていた運送会社が倒産してしまつた。食うにも困る生活が続き、途方に暮れていた時、ヒョンス親子はひょんなことから貿易会社を経営するユリの父親に拾われた。ヒョンスの父は住み込みの運転手となり、ヒョンスも一緒に、ユリの家で暮らすようになったといふことだつた。

ヒョンスたちにとって、ユリの父は貧しい自分たち親子を救つてくれた、命の恩人と言つても過言ではない存在だつた。そんな彼の

愛娘であるヨリもまた、ヒヨンスにとって特別な存在になるのは自然なことだった。

カフェテリアは毎時で混み合っていたが、運よく席を見つけて一人で腰を下ろす。

「あの子も、ここの中生徒なの？」

「うん。文学部英米文学科の四年生。同じ年だけど、僕は二年間兵役に行つてたからね」

「英米文学科？」

それなら、ミンホと同じ学科だ。

「どうかした？」

「うん。一緒に編入したヤツも、英米文学科だったから」

ナビはメニュー表に視線を落とすと、パアッと顔を輝かせた。

「わっ！？ すごい、クリーミーソーダがあるー！」

メニュー表から顔を上げたナビのあまりの喜びよっこ、ヒヨンスもつられて笑顔になる。

「ねえ。じゃあ、あのガラの悪いデッカイのが、ユリの恋人なの？」

会話の流れを止めたクリームソーダの話題から、自由自在に元の話題に戻つて、ナビがストレートに尋ねてくる。ヒヨンスは肩をすくめてみせた。

「そうだね……ハン・ガンホって言つて、この大学の学長の息子なんだ。アメフトの有名な選手でね。社会人リーグの強豪チームに内定が決まってる四年生なんだ。コリとは去年の夏くらいから付き合つてる」

「ふうん……でも、似合わないな。コリには、ヒョーンスの方が合つてるよ」

「ごく自然に出たナビの言葉に嘘はなく、社交辞令でも何でもなく本気でそう思つてくれていることが分かり、ヒョーンスはありがたいような切ないような複雑な気持ちになった。

「……僕は、ダメだよ。コリは綺麗だしね」

「確かに美人だけど、ヒョーンスだってカツコいよ。少なくとも、あの顔面色黒お化けより、数百倍ハンサムだね」

一度見ただけのガンホの特徴を、顔面色黒お化け といつネーミングで表現したナビの微妙なセンスに、ヒョーンスは先ほどまでの居た堪れない気持ちを忘れて思わず吹き出した。

「ピッタリでしょ？」

ナビはヒョーンスにウケたと勘違いして、エヘヘと得意気に笑つた。

「……でも、やつぱり僕はダメだよ。僕はコリの子分みたいなものだから」

「子分？」

「じゃなかつたら……下僕、かな」

思い切り自分を卑下してみせたのに、ナビは思いもかけない反応を見せた。

「いいね！ 子分。僕も欲しいつー……いや、いたつー！」

「へ？」

的外れなナビの言葉に、ヒョウンスの目が点になる。

「とりあえず、このクリームソーダ買わせるだろ。それで、それで……」

手をグーのカタチにして、口元を押さえてグフグフと笑う。ワケが分からぬながらも、ナビがあまりにも楽しそうなので、ヒョウスも付き合つて愛想笑いを浮かべる。

「ヒョウンツー！ ナビヒョウンツー！」

その時、カフェテリアのドアが開いて、聞きなれた声がナビの名を呼んだ。

「尊をすれば……遅いぞ、ミンホ！」

そう言つて顔を上げた時、ナビは思わず受け反つた。

「ミンホ……お前、何やつてるの？！」

ナビがそう言つのも無理はなかつた。

汗だくでカフェテリアに入つてきましたミンホの後ろには、何人いるのか、もはや数えるのも困難なほどどの女子学生の群れが出来ていた。

「ハン・ミンホシー、お皿は私とー！」

「何言つてるのよ、私が先よつー！」

狭いカフェテリア内は、途端にミンホを追いかけてきた女子学生たちで埋まる。

「逃げますよ、ナビヒョンシ…」

ミンホなり、ミンホはナビの腕を掴んだ。

「え？ あ……お…」

ミンホに引寄せられるまま席を立ち、出口ぐと向かう。

「わやあああああ…。ミンホシー、ゼリぐー？…」

「じゃなさいよ、あんたつ…」

「うううと、足踏まないでよつ…」

途端に、大混乱に陥る店内。

「ヒョンスッ！ 韓も来てつ…」

ミンホに腕を引っ張られながらも、ナビは人垣の間から頭しか見えないヒョンスを呼んだ。ヒョンスも女子学生たちを搔き分けて店の外へ出た。

どのくらい走ったのか分からない。

カフェテリアを出てもしぶとく追いかけてきた女子学生たちを何とか振り切って、ナビとミンホとヒョンスの三人は、旧校舎の空き教室に逃げ込んだ。

「…………はあ…………はあ」

三人とも肩で息をしながら、そのまま床に倒れこむ。

「…………ミンホ…………いつたい…………ハア…………ツ何なんだよ、あの子たちは…………」

「…………ハア…………僕に…………聞かれてても…………知りませんよ」

ミンホは息を整えるために、着ていたポロシャツの胸を掴んだ。

「授業前…………から、何か僕を…………チラチラ見て…………変だなって思つたら…………授業、終わった途端に…………あの騒ぎ…………」

ミンホはよつやく上半身を起にして、汗に濡れた前髪をかきあげた。

「…………といひで、そりがね?」

ミンホは、成り行きでここまで一緒に逃げて来たヒョンスを見て言った。

「あ、そうだ！ センス、これがセントラルが言つてた一緒に編入してきたヤツ。ヨンス、これがセントラルが言つてた一緒に編入してきたヤツ。ヨンス、これがセントラルが言つてた一緒に編入してきたヤツ。」

「友達？」

ミンホの目が、一瞬警戒の色を宿す。

「ヒヨンス、これがセントラルが言つてた一緒に編入してきたヤツ。僕の子分の、ハン・ミンホ。英米文学科四年生」

「は？ 子分？」

聞き捨てならないとこりゅうひ、ミンホの目が光る。

「クリーミーソーダ買つてよ」

「突然何の話をしてるんですかっ！」

脈略が無さ過ぎるナビに、ミンホの声も大きくなる。

「さつあ、四年って言つてましたよね？ 年……上なのに、子分？」

今や大分フランクになつてきたとはい、儒教精神に乗つ取り、年功序列を重んじる國の若者とはとても思えない。二学年も上の相手に敬語はあるか神をも恐れない態度で子分扱いするナビの様子を見て、当事者でもないのにヒヨンスの方がハラハラして尋ねた。するとミンホが、すかさずナビの頭を大きな手で押さえつけるようにして、ヒヨンスに向かつて愛想笑いを浮かべた。

「ああ、この人ね、本当は僕より一つ年上なんです。三浪なんて親不孝な真似して、ようやくお勤め（兵役のこと）が終わつてもこの調子でしょ。こんなナリして大学生なんて、詐欺ですよね？ 見た目も中身も中学生でしょ。これじゃ」

「なにをお？！」

ミンホに頭を押さえつけられた状態で、ジタバタと両手を回して暴れるナビは、ミンホの“親分”の貫禄はまるでなく、“子分”とされたミンホは、完全にナビの保護者のようだつた。

「……フツ……ハハハ、アハハハハハ

二人のやりとりを見ていたヒョンスが、たまらず笑い出した。当の一人は、何を笑われているのか分からなくて、キョトンとした顔でヒョンスを見つめる。

「君たちって、本当に面白いね

腹を捩つて笑うヒョンスに、ミンホとナビは顔を見合わせる。

「面白い？ 僕らが？」

「さつきから、そう言つて笑うんだよ」

「面白いのは、あなただけでしょ？ 僕はお笑い担当じゃありますから」

「ハア？！」

「ほら、また！」

手を叩いて、ヒョンスの笑いの発作は尚一層激しくなる。

「でも、確かに“お笑い”担当じゃないよね……ミンホ君だつける？ 君、ダンスパーティの相手決めるの大変だよ、きっと。さつきのあんなもんじゃない。女子の間で戦争が起こるね」

「ダンスパーティって、これ？！」

「あ！ あなた、いつの間に」

途端にナビが田を輝かせ、ポケットの中から皺くぢやになつたチラシを取り出した。ミンホは呆れ顔で見守る。

「そう、それ。我が校の伝統行事だからね。ラストダンスで踊つた相手と結ばれるつていう伝説のイベントだから。あと一週間、みんなパートナー選びに躍起になつてるんだよ」

ヒャンスの言葉に、ナビはポンツと膝を打つた。

「じゃあ、チャンスじゃん。コリを誘いなよ、ヒャンス！」

名案が浮かんだと、ナビは田をキラキラさせヒャンスを覗き込む。

「……無理だよ。コリはきっとガンホと……」

「つむくヒャンスの頬を両手で挟むと、ナビはグキッと音がするくらい乱暴に、無理やり顔を上げさせた。

「何弱気なこと言つてるの？ あと一週間もあるんだよ！ 押して押して押して押しまくれっ！」

「……あの、全然話が見えないんですけど。コリって誰ですか？」

置いてきぼりをくらつたミンホに、ナビは明るい声で答えた。

「ヒャンスの片想いの相手」

「ちよ……ちよっと！ ナビ」

「ほひ、なるほど」

真っ赤になるヒョウスにはお構いなしに、ミンホも知った顔で頷いた。

「こんなおあつらえ向きなイベントがあるなら、利用しない手はないですねえ」

腕を組み、顎に手を当てて神妙に頷いてみせる。

「ほらね、ヒョウス。子分もそう言つてる」

「ちょっと、ナビヒョウ？ わざわざからその聞き捨てならない名称は、ひょっとして僕のことじやありませんよね？」

「お前以外、誰がいるの？」

悪びれもせずにナビが言ひ。

「だから、クリームソーダ」

「だからって、何がだからなんですかっ……！」

ミンホが思わずナビの腕を掴みそうになつたその時、ナビの視線が止まつた。

「……あ、雨だ」

ミンホの肩越しに見上げた教室の窓を、ポツリポツリと雨がたたき出した。

「僕、帰らなきやー」

途端にナビは勢いよく立ち上がり、教室のドアへと向かつ。

「ナビヒヨンッ！！」

思わず大声で呼んだミンホを振り返り、ナビはほんの一瞬、切な
そうに目を伏せた。

「……ヒヨン」

その表情に、ミンホの心臓がドキリと跳ね上がる。普段バカみた
いに明るい人間が不意に見せる寂しげな表情は反則だ。ミンホがか
ける言葉を探しあぐねていると、不意にナビが顔を上げた。

「ミンホ……」

意味もなくドキドキしながら、ナビの言葉を待つ。

「代返頼む！」

スチャッと軽い敬礼のポーズを取ると、ナビはハスキーナ笑い声
を廊下中に響かせて、駆けて言った。

「ナビヒヨンッ！」

後には怒りに震えながら拳を握り閉めるミンホと、困惑顔のヒヨ
ンスが残された。

ヒヨンスは明かりを落としたリビングのソファーで、先ほどからジッと時計と睨めっこをしていた。

ここには、コリたち社長一家が暮らす母屋で、ヒヨンスと父親は同じ敷地内にある離れに暮らしていた。しかし、部下思いのコリの父親の計らいで、いつも夕食は他の住み込みの従業員も一緒に母屋で取ることになっていた。

今日も夕食を終えた父親は先に離れに引き上げたが、ヒヨンスだけその場に残った。幼い頃から成績優秀だったヒヨンスは、特にコリの父親に気に入られ、本当の家族同然に可愛がられていたので、こつして遅い時間まで母屋にいても咎められることはなかった。

却つて、高校に上がる頃から急激に素行が悪くなりだした一人娘のコリに代わって、以前にも増してコリの父親はヒヨンスに目をかけるようになつていた。

ヒヨンス自身もコリの父親を心から敬愛していたし、目をかけてもらうのは単純に嬉しかった。しかし、それが、コリを家に寄り付かせない理由の一つなのではないかという思いもあり、複雑な気持ちだった。

結局今日もコリは夕食の時間まで帰つて来ず、コリの分の夕食は住み込みの家政婦の手によつて、キレイにラップがけされ、テープルの上に乗つている。

先ほどまでリビングで、ヒョンス相手に最近の政治や経済の話をしていたコリの父親も、一時間前に自室に引き上げた。それまでコリのことには触れず、明るくヒョンスと話していた彼が、リビングを去り際、横目で手を付けられていらないコリの分の夕食を見て、深い溜息をついたのをヒョンスは見逃さなかつた。眉間に揉む仕草には明らかな疲労の色が見て取れ、もうそれほど若くない彼の身体にかかる、心労の深さを思つてヒョンスは胸を痛めた。

時計はもうすぐ、0時を回るとしている。

結局今日も、日付が変わる前にコリは帰つて来なかつた。

誰もいない深夜のリビングは静まりかえつてゐるが、先ほどからヒョンスの頭の中には、毎晩知り合つたばかりのコン・ナビという学生の、ハスキーボイスが大音量で鳴り響いている。

連れのハン・ミンホという学生も合わせて、風変わりな子だとヒョンスは思つた。

とても大学生とは思えないほど無邪氣で自由奔放だが、不思議とナビの言葉には力があつた。

(コリにはヒョンスが合つてるよ)

(あと一週間もあるんだよ！ 押して押して押して押しまくれつ…)

ナビに言われると、不思議と「そうかな？」といつゝ気がしてくる。諦めるなーと背中を押してもらつているような気持ちになる。

だから、今日はこの場所で、胸をドキドキ言わせながらも、コリの帰りを待つてゐる。

ダメで元々の気持ちで、ダンスパーティに誘つてみるつもりだ。

その時、暗い室内に、カーテンの隙間から車のヘッドライトの明かりが差し込んできた。ヒョンスが窓に駆け寄り外を見ると、門の

前に車が止まり、ドアが開く音、閉まる音に続いて、中から一つの影が降りてきた。

「……っ」

小さい方の影はユリ。

もう一つの影は、遠由でも分かる。ガンホのものだ。

あちらから見えるはずもないのだから、隠れる必要もないのに、ヒヨンスはカーテンを握り締めて、二人の様子を見守る。

一つの影が一つに重なり合つ。

見慣れている光景とはいえ、ガンホは胸が詰まつて呼吸が苦しくなる。

しかし、今日はいつもとは様子が違つた。

ガンホの黒い大きな影の中に包まれたユリは、ガンホの腕の中から逃れようと身じろぎをすると、ガンホの肩を突き飛ばし、手にしていたハンドバックでガンホを何度も何度も叩いた。

ガンホの手が伸び、ハンドバックを振り下ろすユリの手を掴む。ユリは首を左右に振つて、イヤイヤをするように抵抗する。ヒヨンスは思わず、窓を開け外へと飛び出していた。

「ユリツッ！！」

大きく叫んで、ガンホから逃げ出して庭の中に駆け込んできたユリを抱きとめる。

後から追つてきたガンホと、ユリを挟んで対峙する。

「何だよ、運転手」

ガンホが先ほどまでのコリとのやりとりで呼氣を荒げながら、突然現れたヒョーンスを見て田を吊り上げた。

「コリに、何をしたんです？」

肩を震わせるコリの背中を抱きながら、ヒョーンスは声が震えないように腹にグツと力を込めながら言つた。

「ただの痴話喧嘩だよ。お前には、関係ないだろ。コリ、こっち来い」

「イヤツ！」

「おいつ！」

「やめてください！ 警察を呼びますよ」

ヒョーンスはコリの腕を掴むガンホの腕を振りほどいて叫んだ。

「警察だあ？」

「不法侵入に脅迫、連行してもらひの理由はいくらいもあると思いますよ」

ガンホはヒョーンスの顔ギリギリまで自分の顔を近づけて威嚇したが、ヒョーンスは田を逸らさずにそれに耐えた。

「つち」

ガンホは小さく舌打ちすると、先にヒョーンスから顔を背けた。

「明日の朝、迎えに来るからな。コリ」

そう言つと、庭の芝生の上にベッドと睡を吐いて一人に背を向けた。ガンホの背中が門の外へ消えた途端、ヒョンスはへナへナと足から力が抜け、芝生の上にへたりこんだ。ヒョンスの腕が離れると同時に、ユナは家に向かつて駆け出した。

「コリッ！ ちょっと、待つてよ！ コリッ！」

ヒョンスは慌てて、まだ力の入らない足を踏ん張つてユナの後を追う。

「コリッてばっ！」

逃げるユリの腕を掴んで振り向かせた瞬間、涙でグシャグシャに濡れたユリの顔がそこにあつた。

「どうしたの？ 何があったの？」

驚いたヒョウンスがコリの肩を掴んでも、コリはただしゃべりあげて泣くだけだった。

「泣いてちゃ分からなによ、コリ。俺に話して？」

そう言つてコリの頬に手を伸ばした時、ポトコトコリのジーンズのポケットから何かが落ちた。

「……何？」

「屈みこんでそれを拾おうとしたヒョウンスに、コリは鋭い声で叫んだ。

「ダメッ！」

だが、一歩遅く、拾い上げた白い包み紙は既にヒョウンスの手の中にあつた。

「……これ……コリ、またか……」

その途端、コリはワッとして泣き崩れて、ヒョウンスの胸に縋つた。

「……ヒョウンス、助けて……お願い」

「……コリ、

『……がちにコリの背に手を回すと、コリはますます身体を密着させたヒヨンスに縋り付いた。

「ねえ……あんた、いつも私を助けてくれたわよね。小学校一年の時、オネショした時も、あんたが庇ってくれた」

胸の中で震えるコリは、本当にあの頃の小さな少女に戻ってしまったようだった。

「……助けてよ、お願い。あんたはいつだって、私を喜んで助けてくれたじゃない」

確かに、そうだった。
今でもよく覚えている。

『…………ヒヨンスウ』

『コリ? どうしたの? 眠れないの?』

真夜中、みんなが寝静まつた後、泣きながら枕を抱えて自分の部屋にやってきたコリのために、ヒヨンスは身体を動かしてベッドの半分を空けてやった。

もぐりここんできたコリの身体は、ヒヤリと冷たく濡れていた。

『……ん? コリ?』

不信に思つて、嫌がるコリの寝巻きの尻を触つて確認すると、しつとりとした感触がした。

『お前、まさか……』

絶句するヒョウンスに、コリはシクシクと泣き出した。

『…………どうしよう…………パパに怒られる…………』

あまりにも哀しそうに泣くものだから、ヒョウンスはそれ以上責めることが出来なくなってしまった。

仕方なく一人の上にかけていた布団を剥がすと、ヒョウンスは自分のパジャマのズボンを脱ぎ、シーツも剥ぎ取った。

『…………ヒョウンス?』

『代わつてやるよ。おじさんこは、俺が怒られるから』

キヨトンとするコリの前で、ヒョウンスはテキパキと作業を進める。全てが終わると、コリを連れて、じつそり階下のシャワールームへ連れて行つた。

肩に掴まらせながら、コリの汚れた身体を洗う。

『…………ありがとう、ヒョウンス』

翌朝、オネショウがバレたヒョウンスは、大人たちにじつぴどく叱られた。罰として、屋敷の廊下に正座させられ使用者たちにからかわれても、ヒョウンスは恥ずかしいどころか、むしろ誇らしい気持ちになつていた。

シャワールームで、肩に触れていたコリの小さな手の温度を思い出せば、何だつて出来るような気がしていた。

今、コリの手はあの頃のよう小さくもなく、暖かい温度も持っていない。

白くなめかしいその細腕は、先ほどから媚びるよつヒョンスの肩に触れている。

ヒョンスはライトも付けずに、そつと真夜中のガレージから車を発進させた。

「……あんただけが、頼りなの」

コリは泣いた後の濡れて甘えた声で、そう囁く。

ヒョンスは言われるままに、車を走らせた。

しばらく走り続けて、やがて、明かりの消えたクラブの前に車を止めた。コリの後に続いて、フロアの奥の配水室へと歩を進める。

「何も聞かないで。ただ、黙つて言つとおりにして

コリが振り返り、もう一度念押しする。ヒョンスはただ黙つて頷くしかなかった。

懐中電灯を手に、鍵のかかっていない配水室のドアを肩で押して中に入る。毛細血管のよくな配水管の合間を縫つて、奥へ進んでいつた時、足元を不意に駆け抜けた生暖かい生き物の感触に思わず悲鳴を上げた。

「しつ！」

コリが厳しい口調で振り返る。

チューといつ泣き声とともに、ネズミが駆けていく音がした。

「……どこのまで行くんだよ？ 何があるんだ、一体……」

その時、ヒヨンスの照らす懐中電灯の明かりの先に、大型受水槽が姿を現した。その陰に隠すように、簡易ベッドが見える。

「……何だ？」

そう言つて目を凝らした次の瞬間、その上に乗せられた黒い塊を捉えて、ヒヨンスの目が大きく見開かれた。

「つな？！……」

悲鳴を上げる寸前で、突然横から飛び出してきた大きな影に口を塞がれた。

「……見たよな？ 見たからには、お前も共犯だからな」

その影は、ヒヨンスの耳元で低い声で息を吹き込むように囁く。目だけを動かしてその影の手の先を追つと、正気ではない光をたえたガシホの目と視線があつた。

「……手を貸せ。コリのためだ」

口を塞いでいた手がスルリとヒヨンスの首に巻きついた。ヒヨンスがゴクリと唾を飲み込む音が、狭い配水室に響いた。

ドアを蹴破る勢いで、明け方の捜査課にチョルスが飛び込んでき
た。

緊急召集を受け、気のみ氣のまま一人暮らしのアパートを飛び出
して来たため、辛うじて肩に引っ掛けってきたスーツは皺くちや、髪
はボサボサの酷い有様だったが、目だけはギラギラと輝いていた。

「聖水大橋ソンスティギヨから、遺体があがつたつて？」

肩で息をしながら、チョルスが当直だった刑事に詰め寄る。

「ああ。該者は明慶大学経済学部経営学科四年、ノ・ミラ、二十一
歳。橋のたもとに引っかかつて浮いてたのを、通行人が見つけた」

「明慶大学！？」

「6月3日、大学へ行くと行って家を出てから行方不明。家族から
捜索願が出されてた」

そう言つと、当直の刑事はチョルスに向かつて資料を放つた。チ
ョルスはすぐさまその資料に目を通す。

「遺体の状況から見て、死後だいぶ日数が経つてゐるな

当直の刑事は、資料写真の惨たらしい写真に顔をしかめながら言
つた。

「死因は？」

「今、鑑識に回しているが、恐らく……コレだろ？」

そう言つて、当直の刑事は自分の腕に注射針を刺す真似をした。

「そこ、見てみる」

指で差し示された資料写真には、剥き出しになつた少女の腕の内側に、赤黒く変色した内出血の痕がクツキリと残つていた。

「鑑識の結果を待てば、ハツキリする」

刑事の言葉に、チョルスも頷いた。

しかし、鑑識の結果は、チョルスたちの予想とは大きく異なるものだった。

「心臓麻痺だと？！」

「な……何ですかっ！？ 鑑識の結果が信じられないとつ？」

公式発表された今回の該者の死因は、当初、当直の刑事とチョルスが予想していた薬物使用によるものではなく、女子学生の元々の持病である心臓疾患により、麻痺を起こした突然死とされた。川の側を歩いていた時にたまたま発作が起き、その拍子に聖水大橋の二つ先の大橋の欄干から落ちたのだと推測された。

発表されるなり、チョルスは鑑識室に乗り込んで、主任の胸倉を掴んだのだった。

「もう一度良く調べろっ！ 薬物反応が必ず出るはずだ」

「薬物反応なんて出ませんでしたよ。何度も調べたって同じです」

主任はチョルスに締め上げられたせいですり落ちたメガネを直すと、僅かに上擦った声で反論した。

「資料写真に残ってる、あの針の痕は何て説明するんだ？」
「資料写真？ そんなものがどこにあるんですか？」

主任の言葉に、チョルスは大声で怒鳴った。

「とぼけるなよ！ 該者の死体遺棄現場の写真だ！」

そう言つて、すぐそこデスクの上に散らばっていた写真を取り上げた。だが、一枚、一枚、乱暴に数えていつても、チョルスが当直の刑事と一緒に見た、女子学生の腕にはつくりと残る注射痕の内出血が見える写真はどこにも無かつた。

「……つな？！」

絶句するチョルスを前に、主任はゴホンッと咳払いしてからチョルスに掴まれていた襟首を整えると、背筋を伸ばして言つた。

「全く。変な言いがかりはよしてくださつよ。鑑識の結果は変わりません。あなたが見たと言つ、幻の写真が出てきたとしてもね」

チョルスに冷たい一警をくれると、主任は部下の職員に顎をしゃくつて、呆然と立ち尽くすチョルスを鑑識室から追い出した。
明白な筈なのに、なぜか隠匿される死亡原因。
無くなる筈のない、資料の紛失。

まさか、内部に？

チョルスは鑑識室の扉の前で立ち渴くしながら、ギリッと唇を噛んだ。

安いビジネスクラスの固いスプリングのシートを弾ませて、ペク・ギョウンは文字通り、その場で電気ショックにでもあつたかのように跳ね上がった。

広げた新聞の端が、隣りの座席で頭にサングラスを載せたまま大いびきをかいていたオーサーの顔にかかり、オーサーはムズムズと鼻を動かした後、不快そうにそれを振り払った。

「……そんな……ミラが、何で……？」

こつもなら、オーサーの機嫌を損ねる失態を演じないよう気を使うギョウンだったが、今日ばかりは様子が違っていた。

オーサーを気に留める余裕もなく、一人口の中でブツブツと呟く。新聞を握る手も、小刻みに震え、見る見るうちに顔が青ざめていった。

「……ん？」

面倒くさそうに額のサングラスを押しやり、隣りのギョウンを上げたオーサーは、そこで初めて、彼の様子がおかしいことに気がついた。

「……どうした？」

眠い目を擦りながら、ギョウンに尋ねる。

ギョウンは何も応えず、そのまま力なく新聞を握った手をダラリと垂れ下げる。床に落ちて広がる一步手前で、オーサーはその新聞をキヤッチした。

【聖水大橋からの発見遺体。身元は、明慶大学四年、ノ・ミラさんソンヌステギョと判明】

田を走らせた先に、紙面の端に小さく載ったその記事を見つけた。ともすれば見過ごされても不思議ではないその記事が、ギョウンに口を利くのもままならないほどに、大きなショックを与えた原因に違いなかった。

「この娘……」

言いかけたオーサーの前で、ギョウンは急に立ち上がった。

「おい?!」

驚くオーサーに応える余裕もなく、ギョウンは座席の間をよろめきながら、狭い機体の後方へと向かう。

「お客様、間もなく着陸ですので……」

止めるキャビンアテンダントを振り切つて、ギョウンは機体の一番後ろにあるトイレの中へと駆け込みガチャリと鍵をかけた。

「あの、お連れ様が……」

困り果てたキャビンアテンダントが救いを求めるようにオーサーに視線を移すと、オーサーはそれに応えてニッコリと微笑んだ。

「「めんね。昨日の夜食べた、タッパル（激辛の鶏の足料理）がアタッたみたい」

親指の先でトイレの方を指しながら、オーサーは可愛い彼女に向かってウインクしてみせた。

「そろそろ出てきてくれない? 何時間ウ 口で粘るわけ?」

もぬけの空になつた機内で、オーサーはトイレの前でしゃがみ込みながら開かずの扉に向かつて語りかける。

出口付近では、機内清掃の職員が迷惑そうにオーサーに視線を送つている。

目的地である済州島国際空港に着陸してからも尚、ギョウンはトイレに立てこもつたままだつた。

「いつまでも粘るなら、俺にも考えがあるよ。国内線の発着ロビーでアナウンスしてもらおうか?『ソウルからお越しのペク・ギョウン様のお腹が荒れ模様のため、国内線に遅れが出ております』ってね」

その時、バンッと音を立ててオーサーの目の前で扉が開いた。そこには涙と鼻水で顔をグシャグシャにした、酷い有様のギョウンが立つていた。

「……先生……」

「タンマ! 今その顔で俺に抱きついたら、命はないよ。このシャツ、今回の旅行のために新調したんだから」

そう言つて、趣味の悪い、ヤクザ者丸出しのアロハシャツの裾を引っ張つて見せる。

「サンセヨ……」

情けない声でそれでもオーサーに縋るつとするギョウンの肩を押し返して、オーサーは機内清掃員に頭を下げながらチップを渡して、まだグズグズと泣いているギョウンの背中を押してタラップを降りた。

手続きを済ませ、そのまま人目を避けるように発着ロビーの柱の影に連れて行くと、オーサーはギョウンと向き合った。

「そろそろ落ち着いた？　あの娘はやっぱ……」

「……言つた途端、ようやく乾きかけたギョウンの皿に涙がいっぽいに浮かんできた。

「もへ、泣くなっ！　鬱陶しい！」

オーサーに一喝されて、びっくりしたようになつてギョウンの涙が止まる。

「……そうです。俺の女だった、ノ・リリです」

「うな垂れたまま、小さな声でわづわづく。

「……あの時の、一大原因の一つってわけね。一つはアメフト、もう一つがこの娘？」

「……はー」

ギョウンはそのまま、ズルズルとその場に座り込んだ。

悪夢のような、どん底の状態にいたあの頃の記憶が蘇つてくる。

(ギョウン！ あなたは、韓国一のクオーターバックよ！)
(ずっと、私と一緒にいてね)

(……好きな人が出来たの。だからギョウン、悪いけど、もう会え
ないわ)

「うわああああああああつ！」

「ちよとー お密さん」

カウンターに並べられたグラスをなぎ倒し、奇声を上げるギョウンを店の主人が振り返る。店の四方に目配せをして、常駐させているボーイ兼用心棒の男たちにギョウンを取り押さえさせる。

屈強な複数の男たちを持つてしても、将来を渴望されていた大学アメフト界の元花形スターの鍛え上げた肉体を押さえつけるのは至難の技だった。

「摘み出せ！」

店を滅茶苦茶にされて、青筋を立てた主人が男たちに命じる。

「触るなっ！ 誰も、俺に触るな……ウ……グウエ！」

そのまま身体を二つに折り曲げて、ギョウンは自分を取り押さえていた男の一人の足元に嘔吐した。

「貴様つー！」

ピカピカに磨き上げた革靴を汚された男は、躊躇なくギョウンの頬を殴り倒す。

床に腹ばいになりながら、ギョウンは吐しゃ物の中に顔を埋めた。

「一度と来るな」

そう言われて、勢いよく店の外にはじき出される。路地に積まれていたゴミの山に頭から突っ込むと、後ろでピシャリと店の扉が閉められる音が響いた。

外はいつの間にか雨が降り出していた。

ペク・ギョウンは、聖智大学アメフト部の有名選手だった。

同じ学年で明慶大学のハン・ガンホとは、高校時代からのライバルで、大学タイトルの数々を一人で競い合っていた。

他校に通う美人で有名な彼女もいた。

彼女　ノ・ミラは、高校時代、ギョウンが通う高校の隣の女子高に通う彼女を口説き落としてモノにした。

人生まさに順風万帆。

挫折なんて言葉とは無縁に生きてきた。

だが、彼が大学三年生の春、明慶大学との練習試合中にそれは起こつた。

いつものような激しいぶつかり合いの中、不意に足を払われた。グラウンドに転がったギョウンの膝の上に、幾人もの明慶大学側の選手が覆いかぶさってきた。

転んだ時の姿勢が悪く、不自然に曲がった膝に大勢の体重が一気にかかる。

痛みに叫ぶギョウンの視線の先で、冷たい笑みを浮かべて彼を見下ろすガンホの姿が見えた。

膝の半月板損傷に靭帯断絶

アメフトへの復帰どころか、完全な日常生活に戻るまで半年を要した。

完全に経たれた選手生命と共に、これまでのギョウンの人生は終わりを告げた。

始めのうちにそ足しげく入院先を訪れてくれたチームメイトも、荒れるギョウンを前に、日が経つにつれ一人減り、二人減りして、とうとう誰も来なくなつた。

それは、最愛の恋人、ノ・ミラも例外ではなかつた。

（早く良くなつてね　）

可愛らしい声でそう囁かれ、照れ隠しに邪険な態度を取るギョウンにもいつもの笑顔を向けていたミラが姿を見せなくなつてから、今日で二週間になる。

毎日見舞いに来ていた彼女だが、大学の試験があるから忙しくなると言つて、一回おき二回おきになり、この前は本当に久しぶりに病院へやつて來た。

ご無沙汰していたお詫びにと、高価な高麗人参を手土産に持つてきたが、今ではその彼女の置き土産だけが、サイドテーブルに足を組んだ人間そつくりの姿勢で鎮座して、ギョウンに哀れみの眼差しを向けていた。

一週間を過ぎた頃から、流石に痺れを切らして、看護師の目を盗んで喫煙室にもぐり込み、ミラあてに電話をかけてみたが、電源を切つているのかいくらかけても繋がらなかつた。

そして半年後、ギョウンがやつとの思いで退院する日まで、どうとミラは姿を現さなかつた。

退院後、学校の理事者室に呼ばれ、今後の身の振り方を問われた時、ギョウンは明らかに彼らに厄介者扱いされているのが分かつた。“我が校の誇り”と口を揃えてギョウンを讃めそやしていた者が一様に、手のひらを返したような態度だつた。

確かにスポーツ推薦で入つた大学だから、もうアメフトを続けられないとなれば、大手を振つて在学できる資格はない。学校側とし

ても、ここまで母校に数々の栄光をもたらしてきた名選手を、途中で退学させるという無体な真似は表立っては出来ないが、その態度や言葉の端々から、ギョウンに自主退学を促しているのが感じ取れた。

荒れ狂つた気持ちのまま、身辺整理のために立ち寄つた部室で、ギョウンは耳を疑つような後輩の会話を盗み聞いてしまう。

「哀れなもんですね、ペク先輩も。退学するつて噂ですよ」

「そりやそうだろう。肩身が狭くて、普通の神経じゃいられないよ。恋人にまで見放されて」

「ペク先輩の彼女、明慶のハン・ガンホに乗り換えたつて知つてました?」

「本当かよ? 女つて怖いなあ」

クスクスと忍び笑いを漏らす一人がいる部室のドアを、ギョウンは部室棟全体が揺れるような大きな音を立てて蹴破つた。

「せ……先輩つ?」

噂をすれば、影。

しかし、あまりに唐突で予期していなかつた激しい影の登場に、二人は恐れおののいて震え上がつた。

手前にいた後輩の胸元を締め上げ、ギョウンは搾り出すような声で言つた。

「……おい、今の話は……」
「す、す、すみませんつ!」

締め上げる力を強める。グゥツと息の詰まつた後輩の横で、締め上げられていない方のもう一人がなぜかより青ざめる。

「質問に答えるつー ミラが、ガンホに乗り換えたつて一体……」「お、俺の女が明慶にいて、明慶では有名な話だつてつー。」

後輩が苦しげに叫ぶと同時に、ガンホは乱暴に彼を戒めていた手を離した。

「…………」

蹴破つた時と同様に激しい音を立てて、ガンホは部屋を飛び出していく。

真っ直ぐに向かった先は、ミラのアパートだった。

「ミラッ！ 開けろつー！ 出て来い！」

隣人の迷惑も顧みず、インターフォンを鳴らすこともせず、ギヨウンは通りなれた彼女の部屋のドアを叩く。

「ミラッ！」

何十分もそうして叩き叫び続けていたら、根負けしたのか、静まり返つていた扉の向こうで、力チャヤリと鍵の開く音がした。細く開けられたドアには、しっかりとチーンがかかっていた。そこに彼女の拒絶の色が何よりも明確に現れている気がして、ギヨウンは怒りよりもやりきれない寂しさに襲われた。

「ミラ……どうして、病院に来てくれなかつたんだよ？ 電話も繋がらないし。俺、心配……」「いめんなさい」

ギョウウンの言葉を遮つて、//ラが小さな声で囁く。

「何謝つてゐんだよ？」

「//間だと語つのに、//ラの部屋には厚い遮光カーテンが引かれて
いるのか、彼女の身体の向こうには薄暗い闇が広がつていて。
綺麗好きで掃除好きで、派手な外見に似合わず家庭的で、いつも
部屋の中は明るく整頓されていた彼女の部屋とは思えなかつた。
心なしか、部屋の中からはすえた匂いも漂つてゐるようだつた。

「何があつたんだよ？ とにかく、入れてくれ。中で話をしよう」

ギョウウンがドアの隙間に足を挟もうとするべく、//ラは咄嗟に扉を
閉めようとした。

「//ラ？…」

「……好きな人が出来たの。だからギョウウン、悪いけど、もつ会え
ないわ」

//ラは一気に息を吐きそのまま//ラを睨いた。

「……お前、本氣で言つてゐるのか？」

その時、ギョウウンの//ラ、//ラの身体の向こうへ、明かりの//新しい玄
関先に無造作に脱ぎ捨てられたスニーカーが映つた。

「新しい男が出来たつて、本当だつたのか？」

ビクッ //ラが身を竦ませる。

「相手が、ハン・ガンホだつて、本当だつたのか？」

部屋の奥にいるであつた相手にも届くよつて、ギョウンは声をあげた。

「……ごめんなさい。もう、離れられないの」

ミラはまるで何かに怯えているようにそう言つと、弱々しい力でギョウンの肩を押し返した。もともと華奢なスタイルだつたが、しばらく会わぬ内に、随分とその腕は痩せてしまつたよつて見えた。

それからは直視できない現実から逃れるよつて、酒に溺れた。大学へは半場やけつぱちの気持ちで、ミラのアパートから戻つたその足で退学届けを出した。

毎日することもなく、夜の店に繰り出しては、あちこちの店で鼻つまみ者になり追い出されるまで、飲み倒した。

その内、ソウル市内の店では噂が広まり、入店を拒否されると珍しくなくなってきた。

世界中から拒絶されているよつた気がして、ギョウンの心はますます荒んでいった。

そんな時、雨の向こうに浮かぶ黒テントを見つけたのは、全ての偶然だつた。

「ヨミの山に頭から突っ込んだせいで、我ながら胸の悪くなるような腐臭を漂わせながら小雨の中を一人歩いている時、高架橋の下で隠れるように明かりを灯すテントを見つけた。

九月の終わり頃だった。

長く続く秋の雨に打たれていると、肌の体温を奪われていくのが分かった。眩しい太陽が照りつける夏は終わり、自分の人生にもう寂しい秋が訪れたような気分になつた。

温めて欲しくて、何でもいいから慰めて欲しくて、ギョウウンはその灯りに導かれるように、覚束ない足取りで高架橋の下へと降りていつた。

テントの入り口にはまだ『準備中』の札が下がり、中から人の話し声が聞こえて来た。

「遅すぎない？ ナビヤが下見に行つてから、何時間経つのぞ？」
「オンマも一緒だから、その辺で遊んでるんじゃないかと思つナゾ

……
「だつて、もう六時だよ？ 暗くなる前に帰れって言ってあるんだろ？」

子どもでもいなくなつたのか、中で交わされる二人の男の話し声には焦りの色が滲んでいた。

「やっぱり俺、ちょっとその辺見て……」

店の中で誰かが立ち上がる気配がしたのと同時に、粗末な黒テン
トのドアが開いた。

「あつ！」

全く心の準備をしていなかつたギョウンは、突然のことに動搖し
て口をあんぐりと開けた。

彼の動搖の原因は、店の人間との突然の対峙だけではなかつた。
ドアを開けて現れた男の、人間離れした容姿にまるで魂を抜かれ
るような気持ちになつた。

蝶のように白い肌と、灰色の瞳、東洋人か否かすら定かではない。
プラチナブロンドに近い明るい金色に染められた髪も、常人であれ
ば少々奇抜すぎて違和感のある代物に見えたが、彼にかかるては、
地毛だと言えばそれで納得してしまうほど馴染んでいた。

「あつ！」

ギョウンと同様に、その金髪の彼も声をあげた。

「オンマツ！」

だがその視線はギョウンを見事に素通りして、彼の背後に向かつ
ていた。

「へ？」

思わず後ろを振り返ると、ギョウンの後ろには瘦せた猫が一匹、
雨に濡れそぼつて立つていた。

金髪の男は邪魔なギョウンを押しのけて、その猫に向かつて手を
伸ばした。

猫は一声、ニヤアッと高く鳴くと、そのみすぼらしい見かけに反して、そもそも当然といったような優美な動きで美しい男の胸に沿った。

「ナビせせじーるの？ 一緒にじゃないの？」

男はあるで言葉が分かるとでも思つて居るかのよつて、猫に向かつて話しかける。

猫もそれに応えるよつて、男の胸で身じろぎをした。

また、ニヤアッと甲高く鳴くと、男の胸から飛び降りて雨の中を駆け出した。

「待て！ オンマー！」

金髪の男はそつ脱ぐと、急いで店の中を振り返った。

「オーサー！ オンマーが帰つて來た。ナビに何かあつたんだ。追いかけるよ」

「待てよ、ジェビン！ 僕も行く！」

しかし中の男の返答を待たずして、金髪の男は猫の後を追つて既に駆け出していた。

「つたぐ、せつかちなんだから

ブツブツ言いながら、一人目の男もテントの入り口に現れた。手には『CLOTHES』の札を持っていた。

「ん？ おたく、誰？」

呆気に取られたまま立ち去っていたギョウンに田を留め、一人田の男が声をかける。

「誰？」と問われても、何と答えていいのか分からなかつた。自分はただ、明かりに惹かれ、ひつそりと立つてゐる黒テントに温もりを求めて立ち寄つた、ただの密に過ぎなかつたから。

「ちょうどこいや。緊急事態だから、ちょうど店番してー。」
「は？！」

「言つが早いか、男は有無を言わせやがヨウソの『CLOSE』の札を押し付けた。

「ちよ……ちよっとー。」
「札下げて、中にしていいよ。密が来たら、断つて店に入れなくていいから

それだけ言つと、傘も差さず、先ほど金髪の男と猫が消えた雨の中へと飛び出して行つた。

突然押し付けられた店番に、惑いながらも、誰もいない店を放つて帰つてしまつわけにも行かず、ギョウンは恐る恐る店の中に足を踏み入れた。

外から見るよりも案外中は広く、ジャズの名盤などがディスプレイされた店内は小奇麗に片付いていた。

言われた通り『CLOSE』の札を下げ、自分はカウンターに腰を下ろす。

店内は静かで、屋根を打つ雨と壁にかけられた振り子時計の秒針の以外に音は無かつた。

やることもなく店内を見回した時、ふと、カウンターの中の飾り

棚に陳列された数々のワインやウイスキー、酒の瓶が皿に詰まつた。

意識した途端に、指先が震えた。

誰も見ていない そんな誘惑が、ギョウンの頭の中を駆け巡る。

自主退学してからというもの、毎日浴びるように酒を飲む生活を送つたお陰で、すでにギョウンの身体は、本人が意識するよりもずっと深刻に、アルコールに侵されていた。

「さ、入つて入つて。狭くて汚い店だけじせ」

「狭くて汚くて悪かつたな」

「あらら、オーナー様、聞こえましたあ？」

どれぐらいの時間が過ぎたのか。

朦朧と霞む頭に、軽口を叩く甘く掠れた美声が入り込んできた。身を起こそうとしても、意識と身体のバランスが取れず、思うようには力が入らない。結局、ギョウンに出来たことと言えば、床に仰向けに寝そべった状態で瞼をピクピクと痙攣させることだけだった。

「うわっ！ 何、この惨状」

瞼の裏を刺していた店内の橙色の光に影が差し、誰かが自分を真上から覗き込んでいるのが分かった。

「ずいぶんお行儀の悪い店番だねえ」

呆れた声と同時に、爪先で脇腹を小突かれた。

「まさかこれ、ゼーんぶ、君一人で飲んじゃったわけ？」

瞼の裏の影が揺れるたび、ギョウンの耳の側でパリンパリンとガラスが弾ける音がする。それと一緒に、濃厚な酒の香りも辺りに漂う。

「店番のお駄賃でもあげようかと迷つたけど、これじゃあお駄賃以上に飲んじゃつてゐるね」

「おー、オーサー！　お前の持つてゐるかのビン……」

ワナワナと震える別の声が近づいてくる。

「…………ロマネ・コンテイヤニカ?ー」

「く?」

言われて、オーサーが初めてラベルに皿を落とす。無残に赤い命を垂れ流すボトルの口に鼻を近づけて、クンッと香りを嗅ぐと、ニッコリと微笑んで言つた。

「うふ、間違いないね。ロマネ・コンテイ、2004年モノ、占めて1300万ウォン（約100万円）なりー。」

「なりー！　じやない、この野郎つー！」

途端、寝ていたギョウウンの頭が凄い力で引き上げられた。胸倉を掴まれ、ただでさえ酒でフラフラの頭を激しく揺さぶられる。

「お前つー！　どつこつもりだ、よつこよつて店一番の超最高級ワインをひー！」

「あ……やめ……ッウ

しまつた　思つた時には、もう遅かつた。

ゲロゲロと盛大に嘔吐したギョウウンの胸倉を掴んでいたジョンビンの白い手は、一瞬の内に嘔吐物でドロドロになつた。

「…………貴様…………」

薄目を開けて自分を掴む男の顔を覗き見たギョウンは、一瞬で凍りついた。

静かな怒りに震えるジエビンのゾッとするほど美しい瞳には、明らかな殺気が見て取れた。

殺される！ そう思つて思わず固く目を閉じたギョウンに、突然救いの天使が現れた。

「もうつ！ 先生も兄貴もいい加減にしてよ。僕とお酒とどつちが大事なのさ！」

天使は世にもマヌケな声で、殺気に満ちていた男の体からあと一寸間に隙を抜いてしまつ。

「だつて、ナビ……」

「僕は、1300万ウォンと変えられるの？ ん？ どうなの？」
「もちろん、ナビやは10億ウォンとだつて変えられないよ。ねえ、ジエビン！」

調子の良い声が追随する。

「そりゃそりゃだけど、でも、それとこれとは……」

「違わないでしょ。何だったら、後で弁償してもうつて、お金が無理なら身体で返してもらえばいいじゃない」

誰よりも恐ろしい」とを、マヌケな天使は意図も簡単に口にする。

「それより、こつちが先でしょ」

そう言って、ナビは自分の後方で、未だ店に入りきらなかった、どう

したものかと思案しながら雨の中で立っている何人の若者を指差して言った。

「“取引き”するんでしょ？」

やう言ひナビをよく見てみれば、彼のすぐ後にटアリと張り付くように若者の一人が立っている。

不自然に密着したその腰元には、店内の薄暗い照明に照らされた、鈍いナイフの光がキラリと乱反射していた。

「ほ……ほほ……本当に、『ヒーリン』を……も……もも……持つてるんだるひなっ！」

ナビの腰にナイフを押し当てる学生は、酷く震えながらもう言ひて、ナビの身体を押した。

「つ痛」

ナイフの切つ先がほんの少しだがナビの腰に食い込み、ナビは顔をしかめた。

「持つてるひて言ひたろ？ それに、さつきちよつとお裾分けしてもらつたけど、お宅らが持つてるような粗悪品じゃない。もつと、超高級の、それこそ麻薬界のロマネ・コンティみたいに、一瞬でイツちゃんえるような“エデン”持つてるよ。だけど、それをあげる前に俺たちのナビヤをちょっとでも傷つけたら、俺がお宅らを一瞬でイカせてあげるよ。一度と戻つて来れない、本当の“ヒーリン”にね

冗談めかした口調に似合わない冷酷な目で、オーサーは若者の集

団を見つめる。それが脅しでも何でもなく、いざとなれば本当に皆殺しにすることも厭わないということは、彼の目を見ればすぐに分かる。

「まずは、ナビヤをすぐに解放して」

「ク、クスリが先だ！ 店にしかないつて言つから、こんなところまで着いて来たんだぞ」

「じゃあ、同時に。ハナ・トウル・セツ（一・二・三）で俺はクスリを投げるから、お宅らはナビを離しなさいな」

「…………いいだろ？ 可笑しな真似するなよ…」

「ハナ……トウル……セツ！」

オーサーの掛け声と共に、白く小さな紙包みが宙を舞い、同時に突き飛ばされたナビがオーサーの腕の中にすばりと納まった。

「お帰り、ナビヤア」

「止めて！ 先生っ！ ヒゲ痛い、ヒゲツ！」

もがくナビにお構いなしに、オーサーは頬ずりを繰り返す。

「おい、ふざけるなよ！ たつたこれだけか？」

その時、宙に浮いた小さな紙包みを必死の形相で掘み取った若者が怒声を上げた。

「これじゃあ、一人分にしかならないじゃないか」

「そうだよ、ナビヤ一人の命と引き換えなんだから、一人分で合ってるでしょ？ 取り引きはファイフティファイフティでなきゃ。それに言つたでしょ？ 超最高級品だつて。量産できたら、高級品つて言わないよ」

「テメエツ！」

若者は手にしたナイフを振りかざして、オーサーに襲い掛からうとした。

「これだから、おバカな学生は嫌いなのよ。取引きの何たるかを、分かつてないのね

「黙れつ！」

そう言つなり、若者はオーサー目掛けて突進してきた。

「ちょっと、ナビをお願い」

オーサーは慌てる様子もなく、ナビの肩を掴んで傍にいたジエビンに彼を引き渡すと、自分は悠々と若者に向き合つた。

一瞬にして若者の手首を押されると、身体を反転させて若者を背後から壁に押し付ける。

捻りあげたナイフを持った手首にほんの少し力を加えただけで、若者は耳をつぶさくような悲鳴を上げた。

「もつと欲しいなら、お願いしなきゃ。可憐くね、おねだりしてみなよ。ベッドの中の女の子みたいに」
「その辺にしどかよ、オーサー。骨折れるぞ」

案の定、壁に押し付けられた若者の顔は見る見るつむけて青ざめ、額からは脂汗を流している。

「形勢逆転だね。ねえ、君たちもよく聞いて。リーダーの骨、バラバラにされたくないよね？ トベるクスリも欲しいよね？」

まだ戸口の所で雨に濡れたままパーカになつていてる若者の集団に、オーサーは声をかける。

「取引きの条件は、簡単だよ。本当に特製だからね、せつきみたいに一度に一人分か、そうだね、君の彼女の分くらいしか上げられない

そう言って、一番戸口に近いところで、オーサーに取り押さえられている若者を心配そうに見つめている少女にウインクした。

「嘘だと思つなら、帰つて吸つてみて。ロマネ・ゴンティエ級の」

クスリに比べたら、君らが今までキメてたクスリは、1000ウォンの価値も無いくて分かると思うから。でも、さつき言ったみたいに量産は出来ないよ。ここにいる、君たちだけの秘密にしてくれなくちゃ、殺到しちゃうでしょ。ああでも、ここにいる全員分も、一氣には無理だよ。順番に、一人づつ来てくれなきゃね

「順番で来たら、必ず最後まで行き渡る保障があるのか？」

後方にいた若者の一人が声をあげる。

「いい質問だね。それが約束できないから、困ってるんだよ。最後の一人の直前で無くなるかも知れないし、保障は出来ないね」「じゃあ、順番なんて、どうやって決めるんだ？ 行き渡らないことを承知で、最後になるヤツなんていないじゃないか」「だから、言つたでしょ？ 何か忘れてない？ これは“取引き”なんだよ」

オーサーは人差し指を唇に当てて囁く。

「君らが、その1000ウォンワイン以下のクスリをどこから入手したのか、そのまた入手先の相手は、どこから手に入れたのか、出来るだけ詳しい情報を持つてる子から、一人づつ、ここ『ペニー・レイン』へ呼んであげる」

オーサーは居並ぶ学生たちをグルリと見回して言った。

「簡単でしょ？ 僕の気に入る情報だつたら、特別に後から彼女一人だけは呼んでもいいよ。ささやかなお礼として、ホテルも一泊プレゼント。キメてヤルと気持ちいいって、君たちなら良く知ってるんでしょ？」

「先生っ！」

際どいオーサーの物言いに、思わずナビが声をあげる。ナビの過剰な反応を見て、当のオーサーはイシシと笑つて『満悦の様子だ。

「ちなみに、この店は雨の晩だけ開店して、開店場所も神出鬼没。秘密の取引きには持つてこいだから、安心して。ママやパパや学校の先生にバレずに、イケナイことし放題だよ」

軽薄な口調の誘惑でも効果は充分だつたよつて、若者たちは欲望に目を光させて、生睡を飲み込んだ。

「でも、そんない「ロロロロ店」の場所が変わったんじゃ、どうやってあんたに連絡すりやいいんだ？ 全員に携帯の番号でも教えるのか？ 仮に皆があんたの連絡先を知つたとして、アポが重なつたらどうやって順番を決めるんだ？」

矢継ぎ早な質問は、彼らが本気になつてきた証だつた。

「俺が直接、君らと連絡を取る訳には行かないよね。俺はイケナイクスリを配布する親玉だから。すぐに足がついたりやうでしょ。誰か、いい子を間に挟みたいんだけど……」

そう言って、若者たちを見回したオーサーの視線の隅で、何かがムクリと起き上がつた。

この状況で皆に忘れ去られていたが、ロマネコンティを飲み干して、危うくショビンに殺されるところだつたペク・ギョウンだつた。

「…………あれ？…………お前、どうかで……」

ギョウンは朦朧とした意識の中で、まだオーサーによつて壁に押

し付けられたままの若者を見て言った。

「どうかで、会ったか？」

首を傾げるギョウンに、若者の方も次第に眉間に皺を寄せた。

「お前……自治会の……ヤツだよな？ あれ？ お前も……お前も
？」

ギョウンは店の戸口に並んだ彼らにも視線を走らせる。徐々に頭にかかるいた霧が晴れるようだつた。

「ペク・ギョウンッ！」

ギョウンより先に、壁の若者が驚いたように声をあげた。

「聖智^{ウチ}大学の学生だった、ペク・ギョウンだよな？！」

その途端、戸口の若者たちも一斉にざわめきだした。何日も櫛を入れていないボサボサの髪と、伸び放題になつた汚らしい不精髭から、フィールドを駆け回つていた頃の輝かしい面影は皆無だつたが、かつての母校のスターの顔は、皆良く覚えていた。

「嘘だろ？ アメフトの？」

「退学したはずだろ？ 何で、こんなところ？」

「今のは会話、全部聞かれてたのか？」

動搖はあつといつ間にその場にいた学生全員に広がつた。思ひがけない目撃者に出来わし、彼への対処をどうすべきか、皆考えあぐねていた。

「何？ おせらうじ大学の生徒だったの？」

オーサーが面白そうに話に割り込んでくる。

「ふーん、いいこと考えた！」

愉快そうに膝を打つて、オーサーは告げる。

「この子を仲介に立てるのはどう？ 情報が入つたら、君らはこの子に連絡して。俺はこの子を派遣するから、そしたら情報を渡して。それが俺の気に入る代物だつたら、そこで始めて『ペニー・レイ恩』へご招待！ どう？ 完璧じゃない？」

「…………え？ お……俺？」

突然のことに事態が飲み込めていないギョウングが、驚きに目を見開いてオーサーを見る。

「わうだよ。わうきナビも言つたでしょ？ どうせお金無せそうだし、身体で返してもらおうと思つて。ロマネ・ハントイ分は働いてもらわないとね」

オーサーの女好きするウインクで、あつとこいつ間にこの無茶な商談は成立してしまつた。

「わーー、じゃあまあは、まともに働ける身体になつてもうわないとね」

若者たちを帰した後の明るくなつてきた店内で、オーサーはなぜかギョウングの身体をロープでグルグル巻きにしていた。

「…………何してるんですか？」

「自覚あるでしょ？ 手足はブルブル。君は立派な、アル中患者だ

よ

そう言つなり、縛つたロープの片方を担いで、ズルズルと店の奥へと進んでいく。カウンターの中の扉を開け、テントから繋がつたキャンピングカーへとギョウングを連れて行こうとしていた。

「ジヨビン、一週間くらいシャワー室借りるよ」

「えー？！ そしたら僕たちがシャワー使えないじゃない」

「代わりに貸し切りサウナ行こうぜ、ナビ」

「ヤッホーイ！ それなら、許す」

呑気な会話が交わされる横で、ギヨウンはこれから一体何が行われるのか検討も着かなかつた。

高級ワインを飲んでしまったことを恨まれて、まさかシャワー室で拷問を？ そう思ふと、恐怖で歯がガチガチと鳴つた。

「さあ、今日から一週間、君は俺とここで我慢大会だよ。本当は俺も、ナビヤと一緒に貸し切りサウナへ行きたいところ、我慢して君に付き合つてやるから、我慢大会。君は、アルコール抜きの我慢大会。どうちに軍配が上がるかな？ 俺のナビヤ中毒は、君のアル中より重症だから」

空になつたバスタブにロープでグルグルに縛り上げたギヨウンの身体を乱暴に二つ折りにして放り込むと、自分はバスタブのヘリに腰掛けて、悠々と煙草に火をつけた。

「禁断症状で、イライラしちゃつたらゴメンね。いつもは優しい先生だけど、ナビヤが足りないと俺、人格変わっちゃうから」

そのまま火を消しもせず、浴槽に呑えていた煙草を投げ捨てる。

「熱つ！」

「ふふ、じゃあ……レディーゴー！」

優しげに下がつた目尻の奥から覗く鋭い目の光に、ギヨウンは縮

み上がった。だが、既に籠の鳥、まな板の上の鯉　彼に逃げ場は無かつた。

「あの時の、先生の恩は一生忘れないよ」

済州島国際空港の柱の影でうずくまつた姿勢のまま、ギョウンは弱々しい口調で呟いた。

「……そのまま酒に溺れ続けてたら、俺、本当の廃人になつてた」「俺はグルグル巻きにして縛つてただけ。あと、ナビヤ欠乏症でイライラしたから苛めてやつただけ。乗り越えたのは、お前自身の力だよ」

いつものふざけた口調は別にして、滅多にかけられることのないオーサーの優しい言葉の響きに、ギョウンが思わず顔を上げる。

「『ペニーレイン』と学生たちの橋渡しをしながら、お前も俺の田を盗んでヤクに手を染める機会は沢山あつたのに、お前は手を出さなかつた。俺は正直、100%，お前を信頼してたわけじゃないのよ」

「ごめんねーと笑いながら、オーサーはギョウンの頭をまるで幼子にするようにグシャグシャと撫でる。

「……お前の愛しの彼女が、ヤクをやつてるんじゃないかつて、気付いたのはいつ?」

ギョウカンの皿から、一皿取まっていた涙が再び溢れ出す。

「……確信が、あつたわけじゃないんだ……でも、あいつの……アパートに行った時、あいつが……何かに、怯えてるみたいで……」

（……『めんなさい』。もつ、離れられないの）

あの時は、ガンホへの心変わりを告げる言葉としか受け取れなかつた。

だが、もしかしたら“離れられない”理由は、別のことにはあつたのではないか。

一年近く、オーサーの指示の元、聖智大学の学生を中心に薬物にハマった学生たちを『ペニー・レイン』へ誘導する仕事をするつむち、この薬物騒動に明慶大学のガンホが絡んでいること、そして自分の傍を離れ、今はそのガンホの元にいるアリへの疑惑も深まつていつた。

「一斉摘発のタレ込みしたのは、誰だと思つ?」

軽い調子で尋ねるオーサーに、ギョウンは思わず言葉を詰まらせ
る。

「多分、俺とお前は同じこと考えてるよ。向こうも俺らに気付いた
から、先手を打つてきたんだ。警察が彼らを持つてってくれれば、
俺らは奴らを上げる証拠に辿りつけない。それどころか、自分たち
は身を隠したまま、あわよくば邪魔な俺らも警察が片付けてくれる
可能性さえあるからね。聖智大の一件は、奴らのトカゲのシッポ切
りだったんだよ」

ギリツと唇を噛み締めるギョウンに、オーサーはニヤリと笑つた。

「悔しい? ペク・ギョウン」

そう言いながら、ギョウンの額を小突く。

「負け犬人生なんて、プライドが許さないよね。一度でも栄光を味
わつた人間なんて、みんなそうさ。あの坊やを見てられなかつたん
でしょ? 今の自分を見てるみたいで、イライラして苛めたくなつ
た? だから、警察に追い詰められた時、見捨てて一人で逃げたり
したんでしょう? 僕に怒られるの分かつてて」

ギョウンが一斉摘発のあつた夜、一緒にいたのはロ・ジョンヒョ
ンという名の少年だった。

彼は聖智大学の学生ではなく、あの雨の夜に『ペーター・レイン』傍

の廃材置き場にたむろしていた若者の中にもいなかつた。その彼が

『ペニー・レイン』に来たがつた理由は、ただ一つ。

彼の恋するナ・ジスクという少女が、あの廃材置き場のメンバーの中にはいたからだ。

彼女には既に別の恋人がメンバーの中にいて、彼のことなどまるで眼中に無いというのに。

丁度、元恋人のミラを追いかけても、相手にされなかつた自分のように。

彼は『ペニー・レイン』へ呼ばれたまま帰らない彼女を追いかけたい一心で、聖智大学のメンバーに何度も掛け合い、ギョウンに連絡を取つてきた。始めは取り合わなかつたギョウンやオーサーだつたが、あまりにしつこく粘るため、特例的に一度だけ彼を呼んでやることに決めた。だがその矢先に、あの一斉摘発事件が起こり、ギョウンの忠告を無視して、搔き集めた粗悪なクスリの残りを使っていた学生たちが警察へ連れて行かれてしまつた。明洞ミョンドンの路地に身を潜めていたジョンヒョンも同様だつた。

「『ペニー・レイン』に連れて来ていれば、今頃会わせてやれたのに」

空港から予約していたレンタカーに乗り換え、郊外へ飛ばす車中でオーサーはさわやかな島の風にウェーブのついた髪をなびかせながら言つた。

「会つたつて、無駄だよ

助手席のギョウンが苦々しげに呟く。

「あの女の男は、あいつじゃないんだから。あの女が待つてるのは、あいつじゃないんだから」

「そつかな？ 禁断症状に耐え切れなくて、彼女置いて逃げ出すような男を、彼女が今でも待つているとでも？」

「女なんて、みんな一緒だよ。バカで男を見る目がないんだ」

ギョウンの言葉に、オーサーはハンドルを握つたまま思わず「フッ」と吹き出した。

「何が可笑しいんですか？ 先生」

「いや、「ゴメン。そうだね、女は見る目がないよ。お前や、あの坊やが簡単に振られる世の中は、ろくなもんじやないね」

「全然心がこもってないよ。先生は、失恋したことないからそんなこと言つんだよ」

「どうかな？ これでも、人生の機微はそれなりに理解してゐるつもりだけだね」

拗ねるギョウンにオーサーは楽しげにアクセルを踏み込む。

「じゃあ、会いに行ひよつとしようか。そのバカで男を見る目がないお嬢チヤンにね」

二人を乗せた車は、真っ直ぐに伸びた海岸線を横目に、リゾート地の穏やかな風を掻き分けて速度を上げた。

「……久しぶりだな、ちょっと、瘦せた……つてより、やつれたか

？」

「チョルスヒョーン」

ペニーレインの店の前、静かに降り続ける雨を見上げながら、チョルスとミンホの一人は、黒テントの壁にもたれて、何気ない風を装いながら定期報告を行う。お互いがこうして顔を合わせるのは、ミンホがナビと大学に潜入して以来初めてであり、一週間ぶりのことだった。

「……といひでお前……その格好は？」

チョルスはマジマジと、隣りのミンホを頭のてっぺんから爪の先まで観察する。

普段は少しきせのある束になつた髪を、ペタンと七対三の割合で頭に撫でつけている。水色のギンガムチェックの半袖シャツの裾は、ベージュのチノパンの中にきちんと入れ込んで、仕上げにその上からしつかり黒いベルトを巻いている。漫画に出てくるような、牛乳瓶の底並みに分厚いレンズの黒縁メガネをかけ、ブックバンドで縛つたテキストを小脇に抱えたミンホの姿は、はつきり言って『野暮つた』の一言だった。

初めて署に配属されて来た時、クムジャを始め、誰もが振り返るような高貴な美男子の面影はそこには皆無だった。

「……それについては、やむにやまれぬ事情があつたんですね

ミンホは、苦々しげに唇を噛み締める。

「そ……そつか」

それ以上聞くのもためらわれて、チョルスはなるべく野暮つたい

ミンホを見なごつにしてやがつと、自分の爪先に視線を落とした。

「それで、どうだ？ 調子は？」

「どうも、いつもないです」

ミンホは大きく息を吐き出し、それをきっかけに溜まりに溜まつた不満を一気にぶちまけた。

「僕が、これほど……こんな格好までして目立たないように氣を使つているというのに、あの人ときたら…」

「あの人って……ナビのことか？」

「他に、誰がいるつていうんですかっ！」

ミンホは怒りのあまりズリ落ちてくるメガネを指で直しながら、チョルスに向かつて捲くし立てる。

「ここの前なんか体育の授業で、あの人、バトミントンの試合に出たんですよ。そこまではいいんです、そこまでは。それが、さつさと負けて授業時間内で終わらせればいいものを、ムキになつて勝ち進みましてね、バトミントン部の熱烈な勧誘を受けたんです。そこで、あの人つてば、あらうことか学部対抗の試合に出場したんですよ。そんな目立つこと止めろって僕は何度も止めたのに、『男の約束だから』なんて言つちやつて。その上當日になつたら、僕にまで加勢しろつて言つて無理やり試合に引っ張りこんだんですよ！」

「それで？」

「優勝しちゃいましたよっ！」

頭を抱えて、ミンホが叫ぶ。

結局お前も、ナビに釣られて本気で試合しちまつたんじゃねえか、とチョルスは喉元まで出てきていた言葉を飲み込んだ。

「……お前も、大変なんだな」

チョルスは冷静沈着だと思っていた弟分の振り回されっぷりに、ナビの計り知れなさを感じた。

「ところで、チョルスヒョンの方はどうなんですか？」

ようやく落ち着きを取り戻したミンホの問いかけに、チョルスは一瞬躊躇を見せてから、重い口を開いた。

「……疑いたくはないが、今回の件には内部が噛んでる可能性大だ」「内部？」

ミンホが信じられないという目でチョルスを見つめる。

「聖水大橋ソンスティギョ あがつた死体……」

「明慶大学のウチ ノ・ミラですね！？」

素早く反応したミンホにチョルスが頷く。

「……検視結果が改ざんされてる」「つな？！」

大声を出しそになつたミンホの口に、チョルスは慌てて人差し指を当てて制する。

「証拠があるわけじゃない。だが、内部に今回の薬物事件を、隠蔽いんぺい したい動きがあるのは確かだ。俺はそれを探る」

厳しいチョルスの視線に合わせて、ミンホも神妙に頷く。その時だった。

「チョルスッ！ どこで油売ってるんだよっ？！ 早く手伝つてつ！」

店の奥から、フライパンの底をお玉で叩き鳴らしながらチョルスを呼ぶジョビンの声が聞こえてきた。

「は、はいっ！ ただいまっ！」

その途端、チョルスは弾かれたよつて背筋を伸ばして、その声に答えた。

「え？ チョルスヒヨン？」

これまで見たことの無い兄貴分の姿に、ミンホが我が目を疑う。

「悪いけど、俺はこれで」

「はあ……あの、オーサーって医者はどうしたんですか？ 彼も店を手伝つて言つてましたよね」

その途端、チョルスが目を剥いた。

「そつなんだよっ！ あの男、調子のいいこと言いやがって。一日も手伝わないで、俺だけ置いてトーンズラしやがつたっ！」

「チョルスツ！ いい加減にしろよっ！」

「はいっ！ 今すぐ行きます、オーナー様っ！」

先ほどよりも怒氣を増したジョビンの声に、チョルスは慌てて店内に駆け込んで行つた。

「……チョルスヒヨンも、大変なんですね」

先ほどまでの眼光鋭い『刑事』の顔をしていたチョルスの、情け

ない変貌振りに、ミンホは自分の境遇も重ね合わせて、深い溜息をついた。

ナビはいつものように講堂の最前列に陣取り周囲をキヨロキヨロと見回していた。

始業時間から五分程遅れて、教授が入ってくる。

「授業始めます」

胸元のピンマイクに唇を寄せて、テキストのページを指示する教授の声を、ナビは上の空で聞いていた。

今日も、ヒヨンスは欠席だった。

最初の授業に出て以来、熱心な生徒と誤解され、なぜか教授に気に入られてしまつたナビは、教授から入学してから今までのヒヨンスの様子を聞いていた。教授によると、ヒヨンスはいつも最前列の席を陣取り、入学以来どの授業も一度も欠席することなかつたと言う。ヒヨンスが主席で入学したというのも、ナビはそこで初めて知つた。

「教授つ！」

授業が終わつてから、ナビは廊下で教授を捕まえに走つた。

「おう、コン・ナビ。分からないとこりでもあつたかい？」
「いえ……あの、ヒヨンスのことなんですけど」

ナビが切り出すと、教授も心なしか顔を曇らせた。

「今日でちょうど一週間になります。教授は何か知りませんか？」

「……残念ながら、何も知らんよ。君たちの方が仲がいいんだから、何か知ついたら教えて欲しいくらいだよ」

教授も抱えた資料をもう一度抱きなおすと、溜息とともに呟いた。

「……また、あのワガママなお嬢さんで振り回されてるんじゃない
かね」

「え？」

「英米文学科のイ・ヨリだよ」

教授は眉間に縦皺を深くして、苦々しげと言つた。

「コ・ヒュンスは優秀な若者だからね。将来のためにも、あの家は
早く出た方がいい」

そう言つと、教授はナビを置いて、スタスターと歩いて行つてしまつた。

「遅くなつてすみません、ナビヒヨン」

ミンホが待ち合せをしていたカフェテリアに着くと、ナビは心ここに在らずといった表情で、クリーミーソーダのアイスをストローでグシャグシャにかき回していた。

「ナビヒヨン~」

ミンホがすぐ側まで近付いて初めて、ナビはミンホに気が付いたようだつた。

「……ああ

「どうしたんですか？ ボーツとして」

ミンホが向かいの席に腰掛けながら尋ねる。

相変わらず、やりすぎなほどに『野暮つたい』格好をしている陰で、今はカフェテリアの中でも静かにナビと話が出来るようになつていた。

「……ヒヨンス、今日も来なかつたんだ」

「ああ、そのことですか」

ナビの言葉に、ミンホも眉根を寄せる。コリをダンスパーティに誘い出すように一人だけしかけたのは、今から丁度一週間前の出来事だった。

一人に押され気味ながらも、その時のヒヨンスは、勇気を出してユリを誘つてみると、気合を入れて帰宅して行つた筈だつた。だが、それがヒヨンスの姿を見た最後になつた。

その時、カフュテリアの中に、一際華やかで賑やかな集団が入つてきた。

さつきまでその辺のテーブルを占領していたサークル仲間たちも、誰からともなくその集団のために席を立ち、場所を空ける。その中央には、中でも飛び切り目を引く少女が女王のように君臨していた。

ミンホの左目が、僅かに細められ、厳しい表情になる。

「ヒヨンスと入れ替わるよ」、あっちのお嬢さんは学校に来るようになりましたね

ナビもミンホの視線の先に目をやる。

「イ・ユリですよ」

「ヒヨンスと一緒に暮らしてゐる?」

「暮らしてると言えば暮らしてゐで間違ひはなにんでしょ」ナビ。
ヒヨンスの仕える、女王様つてところですかね」

ミンホは皮肉氣に口元を歪める。

「まあ、授業に出るつて言つたつて、その間はずつと取り巻きたちとしゃべつてるか、ネイルの手入れに忙しくて、まともに聞いちゃいませんけどね」

ミンホはユリから視線を外し、ナビに向き直つた。

「……それより、気になる」とあります

「それより？」

ミンホの何気ない一言に、ナビがピクンと反応する。

「それよりって、ヒヨンスのことより大事ってこと？」

「突つからぬいでくださいよ。そんなつもりじゃありません」

思いがけず過敏なナビの反応に、ミンホが驚きの表情を見せる。

「じゃあ、どんなつもりで言つたんだよー。」

ナビものよつこ顔を赤くして怒るナビに、ミンホは半ば呆れながら、周囲に聞かれなこよつこ声を落として言つた。

「一週間前に、聖水大橋セイヌドウカイからあがつた女子大生の遺体……」

「ああ。チラシ配つてた、あのおばさんの娘さんだろ？ 気の毒だつたね」

顔を曇らせるナビの言葉に、ミンホも頷く。

「その彼女ですが、学長の息子のハン・ガンホと付き合ついたらしいんですよ。周囲には、半ば公然の仲でした」

「ゴリは？」

「そう、だから、いわゆる三角関係つてやつです」

ミンホは更に声を潜めて、ナビに顔を近づけた。

「ノ・ミナ……該者の名前ですが、遺体があがつたその日から、コリはこれまでの分を取り戻すかのように、学校に通つてます。ガン

ホも一緒にですね。反対に、それまで欠席したためしのないヒョンス
がずっと姿を現さない」

回りくどいミンホの話に、ナビが眉を潜める。

「何が言いたいわけ？」

「……おかしいと、思いませんか？」

ミンホの分厚いメガネの奥の目が光る。

「遺体で上がった相手は、コリの恋敵。そのコリが、言いなりに出
来る相手は？」

「お前、まさかヒョンスを疑ってるの？！」

思わずガタソックとテーブルを鳴らした勢いで、ナビはクリーミムソ
ーダの入ったグラスをミンホの方へ倒してしまった。

「うわー！ 何するんですかー！」

ミンホのベージュ色のチノパンに、みるみる濃い染みが広がる。
しかし、ナビは謝ることもせず、顔を真っ赤にして言った。

「信じらんないー！ ヒョンスを疑うなんて。お前、どうかしてる
よ」

「疑うことが商売なんで」

ミンホもハンカチでチノパンの染みを必死になつて拭きながら、
言い返す。

「遺体があがると同時に、姿を消した人物がいれば、マークするの

は当たり前でしょ？」「

「ヒヨンスはそんなヤツじゃないよ！」

「何でそんなこと言い切れるんですか？ 会って間もないのに」「分かるつたら、分かるのつ！ 僕、人を見る目だけは確かだ」「あなたみたいに、勘だけでモノを言つていられたら僕らだって苦労しないんですよ」

「そうやって、誰のことも信用できないなんて、可哀相なヤツだな！ だから僕、お前のこと、キライなんだよ」

ナビの言葉に、ミンホの顔から血の気が引いた。

スウツと細められた目が、冷たい光を宿してナビを真正面から見据える。

「……キレイで結構。僕は僕の仕事をしてるだけです。最初から、あなたとは違うんだ」

「僕と違うって、どういう意味だよ？」

「雨になつたら、姿を消す。遊びでやつてるんじゃない」

ミンホは冷たく言い放つと、スッとそのまま席を立つた。

「つな？！ ちょっと、待てよっ！ おいつ！」

ナビは慌てて立ち上がつたが、ミンホは振り向きもせずにカフェテリアを出て行つた。

チツチツチツチ……

安ホテルの時計は、先ほどから耳障りな音を立てて時を刻んでいる。

ナビはこのホテルの部屋に入った初日に、大騒ぎしながら確保した窓側のベッドの上で膝を抱えて座りながら、先ほどからずっと窓の外ばかりを見つめていた。

ふと、窓から見下ろしたホテルのロビーに、彼が先ほどから探していた人物に良く似た長身の影が入って行くのが見えた。
「これは一階だから、すぐに上がつてくるのは分かっている。

「あいつ……やつとつ！」

ナビは弾かれたように立ち上がり、部屋の外に飛び出した。

「遅いよつ！ こんな時間までどこ行って……」

ナビが叫び終わる前に、階段を上がってきた男と田が合つ。
それは、ずいぶん年のいった男で、ナビが先ほどから待ちくたびれていた相手ではなかつた。

男は怪訝な顔をしながらナビの脇を通り抜け、ナビたちの部屋の二つ先の部屋を開け、中に入つて行つた。

ナビは肩を落として、自分の部屋へと引き返す。

再び舞い戻つた部屋はすっかり暗くなつており、日が暮れていくのにも気付かずに、自分が部屋の電気すら着けずに今まで過ごしていたことに気付いた。

時計の針は、もう夜の8時を回りうつとしていた。
昼間、カフェテリアでケンカ別れをしてから、ミンホがホテルに帰つて来た形跡はない。一緒に大学への潜入捜査を開始してから、およそ一週間。今までただの一度も、ミンホはナビを一人この部屋に置いておくことなどなかつた。

雨が降つたらペニーレインへ帰す その約束があつたから、ナビがホテルに戻らない日はあっても、その逆はなかつた。
普通に授業を受けている日でさえ、ミンホはいつも先にホテルに戻り、帰つてくるナビを待つつてくれた。

ブツブツ文句をいいながらも、ちゃんとナビの分のご飯も用意して。

だから、初めて経験するミンホのいない一人きりのホテルの部屋は、何だか暗く広く感じて、落ち着かなかつた。

「……ミンホの、バカッ」

ナビは拳を握り締めてそう吐き出すと、ジーンズの後ろポケットに携帯と財布だけを押し込んで、部屋を飛び出した。

地下鉄の駅を二つ乗り継いで、大学の最寄り駅で降りる。
帰宅する学生たちと逆方向に、ナビは走つた。

六限の授業もとつぐに終わつてゐる時間で、校内にほとんど人影はなかつた。開いてゐる教室や、学食の周囲を一つ一つ見て回つたが、サークルの仲間同士やら何やらの小さな集団があるだけで、ミンホの姿はどこにも見えなかつた。

「……どこに行っちゃたんだよ」

大学校内にいると決まっているわけではないが、ミンホが他に行きそうな場所など、ナビには検討もつかなかつた。

考えてみれば、ここ一週間ほど四六時中一緒に居たとは言え、ほんの一ヶ月前までは全くの知らない同士、赤の他人だつたのだ。彼自身がどういう人間なのかすらちゃんと知りはしないのに、彼の行動範囲など分かる筈もなかつた。

どうしようもなく中庭へ出ると同時に、背後でさつきまでナビがいた校舎の明かりが消えた。もう明かりが付いているのは、部室棟と図書館だけだつた。

何となく、引き寄せられるように図書館へと足を向ける。大学へ編入して来た初日、ミンホと図書館の前で交わした会話を思い出す。

『……ああ、いいですねえ』

『何が?』

『ここ。金曜日は一晩中開いてるみたいですね』

ミンホは学生課でもらつてきた利用案内に目を落としながら、本当に嬉しそうに笑つた。

『一晩中図書館について、何するのや?』

『何つて? 本を読むに決まってるじゃないですか。運動会でもしますか?』

『違うよつー。そうじゃなくてさ、一晩中読んでもの?』

『一晩でも、一晩でも、時間が許すなら、何日だって読み続けたいですよ』

その時は信じられなくて、宇宙人でも見るような感覚でミンホを見ていたと思う。だけど、黙つていれば知的な雰囲気のするミンホに、図書館は妙に似合うなと思っていたのも本当だった。悔しいから、口に出したりはしなかつたけれど。

吹き抜ける生暖かい風が、湿気を含んでナビの短くなつた髪をなぶる。

経験上、肌に当たる感触で、これは雨を連れてくる風だと分かる。だが今は、ミンホを見つけることが先だつた。

図書館の中は、花の金曜日といつことも手伝つてか、人影はまばらで静かだつた。

ナビは棚の端から顔を出し、順々にミンホの姿を探して歩きまわつた。

しばらく歩き回つて『文学・詩』の分類棚に辿り着いたとき、ナビは田端の人物を見つけて、思わず棚の隅に姿を隠した。

そこには、脚立の上に腰を下ろして、手にした本を一心に読みふけるミンホの姿があつた。

カモフラージュ用の野暮つたいメガネは、今はミンホのシャツの襟元に差し込まれている。

長い足を脚立の上に投げ出し、静かに本に田を落とすミンホの姿は、本当に完成された一枚の絵画のようだつた。端正な横顔で静かに文字を追い、長い指先がゆっくりとページを繰つている。ナビは声をかけるのも忘れて、思わずその姿に見入つていた。

「……何してるんですか？」

不意に声をかけられて、ナビが飛び上がる。

「それで、隠れてるつもりですか？」

「え？ 嘘つ？ いつから気付いてた？」

動搖するナビに、ミンホは本から田を上げて、溜息をついた。

「さつきからずっとですよ。丸見えです。それじゃあ、尾行は出来ませんね」

「……うう

棚の影から出てきて、顔を赤くして俯くナビに、ミンホは言った。

「何しに来たんですか？」

「……べ、別につ！ お前を探しに来たわけじゃないからねつ！ 本でも読もうと思つたら、たまたまお前がいただけで……」

「へえ」

ミンホは軽く鼻を鳴らして、脚立の上から窓の外を振り返った。

「でも、もう降りそうですよ。行つたらどうですか?」

ミンホの言葉に、ナビはTシャツの裾をギュッと拳で握り締めて黙つてしまつた。

「……イジワル、言つなよ」

見る見るうちに顔を赤くして消え入りそうな声で文句を言つナビを見ているうちに、頑なだつたミンホの心にも、チクリとした罪悪感が生まれた。

「……ごめんなさい」

ミンホも小さくうつ吸くと、本を抱えたまま、静かに脚立を下りてきた。

田の前を通り過ぎるミンホの後を、ナビも遠慮がちにじていく。ミンホは窓際の席に本を置いて、自分も腰を下ろした。その向かいに、ナビもチョコソと腰掛ける。

「……何、読んでたの?」

氣まずくなつたナビが先に声をかけた。ミンホは黙つて、ナビにその本を差し出した。

「……ラングストン・ヒューズ詩集『驚異の野原』?」

詩集など、読んだこともなかつた。

「お前、 じゅうじゅうのが好きなの？」

「僕が詩を好きだったら、 可笑しいですか？」

ミンホは少し赤くなつて、 プイッと横を向いた。 滅多に見せない照れた表情に、 ナビは初めて、 ミンホを少し可愛い奴だと思った。

「読んで聞かせてよ

「ええ？！」

「だつて、 詩つて読んで聞いて、 音で楽しむものでしょ？」

露骨に嫌な顔をするミンホの前で頬杖をついて、 ナビはイシシと歯を見せて笑つた。

「ほり、 早く読んで！」

「自分で読めばいいじゃ ないですか

「読めない字があるもん」

ナビはミンホの手を叩いて『早く』と催促した。 ミンホは頭を搔き鳴りながらも、 やがて諦めたのか、 渋々本の表紙を開いた。

ゆうべ 僕は

とても奇妙な夢をみたが
夢でみたのは
全く意外なことばかり

あなたが僕といつしょにいなかつた！

目をさまし
ふりかえつて
壁にむいて
眠っている

あなたに さわってみた

よくも夢が
ウソを云えるものだ！
と 云つてはみたが

あなたが全くいなかつたのだ！

（引用『驚異の野原』 ラングストン・ヒューズ詩集 齋藤忠利訳）

静かにミンホの声に耳を傾けていたナビが、不意にポシリと言つた。

「……哀しい詩だね」
「そうですね」

ミンホも頷き、本をパタンと閉じる。

「でも、この逆よつマシドショウツ」
「逆？」

「子どもの頃、昼寝してる間に、母親に黙つて買い物に出掛けられたことがあるんです。寝かしつけられる時、絶対起きるまで側にい

るよつて約束したのに。母は、僕が起きるまでに帰つてくるつもりだつたらしいんですけど、運悪く車が渋滞に巻き込まれましてね、目を覚ましたら母がいない！ 家の中にたつた一人で、外はだんだん暗くなる。結局、母が帰つてくるまで大泣きして過ごしました」

キコトンとしてミンホの話を聞いていたナビは、不意にプツと吹き出した。

「フ……アハハハハハ！ ミンホって、すつこじに甘えん坊だつたんだね」「な、何ですか？ いいじゃないですか、別に。子どもの頃の話ですよっ！」

ミンホが慌てれば慌てるほど、ナビの笑い声は大きくなる。周囲を気にしたミンホがシッと唇に手を当てるが、ナビは腹を押さえても必死に笑いの発作をおさめようと身体をピクピク震わせた。

「いたいけな子どもを、騙す大人が悪いんですよ」

悔し紛れにミンホが言つと、よつやく笑いの収まつたナビが顔を上げた。

「まあね……だけど、騙したくて騙すわけじゃないよ。やつするしかないって、時もある」「そんなイジワルしたことが？」

ミンホは反撃とばかりに片手を細めて、少し意地の悪い笑顔でナビの顔を覗き込んだ。

「ナビヒヨンは、仕掛ける側ですかね？ 小さい弟や妹がいたら、寝てる間に姿を消して、遠くからそつと様子を覗つてるとか」

いつものように小さな拳で軽く叩かれたことくらい予想していたのに、ナビは意外な反応を見せた。

「……そうだね」

ほんの少し目を伏せて、寂しそうに微笑むナビの横顔に、ミンホの心臓がドクンッと音を立てた。

まだ

普段、バカがつくくらい明るくうるさいこの人が、ごく稀に見せるこの表情。

それはいつも見間違いかと思うような一瞬の表情で、すぐに元の屈託のない笑顔に戻るが、そのギャップが、いつまでも胸に残つて何とも言えないやりきれない気分にさせられる。

「……ねえ、他の詩も読んでよ。僕、聞いてるから」

ナビは頬杖をついたまま、一叩一叩とミンホにねだる。もう、先ほどの寂しげな表情は消えている。

「僕の朗読は、高いですよ？」

悔しいから憎まれ口で返してやつても、結局最終的には、自分はナビのリクエストに答えてやるのだ、とミンホには分かつていた。この人が少しでも、いつもバカな顔で笑つていいための役に立てるのなら。

ナビは手を閉じて、静かにミンホの読む詩の世界に耳をすませていた。

「……ヒヨン？」

もう何ページ読んだだろう。

不意にミンホが顔を上げてナビを見ると、ナビは頬杖をついた姿勢のまま、静かに寝息を立てていた。

「まつたく、人に読ませるだけ読ませといて」

ミンホが苦笑してナビと向き合った瞬間、ナビの肘がガクンッと机から外れた。

「うわっー。」

驚いたのはミンホの方だった。

考えるより先に身体が動き、大きく頭から机に突つ伏すナビの顔と机の間に、自分の腕を差し入れた。

危うく机に顔面衝突するところだったナビは、ミンホの腕に支えられ、またスヤスヤと寝息を立て始めた。

「ここの状況でも起きないって、何んだけですか？」

ミンホはまだドキドキ鳴る心臓を押さえながら、無邪気な顔をして眠るナビを見た。

ナビを支えた腕に突つ伏すように自分の顎を預けて、同じ平面からナビの寝顔を見守る。眠ると、余計に幼さが増すような気がする。やはり、とても年上とは思えない。

赤ちゃん と言つたら、きっとこの人はものすごく怒るのだろうけれど。

その時、不意に窓を叩く雨の音が聞こえてミンホが視線を上げる。案の定、今夜も振り出した

「ヒョン……降つてきましたよ」

クイクイッと指先でナビの柔らかい頬を触るが、ナビが起きる気配はない。

「ヒヨン」

何度か頬を触つて、ミンホは動きを止めた。

「……今日は、いいですか？」

雨になると、いつもミンホに背を向け走つて行つてしまつナビ。ホテルで一人窓の外を見上げながら、雨が止み、ナビが帰つてくれるのを待つ自分。

ナビは自分のよつな警官ではなく、雨の日は必ず帰すと約束している以上、自分に引き止める権利はないのだ。
だが、飛ぶよつに去つていくナビをいつも見送るのは、正直氣分のいいものではなかつた。

加えてそこに『キライ』と追い討ちをかけられたものだから、ガラにもなく無性に腹が立つてしまつた。

「……僕も眠つていて、雨に気付かせんでした」

ミンホは少しきつく咳くと、腕に乗つたナビの温もりを感じながら、自分も静かに目を閉じた。

まどろみの中で、不意に誰かの歌声が聞こえてきた。

細く、小さく、囁くよつて。

明るいメロディラインとは裏腹に、少し掠れたその声は、泣いて
いるような哀切な響きを帯びていた。

どこかで聞いた歌だ

そう思いながら、ミンホは眠りの底へと落ちていた。

ソウルを南北に流れる漢江ハンガンは、ソウルに住む人々の水源となつて、いるだけでなく、夜になればライトアップされた美しい姿を披露し、海外から訪れる旅行客に対して、重要な観光地としての役割を果たしている。

商業や観光、生活の拠点としての美しく豊かな姿が表の顔ならば、その清流の下を流れ、濁の浮いた汚水を湛えた姿も裏の顔として持ち合わせている。

漢江の川岸に並び立つ貨物倉庫の影で、男は先ほどからイライラと煙草に火を点けては消しを繰り返し、待ち合せ場所に現れるはずの男を待っていた。男の足元には、既に吸殻の山が築かれている。

「悪い、遅くなつたな」

その時ようやく、長い影を従えた待ち人が現れた。煙草を咥えていた男は怒鳴り倒したい気持ちをグッと抑え、早くどこからも姿を見られない自分の側へ来るよう手招きした。

「約束の時間、一時間以上過ぎてるぞっ！」

「そんなに、怒るなよ。オベンキョして遅くなつたのよ。学生の本分は勉強だろ？」

「当直を抜け出して来てるんだぞっ！ 戻るのが遅かつたら怪しまれるだろ？」

悪びれる様子もない男の襟首を掴み、煙草の男は声を荒げた。

「それより、ハイ。例のもの、出してよ」

男はおどけた調子で手を差し出す。煙草の男は懇々しげに舌打ちして、男の手の上にいくつもの紙包みが入ったビニール袋を置いた。

「こつもじいわも」

男はヒヒヒツと嫌な笑いを零して、捲りあげたTシャツの中、デニムのウエストに無理やり袋を捻じ込んだ。

「いい加減にしておけよ、ガンホ。死人まで出したんじゃ、もう底にきれない」

「薬物反応出なかつたんだう？」

不適に笑う男に、煙草の男はついに激高して言った。

「出なかつたんじやないつ！ 出なかつたんだ！ いつまでも、こんなこと続けられないからな」

「はいはい、用心しますよ。つたぐ、相変わらず小心者だな」

そう言つと、男はケラケラ笑いながら、煙草の男の胸を叩いた。

*

「……おかしい」

「何が？」

「うわつ……」

「ちょっと、あんた何やつてるのよつー」

チョルスとクムジヤの悲鳴が同時に狭い資料室の中で交錯する。朝からこの部屋に籠もりっぱなしだったチョルスを心配したクムジヤが、「コーヒーを持って現れ、背後から覗き込んだ瞬間、飛び上がったチョルスの肩とコーヒーを持ったクムジヤの右手がぶつかった。

「熱つ！ 姉さん、熱いよつ！」

「あんたが突然動くのが悪いのよ」

「いるなら、いるつて言ってくださいよ。突然背後に回つこまれたら、怖いじゃないですかっ！」

ギヤー、ギヤー言いながら、チョルスはクムジヤが差し出したおしおりで、コーヒーで汚れてしまったワイシャツを拭いた。

「朝から一体、何調べてるの？」

ようやく落ち着いて、チョルスが叩いていたパソコン画面をクムジヤが覗き込む。

「ああ……ソン先輩と上げたヤマを、もう一度洗い直してるんですよ。一ヶ月前の、あの一斉摘発の記録ね」

「おかしいって、何のこと？」

チョルスはマウスをクリックし、クムジヤの前に新たな画面を開させた。

「……こい。摘発で押収した、ヤクのグラム数。こんなモンじゃなかつたはずだ」

クムジヤはチョルスの横に椅子を引つ張ってきて腰を下ろし、チョルスの話に真剣に耳を傾ける。

「俺が先輩と、廃講堂の乱交パーティーに乗り込んだ時、ざつと数えても二十人以上の学生がいた。そん中でも、しおつ引いた時に自分でヤクを持つてた奴は、半分以上だ。それなのに、押収したことになっているヤクは、俺と先輩の目算の三分の一もない。残りは、どこに消えちまつた？」

クムジヤも画面上のデータの数値に目を通しながら、厳しい表情でチョルスを見る。

「俺たちだけじゃない。あの夜摘発に参加した他のチームが上げてきたヤクの数値だって、おかしなもんばかりだ」

チョルスは無意識に親指の爪を噛みながら、パソコン画面を睨みつける。

「押収した証拠品を好きにできるなんて、内部の人間だけだ」

「ちょっと、チョルス！　滅多なこと言わないでよ。誰に聞かれてるかも分からぬのに」

クムジヤは慌てて、声を潜めながらチョルスの胸を叩く。

「だから、人目を忍んで慎重にやつてるんです。怪しい人間を絞り込むためには」

「怪しい人間？」

チョルスはマウスをクリックして、ほぼ白紙に近いページを表示させた。

「今回の摘発で、唯一シロだった。一人のヤク中も洗い出せなかつた大学」

「…………あ…………もしかして、明慶大学？」

恐る恐る尋ねるクムジャに、チョルスが頷く。

「過去にも一度だけ、明慶に同じように捜査が入つてゐる。それを見つけ出すのに苦労しましたよ」

チョルスが噛んでいた爪をようやく唇から離して、隣りに置いた塗れのデスクトップパソコンのキーを押す。ウィーンと低い唸り声を上げた旧式のパソコンは、ヤーブ状態の暗い画面から静かに目を覚ました。

「九年前、明慶に在学してた院生の変死体が漢江の河口で発見された。だけど、そもそも死後の遺体の損傷が激しすぎて、まともな検視は行えなかつた。それなのに、死因は持病によつて起こつた心臓麻痺の末、河口に転落しての事故死として発表されてゐる。秘密裏に入つた検査でも、明慶の学生間での薬物使用はシロ」

クムジャがゴクリと唾を飲む。

「検視結果を記した書類も、どこにも残つてない。保存年限が過ぎてないにも関わらず、です」

クムジャに向かつて、チョルスはゆっくりと頷いて見せる。

「そつ。最近、よく似た事件が起つきましたよね」

チョルスはデスクトップの画面に指を突きつけた。

「当時行われた捜査の、担当捜査官の名前が載つてゐる」

そして、続けてクムジャの前で開きっぱなしにしていたノートパソコンのキーボードを忙しなくクリックして、乱暴にデスクトップの側に、手にしたノートの画面を並べて見せた。

「今回の、一斉摘発で明慶を担当した捜査官」

チョルスの目がギラリと光り、クムジャを捕らえる。

「両方に入つてるのは、ホン・サンギョ捜査官だけだ」

次の言葉を紡げずにいるクムジャの隣りで、チョルスは厳しい顔でパソコン画面を睨みつけていた。

終業のベルとともに校舎から吐き出されて来た学生で、中庭はごつた返していた。

ナビはミンホとの待ち合わせ場所であるいつもカフュテリアに向かって歩いて行く途中で、不意に見覚えのあるヒョロッジと細長い華奢な背中を見つけた。

「ヒョーンスッ！」

ナビは叫んで、その背中を追つた。

「ヒョーンスッ！ 待つてよ、何で逃げるの？」

ナビは息を切らしながら必死で追いかけ、その手首を掴んだ。

「……一週間も休んで、一体どうしたんだよ？ 心配したんだよ」「ちよつと……忙しかったんだ

ヒョーンスは故意にナビから田を逸らす。ちよつと見ない間に、随分顔色も悪くなり、やつれてしまつたようだつた。

「具合悪そうだよ？ 大丈夫なの？」

「……ナビ、ごめん。僕、急がなきゃいけないから」

そう言って、ナビの腕を振りほどいてもがく。

その時だった。

ヒヨンスが不意に動きを止めた。

「コリッ！」

ナビの肩越しに見つけたその人影に向かって、ヒヨンスは叫んだ。

「え？ ちょっと、ヒヨンス？」

ナビが止める間もなく、ヒヨンスは匕首を握り分け、コリの元へ走り出した。

「コリッ！ 家に帰る約束だろ？ あの時、ちゃんと約束しただろ？ まだ、ガンホのところへ？」

「ちよつ！ 離してよつ！ みんな見てるでしょ。みつともないわね」

ヒヨンスに腕を掴まれたコリは、金切り声を上げながら身を捩る。ヒヨンスはコリの腕を掴み、湿度も高くだいぶ蒸し暑くなっているのに、長袖を着込んだコリの腕を無理やり捲くつた。

「……これ
「やめてよつ！」

コリは叫んで、ヒヨンスの腕を振りほどくと、素早く袖を下ろした。

「あの時、約束したはずだよ。もう止めるつて。家にむちゅんと帰つてくれるつて」

ヒョウンスはゴロの肩を掴み、声を落として言つた。

「……だから、俺……」

「よお、どうした？ 親友」

その時、ガンホが入ごみの中から顔を出し、ヒョウンスの手からコリを奪つた。

「ちゃんと学校には来なきゃダメだぜ。なあ？」

ガンホはヒョウンスの肩をドスンッと拳で一つ強く殴ると、ゴリの背中を抱いて背を向けた。

「ヒョウンス……大丈夫？」

駆け寄ってきたナビに、ヒョウンスは力なく笑つて見せた。

「ごめん、ナビ。俺、もう行くね」

「ヒョウンスッ！」

そう言つと、ヒョウンスは早足に入ごみの中へと消えていった。

＊＊＊

断末魔の叫びとは、じつはいた声のことを言つのだらうか。
何度も聞いても慣れることがない。

聞いているこちらの方が気が変になりそうな叫び声に顔を歪めながら、チョルスは廃材置き場の腐った床を踏み抜かないように注意

しつつ、ジーピンに持たされた弁当をドアの前に置いた。

わざわざこの場から逃げ出そとクルリと方向転換した時、不意に田の前のドアが開いて、中から汗でドロドロになつた上半身裸のオーサーが顔を出した。

「……オマフリさん、待つて……水

せうじつと同時に、チョルスの腕の中に倒れこみで来る。

「おお……おこ、大丈夫かよ?」

慌てて支えたチョルスの腕の中で、オーサーは差し出されたネラルウォーターをゴクゴクと一気に飲み干した。

「……何か、尋常じやないくらい消耗してないか?」

水を飲み干しよがへへ息ついたオーサーが、口元を手の甲で拭いながら皮肉気に笑う。

「そりや、消耗もするでしょ。夢のリゾート地、チヨシユニア済州島から帰つて来た途端に、休む間もなく、あの麗しのオーナー様にこんなにこき使われてるんだから」

「お前、それを言つなら俺の方がよっぽど痛い目に合つてるんだぞ。お前がトンズラしてゐる間に、俺がどれだけジーピンに……」

「言しながら、一一一週間ばかりの『ペニーレイン』において、ジーピンから受けた地獄のシバキの数々を思い出し、チョルスは思わず身震いした。

「悪かつたつて言つてるでしょ。だから、ひやんとお土産も買って

来たじやない

「あんな趣味の悪いアロハ、どこで着ろつてんだ？」

「えー？ オマワリさんのお普段着よつよつぽどいい趣味だと思つんだけどお」

不服そつに口を尖らせるオーサーを、一瞬本氣で殴つてやるうかと拳を振り上げかけたが、減らず口を叩きながら未だ肩で息をしているオーサーを見て、チョルスはグッと涙を呞んだ。

「ねえオマワリさん、ちょっとこれ見てよ

オーサーはポケットから、小さな紙包みを取り出してチョルスの前で床に広げた。

「今、あそここの部屋で寝てる子が持つてたモンなんだけど、分かる？」

そう言つて、親指と人差し指で白くザラザラした粉を掬つて、その粉末を空中に散らす。

「混ぜモンの割合が、増えてんの。最初のヤク中の学生が持つてたモンより、更に混合物増やしてカサを増して、量産してるんだろうな

「……誰が？」

チョルスの問いに、オーサーはきょとんとチョルスを見つめ返す。そして、ニッコリと微笑んだ。

「誰つて……それは、オマワリさんが一番良く知ってるんじゃない？」

チョルスは思わず舌打ちする。
見透かしてやがる。
そう思った。

「その、オマワリさんってのいい加減やめる」

チョルスが不機嫌を丸出してそのままつぶつぶ、オーサーは可笑しそうにクスクス笑った。

「はーい。じゃあ、チョルス？ これでいい？
「本当に、食えない奴だね。お前つて」

チョルスが苦々しい顔をすればするほど、オーサーは楽しげにつまでも笑っていた。

「13号、面会だ。出る」

拘置所の床と同じだけの冷たく固い声でそう呼ばれ、お情け程度の背の低い目隠ししかない、剥き出しになつたトイレの横にうすくまつていたコ・ジョンヒョンは、力なく顔を上げた。

面会？

会いに来るような親もない。

友人と呼べる者は皆ヤクザ者ばかりで、頼まれたつて警察に出向くような奴らではない。

一体誰が？ 不審に思いながらも、一度目は更に冷たさを増した看守の声に促され、ジョンヒョンはノロノロと腰を上げた。

「15分だ。時間になつたら、合図するからな」

「ここまで移送される間にはめられた手錠の鍵を外しながら、看守は素つ気なくそう告げる。

肩を押されて初めて入つた面会室では、透明ガラスの向こうに、野球帽を頭深に被つた見知らぬ男が立つていた。

灰色の囚人服を着たまま、ゆっくりとガラス一枚を隔てた男の元に近づいていくと、ジョンヒョンは改めて首を傾げた。

「……あの、どこかでお会いしましたか？」

室内だと叫づの間に、野球帽に合わせて大きなサングラスまでかけた男の表情は良く見えず、何の目的があつて、こんなところまで自分に会いに来たのかが分からなかつた。

「座れ」

低い声で命じられ、じこ何日かの拘置所暮らしで、自分でも情けないと思いつつすっかり板に付いてしまつた従順な服従姿勢で、ジョンヒョンはガラスの前の椅子に腰を下ろした。

「……あの
「俺が、分からぬいか?」

サングラスをほんの少しだけずらすと、男はその影からジョンヒョンに向かつて、鋭い一瞥をくれる。

「……つあー」

思わず声を上げそうになるジョンヒョンを威嚇するよつて、男はガラス戸を拳でドンッと叩いた。

「どうした?ー」

部屋の外から看守が叫ぶ。

「何でもありません。僕が、ぶつかっただけです」

慌ててそう叫ぶと、ジョンヒョンは改めて男に向か合つた。

「ペク・ギョウン。どうして?」

ガラスの向こうでは、苛立たしげに顔を瞞みながら、ジョンヒョンを睨みつけているギョウンの顔があった。

「先生からの伝言だ」

ギョウンは声を潜めて、ガラスに顔を寄せた。人差し指をクイックで、ジョンヒョンにも顔を近付けるように無言で指示を出す。

「……先生って、『ペニー・レイン』のオーサー・リー？」

「“さん”を付けろよ。礼儀知らずだな」

再びギョウンに怒鳴られ、ジョンヒョンは縮こまる。

「『もうすぐ、ビックイベント』が起こって、この事件は解決する。そしたら真っ直ぐ済州島チヨジュドへ行くといい。もしまだあの娘が、君のお姫様だと思つなら』だとよ」

オーサーの甘い口調を無粋な棒読みでレコーダーの様に再生し終わると、ギョウンはわざと席を立つた。

「ま、待つて！ ビックイベントって何？ ジスクは今、済州島チヨジュドにいるの？」

「知るか！ 言つただろ。俺は先生の言葉を伝えに来ただけだ」

ギョウンはにべもなくそつと放つと、立ち上がりガラスに縋るジョンヒョンに背を向ける。

だが、ふと思いつて振り返った。

「看守、呼ばないのか？」

「え？」

聞かれている意味が分からなくて、ジヨンヒョンはキヨトンとした顔でギョウンを見つめる。

「俺はお尋ね者なんだぜ。お前を置いて、さつさと逃げた。なのにマヌケにも、自分からノロノロの監獄に来てやつたんだ。チャンスだろ？ ドアの向こうの看守に言つてやれよ。『早く捕まえろ』つて」

小鼻を膨らませ、自棄になつたように舌打ちするギョウンに、ジョンヒョンは哀しげに首を横に振つた。

「そんなこと、しないよ

「何でだよ？」

「……君まで捕まつたら、完全にジスクへ繋がる道が絶たれるから」

ジョンヒョンの言葉に、ギョウンは盛大に舌打ちした。

（あの坊やを見てられなかつたんでしょう？ 今の自分を見てるみたいで、イライラして苛めたくなつた？）

チエジュー
濟州島での、オーサーの言葉を思い出す。

悔しいけれど、図星だった。

愚鈍なほどの一途さと執着は、田を背けたかつたギョウンの内面そのものだった。

「お前の女でもないのに」

「……関係ないよ。僕が好きで、ジスクを助けたい、それだけだか

「マヌケ野郎」

そう吐き捨てて、ギョウンは野球帽を被り直すと、今度こそ振り向かずに面会室を出て行った。

俺があの時、今あいつのよつてミラを想つていたら、ミラは死なずに済んだのか？

“俺の女”でなくなつたミラを恨んで酒に溺れていたあの時に、つまらないプライドなど捨てて、ただミラを助けるためだけに行動していました。

あいつはガンホから離れて、クスリで命を落とすこともなかつたのか。

「チクショウツ！」

終わりの無い自問は自分自身へのやりきれない悔恨の情に変わり、ギョウンは思い切り拘置所の床を蹴つた。

廊下ですれ違つた面会人の老夫婦が、そんなギョウンを見てビクツと身を縮める。

顔が割れているのだから、拘置所内で目立つ真似はするな

出発間際にそう釘をさされたオーサーの言葉を思い出し、ギョウンは老夫婦から顔を背けて、足早に拘置所を後にした。

「焼酎と、チャンジャ塩辛」

「俺にも、同じのね」

立ち並ぶ屋台の暖簾を捲つて腰を下ろした中年男の隣りに、チョ

ルスは有無を言わさず滑り込んだ。

ギョッとして振り返つた男に、チョルスはニッコリと微笑んで見

せた。

「お疲れ様です、ホン・サンギョ警査」

「お前……」

「捜査課の、チャン・チョルス警査です」

そう言つて、敬礼のポーズを取る。

「（）一緒にも？」

もう片足は椅子の上に乗せていて、断らせない体勢だったが、慇
懃無礼にそう申し出る。

「……ああ、別に。構わんよ」

サンギョは警戒しながらも、強硬に断る理由もないのに、チョル
スの着席を許した。

「「の前は、お疲れ様でした」

「「の前？」

チョルスは「の前に出された焼酎のビンを掴むと、空になつたサンギョのグラスに勝手に注ぎ、次いで自分のグラスも満たした。その挙句に、まだ手に取つてもいないサンギョのグラスにぶつけて、勝手に乾杯の音頭を取る。

「くはーつ！ 美味いつ！」

喉を焼きながら落ちていく度数の高い酒に唸り声を上げながら、心底美味そうに「の」をつぶる。

「重労働した後は、焼酎に限りますよね。この前の一斉捜査が上がつた後の酒も、美味かつたなあ」

「ねえ？」と、同意を求めるチョルスの「の」を、サンギョは初めて警戒の色を込めて見つめ返した。

「大変でしたよ。俺らが入つた聖智大学はね、お上品なオツムからは想像できないくらい、破廉恥にトンでる学生が多くてね。半裸のアホどもが、拘置所の中に入りきらないくらいだったんですから。それに引き換え……」

「はい、お待ち！」

話の途中で頼んでいたツマミの「の」が出されると、チョルスは歓声を上げた。

「俺、こののチャンジャ大好物なんですよ。いい鱈使つてるのが分かるでしょ？「の」の「リ」の歯「の」たえ、堪らないなあ。先輩も、ほ

「…………」

「…………ああ」

美味そうにシマミを頬張つては、早いペースで焼酎をグイグイと空けていく。

「で、何の話でしたっけ？」

「拘置所に入りきらない逮捕者の話」

「ああ、そうそう」

チョルスはパシンと自分の額を打つて、舌を出した。

「話した傍から、すぐ忘れていけねえや。学生のオツムを云々と言えませんね。それに比べて、先輩が潜入した明慶は、さすがですよねえ。唯一、シロだったんですから。先輩にしてみりや、とんだ無駄足でしたね」

「…………医者と警察は、ヒマなのに越したことないって、昔から言ひつけたんだろ」

「違ひないです」

チョルスは豪快に笑つて、またサンギョのグラスに自分のグラスをぶつけた。

「じゃあ、先輩はかなりツイてる方ですね」

「何でだよ？」

「だって、先輩…………九年前も、入つてますよね？」明慶に

その途端、サンギョの皿の色が変わった。

「…………お前、何でそんなこと」

「俺、捜査課の人間ですよ？」

チョルスは、サンギョの肩を馴れ馴れしく抱いて、顔を近づけた。

「……いえ、なに。たまたまですよ。たまたま昔の資料洗つてたら、あんたの名前見つけましてね。ほお、同じ警察官の中にも、俺みたいな貧乏くじを引く奴と、捜査するところと、全部クリーンなラツキーガイもいるんだと、世の不条理を嘆いてみたわけですよ」

立ち上がろうとするサンギョの肩を、チョルスは無言で強く押さえつける。

「俺、本当はあの捜査の後、焼酎なんか飲んじやいないです。捕まえたガキの一人が、俺の上官を刺しやがりましたね。署内は騒然だつたんです。せつかく明慶に潜入しても、一人もアゲる学生がないなかつた先輩は、あの後、どうしました？ 手が回らない俺らの代わりに、アゲた証拠品のヤクの処理は、あんたたちがやってくれたんですよね」

チョルスは不意に、サンギョの肩に回していた手を、そのままサンギョの胸元に滑らせた。

「何するんだ、お前つー！」

顔を真つ赤にして慌てるサンギョに構わず、チョルスはサンギョの胸ポケットから束になつたウォン紙幣を引きすりだした。

「こんなところでも、差がつくんだから嫌になつちまうなあ

チョルスはワザとらしく溜息をついて、サンギョの肩を抱いたま

ま紙幣を数え始めた。

「先輩は、羽振り良さそうですねえ。俺みたいなボンクラと違つて、眞面目にお仕事してる証拠なんでしょうねえ。先輩にしか出来ない大きな仕事をね」

「お前、一体、何が言いたい?」

イライラし始めてきたサンギョが、チョルスを睨みつける。

「教えてくださいよ、先輩。俺だつて、重労働安月給に、いい加減嫌気が差してんのだ」

サンギョの目が血走るほどに、チョルスの笑みは深くなる。

「……例えば、そつだな。書類の改ざんとか? 情報の漏洩とか?」「つな! お前……」

ガタツと音を立てて立ち上がったサンギョの前で、チョルスはゲラゲラと笑い出した。

「冗談ですよ、先輩! 酔つ払いの戯言です。本気にしましたあ?」「不愉快だつ! 帰るつ!」

サンギョはそう叫ぶと、屋台の椅子を蹴り飛ばして夜の闇の中に消えた。相当狼狽したのか、チョルスが先ほど胸ポケットから拝借したウォン紙幣を、そつくりそのままテーブルの上に残していた。

「親父さん、お勘定ね」

チョルスはその中から一枚抜き取ると、涼しい顔で屋台のテーブ

ルの上にそれを置いた。

*

暗い路地裏に飛び込んだサンギョは、落ち着きなく周囲をキョロキョロと見回すと、携帯電話を取り出した。震える手で番号を押す。

長々と鳴り続ける呼び出し音に、苛立ちながら歯を噛む。

『……何だ？』

ようやく応答した電話の向こうの相手に、サンギョは歯み付くよう叫んだ。

「追われてるんだっ！ 狂犬に『狂犬？』

一瞬、クスリと笑いを含んだ声に、サンギョはカツとなつた。

「捜査課のチャン・チョルスだよっ！ 分かってるだろ？！

だが、上擦るサンギョの声とは違い、電話の相手は冷静だった。

『落ち着け。何があつた？』

「カマかけてきやがつたんだ。絶対、感づいてる。俺たちのこと…

…

『俺たち……ね』

電話の声は、今度はハッキリと嘲笑の色を滲ませて呴いた。

『俺とお前の関係まで、気付いてるとは思えないが
「ふざけるなよっ！ 俺は、捨て駒か？」
『まさか！ 俺とお前は運命共同体だよ。昔から……決まってるじ
やないか』

電話の相手は、大げさに驚いてみせる。

「明慶だけに捜査情報流したこと、あいつは掴んでるんだ」
『そりやか？ さつき自分で言つたじゃないか。カマかけてきてる
つて。それだけだよ。証拠なんか掴んでいない。うるたえるお前の
反応を見ていただけだ』

熱くなるサンギョに応えて、電話の相手は今度はなだめるような
猫撫で声を出した。

『心配しなくとも、あいつは何も出来やしない。それより、お前に
はまだ大きな仕事が残ってるだろ？』

携帯を持つサンギョの肩がピクリと動く。

それをどこかで見ているかのようだ、電話の声は満足そうに笑つ
て言った。

『期待してるよ。パーティが楽しみだ』

大学の構内は、いよいよ三日後に迫った学内ダンスパーティの準備で活気づいている。ここ数日は、課業になると、大看板の制作に取り掛かる学生が金槌を振り下ろす音や、パーティの合間に余興として披露される学生バンドの音楽などが、暗くなるまで続いていた。

ナビは中庭のベンチに座って、慌しく働く学生たちの姿を眺めていた。

「ナビヒョウン？」

その時、ナビの前を通り過ぎて行った長身の男が、そのまま後ろ向きで戻ってきた。

「……何だ、ミンホか」

ナビはまどろか虚ろな目をしたまま、その男を見上げた。

「ダサすぎで、気付かなかつた」

無表情で見つめる先には、最近ではすっかり『野暮つたさ』が板に着き、もはや美男子の面影を完全に捨て去ったミンホが立っていた。

今日の彼は、緑色の大きなナップザックを背負い、よれよれのTシャツにカーキ色のハーフパンツ、足元は素足にビーチサンダル、

そしていつもかけている牛乳瓶の底メガネという、いでたちだった。

「仕方ないでしょ。僕は血を見たくありませんから」

「血?」

キヨトーンとするナビに、ミンホは自分の背後を親指で差し示した。

「あれですよ、あれ」

それは、製作途中の大看板だった。バンダナで髪をまとめた女子学生が、手に大きな刷毛を持ち、黒いペンキで文字を入れている。

ラストダンスは、あなたと

文字は、そう読めた。

「この学校に伝わるジンクスらしいですよ。ラストダンスで踊ったカップルは、結ばれるって言つて……」

そう言えば、以前ヒョーンスも同じようなことを言つていた気がする。

「それが何で、血を見ることになるわけ?」

察しの悪いナビに、ミンホは深い溜息をつく。

「ラストダンスって、一曲ですよね?」

「ラストって言つぐらいだからね」

何を当然なことをと、ナビは呆れた顔をする。

「一曲つひことは、相手は一人しか選べないってことですね」

「まあ、そうだよね」

「選ばれる者、選ばれざる者。争いは、避けられません」

ミンホが再び、深い溜息を吐いたところで、ようやくナビは気がついた。

しかし、答えが分かつて呟いた顔はほんの一瞬で、すぐにムスツと頬を膨らませた。

「……フンだ。モテる男は辛いね」

「何ですか、ナビヒヨン。元気のない原因はそれですか？ いつもバカみたいにうるさいくて、百メートル先からでも嫌でも田に入る自己主張の強いあなたが、さつきは完全に気配を消してボーッとしてたから、思わず気付かずに通り過ぎてしましましたけど。具合でも悪いのかと思つたら、相手がいなくて拗ねてたんですね」

「つな？！ 違うよつ！」

訳知り顔のミンホに、ナビは顔を真っ赤にして抵抗する。

「ちょっとと考え事してただけだよ。ダンスパーティーのことなんか、忘れてたよ」

「考え事？」

黙りこんでいてもその表情から、ミンホにはナビの考えてこらむことが手に取るように分かった。

「……ヒヨンスのことですね？」

ナビは曖昧に首を傾げながら、ブラブラとベンチに腰掛けた足を

揺らした。

「尊をすれば、ですよ」

ミンホはそう言って、ナビの背後へ顎をしゃくった。

「さつきのあなた以上に、浮かない顔ですね」

ナビが顔を上げて振り向くと、そこにはこの中庭で別れて以来、久しぶりに見るヒョンスの姿があった。

「ヒョンスッ！」

ナビは立ち上がり、背中を丸めて歩くヒョンスの元へ走り出した

「……ナビ」

ヒョンスはナビたちに気がつくと、気まずそうな顔をして一瞬逃げる体勢を取つたが、駆け寄つた勢いのまま抱きつくように肩を押さえるナビと、その後を追つてきたミンホにさりげなく退路を絶たれ、その場に留まらざるを得なかつた。

「ねえ、ヒョンス。本当に大丈夫なの？」

「……何が？」

「」の前学校に来た時から、何か変だよ？　コリとはあれからちゃんと話せたの？」

真正面から自分を見据える真つ直ぐなナビの顔に、ヒョンスは居心地悪そうに顔を背けた。

「何か悩んでる」とがあるなら、話してよ。力になれるかもしれない

い

「……何も、ないよ」

せう^{シウ}つい^{ツイ}に逸^{アハハ}した視線の先には、ミンホの田^{ミタ}があった。

「恋の悩みですかね？」

ミンホの視線には、ナビとは違い、見透かすよ^シうな冷たさがあつた。

「あのお嬢さんに関わること……せう^{シウ}ですよ^シね。」

本当に言いたいことは別にあると、暗に仄めかされているのがヒヨンスには分かつた。

「……何、言つて……」

どう逃れようか、そんなことに頭を巡らせ始めた時、横から場違いな声が降つてきた。

「なんだ！ せう^{シウ}つ^{ツイ}とか」

素つ頓狂な明るさを含んだ声に、ヒヨンスと一緒にミンホも啞然とじてナビを振り返る。

「ユリをラストダンスに誘えなくて、しょげてるんだ。せう^{シウ}でしょ

？」

「へ？」

「はあ？！」

ナビの言葉に、ほぼ同時に一人は呆れた声をあげた。

「水臭いな。言つてくれれば、もつと早く協力したのに。だつて、ジンクスなんでしょう？ ラストダンスで踊つたカツプルは結ばれのつて。こんなチャンス逃す手はないよー。ガンホからユリを取り返さなくちゃ」

呆気に取られている一人にはお構い無しに、ナビは勝手に乗り気になつて、黒目勝ちな目をキラキラと輝かせる。

「ね？ お前もそう思うだろ。ミンホ」
「え？ ああ……まあ」

同意を求められたミンホが、勢いに押され、顔を引き攣らせながらも渋々頷く。

「僕に任せて、ヒヨンス。絶対ユリが、君とダンスを踊りたくなるようにしてあげるから」
「え？ あの……えつと……」
「こうしちゃいられない。じゃあね、ヒヨンス。期待して待つてー！」

ナビはそう言い残すと、クルリと背を向けて全速力で駆け出して行つた。

「ちよつとつー！ ナビヒヨンッー！」

慌てたミンホが追いかけようとした時には、既にナビの背中は米粒大まで小さく遠ざかっていた。

「すみません、僕もこれで。あの人、放つておくと何をしでかすか分からんんで」

ずり落ちてくる眼鏡をクイッと引き上げて、ミンホも背中のナップザックを揺らしながら駆け出していく。

嵐のような二人を、残された当のヒョ়ンスだけが、ただ呆然と見送っていた。

肩で息をしながら、ミンホはよつやくホテルの部屋の前に辿り着いた。

目の前で地下鉄の電車のドアが閉まり、無常にもあと一歩のところにナビに追いつけなかつた。

次の電車が来るなり飛び乗つて、駅から全速力でホテルまで走つてせいで、目の前が酸欠でチカチカしている。

よひめきながら部屋のドアノブに手をかけた途端、思い切り戸が内側に開いて、バランスを崩したミンホは部屋の中へ倒れこんだ。

「あれ？ 何だ、お前も帰つてたの？」

足元に転がるミンホを見下ろして、ナビはキョトンとした表情を浮かべる。

華奢な両肩には、どこへ旅行に行くのか？ と問いたくなるような大ぶりのショルダーバッグが下がつている。

「……帰つてたの？ ジヤないですよ……あなた、今度は一体何をしでかす気なんですか？」

息も絶え絶えになりながら、ミンホはナビを見上げる。

「ふふふ、ちよつとね。恋のキューピッドヤツ？」

手をグーの形にして口元に当て、肩を竦めるナビは可愛らしくは

あつたが、ミンホには、浅はかさ加減に關しては自分の想像の域をはるかに超えたこの男が、その小さなオシムで何を企んでいるのか、恐ろしいばかりだった。

「ねえ、コリの取り巻きたちが入り浸つてるクラブの名前つて、“ソメチメス”でいいの？」

「は？」

理解の範疇を超えすぎで、とつとつ[手]田語までしゃべり始めたのか、ミンホは一瞬本氣でそう思った。

「ほり、これ。“ソメチメス”」

そう言って、幼く拙い字で書き[手]された英字のメモを、倒れているミンホの目の前に晒す。

そこにには、“sometimes”と書かれていた。

「“サムタイムス”でしょ！ あなた、こんな簡単な英語も読めないんですか！？」

心底衝撃を受けて叫ぶと、ナビは耳の後ろを搔いて聞こえない通りをした。

「ちよつと、ナビヒヨン。あなた、ビードーの店の名前を？ もては、僕の調査資料、勝手に読みましたね？」

「あてと、そろそろ行かないとなあ

「ちよつと待て！」

「じゃね、ミンホ。今夜は遅くなるけど、心配しないで」

スチヤツと敬礼のポーズを取るなり、猫のよつてドアの隙間をす

り抜けていく。咄嗟に、目の前にあつた細いジーンズの足を掴もつと伸ばしたミンホの腕が、虚しく空を搔いた。

「ナビヒョணッ！」

ホテルの廊下に、ミンホの悲痛な叫びがこだました。

＊＊＊

夜更けと共に盛り上がりを見せる地下のクラブの入り口に立った黒服は、近づいてくる異様ないでたちの女に、職務を忘れて思わずアングリと口を開けた。

戦闘服のような、厚い肩パットの入った濃いピンクのド派手なボディコンスーツを着込み、クネクネと腰を振つてシナをつくりながら歩いてくる。

肩まで真っ直ぐに伸びた髪を気取つた仕草で後方にかきあげながら、女は黒服に向かつて、ウインクを投げた。

パツンと一直線に切られた厚い前髪の下から見え隠れする眉毛は太く濃く、真っ赤なルージュと相まって、まるでハ〇年代のディスコ全盛の時代からタイムスリップして来たように見える。呆気に取られたまま思わず入口を通しそうになつた時、黒服はハツと我に返つた。

「ちょっと、困ります」

「え？」

女はなぜ自分が止められたのか分からぬといつた様子で、怪訝な顔で黒服を見上げる。近くで見ると、その化粧はより強烈だった。

「誰かの紹介が？」 ここは会員制だから、初めての客はお断りなんですよ」

「あんた、本気で言つてんの？」

裏声のような妙なソプラノの掠れた声が、黒服に向かつて抗議する。

「まさか、アタシを知らないの？ “明慶大のダンシング・クイーン” の、このアタシを？」

「……ダンシング・クイーン？」

今時そんな通り名があるものか。

もしかしたら、頭が少々イカれた女なのではないか？ 黒服が別の意味で薄気味悪くなっているところへ、女とは180度異なる、今ドキの女子学生の集団がタクシーから続けざまに降りて来た。

「ちょっと、何してんのよ」

「邪魔よ。入れないじゃない」

少女たちは、店の入口で押し問答しているこの妙な女と黒服に向かつて、口々に文句を言つた。

「すみません。どうぞ、お入りください」

黒服はすぐに脇に避けて、顔パサラしい彼女たちのために道を開ける。

ボディコン女は囁々しくも、彼女たちの後に続いて何食わぬ顔で入つて行こうとする。

「だから、あんたはダメだつて！」

「アタシを通さないなんて、このクラブの恥になるわよ」

「何なのよ！」の女？」

鼓膜を刺激する女のソブリノに反応して、地下への階段を下りかけていた少女たちが振り返る。

「さつきから、困ってるんですよ。“明慶大のダンシング・クイーン”だそうで」

「明慶大？ こんな女見たことないわよ」

見たら絶対、覚えてる。

そう言つて鼻で笑う少女に、周囲も追随して嘲笑の輪が広がる。

「これだから、モグリは困るのよ」

「……モグリ？」

使う言葉がいちいち古めかしい。

それを、女は何よりもイケていると勘違いしていそうな様子が痛々しいほどだ。

「あんたたち、イ・ヨリは知ってるでしょ？」

女の言葉に、少女たちの顔色が変わる。

「私はヨリの親友よ。^{チング}ヨリの親友を追い出したつてバレたら、後でどうなるかしらね？」

少女たちは途端に不安げな顔で互いの肘を小突きあつ。

「嘘に決まってる」

「ユリがこんなダサい女と、親友なワケないじゃない」

だが、疑惑はさながら波のように広がっていく。

「あんたたち、何してるの?」

その時、一台のタクシーが店の前に止まり、中から着飾ったユリが降りて来た。

「ゴリッ！」

女王の登場に、少女たちが一斉にゴリに駆け寄る。

「何よ」

「この女が、勝手にゴリの親友だなんて言って、店に入らうとしたのよ」

告げ口するよつに、少女の一人がゴリの腕を取る。

「私の親友？」

ゴリは美しく整えられた、女の極太眉毛とは対照的な眉を吊り上げて、女を見やる。

「こんな女、知らないわ」

鼻を鳴らして行こうとするゴリの腕を、女は思いの他強い力で掴んだ。

「何すんのよつ！？」

金切り声を上げるゴリの耳元に、女は囁く。

「私は・ヒヨンスにダンスを申し込まれてるの」

思わず女に視線をやつたユリの反応を見て、女はドギつコルージュの脣でニンマリと笑みの形を作った。

「ヒヨンスが、あんたみたいな女、相手にするわけない」

「そつかしら？」

「あいつは、私に夢中なんだから」

「今わね」

平静を装うユリだったが、この奇妙な女のベースに徐々に乗せられ、イライラが募つていく。

「ラストダンスのジンクス、知ってるよね？」

女の言葉に、ユリの頭にカツと血が上る。

「何してるの？ やつをと行くわよつー」

取り巻きの少女たちに向かつてそう鋭く叫ぶと、未だ強い力で女に掴まれている腕を乱暴に振りほどく。

「彼、最近様子がおかしいわよね。何か悩み事があるみたい。心当たり、無い？」

背を向けたユリだけでなく、周囲の皆に聞こえるよつて、女は声を上げる。

「何で私にそんなこと聞くのよ？」

「口・ヒヨンスのことば、誰よりもあんたが知ってると思ったから」

意味深に微笑んで見せる女に、ユリは背筋が寒くなるのを感じ

た。

「何が望みなの？」

「クラブに入れてよ。踊りたいだけ」

女は待つてましたとばかりに、まるでお化けのよひに脣からはみ出したルージュで微笑む。

ユリは不快そうに眉根を寄せたが、やがて乱暴に顎をしゃくった。

「……着いて来て」

「ユリッ？」

「いいから、黙つて」

周囲の少女がユリの腕を引っ張つてユリの選択を咎めるが、ユリは首を横に振つてそれを制した。

女は分厚い肩パットを揺らしながら、嬉々としてユリたちを追い越して地下のクラブへの階段を降りていった。

*

「へえ、こんな風になってるんだあ」

女は派手な電飾に彩られた品の無い店内をキョロキョロと見回しながら、鼓膜を破るような音の洪水を楽しんでいた。無意識に身体がリズムを取つて揺れています。

狭い店内で女にぶつかる客は、皆一様に女のいでたちを見てギョッとしているが、当のの方は全く気にする様子も無く、マイペースにカウンター席に陣取つた。

「クリームソーダーつ！」

「は？」

カウンターのボーイが、女の格好よりも言動に驚いて尋ね返す。

「この人……ココさんの、連れですか？」

後から女の横に腰掛けたユリに、ボーイが助けを求めるように視線を投げる。

「連れなんかじゃないけど。ウーロン茶にして」「えー？ クリームソーダが飲みたかったのに」「贅沢言わないで。奢ってやるんだから」

ユリはピシヤリと言い放つと、投げつけるようにカウンターにウォン紙幣を置いた。

「あんた、ヒヨンスの何を知ってるの？」

ユリは店内の様子に気を散らしている女に、腹立たしげに聞いた。

「今はまだ何も。でも、これからゆっくり知りたいと思つてゐる」
ハツと息を吐いて、ユリは嘲笑した。

「付き合ひきれないわね。せいぜい頑張るといいわ

ユリは取り巻きたちの待つフロアの中央へ向かうべく、席を立つ

た。

「適当に遊んで、満足したら帰つてよ。あんたの顔なんか、長い間見ていたくないわ」

「ねえ、こここの店つてリクエストできるの？」

背を向けかけたコリに、女が問いかける。コリは素つ気なく、フロアの対面にある、ロッブースを指差した。

「ありがと」

女はまたあの不気味な笑みを浮かべると、嬉々として人ごみを搔き分けてDJブースへ駆けて行つた。

「変な女」

ユリは肩を竦めて、仲間の待つフロアに向かう。ノリのいいダンスビートに合わせて身体を揺らし、何もかも忘れてしまいたい。

ガンホのことも。ヒヨンスのことも。

その時、フロアを揺らしていた大音量が鳴り止み、ブースの中では次の曲をかけるべく準備が行われていた。その間に、店内には明かりが灯り、しばしの休息が取られていた。

だが、ブースの中では選曲に時間がかかっているらしく、中々照明が落ちない。よつやく絞られた照明の元、流れてきた曲に、フロアにいる若者全員が呆気に取られたように動きを止めた。

優しげな音色に合わせて、柔らかい男性ボーカルの声が穏やかにメロディを紡ぐ。

「何だ？ これ？」

「いつの曲よ？ 」んなんじや踊れない」

あつとこつ間に、フロア全体に不満の声が広がる。

「ユリ？ どうしたの？」

客たちと一緒になつて、口々にブーイングしていた取り巻きの少女の一人が、ユリの様子がおかしいことに気付いて彼女の顔を覗き込む。

「…………この曲…………」

ユリは呆然とブースを見つめている。

「ちょっと、ユリ。大丈夫？」

その途端、ユリは未だざわめくフロアの客たちを押しのけて、ブースに駆け寄った。ユリに体当たりされた客たちが、口々に抗議の声を上げるが、ユリはお構いなしだった。

「やめてつーーー曲を止めつーーー。」

「コリはブースに飛び込むなり、DJに掴みかかった。

「何で？ いい曲でしょ？」

DJの隣りの椅子で膝を抱えて座っていた女が、コリを見上げて微笑む。

「あんた、この曲どこの？」

コリはDJから手を離し、今度は女の襟首を掴んだ。

「ヒップンスの好きな曲だよ。運動音痴の自分でも、この曲だったら踊れるんだって言つてた。一緒に踊ろうって」

「嘘よつ！ あんたなんかとあいつが一緒に踊りたがる筈ない。この曲は、あいつが初めて……」

「初めて……何？」

ジッとコリを見上げる女の視線が痛い。

コリは乱暴に女から手を離すと、ヒステリックに叫んだ。

「誰か、この女を摘み出してつーー早くつーー！」

慌てて黒服たちが駆け寄つてくる。

女は敢え無く、両腕を掴まれて、店の外へ運ばれた。

「ご自慢の肩パットがズレて、より滑稽な格好になつていていたが、女は満足そうに小鼻を膨らませ、やり遂げたような笑みを浮かべていた。

(コリ?)

(入って来ないでよ)

雨の日曜日。

外出禁止を食らつたコリは、自室の出窓に肘をついて、涙の滲む目で恨めしげに外を睨みつけていた。

中学に上がつたばかりのコリだったが、その美貌は入学前から知れ渡つており、制服を着崩して身につけるような、いわゆる“不良”と呼ばれる集団から目を付けられていた。その中には、コリが憧れる先輩もいて、その彼から週末にクラブに誘われた時、コリは天にも昇る心地がした。

父親の目を盗んで、ベッドの中で初めての化粧をしていそそと下準備に励んだが、十時を過ぎていざ一階の窓から抜け出そうとしたところを、帰宅間際の住み込みの家政婦に見つかってしまった。

当然、それは直ぐに父親の知るところとなり、コリはこりびどく叱られ、一ヶ月という、中学生のコリにとつては永遠とも言えるような長きに渡る“外出禁止”的罰を与えられた。

自室で塞ぎ込むコリを心配して、関係のないヒヨンスまで付き合つてこここのところ外出していなかつたが、コリはそのことに気付いてはいなかつた。

(おじさん、出かけたよ)

(あつや)

(ちょっと、出て来ない?)

ヒヨンスの言葉に、コリはガバッと顔を上げる。

(あんた、協力してくれるの? 私を外に出してくれる?)

部屋のドアを開けて、ヒョウンスの肩を掴む。

(外に出るのは無理だよ。おじさんはないけど、お手伝いさんが見張ってる)

(何よ、情けないわね)

ヒョウンスは何も悪くないにも関わらず、ハツ当たりをしたコリは乱暴にヒョウンスの身体を突き放す。

(でも、リビングまでなら大丈夫だよ)

(リビングに行って、何するのよ)

(着いて来て)

ヒョウンスは微笑んで、コリの手を取る。退屈で死にそうだったコリは、バカらしいと思いつつも、ヒョウンスの後に続いて階下へ降りて行く。

(見て、これ)

リビングに着くと、ヒョウンスは部屋の隅で埃を被つたLPレコードのカバーを外した。それは、コリとヒョウンスが、「オモチャではないから」と、固く触れるのを禁止された、父親の宝物だった。

(ちょっと、かけてみない?)

そう言つとヒョウンスは、棚の陰から、大判のレコードまで取り出した。

(あんた、それどこから?)

(おじやさんの書斎から、ひょっとだけ借つてきたんだ)

ヒョウンスは肩を竦めて見せる。

(バレたら、殺されるわよ)

やう言つながら、コリは徐々に愉快な気持ちになつて来た。眞面目なヒョウンスが、こんな冒険をするなんて。

(本当に音出るの?)

(見てて)

やう言つと、ヒョウンスはプレーヤーの蓋を開けて慎重にレコードをセットすると、静かに針を落とした。

ジジ……ジジ……

外の雨音に良く似た音が、しばりへビングに響いた後、古めかしいが温かいメロディが流れてきた。

(あー)

コリは思わず歓声を上げて、ヒョウンスを見た。ヒョウンスがニッコリと微笑む。

(踊つてみる? コリ)

(ここで?)

(クラブみたいにはいかないけど)

やう言つて、コリに片手を出しだす。

ダサい……いつもなら、そう言つて鼻で笑つてやるのだが、雨音の中のダンスはしつとつと氣分が良くて、コリは素直にその手を取つた。

(何て曲なの?)

(『悲しき雨音』)

(イケてない曲ね)

(僕にはこれくらいが丁度いいよ。初めての僕でも、ちゃんと踊れる)

(ちゃんと踊れてないわよ、さつきから私の足踏んでる)

ぎいじちないそのダンスに文句を言つてやれば、ヒョウンスは照れくわざりに頭を搔いた。

(じめん。もつと練習するよ)

(バカね。こんなダンス踊る機会なんて、そんなに無いわよ)

(痛つ)

(何?)

(ユリも、今僕の足踏んだ)

(何よ、文句あるの? 仕方ないじゃない。私も初めてなんだから)

一瞬顔を見合させた後、ユリはクスクス笑いだした。それにつられて、ヒョウンスも笑う。一人は互いの肩に自分の額をつけて、即席のダンスホールに変えたりビングで、一人だけのつかの間のダンスを楽しんだ。

「馬鹿な奴……あんな、昔のこと」

「コリ?」

カウンターで濃いカクテルを喉に流し込みながら、ユリは唇を噛む。

もう忘れかけていたあの日の雨音が、ユリの心を乱していた。

*

(ヒョウンス、いつも何聞いてるの?)

講堂で席を並べて座っていた時、そう尋ねると、ヒョウンスは片耳に挿していたイヤホンをナビに貸してくれた。

流れてきたオールディーズの名曲に、ナビはパッと顔を輝かせた。

(これ、知ってる。うちのジョビン兄貴も持ってるよ)

楽しげに身体を左右に揺すってリズムと取るナビに、ヒョウンスが微笑む。

(若いの?、こんな曲良く知ってるね)

(ユリのお父さんが好きで、レコードを持つてたんだ。これで、ユリと初めて踊った)

(へえ、ロマンチックだね)

口笛を鳴らすナビに、照れた表情で頭を搔くヒョウンスの様子を今でも覚えている。

きっと、ユリも覚えているはず。

二人で共有した“初めて”のダンスを、忘れられるはずがないんだから。

「ちょっと、正気ですか？この僕を入れないなんてどうこう」とですか？二十四年間生きてきて、今までクラブで門払いされたことなんか……」

黒服に取り押さえられた、よれよれTシャツに縁のナップザック、牛乳瓶の底眼鏡の男が、入口で押し問答している。

「全く、今日は一体どうなってるんだ？ わりきのボディコン女といい、こいつといい」「いいから、早く入れて下さい！ 知り合いがきっと、中に……」「どうかしたんですか？」

その時、クラブの前に突然現れた男を見て、黒服たちが背筋を伸ばした。

「これは、ジェビンさん！」
「え？」

黒服の言葉に振り返ると、そこにはタイトなブラックティームに黒い皮のジャケット、シンプルなシルバーのクロスを首に下げた、スタイルリッシュの権化のようなジェビンが立っていた。

「先輩に頼まれて、搬入に来たんだけど」

そう言つて親指で指し示す背後には、畳んだ状態の『ペニー・レン』つまり、キャンピングカーが止まっていた。

この店のオーナーはジェビンの商売仲間で、時折、ジェビンが仕入れた珍しく高級な酒や食材があると、いつもして取引きに訪れるのだった。

「雨が降りそりだから、さつさとやつて終わりたいんだよ。しかしも、今夜は開店するハメになりそりだから」

「はい、ではすぐにオーナーに連絡を」

そう言つて、黒服の一人はシャツの襟元につけていた無線で店内と連絡を取る。

「……ちよつと」

その時、牛乳瓶の底眼鏡の男は、恨めしげにジョビンをねめついた。

「まさか、知らんぷりするつもつじやないでしょ？」

そう言われて、ジョビンは初めて、足の先から頭のてっぺんまで、マジマジと男を見つめた。その野暮つたさ加減は最早、このような華やかなクラブの前で見ると天然記念物の域だつたが、それはまさしく、ハン・ミンホその人に違ひなかつた。

「ジョビンさん？ お知り合いでですか？」

怪訝そうな黒服の視線を受けて、ジョビンは戻る。

「……いや。知らない」

「はあつ？—」

予想もしない裏切り、ミンホが叫ぶ。

「早く通してくれ」

「ちょっとあなた、今口で僕を見て見ぬフリしたら、一生後悔することになりますよ」

ミンホは必死でジェビンの腕を取つて縋りつく。

「離せ。クラブにはクラブのルールがあるんだよ。そんな珍妙なセансしてる、お前が悪い」

「好きでこんな格好してるんじゃありません！ 急いでたから、仕方なくです。それもこれも、お宅のナビヒヨンのせい……」

ミンホが途中まで言いかけたその時、中から両脇を黒服に取り押さえられた、ミンホ以上に珍妙な服装の女が弾き出されてきた。

「痛あつ！」

アスファルトの道路に転がされた女は、ハスキーな甲高い声で悲鳴を上げる。

「もひつー！ 女の子には優しくしろって、小学校で習わなかつたのかよつー！」

ズレたカツラをかなぐり捨てて、女 だつたものが、叫ぶ。

「……え？」

片パツトのズレたボディコンスーツ、太い眉毛、唇から大きくなみ出した真つ赤なルージュ、奇妙奇天烈には違ひないが、それはミンホとジェビンがよく見慣れた人物。

「ナビツ？ー」

「ナビヒュンヒ？……」

一人はほぼ同時に、素つ頓狂な声を上げた。

「……あれ？ ミンホ……に、兄貴まで……何でここに？」

ナビは道路に尻餅をついた姿勢のまま、キヨトンと一人を見上げる。

「あああああ……お前、何てことだ。兄ちゃんは、お前をそんな不思議ちゃんセンスの子に育てた覚えは……」

「あなた、今気にするのはそこじゃないでしょ？」

「こいつか？ この珍妙ダサ男と一緒に暮らしてるせいでの、美的感覚が狂つたのか？」

「酷い言われようですね！だから僕は、好きでこんな格好してりんじやないって言つてるでしょつ……」

「女装するにも、もつとやり方が……」

ジエビンの“女装”的一言に、黒服たちが振り返る。ミンホは慌てて、ジエビンの腹に肘を食らわせた。

グウツと息を詰まらせるジエビンの横で、ミンホは黒服たちに愛想笑いを振りまいて、その場を取り繕つ。

「あはは、ジエビンさんなら、女装も似合つそうだ。本当の女人より綺麗ですよ、きつとお……アハハハハー」

その時、ポツリ と、ナビが手を着くアスファルトの道路に、黒い染みが出来た。

ポツリ、ポツリ、ポツリ……

その染みはあつという間に広がりを見せ、本格的な雨が降り出した。

「うわー、やっぱり来た」

ジエビンが慌てて、着ていた皮のジャケットを脱ぎ捨て、ナビの頭に被せる。

「搬入はまた明日だ。急いで開店する場所見つけなきや」

ジエビンはそう言つなり、当然のように尻餅をついたままのナビに手を差し出した。

雨が降つたら、『ペニー・レイン』へ帰す

ナビの身柄を預かつた時からの、彼らとの約束。

ミンホはチクリとした胸の痛みを感じながらも、目の前でこの兄弟を見送るべく、自分は一步下がつて身を引いた。

「ナビ？ 早く行くぞ」

ジンはいつまでも自分の手を取らうじゃないナビを不審に思
い、座り込んでいるナビに顔を寄せる。

「どうした？」

「『めん、兄貴』^{じゅき}！」

ナビは驚つなづ、勢いよく立ち上がって、少し離れた場所に立つ
ていたミンホの手首を掴んだ。

「え？ ナビヒョ়ン？」

呆気に取られたミンホの手を取つたまま、ナビは走り出す。

「戻つたら、うんつと働くからー！」

「ナビ？！ おい、待てよつー！」

ジンの制止も虚しく、ナビは雨の繁華街を、ミンホと手を取
り合つて駆け抜けて行つた。

「早く、入つてください」

暗いホテルの部屋に先にナビの身体を押し込んでから、ミンホは
部屋の明かりを付けた。

すぐにシャワールームへ直行し、ナビのために狭いバスタブに湯
を張つてやる。ふんだんに雨を吸い込んで重くなつたボディコンス

ーツを着込んだナビは、所在無げに玄関に突っ立つたままだ。

「何してるんですか？ 早く、」いつしか来てください」

バスルームから、怒氣を含んだミンホの声が聞こえてくる。

「うー…… そんなに、怒るなよお」

ナビは弱々しく唸り声を上げながら、恐る恐るミンホの待つバスルームへと入つて行く。

「無茶を通り越して、あなたのは無謀です。どうこう思考回路してるから、女装なんて思いつくんでしょう」

まだグズグズしているナビの腕を引っ張つて、ミンホはパットの両肩を掴んで背後から抑え込むと、グイッとナビの身体を脱衣所の鏡の前に向けてやつた。

「これはもう、女装じゃなくて、仮装です。見てみなさいよ、お化けです」

ミンホの言う通り、雨で流れた眉墨とマスカラが、ナビの頬に黒い線を描き、まるでホラー映画のような様相を呈してくる。帰る途中で、雨避けになるかと再び被り直したカツラがペッタリと頬や首筋に張り付き、ますます不気味さに拍車をかけている。

「僕、以前休暇で日本に行つた時、あなたにそつくりな人形を見ましたよ。勝手に髪が伸びる、呪いの人形だそうです」

「完全にお化けじやん！」

「だから、そう言つてるんです」

ミンホは傍にかけてあつたタオルを鷲掴みにすると、グルッとナビの身体を反転させて、向き合つた格好で「ゴシゴシ」と容赦なくナビの分厚い化粧を落としていく。

「い……痛いよ、痛いって！ 鼻がもげる……ングッ」

タオルで窒息させられそうになり、賢明にミンホの身体から逃れようともがくが、ガツチリ背中をホールドされているので、それも適わない。

「これじゃあ、僕がやつた方がまだマシでしたね」

「180センチ超える大女がいるかよつ！ お前の方が、お化けだよつ」

ジタバタ暴れながらも、よつやく本来のナビの顔がタオルの下から現れる。

「じゃあ、早く脱いで」

「は？」

ミンホは黒く汚れたタオルを洗面台に放り投げると、片眉を吊り上げて言った。

「は？ じゃないでしょ。今更、何恥ずかしがつてるんですか。早くして下さい。風邪引きますよ」

そう言つて、ナビの肩パットに手をかける。

「ちよつ……ちよつと待つ……！」

慌てたナビが、ミンホの手を振り払う。

「ひ…… 一人で脱げるよ」

「濡れて身体に張り付いてるでしょ。脱ぎこへいから引つ張つてあげます」

「いやいやいやっ！ 大丈夫っ！」

「そうですか？ ジヤあ、どうぞ」

腕を組んで、洗面台に背中を預けると、狭い脱衣所の中でもミンホはジックとナビを見下ろした。

「何で、そこそこいるの？」

「何でって、あなたの脱ぎ捨てたその戦闘服みたいなボディコンスーツを、さつさと洗いたいからですよ」

「後で持つていいくから、お前は部屋出でないよ！ 着替えてないと、覗くな！」

ナビの言葉に、ミンホは黙つてジーストとナビを見下ろしている。

「……な、何だよ？」

「『』の部屋に初めて来た時も、『覗くな』って騒いでましたよね。この際だから、ハッキリ言つておきますが、僕は男に欲情する趣味は、ましてお化けみたいな女装した男に欲情する趣味は、ありませんから。そんなに不自由していません。あしからず」

「出でけつ！」

嫌味タップリな余裕の表情を浮かべるミンホに、濡れそぼったタオルを投げつけて、ナビはミンホを脱衣所から追い出した。

チャポーン……

ミンホが浴槽に溜めてくれた温かいお湯に首まで浸かると、ようやく人心地がついた。疲労に負けて、ウツラウツラしそうになつたところで、見計らつたように脱衣所に戻つて来たミンホに声をかけられた。

「そのまま寝ないでくださいね。溺れますよ
「わ、分かつてゐよつー！」

図星を指されて、ナビは慌てて目を擦る。

曇りガラスの向こうで、ミンホがナビの洗濯物を拾つている様子が分かる。

「それにして、今時こんなスーツ、どこで手に入れたんですか？
買おうと思つても、売つてないでしょ」

「前に先生にもらつたんだよ。20歳の誕生日プレゼント」

オーサー・リーのことだ。

全く、あの変態医者ときたら、何を考えているのか。
ミンホは苦々しげに舌打ちした。

「……ナビヒヨン」

未だガラスの向こうで立ち去る気配のないミンホが、静かに切り出す。

「何?」「

「……さつき、何でジョビンさんと一緒に行かなかつたんですか?」

雨が降つて來たのに。

差し出されたジョビンの腕ではなく、ミンホの手を取つて駆け出したナビ。ミンホは、その理由が知りたかった。

「……『遊びでやつてるんじゃない』って、言つただり?」

雨が降つたら姿を消す

遊びでやつてるんじゃない。

それは、ヒヨンスのことで喧嘩をした時の、ミンホの台詞だつた。

「……そんなこと、気にしてたんですか」

気まずさに、ミンホの方が押し黙る。

「そういうわけじゃないけど。ここにいる間は、僕もお前に協力するつて決めたんだ」

だからつて、今日みたいな無茶な真似は そういうわけで、ミンホは口を噤んだ。

不器用でやり方は突拍子もないが、ナビが彼なりにミンホの役に立ちたいと思つてゐる気持ちは伝わつてきたからだ。

ミンホはズシリと重いナビのスースを抱えて、脱衣所を出た。だが、自然にほころぶ口元には、未だ本人ですら気付いてはいなかつた。

「そんなことが？」

講堂の前で見つけたヒヨンスを見つけたナビとミンホは、昨晩の騒動の一部始終を説明した。どうせ黙つていたところで、あんな大騒ぎを起こして、コリを始め彼女の取り巻きたちにも現場を押さえられていては、ヒヨンスにバレるのも時間の問題だったからだ。

「君つて本当に、無茶するね。ナビ」

ヒヨンスは呆れた顔をしていたが、次第に耐え切れずにクスクスと笑い出した。

「本当に、君たちと話してると、何だか悩んでることがバカみたいに思えてくるよ」

ヒヨンスはひとしきり笑うと、顔を上げてナビと向き合つた。

「……俺、決めたよ。コリをラストダンスに誘う」

「本当? ヒヨンス」

「ああ。ナビがこんなことまでしてれたんだ。本人の俺が、頑張らなきや嘘だろ?」

「うん! 頑張れ、ヒヨンス」

力強くガツツポーズを取るナビに、ヒヨンスは少し寂しげな笑みを浮かべながら言つた。

「……ありがとう、ナビ。本当に、ありがとう」

ミンホはその横で、そんなヒヨンスを、何か言いたそうな顔でジツと見つめていた。

大学の帰り道、一人で歩くヒヨンスの行く手を、突然現れたガンホが塞いだ。

その背後には、ユリの姿もある。

「探したぜ、親友」

ガンホはヒヨンスの肩に手を回し、耳元に顔を近づけた。

「あの夜以来、サボリ癖が着いたのか？ お前が学校になかなか来ないから、話もろくに出来やしない。ユリも寂しがつてたんだぜ。なあ？」

ガンホがユリを振り返ると、ユリは彼の顔色を見て、曖昧な笑みを浮かべた。

「折り入つて、お前に頼みたいことがるんだよ、親友」

ガンホはいやらしく『親友』という言葉を連呼すると、ヒヨンスの抵抗を許さないことを示すように、回した腕に力を込めた。

ヒヨンスはそんな腕を強く振り払うと、ガンホを真っ直ぐに見据えて言った。

「そんなことしなくても、俺は逃げないよ。どこへでも、連れて行けよ」

「アハハハハハツ！ 聞いたか？ ユリ」

ガンホは腹を抱えて笑い出した。

「俺たちの『親友』は勇ましいな。この間の大仕事を終えてから、一皮剥けたみたいだ」

ガンホの言葉に、ユリはソワソワと落ち着かない様子を見せたが、
ガンホは相変わらず不適に微笑んだまま、路肩に止めてあつた自慢のスポーツカーを顎でしゃくった。

「来いよ。男同士の話をしようぜ」

ガンホの車に乗せられて辿り着いた先は、ハンガン漢江川岸に並び立つ貨物倉庫の一つだった。

ガンホは車を降りると、皮のジーンズのポケットからジャラジャラと伸びていたチーンの先を辿り、そこに繋がっていたいくつもの鍵の一つを取り出して倉庫の鍵穴に差し込むと、静かにシャッターオーを開けた。

対岸のビルの明かりが川面に反射する明かりの他に、光を確保するものではなく、暗い倉庫の奥は濃厚な闇が垂れ込めていた。

ガンホはポケットからペンライトを取り出すと、倉庫の壁面を照らした。

「これ、何だか分かるか？」

詰まれたダンボール箱の山を叩きながら、ガンホが上擦った声で問う。ガンホはコリに乱暴にペンライトを手渡し、手元を照らすように指示を出すと、ダンボールの山の一つにカッターで切り込みを入れた。出来た傷に手を差し入れ、中から何かを驚掴みにして、その手をヒヨンスの目の前で開いて見せる。

サラサラと砂時計が時を刻むように、白く輝く粉がガンホの指の間から零れ落ちた。

「……こんなもの、どこから？」

目の前の光景はもう既に、学生のお遊びの域を超えていた。しかし、それに驚かない自分がいる。

冷静なのではない。

もう、本当に麻痺しているのだ。

ダンスフロアの地下へ行つたあの日から。

薄暗い地下の配管室で寂しく死んでいた女の遺体を、ユリのために、この漢江に投げ捨てた、あの日から。

そんなヒョンスにはお構いなしに、ガンホは興奮した様子で捲くし立てる。

「聞いて驚くなよ。俺は、サツの中に『金のなる木』を持つてるんだ。絶対にバレない、その上、この先いくらでも好きなだけヤクが手に入る確実なルートだ。今まで、小遣い稼ぎにチマチマ売つてたけど、こんなにあるんだ。もつとデカく当てなきゃ嘘だろ?」「何する気なの?」

ヒョンスの言葉に、ガンホは異様な光を宿した目をギラギラと輝かせながら言った。

「ダンスパーティの夜、学内にこれを運べ」

ガンホは暗闇の中でヒョンスにピタリと顔を近づける。

「買い物手はもう決まってる。お前にも、当然分け前はやるよ。悪い話じやないだろ?」

ガンホは手の甲で、ヒョンスの乾いた頬をなぞった。

「……ここまで知つたら、もう足抜けしようなんて思わない方がいいぜ。それとも、大好きなユリを置いて、自分だけ逃げたいか?」「逃げないよ」

意外にもハツキリとした口調で言い切つたヒョンスに、ガンホが一瞬たじろいだ。

「だけど、条件がある」

「条件？」

身構えるガンホを通り越して、ヒョウンスはガンホの後ろで先ほどから一言も発していないコリを見つめて言った。

「……ユリ、僕とラスト、ダンスを踊ってくれる？」「え？」

ヒョウンスの言葉に、ユリは畳然とした表情でヒョウンスを見た。

「僕と、踊つて……約束してくれたら、この仕事引き受けよう」

ユリが答える前に、ガンホが笑い出した。

「アハハハハハ！　踊つてやれよ、ユリ。そんなくだらないことが条件か？」

「約束して。ユリ。お願ひだから」

ガンホを無視して強い視線で自分を見つめるヒョウンスに、ユリは戸惑いながらも尋ねる。

「あの女」

「え？」

「クラブに来てた、あの女」

「ああ」

ナビのことを言われているのだと分かつて、ヒョウンスはほんの少し笑つた。

少しでも、気にしてくれる気持ちがまだ残っているんだね。

「僕の気持ちは変わらないよ。誰か一人としか踊れないなら、ユリ、僕は君がいい」

「フン、聞いてられないぜ」

小バカにして笑うガンホの横で、ユリは小さくコクリと頷いた。

「ありがとう、ユリ」

「安い男だな。本当に」

ガンホが嘲るように鼻を鳴らした。

＊＊＊

二歳で母を亡くした。

五歳で職を失った父と、食うにも困る生活を余儀なくされ、腹をすかせて父と二人、何日もソウルの街中を歩き回った。

失うものなど何も持たない自分たちから、神様はこれ以上何を奪う気なのだろう 幼心にそう思っていた。

生きるために、遂には物乞いの真似事まで始めた時、目の前に現れたのが、君だった。

『ねえ、何してるの?』

あれは酷く凍えた冬のある日、道路の片隅で、空腹に耐えかねて横たわる父親の横で、膝を抱えて座っていた僕。

何か新しい遊びでもしていると思ったのか、君はキレイなコート

が汚れるのも構わずに、僕の横に腰を下ろした。

僕の真似をして、膝を抱える君。

目が合つと、フフフッと楽しそうに笑つ。

『競争よ。どつちか先に動いた方が負け』

そう言つと、言葉通り息を止めて、人形のよつに固まつて見せる君。

だけど、その勝負だつたら、僕が負ける筈がなかつた。

だつて、君を見つめて少しも動けなくなつたのは、僕の方だから。

『ユリー、どこに行つたんだい？』

『あつ！ パパー！』

お人形の時間を止めて、また気ままに人間に戻つた君は、僕の隣りに腰を下ろした時と同じ軽やかさで、フワリと立ち上がり駆け出した。

『ダメじやないか。急にいなくなつたりしたら、心配するだろ？…あれ？ その子は？』

急に、光が差した。

飢えと寒さだけが支配する地獄に、突然下りてきた天国の梯子だつた。

ああ、そうか。

お人形のような君は、本当は天使だつたんだ。

天国でどんなに天使がワガママに振舞つたつて、そんなこと構いやしなかつた。

だつて、今ここで僕が息をしているのは、あの日君が天国に引き

上げてくれたから。天国を、この目に見せてくれたから。

どんなワガママも聞いてきた。

君は確かに、僕の天使だつたから

「ミンホッ！ ミンホッ！」

雨が降りしきる日曜日の朝、ホテルの窓枠に腰掛け外を見ていたナビが、突然大声でミンホを呼んだ。

「……何なんですか、ナビヒョン……日曜くらいい、ゆづくら寝かせてくださいよ」

氣だるい朝の空氣をまどい、まだベッドの中でもどろみの最中にいたミンホは、面倒くさそうに寝返りをうつて言った。

「ヒョンス、だよっ！ ヒョンスが来てるんだ」

ナビはそう言つて、ミンホの横たわるベッドを踏み超えて、部屋のドアに向かつて走つた。

「うぐうつ……」

思い切りナビの足で背中を踏まれたミンホは、ぐぐもつた、声にならない呻きをあげる。

数分後には、ナビは戸惑いがちなヒョンスの手を引いてホテルの部屋に戻つて來た。

「どうしたのヒョンス？ 僕たちに、何か話したいことがあつて来たらんじやないの？」

部屋の中へ促してベッドに腰を下ろしても、なかなか口を開けないヒョウスに、ナビが切り出した。

「……僕、警察に行く」

消え入るような声でヒョウスはさりげなく、再び黙つてしまった。

「その必要はあつませんよ」

ミンホの言葉に、ヒョウスが顔を上げる。

ミンホは静かに、ポケットから警察手帳を取り出して見せた。

「……え？」

驚きで声も出ないヒョウスに、ミンホは頭を下げる。

「騙してて、すみませんでした」

「……ナビ、もしかして、君も？」

ナビは静かに首を横に振る。

「……ナビヒョウ」

ヒョウスの混乱を察して、ミンホが静かに言った。

「……ペニーレインへ行きませんか？ そこない、さつと落ち着いて話ができる」

ジエビンは暖かいカフエオレとハムエッグの乗った皿を、カウンターの向こうから、そっとヒヨンスの前に差し出した。

「モーニングセットだよ。朝飯、まだだろ?」

ジエビンは微笑みながら、久々の豪快な皿洗いにいそしむナビを振り返つて言つた。

「ナビが友達連れてくるなんて初めてだな

「俺は? 俺は?」

「先生は友達じゃないでしょ。僕のこと、ヤラシー田で見てるもん」「そんなあ、純粋なフレンドシップだよ、フレンドシップウ」

相変わらずなオーサーを冷たくあしらうナビの様子を見て、ヒュンスが少しだけ微笑んだ。

「あれ? 君、笑うと魅力的」

オーサーが田ぞとくそれを見つけて笑う。

「どうしよう、俺。ナビの周りにはいい男がいっぱい、油断できないワ」

「バカ言つてないで、少しほその人にしゃべらせてあげてください」

見かねたミニンホがとつとつ間にに入る。

「あんたが、話したいことってのは何だ?」

それまで黙っていたチョルスが静かにテーブルを立ち上がり、ヒヨンスの隣りのカウンター席に腰掛けた。

『ペニー・レイン』にヒヨンスを連れてきた時、ミンホとチョルスは彼に自分たちの正体を明かした。

時期尚早かとも思われたが、ヒヨンスが並々ならぬ決心でここに来たことが分かつていて、腹を割つて全てを話して欲しいと思つてのことだつた。

テーブルの上で組んだ手に視線を落としたまま、ヒヨンスは青ざめながら小さな声で言つた。

「聖水大橋ソンスデギョの遺体……」

「ノ・ミラか?」

思わず乗り出したチョルスに、ヒヨンスは言葉を詰まらせた。

「チョルスヒヨン」

「……悪い」

ミンホがたしなめると、チョルスは気まずそうに再び椅子に深く腰かけ直した。

「……彼女の遺体を、漢江に捨てたのは俺です」

深くうな垂れたまま、ヒヨンスは消え入るような声で続ける。

「……ユリの様子が酷く取り乱していて様子がおかしくて、着いて行つたら、既に彼女は死んでいた。何日も経つてゐみたいで……そこに、ガンホもいた」

「なぜ、その時すぐに警察へ行かなかつたんですか?」

ミンホの問いに、ヒョঁンスは首を左右に振つて答えた。

「出来なかつた。コリを……守りたくて。約束したんだ。誰にも言わないので、コリの不安は消してあげるから、だからもう薬はやめてくれつて……だけど、間違つてた。コリは、やめられなかつた」「それで、今さら俺たちに自首してどうするつもりだつた? あんただけしょつ引いても、あんたの好きな女も、そのガンホつて奴も、証拠を掴まなきや、のうのうと外で生きていられるんだぞ」

チヨルスの言葉に、ヒョঁンスは初めて顔を上げた。その目には、決意の色が滲んでいた。

「パーティーの夜、大量のクスリが漢江の貨物倉庫から運ばれる」「何?」

「会場には、買い物の学生が一同に集まる。現行犯で押さえられる

その場にいた全員が、畳然とした顔でヒョঁンスを見つめている。

「パーティーが始まる前、7時に漢江の貨物倉庫で『運び屋』と『売人』が落ち合う約束になつてゐる。ヤクはそのまま会場に運ばれる。煽動してるのは……」

「学長の息子、ガンホ」

ヒョঁンスに代わつて、ミンホが後を引き継ぐ。

「そうですね?」

ヒョঁンスが「クリと頷いた。

「『運び屋』は、僕。『売人』は……ソウル市警の人間だ」
ヒヨンスの言葉で、チョルスとミンホが同時に深く息を吐く。驚きよりも、やはりという気持ちの方が強かつた。

「その市警の人間に、あんたは会つたことがあるのか？」
「ない。やり取りは全部ガンホがやつていた」
「そこまで話してくれてありがたいが、分かってるのか？」
「聞いち
まつたからには、見過ごすわけにはいかないんだぞ。ガンホも、あ
んたも……あんたの好きな、ユリって女も」
「……いいんだ」

チョルスの言葉に、俯いたヒヨンスはポツリと言った。ジェビン
が入れてくれたカフェラテの表面に反射したヒヨンスの顔は、穏や
かな笑みを湛えていた。

「……コリは、意地つ張りだから、自分で悪いことしてるので謝れない。止められない。昔からそうだった。止めてくれるの、叱ってくれるの、待ってるんだ」

「……せんせ」

その時、ナビが皿を拭く手を止めて、ジッとオーサーを見つめて言った。

「ん？ なあに、ナビ」

「昔に戻れる薬つてないの？」

突然のナビの言葉に、その場にいた全員がナビを見つめた。

「大人になつてからのさ、すれ違つちゃつた記憶だけ消して、また昔に戻れる薬。先生は、天才なんでしょ？ コリとヒヨンスを、昔に戻してあげてよ」

必死に言い募るナビをしばらく無言で見つめていたオーサーだが、やがて少し寂しげに微笑むと、手を伸ばしてクシャクシャとナビの頭を撫でた。

「さすがは、俺のナビヤ。優しいね」

ひとしきり柔らかい髪の感触を楽しんだ後、オーサーはスルッとナビから手を離して言った。

「でもや……忘れることが、本当に幸せ？」

オーサーはカウンターについた肘に右頬を乗せ、横田でヒョンスに視線を送る。見つめ返すヒョンスの瞳には、もう答えが描かれていた。

「ありがとう……ナビ」

ヒョンスが微笑む。

「甘えついでに、一つだけ、ワガママを言わせてもらえないかな?」

ヒョンスは顔を上げて、自分を取り囲んでいる五人を一人一人ゆっくり見つめると、再び深々と頭を下げる。

「……最後の曲が終わるまで、待つて欲しい」

* * *

深夜の署長室で、ミンホはチョルスと連れ立つて潜入捜査の結果を告げた。

「今、何て言った?」

震える声で問い合わせる署長に、ミンホはもう一度きつぱりと言つた。

「署内に、内通者がいます」

椅子に深く腰かけた署長が思わず身を乗り出す。

「そんなバカな話があるか！ 一体、誰が……」

「ホン・サンギョ 警査です」

「つな？！」

見る見る顔から血の氣の失せていく署長に、チョルスが更に追い討ちをかける。

「明慶に一斉捜査の情報を流して便宜を図った見返りに、薬の販売ルートを学生組織の間に確立させたんでしょう。ホン警査の口座に、摘発の前後に渡つて多額の入金が繰り返されています。学生たちに売りさばいた薬は、別の大学から摘発した薬の量を改ざんし、手に入れた分を粗悪品に加工し量産したものです。ホン警査から薬の加工を依頼されたヤクザを、別件で引っ張り自白させました」

「数日で、チョルスが極秘でサンギョの周囲を洗い出した成果だった。

「鑑識のノ警衛にも、ワイロを渡してました。明慶の女子学生の変死事件の、検視結果の改ざんの見返りでしきつ」

チョルスは別人の名義になつている銀行口座の入出金記録が書かれた書類の束を、資料の上に積み重ねた。

「彼は明慶の学内イベントに乗じた、これまでにない規模の取引を計画しています。アゲるなら、チャンスはこの日しかない」

署長はチョルスの言葉にも、しばらく唇を噛み締めたまま答えを出せずにいた。警察内部の者の犯行となると、世間的にも非常に厄介だった。

しかし、一人死者まで出したこの事件を、このまま葬り去るわけにもいかない。

「……動員を、お願ひします」

頭を下げるチョルスとミンホに向かつて、署長はやがて一言、分かつた と呟いた。

＊＊＊

日没と共に、学校中が準備に明け暮れた学内最大イベントである明慶大学ダンス・パーティが始まる。

ミンホは既に昨日の晚から、チョルスたちとの最終打ち合わせに出かけていて戻つて来ていない。

彼はそのまま、パーティに潜入するという話だつた。

時計の針が午後6時を差し、ナビはようやく重い腰を上げる。

曲がりなりにも正装を要求される場所なので、今日はジェビンから借りてきたフォーマルなスーツを着ているが、着慣れていない分、居心地が悪くて仕方ない。

ナビは胸元に手をやり、自分の首を締め付けているネクタイをむしり取り、ズボンのポケットに捻じ込んだ。ついでに、第二ボタンまで乱暴に開けて、蒸した身体に風を通す。暑さには適わなかつた。ナビの腰が重い理由は、何も暑さのせいばかりではなかつた。

今夜、これから起こることを知つているナビにとつて、それはただのパーティではなかつた。

ヒヨンスの本当の、ラストダンス。

田の前でヒョウンスが捕まる姿は、見たくなかつた。
だが、いつまでもグズグズしていくも仕方ない。
ナビが思い切つて立ち上がつたその時、ホテルの部屋のブザーが
鳴つた。

「……誰？」

覗き窓から田を凝らしたナビの視界に、二ンマリと微笑みながら
大荷物を手に立つてゐるジェビンとオーサーの姿が飛び込んできた。

「ちよ……兄貴エムも先生も、一体どうしたのさ~。」

部屋になだれ込んでくる一人に押されるように後ずさりしながら、ナビが尋ねる。

「舞踏会にはおしゃれしてドレス着て、カボチャの馬車に乗つていくものだよ、シンドレラ」

相変わらず気障なオーサーの口調くわいで、ナビは皿を皿黙いり黙れる。

「ドレスって、何言つてんのさ~。もつ、スー^ツ着て……」

「ナビヤ、兄貴エムが悪かつたよ。女装の何たるかを、今日けふにわざわざと教えてやる」

「いや、教えてくれなくていいから~。」

「はい、座つて。ナビちゃん」

一人がかりで追い詰められては、ナビに逃げ場はない。

どこから調達して来たのか、ジエビンは小さな三面鏡までついたコスメボックスを開き、慣れた様子でファンデーションを溶き始めた。

「な、何で僕が女の格好しなきやいけないのさ? 意味が分かんな
いっ」

「男同士で、ダンスを踊るの? 変に立つて、コロヒヒンスに
自然に近づけないと困るでしょ」

もつともりしき説得をしながらも、オーサーの口角は上がりっぱ

なしで、ただ単にナビのドレス姿を楽しんでいるのが明らかであった。

「それに、お前に任せてたら、ここの前みたいなボディコンお化けになるからな」

「アハハ、聞いたよ、ナビヤ。俺も見たかつたなあ」

「な？ 元はと言えば先生がっ！ クラブで一番イケてる服と化粧なんだつて言つて、くれたんじやないかあ」

「本気にしちゃうあたりが、ナビヤの可愛いところだよねえ」

「嘘だつたの？！」

「ナビ、あんまり動かないで」

化粧途中の顔をグイッと鏡の正面に向けられて、ナビは口を尖らせて押し黙る。

「何で、僕がドレスなんだよ」

「ミンホのドレス姿よりもマシだろ？」

「うん、想像したくないです」

片手を上げて、オーサーも同意する。

「ナビ」

頬に白粉をはたきながら呼びかけられ、ナビが薄く口を開けると、至近距離でジエビンの優しい灰色の瞳とぶつかった。

「……よく、頑張ったね」

そう言つて、柔らかいナビの黒髪に手を伸ばす。

「『バレない自信、ある?』」

それは、『ペニー・レイン』からナビを送り出すとき、ジョビンがかけたあの言葉だった。

ナビの黒田勝ちの瞳は何かを言いたそうに一瞬だけ揺れたが、すぐにはキューと口角を上げて、ジョビンに答えた。

「『兄貴の“弟”を、信じなさい』」

まるで一人だけの合言葉のように、決まった台詞を繰り返す。そんな一人を、オーサーは少し悲しげな微笑を浮かべて、静かに見守っていた。

＊＊＊

広い講堂の中は、学生バンドが奏でるワルツの音色が響き渡り、すし詰め状態になつた人々の熱気で溢れていた。

オーサーが言うところの“カボチャの馬車”こと、いつものキャンピングカーに押し込められて会場に到着したナビは、一曲も踊つていないので、早くも人ゴミに揉まれてヘトヘトになつていた。やつとの思いで辿り着いた窓辺に背中を預けて一息つくと、人、人でごった返す会場内に目を凝らした。

あの日『ペニー・レイン』で別れたきりのヒヨンスの姿を探すが、ワルツの輪が何週もして、同じ曲が何度も繰り返し流れても、ナビは一向にヒヨンスを見つけることができなかつた。もしや、今日は来ないのかもしさえ思つ。それならいつそ、その方がいい。

そんな淡い期待を抱きながら手の甲で額を拭うと、ビッシュショリと汗に濡れる。ここまで疲労する主な原因は、この居心地の悪い、慣れない服装のせいに他ならなかつた。

肩が大きく開いたワインレッドのドレスは、華奢なナビの鎖骨を強調している。普段、こんな風に肌を晒すことなどないから、無防備すぎて、先ほどから落ち着かなくて仕方ない。ベトベトした唇のグロスも気持ちが悪い。舐めとつてしまいたくてこつそり舌を出したところでジエビンに見つかり、先ほど車の中でこつぴどくじやされた。

アップにまとめたウイッグには、ドレスと同じ色の大きなリボンが留められていて、地毛を思い切り引っ張られているせいいで、痛いし重い。

出来ることなら、足を挫きそつなこの淡い金色のピンヒールも脱ぎ捨てて、今すぐに裸足にジーパン、Tシャツのいつものスタイルに戻りたい。

「女つて、大変なんだな」

思わずそう一人ごちたその時、いつの間に居たのか、見知らぬ男が隣りに立つっていた。

「ドリンク、いかがですか？」

正装した男は、この大学の生徒なのだろう。見たことのない顔だつたが、やたらと馴れ馴れしい笑顔で近づいてくる。

「あ、どうも。」親切に

彼が差し出すグラスを受け取ろうと手を伸ばした時、ナビの手が届く寸前で、横から現れた長い腕がナビのグラスをさらつていった。

「何する……っ！」

文句の一つも言つてやろうとした腕の主を振り仰いだ時、ナビは思わず言葉を失つた。

「…………おま…………」

それだけ言つのが精一杯だった。
そこには、正装姿のミンホが立っていた。

シャツの襟元には、黒い細身のリボンタイが結ばれ、細身のパンツが嫌味なくらいに長い足を更に強調している。

明慶大に潜入してからすっかり板についていた『野暮つたさ』を完全に封印したミンホは、シレツとした顔でナビから奪ったグラスに口をつけると、それを一気に煽つてから、空いたグラスを男に突き返した。

「オリジナルカクテル？ 隨分キツイ度数ですね。これが、いつも手口ですか？」

「な？！」

ミンホの辛辣な言い方に、男が皿を吊り上げる。

「酔わせた女子学生を車に連れ込んで、お楽しみ。そんな感じですかね？」

「失礼だぞ、お前。何の証拠があつて……」

掴みかからうとする男の手首を掴んで、ミンホが軽く捻りあげると、男は途端に情けない悲鳴を上げた。

「別にあなたが何しようが僕には関係ありませんけどね。この人は僕の連れですから、ターゲットにする相手を間違えましたね」

そう言って男の体を軽く押すと、男はよろめいて、派手に床に倒れこんだ。

「チクショウ。相手がいるなら、物欲しそうに立つてゐんじゃねえ

男は悔し紛れにナビに向かって暴言を吐き捨てるが、そのまま床を這つて逃げ出した。

「大丈夫ですか？」

男が去ると、ミンホはナビを振り向いた。

「な……何だよっ！ 余計なことして。僕、喉乾いてたのに」

急に気恥ずかしくなつて、ナビはそれを誤魔化すように素つ頗狂な声で抗議した。

「だつたら、大好きなクリームソーダにでもしなさいよ。あなた、べらぼうに弱いでしょ？ アルコール」

ホテルでの仮住まいの最中に、一日の疲れを癒そうとミンホが買つてきたビールを飲んで、ナビは卒倒しがちがあった。本当は酒が好きではなく、また極端に自分がアルコールに弱いことも自覚しているのに、ミンホにナメられたくなくて無理をして飲んだのだ。それが分かつてから、ミンホは一度とビールを買ってこなくなり、自分は飲みたい時もあるだろうに、ナビに付き合つて、お茶ばかり啜つっていた。

年寄りくさい……とバカにしながら、ナビは内心ではミンホの不器用な優しさを感じていた。

照れくさくて、上手く感謝の言葉など口にすることは出来なかつたけれど。

「それにしても、その格好……」

ミンホは改めて、マジマジビデレス姿のナビを観察する。

「な、何だよ？！ 何か、文句でもあるわけ？ 好きでこんな格好してるんじゃないよ。兄貴ヒヨクと先生に無理やり」

「別に、文句なんかありませんよ。この間のボディコンに比べたら、遙かに良いです。あのお化けメイクと一緒に踊るくらいなら、男同士の方がマシだと思つてたんですけど、これならダンスを申し込んであげてもいいですよ」

一ツゴリ微笑むミンホは、癪に障るくらい優雅な身のこなしで、ナビに向かつて手を差し伸べた。

「僕の方が、お断りつ」

遊ばれているのが分かつて、ナビはブイツと顔を背けた。そんなナビを見て、ミンホは手の甲を口に当てて、クスクス笑いを漏らす。 「だけど、ジョビンさんの腕は大したもんですね。一応、ちゃんと した女の子に見えますよ」

「一応って、何だよ！」

「ちちちー言多いミンホに、ナビは食つてかかる。

「でも、胸はもつと詰めた方がいいですね。スカスカですよ。あの肩パット、捨てなきや良かった」

そう言つて、長身を利用して、ナビのドレスの胸の谷間を上から覗き見る。

「おまつー、この、変態野郎つー」

ナビは今自分がドレス姿で少女を演じていることも忘れて、金色のピンヒールを凶器にして、ミンホに蹴りを入れる。

「……つ痛。格好が変わつても、中身の野蛮さは変わりませんね」

ミンホは長い脛を擦つて、恨めしげにナビを見た。

「といふで、ヒョঁスは……見つかりませんか?」

「それならふざかんなの止めこじと、ミンホは小声でナビに尋ねる。

「…………うん」

「きつと、もう来てる筈です」

講堂の時計は、既に午後9時を指していた。

その時、突然会場の明かりが落ち、辺りが闇に包まれた。

『「ああ、こよこのラストの曲です……」』

司会を務める執行委員の学生が、今日の一大イベントのファイナレを高らかに宣言する。それとほぼ同時に、ナビとミンホの背後の窓に、激しく叩きつけるような雨が降ってきた。

*

ヒョঁスは突然降り出した雨にずぶ濡れになりながら、講堂の中に入ってきた。

会場の隅で一人、いよいよ始まつたラストワルツのバンドの音色と、

張り合いつぶつに激しさを増していく雨の音を聞いていた。

「おこつー、遅かったじゃねえか！」

不意に、グイッと肘を捕まれて振り返る。

そこには、表の顔はアメフトの花形選手であり、我が物顔でパティーの主役を氣取るタキシード姿のガンホと、その恋人として皆の羨望を集めに相応しい、ボディラインを強調する、スリットの深く開いたタイトなドレスに身を包んだ美しいコナの姿があった。肘の内側をドス黒く変色させている無数の注射針の痕は、ドレスと同じ色の長い手袋で巧みに隠している。

「例のブツは？ ちゃんと運んだんだろうな」

ヒヨンスは黙つて手を伸ばし、ガンホの手の中に二つの小さな紙包みを落としてから、講堂の隅にある倉庫を顎でしゃぐる。

「もうみんな、お待ちかねだよ」

ヒヨンスの言つとおり、何人もの学生がソワソワしながら倉庫の扉の周囲に集まっている。

ガンホは目を輝かせてコリの肩を掴んだ。

「行くぞ、コリ」

コリに紙包みの一つを押し付けと、倉庫へと向かおうとする。そのガンホの前に、ヒヨンスが立ちふさがった。

「何だよ？ もう用は済んだ。早くどけよ」

肩を突き飛ばされてよろけながらも、ヒョウンスは真っ直ぐにコリを見つめて手を差し出した。

「……約束だよ、コリ。ラストダンスは、俺と踊つて」「おいつ！」

ガンホに小突かれても、ヒョウンスは動かない。コリから視線を外さない。

コリは戸惑いながら何度もガンホとヒョウンスを見比べた。

「つち」

盛大な舌打ちをして、ガンホはコリの肩をヒョウンスに向かつて乱暴に突き飛ばした。よろめきながら、コリはヒョウンスの腕の中に納まる。

「そんなに俺の女と踊りたきや、好きにしろ」

そう捨て台詞を吐くと、ガンホはあつたりと背を向けて倉庫の方へ向かつた。

そんなガンホをまだオドオドと見つめているコリの手を引いて、ヒョウンスは静かにラストダンスの輪の中に加わった。

*

「あ、始まつたみたいだね」

講堂の裏に止めたキャンピングカーの中で、漏れてくる音楽に耳を澄ませながら、オーサーは煙草に火をつけた。隣りの運転席には、ジエビングが膝に抱いたオンマの背を撫でながら座つてゐる。

「ナビдресスを着せてやつたのは、本當に捜査のため?」

何でも無い世間話のような調子で、オーサーが語りかける。

「他に、何があるつて言つんだ?」

ジエビングはオンマの背に視線を落としたままで言つ。

「いや……親心つて、ヤツなのがなつてね」

窓を開けて、フツと湿氣を含んだ外の風に煙草の煙を吐き出す。

「『バレない自信、ある?』か

開いた窓の隙間から手を出し、指先に触れる雨の感触を楽しむ。

「本當は『バレさない自信、ある?』。さう、聞きたかったんじゃないの?」

互いに別の方向を向いて視線を合わせないまま、沈黙が続く。

「……あこつは、俺の“弟”だ

ポツリと呟くジョビン。「オーサーは頷く。

「エーフ。ナビとお前が、望む限りね」

オーサーは不意にジョビンの背をバチンッと叩いた。

「……おまつ……痛いな。いきなり、何するんだよ！」

「心配しなくても、『巣立ちの時』はまだ当分先だよ。特に、あの坊や相手じゃね。苦労するなあ、『お父さん』」

「お前、面白がってるだろ？」

ジョビンはお返しにオーサーの胸を拳でドンッと殴りつけ、不貞腐れたように運転席のシートに背中を預けた。

*

「……ナビヒヨン」

ミンホは動きだしたワルツの輪に田を凝らしながら囁つた。

「こました。あそこです」

ミンホの指差すほうへ視線をやつたナビは、そこに確かに手を取り合つてしゃべりちなく踊る一人の姿を見つけた。

「来て」

ミンホは突然ナビの手を取ると、有無を言わざずズンズンとワルツの輪に近付いて行つた。

「なつ？！ 何なの？」

「シッ！ 踊るフリして。ヒョンスの近くにいた方がいい」

長身のミンホに振り回されるような格好で、ナビのぎこちないダンスが始まった。

周囲を見回してみると、他の男子とペアを組んだ女性陣たちが、ウツトリした目でミンホに釘付けになっている。

可哀相な男子諸君は、先ほどからそんな薄情な女性陣たちに足を踏まれ放題になつては、小さな呻き声を上げている。

ミンホはナビと違い、悔しいくらいに優雅でスムーズな美しいステップを踏んでいた。ナビは慣れないリズムに四苦八苦しながら、バカにされたくない一心で、意地になつてミンホのリードについていく。ナビに何度も足を踏まれ、顔をしかめながらその都度憎まれ口を叩いても、ナビの背を抱くミンホの手は優しく暖かかった。音楽が最大の盛り上がりを見せる。

その時、講堂の正面玄関の曇りガラスの向こうで、複数の影が動くのが見えた。

「……ミンホ」

ナビがミンホの袖口をギュッと掴む。

「……大丈夫」

ミンホは背に回した腕に力を込めて、ナビを落ち着かせるように静かに頷いた。

「ありがとう、ユリ」

ヒヨンスは腕の中のユリを見つめたまま微笑んだ。長い間ずっと側にいたのに、こんなに近い距離で彼女を見るとはなかつた。

「何で、お礼？」

ユリはヒヨンスに手を取られたまま、気まずそうに顔を背ける。

「僕に、天国を見てくれたから」「え？」

バイオリンとピアノの音色が競つように掛け合いを始め、曲のクライマックスが近いことを告げる。

「君がいる場所が、僕には天国だつたんだ」

ビリビリと弦を爪弾く、長く尾を引くすすり泣きのようなバイオリンの音を残して、ワルツが終わる。

その時、バンッと鋭い音がして、講堂の扉が蹴破られた。

「動くなつ！ 警察だ！」

そこかしこで上がる悲鳴。

一斉に中に雪崩れ込んできた警察と学生の間で、あつという間に小競り合いが始まる。

「何なの？　どうして、こんな…」

パニックになるユリの背を支えながら、ヒョーンスはその時を静かに待っていた。

「ユリ、

ヒョーンスに名を呼ばれ、ユリが顔を上げる。

「……」めんね

「え？」

その時、ユリの背後でカシャリと冷たい金属音がした。

「イ・ユリ。覚せい剤使用容疑で逮捕する」

「……っな？！」

言葉を失うユリの胸元から、ポトリと小さな紙包みが落ちた。先ほど、ヒョーンスからガンホへ、そしてユリへと手渡されたものだった。

「ちよつ、離せつ！　何のマネだよつー」

遠く倉庫の前では、大勢の学生が複数の警察に取り押さえられている。その中に、一際大声で怒鳴り散らしながら暴れるガンホの姿があつた。

「さ、早く来い」

警官に背中を押されたユリは、青ざめた唇を震わせて、ヒョーンス

を見上げた。

「……あんた……あんたが、呼んだのね？」

ヒョウスはそんなユリの視線を真正面から受け止めた。

「私を売ったのねっ！ どうして？ 私のこと、好きじゃないの？」
「好きだよ」
「だったら、何でっ！」
「愛してる」

ヒョウスは手を伸ばして、ユリの頬に触れた。

「……愛してる、ユリ」

そのままそつと、震えるユリの唇に触れるだけのキスをした。目を見開き抵抗するユリに唇を噛まれ、ヒョウスの口の中には苦い血の味が広がった。

「許さないからっ、ヒョウスッ！ あんたが、あんたが私を裏切るなんて……あんたは、あんただけは……私を……裏切っちゃいけないのに……」

ユリの瞳から大粒の涙が零れ落ちる。金切り声でヒョウスを罵倒し叫んでいたのは最初だけで、次第にその声は弱々しい啜り泣きに変わつていった。

「言つたよね、ユリ。君のいる場所が、僕の天国だつて」

ヒョウスはそんなユリに優しく微笑む。

「……」「・ヒヨンスだな？」

その時、ヒヨンスの背後から伸びてきた腕が、突然ヒヨンスの肩を掴んだ。

「え？」

唚然とした顔でヒヨンスを見上げるコリに、ヒヨンスはもう一度柔らかい笑みを浮かべると、静かに後ろを振り返った。

「……ノ・ミラの、死体遺棄容疑で逮捕する」

抵抗することなく差し出したヒヨンスの手首に、カシャリと冷たい金属音が降ってきた。

「ヒヨンスッ！」
「愛してる」

ヒヨンスは肩越しに、もう一度コリを振り返つて言つた。

「……君がいる世界が、僕の天国」

＊＊＊

ナビは騒然となる学生たちのワルツの輪の中で、連行されていくヒヨンスの背中を見送った。

ヒヨンス自身が決めたことだから、もう泣く事もできない。

それでも、やりきれなくて堪らなかつた。

「……ナビヒヨンヘ、」

『氣付いたら、まだミンホに手を取られたままだつた。

「離せよつー、」

泣き出しそうな氣付かれたくなくて、ナビは乱暴に手を振りほどいた。

しかし、ミンホはそんなナビの手を離してはくれなかつた。

「何だよつー、離せつて言つてゐるだろ」

「まだ終わつてませんから」

「……何が？」

「ワルツ」

ミンホはすましめた顔で告げる。

「何言つて……もうとつへん……」

「聞こえませんか？」

『もう言われても、とつへに音楽は鳴り止んで、周囲は雑然とした学生たちの声しか聞こえない。』

「よく、耳を澄ませてみて。僕には聞こえますよ、」

『そう言われてナビも意識を集中せると、学生たちのざわめきの間から、一定の強いリズムで講堂の屋根を叩く、畠の音が聞こえてきた。』

「……あ」

思わず声を漏らすのと同時に、これまでの緊張の糸がプツンと切れ、ナビはなぜだか急に目頭が熱くなってしまった。

ふつ、ふつ、と涙をこらえるために漏れてしまつ声を聞かれたくない、ナビはミンホの胸を叩いて言った。

「……見るなよ」

するとミンホは、ナビの後頭部に手をやつ、そのままグッと自分の胸にナビの額を押し付けた。

「見えません」

それは逆効果で、ナビはとうとう溢れでぐる涙を止められなくなり、ヒックヒックとしゃくり上げ始めた。

「……聞くなよ」

ナビの頭に回していくミンホの手が、優しくナビの髪を撫でる。

「雨の音で、聞こえません」

屋根を叩く雨の音を聞きながら、ミンホは肩を震わせて泣くナビを、いつまでも優しく抱きしめていた。

気が付けばいつも、雨雲を探していた……

澄みきつた空氣の中で、パンの焼ける香ばしい匂いが漂つ。

朝靄あさもやが立ち込める庭の中で駆け回つていた少女は、朝露に濡れた芝生に滑つてツルンツと転ぶと、ビックリしたようつて田を見開いて、しばらく固まつた後にクスクスと笑い出した。

「チエリンー？ 幼稚園に行く前に、お洋服汚いたしゃダメよ」

開け放したリビングの窓の向こうでキッキンに立つていた母親は、カウンター越しに少女の様子を見守りながら、手際よくスクランブルエッグを焼いている。

少女は露で濡れたお尻を擦りながら、クスクス笑いを止めることなくリビングに上がつてきた。

「なあに？ 朝から」機嫌機嫌じゃない？」

母親もフライパンを持つた手を起用に動かしながら少女に声をかける。

「昨日からアッパがいるから、嬉しいの？」

母親が言うと、少女はキャッと小さな手で顔を覆つてコクコクと頷く。そんな可愛らしい少女の様子に、母親もいつしか自然に笑顔になつっていた。

「じゃあ、チエリンにお願い。アッパを起こしてきてあげて。一緒に飯にしましょ」

少女は母親の言葉に大きく頷いて、部屋を飛び出していった。

父親の寝室は、リビングの隣りだった。

少女は背伸びをしてドアノブを回すと、そつと大好きな父親の匂いが満ちた部屋の中に足を踏み入れた。

「……アッパア」

少女は部屋に入つて、キヨロキヨロと周囲を見回した。確かに父親の匂いが濃厚に漂つていて、そこに肝心の父の姿はなかつた。ベッドの上では毛布が人型のまま盛り上がり、ついさっきまで確かにそこに彼が居たことを物語つている。

「アッパア……」

少女の鼻先を、ヒヤツとした朝の湿り気を帯びた風が掠めていく。裏庭に続く窓が開け放され、レースのカーテンが揺れていた。

＊＊＊

男は振り返り、自分の背後にそびえ立つ、鉄条網を張り巡らせた高い塀を見上げた。

丘の上にそびえ立つそれは、まるで中世の罪人を捕らえるための楼閣のようだつた。七年もの長きに渡り、自分を閉じ込めてきた忌々しい塀だが、いざ出て行くとなると、不思議なもので何とも感傷的な気分になる。

ではもう一度、塀の中に逆戻りするか?と問われれば、それは絶

対に固辞したいところなのだけれど。

男が塀から目を逸らし、再び歩き始めようと一歩踏み出した時、カラカラと乾いた車輪の音が聞こえてきた。男が音のする方へ目を凝らすと、遙か先まで続く灰色の塀の向こうから、車椅子に乗った男が現れた。

カラカラカラカラ……

両手で器用に車椅子を操って、あつという間に男の元まで辿り着く。

「……何だよ、出迎えはお前だけか？」

男が鼻を鳴らしながら笑うと、車椅子の男は低い位置から男を見上げ、手が届く範囲の男の太ももをペシンシと叩いた。

「贅沢言つな」

大袈裟に痛がつて見せながら、男が笑う。

「お前、その車椅子、油切てるんじゃないの？ 変な音してるぜ」「知つてのとおり、ウチの組織は金がないんだよ。タダで貸してもらつてるんだ。文句は言えんさ」「へえ……誰かさんとは、エライ違いだな？」

男は皮肉気な笑みを浮かべながら、丘の上から眼下に広がるソウルの街を見下ろした。遠くにソウル市警も見える。

「車、何台来るかな？」

「え？」

「あいつだよ。あいつも、今日こじと木サラバだろ？」

車椅子の男は一瞬深く眉根を寄せると、男の太ももに手を伸ばし、キュッと強く捻りあげた。

「痛ててててつ！ 何すんだよつ！」

「比べて、どうする」

贅沢言つな。

最初に言つた言葉を繰り返し、車椅子の男は仕上げにもう一度、ペシンシと男の腿を打つた。

「……贅沢、ね」

男はツネられた腿を擦りながら、苦笑をこぼす。

「一台あれば充分だろ。車は丘の下に置いてきた
「へいへい、感謝しますよ」
「あと、これ」

そう言つと、車椅子の男は膝の上に置いたジェラルミンケースを男の胸に押し付けた。

「……これなじじや、いられないだろ」
「相変わらず、手回しのいい奴だな。助かるよ」

男はほんの少し複雑な笑顔を浮かべると、ジェラルミンケースを

抱え直し、車椅子の横に並んで歩き出した。

「なあ……といひでお前、どつかいの宝石店知らないか？」

車椅子の男は怪訝な顔で男を見上げた。

「宝石店だと？ シャバに出て、まず真っ先に行きたいところがそれか？」

呆れ顔の車椅子の男とは対照的に、男は無邪気な子どものような顔で頷く。

「あの時は、一つしか買えなかつたから」

男は薄汚れたブルゾンのポケットに手を突っ込んで、隠し持つていた札束の感触を確かめる。

「……揃えてやらなきやな」

車椅子の男は何も言わずに、自分の中の思ひ出に向かって満足そうに笑う男から皿を逸らした。

パイプ椅子に深く腰かけて俯いていたヒョンスは、軋んだ声を上げながら開く取調室のドアの音に顔を上げた。

「調子はどうですか？　口・ヒョンス」

入ってきたミンホは、少しあつれた感のあるヒョンスの顔を見て、勞わるような笑みを浮かべた。その後ろではチョルスが、ミンホよりは難しい顔をしてヒョンスを見ている。

ミンホは静かに自分とチョルスの分の椅子を引くと、ヒョンスの向かいに腰を下ろした。

「……保釈申請が出ています」

座るなり、ミンホは单刀直入に切り出した。ヒョンスは驚くでもなく、ただ落ち着いた様子でミンホの言葉を聞いていた。

「イ・ヒョンジュン氏ですよ」

それは、コリの父親の名前だった。

「君と話したいって」

ヒョ়ンスは静かに首を横に振る。

「手紙も、受け取らないらしいな？ 何でだ？ 親父さんはもちろん、イ・ヒョ়ンジョンはお前に特別に目をかけてきた、第一の父親みたいなもんだらう。あんなに心配してゐるのに、何で……」「ユリは？」

我慢できずに口を挟んできたチョルスの言葉の途中で、ヒョ়ンスは言った。

「ユリには、何で？」

ヒョ়ンスの言葉に、ミンホもチョルスも一瞬黙り込んでしまった。だが、やがてミンホが言ひにへそつに口を開いた。

「……申請は、出でいないよ」

初めてから知つていた そんな表情で、ヒョ়ンスは微笑んだ。

「お前は取調べにも素直に応じてる。保釈したって、ヤクに手を出す危険も、証拠隠滅の恐れもない。高額の保釈金だつて払つてやるつて人がいるんだ。お前さえ望めば、明日にでもこんなとこ出て行けるんだぞ」

理解できないと言つように、チョルスは熱くヒョ়ンスを説き伏せようとする。だが、チョルスが熱くなればなるほど、ヒョ়ンスは反対に落ち着いていくようだつた。

「でも、ユリがいない」

そう言つて微笑むヒョンスの表情は、穏やかそのものだった。満ち足りた表情で繰り返す。

「出て行く時は、ユリも一緒に。ユリの居る場所が、僕の居場所だから」

「今までずっと、下僕扱いされていたのにか？」

喉まで出かかった言葉を、チョルスはグッと飲み下す。

取調べの中でも、ユリやガンホの態度は酷かつた。お互いがお互いへ罪の擦り付け合いをしているだけで、とても自分の過ちを悔いる様子はなかつた。警察官を恫喝したり、ヒステリックに泣き喚く二人の取調べから戻つてヒョンスの取調室に来ると、その落差に複雑な気持ちになる。

「お前がそこまで献身的な愛を注ぐ価値のある女か？」

「チョルスは本気でそう問いただしたくなる。」

幼い頃から側にいて、他の世界に目を向けなかつたから、愛することを義務のように感じているだけじゃないのか？

そんな残酷な問いかけをしたくなるが、ヒョンスの風いだ海のような穏やかな表情を見ていると、言葉を失つてしまつ。

「……僕は、本当にいいんだ。後悔しない」

割り切れない思いに悶々とするチョルスを察してか、ヒョンスの方が気遣うようにチョルスに言った。

「それより、気になつてることがあるんだ」

ヒョウンスは今度はミンホに視線を移し、そこで初めて表情を曇らせた。

「……ナビに、『ゴメン』って伝えて。嘘ついて、『ゴメン』って……ちゃんと、謝れなかつたから」

ヒョウンスの言葉にミンホは微笑んだ。

「気にすることはないでしょ。嘘をついたのは僕らも一緒に、お互い様です。だけど、ちゃんと伝えておきますよ。あの人も、あなたをとても心配していました」

ヒョウンスは膝に手を置いた姿勢で、深く頭を下げた。

ナビが持つ生来の純粋さは、出会う者の心を深く捉える。それは、例え一週間という短い期間であつても変わらない。現に全てを達観したような向きのあるこのヒョウンスでさえも、たとえ愛するユリのためとは言え、ナビに嘘をついたことを気に病んでいる。

本当に、不思議な人だ。

ミンホはヒョウンスを通して、一週間を共に過ごしたナビの姿を思い浮かべていた。

取調室を後にしたチヨルスとミンホは、一人で並んで歩きながら捜査課へ戻った。

ドアを開けるなり、部屋の隅に置かれたテレビから流れる大音量に、一人は仰け反った。型の古い青少年課からのお下がりであるそのテレビは、昼のニュース番組を流していた。

「クムジャ姉さん！ 何でこんな……ボリューム絞つてくださいよつ！」

チヨルスが耳を塞ぎながら文句を言つと、クムジャはテレビの音に負けないくらいの大声で言い返してきた。

「今日が何の日だか、あんた知つてて言つてるの？」
「何の日？ 僕の誕生日はまだずっと先……」

チヨルスが言い終わらない内に、クムジャの放つたボールペンがチヨルス目がけて飛んでくる。ミンホは頭を下げて、上手くその矢を避けた。

「まったく、これだから！ たまにさちゃんとニュースでも見て、勉強しなさい。ほり、じいに来て座りなさい。ミンホ君も」

結局クムジャには逆らえず、一人は渋々テレビを囲む、埃まみれのソファーにクムジャを挟む形で腰を下ろす。ちなみにこれは、鑑識課からのお下がりだ。

クムジャはお気に入りのミンホが側に来てくれてご満悦の様子で、テレビのリモコンを取ると更にボリュームを上げた。

テレビには、見慣れたソウル市警の正面玄関が映し出されている。玄関から門まで、制服を着た警察官が真っ直ぐ一列に並び、もうすぐ姿を現すであろう人物を、微動だにせず待ち構えている。

門の外ではいつくもの黒塗りの車が並び、報道関係者の嵐のようなフラッシュが焚かれている。あまりの明滅ぶりに、画面を見ていたチョルスは目がチカチカしてきた。

「何なんですか？ この騒ぎ」

「あんた、本気で言つてるの？」

クムジャが呆れ返つた声を出したのと同時に、正面玄関から一人の男が姿を現した。

居並ぶ警官たちが、一斉に敬礼の姿勢を取る。フラッシュの嵐は激しさを増し、画面は一瞬、男の顔すら判別できないような白い光の渦の中に飲み込まれた。

画面に大きなテロップが流れた。

『ソウル地方警察庁長パク・ヨンチョル氏、退任』

「あ……」
「ようやく分かった？」

思わず声を漏らしたチョルスに、クムジャは溜息を吐く。

「我らが大ボスの顔、知らないなんて言わせないわよ

それは、若干41歳の若さで、韓国全警察機構の中、1名の治安総監に次いで、わずか4名しかいない治安正監の座につき、今日までの七年間、ソウル地方警察庁長として、事実上韓国国家警察の中核の座に君臨し続けた、パク・ヨンチョルの退任セレモニーの中継映像だつた。

「やつぱり、凡人とは違つわよね」

クムジャがうつとりと画面に釘付けになる。

五十手前の男盛りでることに加え、若々しく潑刺とした容姿に、氣品溢れる立ち居振る舞いで、大きな事件が起きてマスコミへ登場する度に、多くの女性の心を捉えていった。

「警察大学校主席卒業のエリートですもんねえ。辞め方もスマートだわあ」

「警察大学校なら、ミンホだつて同じじゃないですか」

チョルスの言葉に、ミンホがとんでもないと顔の前で手を振る。

「僕なんかとは比較になりませんよ。今でも学校では伝説になつてゐるくらいです。在学中から文武両道で、鳴り物入りで警視庁へ入庁した、エリート中のエリートです」

「おまけに、家柄も申し分ないのよ。亡くなられたお父様も、元治安正監。普通、一世は煮ても焼いても食えない奴が多いのに、彼に限つては父親の上を行つてゐるわね」

「何で、姉さんがそんなに詳しいんです？」

「ゴシップ誌の情報を甘く見ないで」

悪びれもせずに胸を張るクムジャに、今度はチョルスが呆れる番だった。

「上を行つてゐるって……治安正監の上つて言つたら、總監しかないじゃないですか？ しかも、今日で退任なのに？」

チョルスの問いかけに、待つてましたとばかりにクムジャはしゃべりだす。

「バカね！ あれだけの人が、何の目的もなく定年前にただ黙つて退任するわけないでしょ？ 政界進出を目指してゐるよ。第一のステージね」

「それは、確かな話なんですか？」

珍しく話しに食いついてきたミンホに、クムジャは胸を張る。

「間違いないわ。ゴシップ誌にも、確かな情報筋の話つて書いてあつたし」

「……何だよ、結局そつちのネタかよ」

「何か言った？」

舌打ちしたチョルスを見逃さず、クムジャは目を光らせる。

「……いえ、何でも」

チョルスが弱々しく首を振りながら、ソファーの上でじり寄るクムジャから身体を逃がしていた時、捜査課の前の廊下を慌しく走

る足音が聞こえてきた。

バンツと勢いよく開いた捜査課のドアの先には、額に汗の玉を光らせたチョルスたちの同僚が、青ざめた顔で立っていた。

「どうかしたんですか？」

ただならぬ様子にミンホが尋ねると、彼は肩で大きく息をしながら、乾いた声で告げた。

「……ホン・サンギョ警査が、拘置所内で首を吊った」

シーツを引き裂いて紐状にしたものを持ち置所の窓枠に括りつけ、そこで首を吊っていたサンギョの遺体の側には、震える筆跡で書かれた遺書が残されていた。

死後、彼の身辺調査を行つた結果、ギヤンブル癡が高じて膨らんだ多重債務に、首が回らない状況であったのが分かつた。

彼が押収した薬物を粗悪品に加工して量産し、一儲けを企てる場所として明慶大学を選んだ背景には、学長の息子であるガンホを、高校時代に傷害罪で補導しておきながら、それを見逃してやつた経緯があつた。

被害者の少年は危うく失明しかける重傷を負わされたのだが、多額の金を積んで、最終的には被害届を取り下げさせている。

過去のその事件をチラつかせ、ガンホと組んで明慶大学内で薬物売買のための土壤を確立させたサンギョは、そこでの売買で得た金を借金返済に回していた。

ガンホのもう一人の恋人であったノ・ミラが薬物使用による急死を遂げた際も、鑑識への賄賂提供で、事実を隠蔽しようとした。

各大学へ飛び火した大掛かりな事件には違いないが、サンギョの死によって、一連の『エデン』騒ぎは一応の収束を向かえた。

取調室の中で、相変わらずヒステリックに泣き喚き、取調官を手こすりさせていたユリの元に、チョルスとミンホは一人で出向いた。疲労困憊という様子の取調官とバトンタッチして、二人はユリの前に腰を下ろす。

「何よつ？」

ユリは興奮し、泣きはらした目でミンホを睨みつける。

「あなたの恋人は、落ちたぞ」

チョルスが冷たい声で告げる。

「相棒だつた刑事がな、自殺したんだよ。自分の悪事を全部暴露してからな。あなたの恋人も、もつ言い逃れできないつて悟ったのさ」

チョルスの言葉に、ユリは大きな目を見開いて、深く息を吸つたまま動かなくなつた。

「あなたは、どうする？」

チョルスの後を引き取つてミンホが続ける。

「ヒヨンスはね……保釈申請を断りましたよ」

固まつていたユリの肩がピクリと動く。

「本当は明日にでも出て行けるのに、外にはあなたが居ないから、そう言つてました。あなたの居る場所が、自分の居場所だと」

唇が震え始め、それをグッと噛み締めると、コリは横を向いてミンホから田を逸らした。

「……バカみたい。本当、バカな奴」

その姿勢のまま、やがてコリの瞳からは大粒の涙が溢れ出し、頬を伝つて取調室のデスクの上に弾けて落ちた。

「昔つから、そうだった パパは出来の悪い私より、賢いヒョンスの方がお気に入りで……実の娘より、ヒョンスが可愛いのよ……あいつは、それを知つて……バカみたい……勝手に、負い目に感じた……そんなことされたら、私が、余計惨めになるじゃない……」

…

コリは子供のよつに泣きじゃくり、しゃつくり上げながら話し続ける。

「どんなにワガママ言つても、何でも聞いて……受け入れて……」

「あなたは、叱つて欲しかったんですか？ ヒョンスに？ それとも、お父さんに？」

「甘えるな！」

ピシャリとチョルスが言い放つ。

コリは濡れた瞳のまま、ハツとしたよつに顔を上げた。

「いい加減逃げるのやめて、自分で直接聞いたらどうだ？ いくら親子だつてな、テレパシーがある訳じゃないんだ。恨み言でも何でも、口にしなきや分かんねえぞ」

唖然とした顔でチョルスの言葉を聞くコリに、ミンホが告げる。

「……面会に来たいそりですよ。お父様が」

デスクの上に置いたコリの指が、小刻みに震えだす。

「どうあるよ？ む娘さん」

そんなコリの様子を見つめながら、チヨルスが静かに問いかける。

「一度くらい、面と向かって勝負したっていいんじゃねえか？」

俯いた頬を伝う涙が、コリの手の甲でいくつも弾ける。

チヨルスとミンホは、そんなコリの涙がひとしきり乾くのを、静かにその場で見守つてやつた。

「もう戻つてくるなよ」

そう言つて背中を押した、付き添いの看守を振り返つて深々と頭を下げる、ロ・ジョンヒョンはここ数週間を過ごした拘置所を後にした。

身柄を拘束されていたジョンヒョンにも、『エデン事件』の黒幕が警察官で、尚且つ自殺したこと、それにより現在署内は混乱の極みに達していて、自分のような小物への取調べどころではないのだという事実は、薄々分かっていた。

大きな渦の中に巻き込まれたようでいて、それでいて最後には締め出されたような形になり拍子抜けした感は否めなかつたが、これでもうこれ以上薬物が学生の間に出回ることはなく、ジスクの身が

危険に晒されることもない。

出所後は、どんなに跳ね除けられてもペク・ギヨウンに頼み込み、ジスクを迎えに行こうと心に決めていた。

背中を丸めながら歩いていた時、不意にけたたましいクラクションの音がして顔を上げた。

車線を隔てた向こう側に、黒い車が止められていた。

スマートのウインドウが開き、中から軽薄なサングラスをかけた男が顔を出す。

「お勤め、『苦労さま』

間の抜けた能天気な声の主の隣りでは、彼が出所後真っ先にその居場所を探そうと思っていたペク・ギヨウンが、相変わらず眉間に深い皺を刻んだ鬼の形相で、ジョンヒョンに睨みを利かせていた。

「乗れ。早く」

ギョウンが不機嫌に顎をしゃぐると、後部座席のドアのキーが開く低い音が響いた。

促されるまま、ジョンヒョンは慌てて車に駆け寄り、後部座席のドアを引いた。

その時だった。

「……あ……何で？」

それだけ言うのが精一杯だった。

車の中には、彼がこの半年、探し続けた人物。片時も頭の中から離れることの無かつた少女、ジスクが座つて、戸惑いがちにジョンヒョンを見上げていた。

「感動の再会は後にしてさ、早く乗つてドア閉めてくれない？ せつかく効いてる冷房がもつたい無いでしょ？」

サングラスをすり上げながら、オーサーが苦笑する。ジョンヒョンはぎこちなく、ジスクの隣りに乗り込む。

低いエンジン音を立てて車が発進すると、車内は途端に気まずい沈黙に包まれた。

「あの……」

「えつと………」

一人同時に口を開き、お互に慌てて口を閉ざす。

「どうぞ、先に」

「いや、君から」

埒の明かない会話に介入しようとギョウウンが大きく息を吸い込んだ瞬間、オーサーは「邪魔するな」とギョウウンの腿をつねった。

「どうして、ここ? 今まで一体どこ………」

「先生が助けてくれたの。クスリを抜くために、済州島でリハビリ

を……
「済州島?」

そんな遠い場所で。

どうりで、ソウル中を探し回つても足跡一つ見つからぬ訳だ。

「先生から全部聞いたの。あなたが私を助けるために、ずっと私を探してくれていたって。自治会とは関係のないあなたが、警察に捕まつてまで」

なぜ?

その日は暗に、ジョンヒョンにそう問い合わせている。

答えなど言つまでもない。

それでも、口にしなければ決して伝わらない」とがある。

「……それは」

ジョンヒョンがじぶんもじぶんになりながら口を開きかけたその時、

オーサーの視界の隅で、バックミラーにキラリと何かが反射するの
が見えた。

サングラスの中の目を細めて、オーサーはハンドルを握ったまま
ミラーの中で後方へと流れていく景色に意識を集中させる。
カメラのレンズのように絞られたオーサーの目が、反射した物体
を捕らえた瞬間、オーサーは急ハンドルを切った。

「伏せろっ！」

鋭く叫ぶのと、車が反対車線を越えて崖沿いのガードレールに激
突する音、そして、キュンッとごく小さく空間を引き裂く音が車内
の空気を震わせるのはほぼ同時だった。

「一体、な……」

衝撃で開いたエアバックに顔を埋めたギョウンがくぐもった声を
上げる。その時、後部座席から鋭い悲鳴が上がった。

「……あ……ああ……ジョンヒョ……」

驚いて振り返ったオーサーとギョウンの目に、両手を血塗れにし
て、ガチガチと歯を鳴らすジスクが映った。

その彼女の膝元には、グッショリと後頭部を血に染めたジョンヒ
ョンが横たわっている。

ジスクの手やジョンヒョンの頭が血で汚れていることを覗けば、
それは睦まじい恋人たちが、膝枕で甘え戯れている光景と何も変わ

らない。

車内を覆いつくす、生臭い血の匂いさえ無ければ。

ギリッ と唇を噛み締めて、ギョウンは向き直ると、シートベルトを外し、蹴破るように助手席のドアを開けた。

「止めろッ！ 外へ出るなッ！」

オーサーがギョウンの首根っこを捕まえて、急いで車内へ引きずり戻す。

キュンッと再び空気を裂く音がして、まだ車外に残っていたギョウンの足先を掠めて、アスファルトを抉つた弾丸が火花を上げた。

「上から狙われてる。今車外へ出たら、相手の思う壺だ」

そう言つた傍から続けざまに銃声が鳴り響き、ボンネットやフロントガラスに銃弾の雨が降る。

ハンドルに顔を埋め、身を低くして鉛の雨に耐えていたオーサーが、ようやく雨の切れ間を見つけ顔を上げた時、自分たちがたつた今降りて来た、拘置所のある山の上の木々の合間から、ひっそりヒターンする白い車の陰が見えた。

シャツの下、生身の腰に当たる銃の感触を確かめながら、オーサーは一気に車外へ飛び出す。

去つていく車のタイヤを狙つて引き金を引く。

「ツクソ、届かない」

歯噛みするオーサーを嘲笑うかのように、またもやキュンッと小

さな音を立てて飛んできた銃弾が、オーサーの右頬を掠めた。

「……ツ！」

オーサーは咄嗟に開け放つた車のドアの陰に身を隠す。その隙に、頭上で不穏な動きを見せていた白い車は見えなくなってしまった。

「……ジヨンヒヨン……こやよ……田を開けて……」

車内からは、ジスクの悲痛な泣き声が聞こえてくる。

オーサーは息を乱したまま、車体に身体を預けて天を見上げる。初めから、自分たちが今日ジヨンヒヨンの身柄を預かりに来るのを知つて、張られていた。

頬を掠めた銃創が、焼けるような熱さを伴つて、ドクンドクンと脈打つている。

一体なぜ？

防げなかつた。

膨れ上がる疑問とともに押し寄せる自責の念が、脈打つ傷口と連動してフツフツと込み上げる怒りに変わる。オーサーは手の中の銃をきつと握り締めた。

長い梅雨が明けた。

韓国を代表するビーチ、釜山の海雲台海水浴場では早くも海開きが行われたと、今朝のニュースで報道されていた。

ミンホは捜査課の自席に座りながら、窓へと目をやり、カラッとした晴れ上がった初夏の空を見上げる。

『ペニーレイン』を追っていた時、チョルスに冗談交じりに言われて作成した『逆さにしたテルテル坊主100個』は、未だに警察署の軒先にぶら下がっている。

風が吹くと、その100個は仲良く並んで身体を揺らし、まるでダンスを踊っているようだ。

不器用なダンスは、あの雨の夜、明慶大学での誰かさんのラストダンスを思い起こさせる。

何度も何度も足を踏まれた。

グハハーン、グハハーン、グハハーン……

不意に尾を引くようなあの独特のハスキーボイスの笑い声が聞こえてきた気がして、ミンホはブルッと頭を振った。

窓辺の逆立ちしたテルテル坊主にもう一度目をやると、今度は一体一体がナビの顔に見えてきた。

「……っ?—」

思わず立ち上がるミンホに、周囲が驚いたよつて振り返った。

「どうしたの? ミンホさん」

「……あ、いえ……何でも。すみません……」

居た堪れない思いで再び着席するミンホを、周囲は奇異な物でも見るような目つきで見てするのが分かる。

ミンホは頬が熱くなるのを感じながら、恥ずかしさを誤魔化すように椅子に深く腰かけ直した。

「ねえ、これ……もういい加減片付けたらどうかしら? 雨がひどくなつて汚れてるし」

その時、窓辺のテルテル坊主を指して、クムジャが言った。

「明日、燃える火の田だし……」

そう言ひながら、窓辺のテルテル坊主に手をかけよつとしたクムジャの元へ、思わずミンホは走り寄つていた。

「待つて! 姉さん」

突然手首を掴まれたクムジャは、驚いてミンホを振り返る。

「姉さんに、そんなことをさせられません。時間のある時、僕が片付けてますから……」

「まあ!—」

単純に自分を気遣つてくれたのだと思つたクムジャは、頬を染めて喜んだ。ミンホは気まずそうに微笑みを返しながらクムジャを窓辺から追い払うと、開いた窓から、再び空を見上げる。

あんなに毎日ドンヨリと重くのしかかるような雨雲に覆われていたのが、信じられないような晴天だった。

若者であれば余計に、解放的になり遊びに繰り出したくなる、ご機嫌な夏の到来だと喜ぶのに、ミンホの口から漏れるのは溜息ばかりだった。

「窓の外に、何かいいモノでも見えるのか？」

ミンホはなぜかポツカリと心に穴が開いたような気持ちになっていた。

「おー、どうした？ ポーっとして」

その時、急に背後から肩を叩かれてミンホは飛び上がった。

ミンホの肩を抱きながら、チョルスも一緒にになって窓から顔を出す。眼下に広がるのは、激しく行き交う車の流れだけだった。

「何だよ。セクシーな姉ちゃんでもいるのかと思つたのこ

ブツブツ言いながら、チョルスは早くも飽きたとでも言つたげに窓から頭を引っ込めた。

「……チョルスヒヨン」

「ああ？」

窓に背中を預けてもたれるチョルスに、ミンホが恐る恐る尋ねる。

「……あの人たちは、どうしているんでしょうか？」

「あの人たち？」

「……『ペニー・レイン』の」

「ああ」

ミンホの言いたいこと分かつて、チョルスは頷いた。

「相変わらず、好きにやつてるんじゃないか。気のみ気のまま、自由に飛び回つて。ひょっとしたら、ソウルには居ないかもしないな」

ソウルにいない

何気ないチョルスの一言に、ミンホの胸がザワザワと音を立てる。そんな自分の反応に、自分自身が一番動搖する。

「まあ、縁があればそのつひ、またどつかで出くわすぞ」

縁があれば。

確かにその通りだつた。

逆に言えば、もう偶然以外に『ペニー・レイン』に出逢つことない。

「おいつー、チョルス、ミンホー、出動だ」

その時、電話を取つた捜査官の一人がチョルスとミンホを振り返つて言つた。

「長安洞の風俗店がシッポだしやがつた！」

チョルスの目がスッと細められ、刑事のそれに変わる。

それは、数日前から追つっていたソウルの歓楽街の代名詞とも言つべき長安洞での、地下営業の風俗店の取り締まりだった。経営母体が裏でマフィアに繋がっているとの情報を掴み、慎重に捜査を重ねていた。

今日は店に、そのマフィアの幹部が訪れているらしい。一気に摘発するチャンスだった。

「行くぞ、ミンホ！」

「はいっ！」

呆けていた自分に喝を入れなおし、ミンホはチョルスと共に長安洞へ向かつた。

色とりどりのネオンが揺れる長安洞は、全盛期の頃と比べると明かりの数も消え、昔ほどの活気は無くなっていたが、今もソウルを代表する歓楽街として、清濁入り乱れた地下社会が形成されている。問題の風俗店の前では、既に駆けつけた何名もの警察官と客や従業員などが揉み合い、大変な騒ぎになっていた。

あられもない姿の女の写真を載せた看板が倒れ、飛び散ったガラスが道路の上で煌いていた。

チョルスはそんなガラスを踏み分け、人ごみを掻き分けながら、ズンズンと店の奥に進む。ミンホもチョルスの姿を見失わないように後を追つた。

「ちくしょうつ！ 離しやがれつ！」
「触るなつ、このつ！！」

店のあちこちから聞こえてくる罵声。バスタオル一枚を胸に巻いた姿のまま、部屋の隅で一塊になつて震える女たち。

表向きはマッサージ店であり、その実態は春を売つてているという、よくある地下営業店だったが、売上金の一部がマフィアの資金になつているとあつては、見過ごすわけにはいかなかつた。

粗末なカーテンで仕切られたいくつも並んだ個室を、チョルスとミンホは端から確認していく。

その時、勢いよくシャツと音を立てて開けたカーテンの隙間から、少年が一人飛び出してきた。

「……つづーーー！」

少年は頭からチョルスの腹に突っ込むと、そのままチョルスをなぎ倒し、自分は慌てて立ち上ると、脱兎の如く駆け出した。

「……ミンホッ！… 追えつ！… 逃がすなつ！」

苦しげに呻きながらも、チョルスが鋭く指示を出す。
ミンホも弾かれたように少年の後を追つて駆け出した。

店を出て、少年は細い路地を自在に駆けていく。

息を切らせながら、逃すまいとミンホも必死に後を追う。毒々しいネオンに反射して、視界の隅で少年の鮮やかな金色の髪が揺れる。何本目かの路地を曲がった時、不意に少年の足が止まった。路地の先端は、行き止まりになっていた。

「……もう、追いかけっこは、終わりですよ」

追いついたミンホが、ジリジリと少年の背中に近付いていく。

「諦めて、こっちへ来なさい。君みたいな年少者に、手荒なマネはしたくない」

そう言つて手を差し出したミンホに向かつて、少年は路地の脇に積まれていたビールケースを投げつけた。

「抵抗しても無駄ですっ！ 大人しく、言つこと聞きなさいっ！」

ミンホは次々に飛んでくるビールケースを避けながら、一気に少年との間合いを詰めて、遂にその手首を掴んだ。

その時、金色の髪の下に片耳だけつけたピアスが、路地から漏れるネオンの明かりに反射してキラリと輝いた。

その瞬間、ミンホの鼓動がドクンッと跳ね上がる。

「……っあ

振り返ったのは、二キビ痕の田立つ、まだ二十歳にも満たないであらう少年だった。少年は一瞬ミンホが力を緩めた隙を見逃さず、その手を力いっぽい振りきると、再び路地を逆走して、ネオンの街へと消えた。

少年の背中を見送りながら、ミンホは動けなかつた。
一瞬、躊躇した原因は分かつていた。

少年が、ナビの姿に見えた

「馬鹿野郎っ……」

腹の底から搾り出されたようなチョルスの怒声が、捜査課の部屋中に響き渡る。

「……あ……痛てて」

だがそのすぐ後、情けなく腹を押さえながら身を捩る。そんなチ

ヨルスを、クムジャが呆れ顔で支えてやる。

「行き止まりまで追い詰めて、取り逃がすたあぢうこいつことだよ？ああ？！ 何か理由があるなら聞いてやるから、言つてみろ」

「……いえ。気が緩んでいました」

「気が……緩んでた、だと？」

ミンホの言葉は、チョルスの逆鱗に触れた。

「ふざけるなよつーー。お前つーー。あ……痛ええええつーー。」

怒りで顔を真っ赤に染めたチョルスは、今度は痛みで更に顔の赤みを増した。

「ちよつと、あんたも落ち着きなさいよ。ひとまず、座つたり？」

クムジャに手を貸してもらいながら、チョルスが椅子に腰を下ろす。ミンホが手を差し出すと、チョルスは邪険にその手を振り払った。

「現場で悪い抜くなんて、随分お偉くなつたもんだな。そんな奴とはコンビなんか組めねえな。お前、刑事向いてないんじゃないの？」

皆の前で激しく叱られ、ミンホは唇を噛み締めながら黙つてチョルスの言葉を聞く。

「出でけ。今は顔も見たくない」

チョルスが吐き捨てるど、ミンホはグッと握つた拳に力を入れ、そのまま静かに頭を下げた。

「……すみませんでした」

短くそう言つと、ミンホは言われたとおりに捜査課のドアに向かつて踵を返した。

「ミンホ君っ！」

「放つとけ！」

後を追おうとするクムジャを、チヨルスが鋭く止める。パタンと扉が閉まり、ミンホは一人部屋を出て行った。

「……ミンホ君」

警察署の屋上からソウルの街を見下ろしていたミンホの背後から、クムジヤが声をかけた。

「……姉さん」

振り返ったミンホは氣まずそつに田を逸らしながら、クムジヤに向かつて頭を下げる。

「……わつわは、すみませんでした」

クムジヤはミンホの横に並んで、一緒に外を行き交う人や車の波に田を落とす。

「……チョルスのことなんだけど」

「は」

「誤解しないでほしの」

思わず顔を上げて覗いたクムジヤの横顔は、いつも勝氣で、自分たちをコテンパンに言い負かしている手強い姉御の顔ではなく、慈愛に満ちた優しい表情をしていた。

「荒っぽくて、口も悪いし手も早いけど、根は本当にいい奴なのよ。ただ、致命的に不器用なだけ。さつきもあんなに怒ったのは、犯人

を取り逃がしたことだけじゃないのよ」

クムジャが困ったような笑みを浮かべてミンホに向き直る。

「勿論、それもあるけど、チョルスが一番腹を立てたのは、ミンホ君自身に、命の危険があつたかもしれないってことよ。それを分かつて欲しかったのよ。現場では、自分で自分の身を守るしかないことばかりだから」

ミンホはうな垂れるしかなかつた。

その通りだと思った。

「あなたが来る前、チョルスとコンビを組んでた先輩が大怪我したって話したことあつたわよね。チョルスは入庁した時からそのソン先輩にベツタリでね、それこそ金魚のフンみたいに、どこにでも付いて回つてた。だから、あなたとコンビを組めつて上に命令された時も、随分駄々こねて渋つたのよ。だけどね、あなたとこうして事件を追う中で、チョルスは変わつたと思うわ。粗野なところは相変わらずだけど、あなたに対して先輩としての責任をちゃんと感じてる。ソン先輩に教わつたことを、あなたに伝えようとチョルスなりに必死なんだと思うわ」

分かつてやってね

そう言つと、クムジャはフワリと優しい笑顔を浮かべた。

ミンホは、他の場所では『狂犬』と恐れ罵られながらも、捜査課の中ではクムジャを始めとした理解者に囲まれ信頼を得て、一人の刑事としてのチョルスの筋の通つた姿に改めて尊敬の念が生まれるのを感じていた。

「……」めんなさい。ありがと「じゃ」ります、姉さん

ミンホがそう言って頭を下げる。クムジャはいつも姉御の顔に戻つて言った。

「お腹が空いて、気が立つてたのもあると想つわ。子どもと一緒にだから。降りてくるなり、お昼過ぎがチャンスよ。あいつの機嫌もいい加減直つてるでしょ。一ワトリと一緒にだから、怒りも持続しないわよ」

そう言ってカラカラ笑うと、クムジャはミンホを置いて屋上を後にした。

クムジャの背中を見送つてから、ミンホは屋上の柵にもたれて、晴れ渡つた空を見上げる。

そう、刑事が現場で気を抜いていい筈がない。

もういい加減、気持ちを切り替えなくては。

ミンホは自分の気持ちを整理するために『心ここにあらず』の原因を作り出した張本人の姿を、青い空に思い描いてみる。

明慶大学のダンスパーティの夜、連行されるヒョンスを見て泣くナビを思わずこの腕に抱きしめた。

見慣れない『女装姿』^{ドレス}に、正直に言つと気持ちが混同していた感も否めない。

あの人は“男”だ。それはちゃんと分かっている。

だがあの時は、そうせずにいられなかつた。

抱いて、あの華奢な背中を落ち着くまで擦つてやりたかつた。

意地つ張りで、可愛げがなくて、言動も容姿も何もかも子どもみたいなくせに、やたらと年上であることを誇示しようとする。

見ていると危なっかしくて、ハラハラして、イライラして、放つておけなくなる。

何をしでかすか分からぬから、常に見ていないくちや、その背中を視界に納めていなくちや、そんな調子で一週間を過ごしたから、目を煩わせるその存在が不意に無くなつてしまつと、ビックしていいか自分でも分からなくなつた。

全ての検査を終え、店を畳んだ状態での『ペニー・レイン』つまり、キャンピングカーの前でチヨルスと一人で別れの挨拶をした時、ナビは自分の爪先に視線を落としたまま、なかなか顔を上げようとしなかつた。

「……協力、ありがとうございました」

仕方なく、ミンホの方から先にナビに声をかけた。ナビは唇を尖らせながら爪先を見つめたままだつたが、やがてポツリと聞き取れない程の小さな声で呟いた。

「……結構、楽しかったよ」

そう言つと、突然ガバッと顔を上げ、ニカツという効果音がピッタリの屈託のない全快の笑顔で言つた。

「またなあつ……」

耳元で炸裂した鼓膜がおかしくなるくらいのボリュームのハスキーボイスにミンホが田を白黒させている隙に、ナビはジョビンの待つキャンピングカーにさつわと乗り込んできました。

その横を、灰色猫の“オシマ”が、まるでミンホを小馬鹿にするような優雅な仕草で通り過ぎ、当然といつ顔をしてナビの膝の上に収まつた。

気のせいか、意地の悪い田をしたこの猫は『ペニーレイン』と共に着いていける筈も無いミンホを助手席の上から見下ろして、「諦めろ」と告げてくるように見えた。

砂埃を巻き上げて、キャンピングカーが走り出す。

「ナビヒヨン……」

思わず叫んで開いた車の窓を見上げたミンホに、ナビはあるの独特の声で笑いながら、手を振つた。

またな？

簡単に言つけど、本当に『また』会える？

雨の時にしか、姿を現さない。

簡単に捕まえられない『ペニーレイン』。

雨と一緒に生きるジョビンとナビ。

捜査を終え、ジョビンの隣りに帰つて、心底嬉しそうに笑うナビ。一週間の間、自分にそんな顔を見せる」とはなかつたのに。

何に対しか分からぬ悔しさと、心に穴があいたような寂しさを抱え、ミンホもまた日常へと帰つていったのだった。

「……チョルスヒョーン」

資料室のビデオルームにチョルスがいるところの話を聞き、ミンホはチョルスの後を追つた。チョルスはヘッドフォンを嵌めて、今回の風俗店摘発で押収したビデオテープの一つをチェックしていた。

「チョルスヒョーン」

先ほどよりも少し大きな声で呼びかける。チョルスは回転式の椅子を回してミンホに向き直ると、ようやくヘッドフォンを取つてくれた。

「……何だよ?」

相変わらず、正面からその鋭い目で見られると訳もなく緊張する。だが、ここで引いてはいけなかつた。

「……本当に、申し訳ありませんでした」

深く深く、頭を下げる。

「チョルスヒョーンの言つ通りでした。刑事として、あつてはならない行動でした」

狭いビデオルームに響き渡るミンホの固い聲音は、頭を下げられてくるミンホの方が面食らつた。

「何だよ、突然……」

「僕、ちゃんと一人前になりたいです。チョルスヒョンみたいな、一人前の刑事になりたいんです」

ミンホは頭を下げたまま、真剣な口調で言い募る。

「俺も別に……一人前なんかじゃねえよ」

氣恥ずかしさを隠すように、モゴモゴとチョルスが答える。

「一度と、現場で氣い抜くな

「はい」

「俺とこれからもコンビ組むつもりだったら、『僕ちゃん』は卒業だぜ。一人前の男になれよ」

「はいっ！」

氣合を込めたミンホの返事に、チョルスはニヤッと口角を上げて笑った。

「じゃあ、早速仕事だ」

そう言つと、チョルスは先ほどまで自分がかけていたヘッドフォンを、ミンホに向かつて放り投げた。

「ビデオん中に映りこんでる、顧客の身元の割り出した

ミンホは受け取ったヘッドフォンを頭にセットすると、チョルスの隣りに腰を下ろして、モニターを食い入るように見つめた。

東の空が白み始めた頃、漢江のほとりに、闇と同じ色をした黒い車がそつと横付けされた。

今は小さな骨壺の中に納まつた男を胸に抱いた少女は、白い韓服姿のまま、海へと向かう漢江の早い流れの前に立つた。少女の髪には、喪帳である白いリボンが結ばれている。

「直系家族でもないのに」

韓国における葬式のしきたりである、直系家族が身につける正装をしたジスクの後姿を田で追いながら、ギョウウンが呟く。

「天涯孤独の身の上らしいよ。工業高校を卒業する頃、両親をいっぺんに亡くして、親戚とも絶縁状態らしい。葬式を出してやる家族もいなんだ」

「笑つちまう。陳腐なドラマ並みに、不幸なヤツ」

だがそういう呟き捨てるギョウウンの声は、嘲笑じるか涙を含んで湿つていた。

「あの射程距離……」

ボソリと呟いたオーサーの言葉に、ギョウウンが振り返る。

「……素人の腕じゃない」

「だとしても、何であいつが？ あんな、下つ端の、ガンホと直接

会つたこともないようなあいつが何で殺されなきゃならねえんだよ！」

「だからそれが、不可解だつて言つてゐるんだよ」

激高するギョウンを宥めるよつて、オーサーは努めて冷静な声で言つた。

「今更だけど、こんなに早く釈放されたのも考へてみればおかしいんだ。仮にもジョンヒョンは警官を一人刺してゐる。命に別状は無いにしても、相手は重傷だ。『H-トラン』事件とは別にして、簡単に拘留が解かれるような罪じゃない」

「まさか……」

自身の思い当たつた恐ろしそうな仮定に、ギョウンが思わず言葉を詰まらせる。

「最初から殺すつもりで、わざと釈放を？」

震えるギョウンに、オーサーは無言で頷いて見せる。

「俺たちに知られたくない何かを話される前に、あの山の中でケリをつけたつもりだつたんだ」

「知られたくない何かって何だよ？ あんな奴が、そんな大層なこと、知つてゐるわけ無いじゃねえか」

ギョウンは拳を握り締め、悔し涙が頬を伝つた。

小さな骨の粉に変わつたジョンヒョンが、ジスクの手のひらからサラサラと風に乗つて、漢江の河流に向かつて流れしていく。

「好きだから、だよつ！」

その時突然、ギョウンはジスクの背中に向かつて叫んだ。

「死ぬ直前に、あんたに言いかけてただろ。大学生でもないくせに、恋人もいるあんたを助けるために、ヤクの密売に首突っ込んで、警察に捕まつた理由なんて、それしかないじゃねえか！」

振り返つたジスクの瞳に、新たな涙が溢れだす。

ジョンヒョンの骨が舞うのと同じ方向に、彼女の黒髪が流れ、涙に濡れた頬に張り付く。

「バカな奴……詰まんねえ死に方しやがつて……本当に、バカな奴だよつ！」

胸に広がる理不尽な怒りを持て余して、ギョウンは身体の向きを変えると、思い切り車のタイヤを蹴飛ばした。いつもなら叱りつけるところだが、泣きながら拳で幾度もボンネットを殴りつけるギョウンを、オーサーは今日だけは何も言わずにそつと見守つてやつた。

ガシャガシャ、ワシャワシャ……ザーザー。

鼻の頭に洗剤の泡を乗せながら、ナビは猛烈なスピードで皿を洗つていく。対面カウンターには新聞を広げながら、ドービーに口をつけているジェビンの姿がある。

ここは、ソウル北部に位置する北漢山^{ブッカンサン}国立公園の麓。ソウル市街から地下鉄・バスを乗り継いで簡単に行ける距離にあるため、人気の登山コースになっている。

都市部と違い、紛れ込んでくる醉客の数も少ないので、ちょっとした休養も兼ねて、ジェビンたちはこの自然豊かな地に一週間ほど前から滞在していた。

今日はよく晴れ渡り、北漢山^{ブッカンサン}の緑も萌えるように鮮やかに見渡せる。

梅雨の間中開店して、水分をふんだんに吸つてしまつた黒テントを、青空の下で組み立てて、こうして日干しすることで湿気抜きをしていた。

「ふああああああ

ジヒビンが口元を押さえることもなく、せっかくの美貌が台無しになることも厭わずに、大あくびをして目尻に涙を浮かべた。

「ナビは、働き者だねえ」

寝ぼけまなこを擦りながら、ジエビンが感心したよつて呟く。

「兄貴は、怠け者だねえ」

ナビが笑いながら、濡れた手でジエビンに向かって雪を飛ばす。

「冷たつー、ちょっと、酷いよ。ナビッ！」

こんな兄弟同士の他愛ない戯れを、突然割り込んだアベルの音が中断させた。

「あー」

「……何だ、お前か

一人同時に振り返ったナビとジエビンは、戸口に佇む見慣れたシルエットに、対照的な反応を見せた。

「や、お久しぶりー」

ヒラヒラと振りながら、勝手知ったる顔でオーサーはジエビンの隣り、ナビの対面のカウンター席に腰を下ろした。

「失礼ですがお客様。本日は開店休業日でね。誰が、勝手に入つて良いって言ったよ?」

冷たく横目で一瞥するジエビンを物ともせずに、オーサーはニッコリ微笑む。

「そうそう、だからね。ナビヤをデートに誘いに来たんだよ。休み

の日ぐらこ

皿洗いなんかオーナーに任せせて、俺と登山テートに行こうよお

「先生に登山する体力なんてあるの?」

「何言つちやてんの? 俺、こつ見えてもムキムキよ。兵役だつてちゃんと勤めたモンね。お望みとあらば、ナビにだけは見せてあげるよ? だから、このまま山の奥へ……」

言いかけたオーサーの頭を、丸めた新聞紙がスパーンッと小気味良い音を立てて弾く。

「国立公園で、遭難したい?」

絶対零度の笑みを浮かべて、ジエビングが微笑む。

「つたく、相変わらず激しいなあ」

オーサーは叩かれて乱れた髪を手弔で整えながら舌を出した。

「はいはい。筋肉は、オーナー様には適いませんよ……調子に乗りました」

「分かればよろしい」

カウンターに額をつけるオーサーの頭をポンポンと丸めた新聞紙でつつくジエビングの様子を見ながら、ナビがクスクスと笑つた。

「今までずつとビ」にいたの? ソウルを離れる時も、絶対ついてくると思つたのにさ」

「あれ? 俺がいなくて寂しかった?」

懲りずに身を乗り出すオーサーの襟元を掴んで、ジエビングが引き

戾す。

「そんなんじゃないけど。何かあったの？」

あつさつ否定しながらも、ナビは少し心配そうにオーサーの顔を覗き込んだ。

「それに、その頬つべた。怪我したの？」

オーサーの青白い頬には、大きく目立つ絆創膏が貼られている。

「どうせ、女にやられたんだろ」

ジーピンが呆れ顔でそう言つと、オーサーは絆創膏の上に手を沿え、わざと可愛らしく首を傾げた。

「やうなのお。色男は辛いわあ
「何だよ、心配して損した」

ナビが呆れ顔で肩を竦める。

「そんなことばっかりやつて、いつか女人に刺されても知らないからね」

「だから、これからはナビ一筋でいくからー」

「お断り！」

「やん、相変わらずツレないねえ。でも、そこが好きー」

「おい、いい加減にしとけよ」

いつもの軽口の応酬が始まると、あつといつ間にそこは普段の『ペニー・レイン』の空氣に変わる。テントを開く場所が変わつても、

ナビとジービン、フタコと氣まぐれに現れるオーサーがいれば。

「それにしても、ナビ。随分手際が良くなつたよね」

ジービンは新聞を置んでナビに向き直ると、先ほどオーサーに向けていたものとは打って変わつた、優しい笑顔を浮かべて言った。相変わらず、洗剤やら水やらはシンクの周囲や足元に跳ね飛ばされ、後でジービンが拭き掃除をしなければならない状態だったが、短時間に処理できる皿の量が格段に増えた。

「ああ、これね！ ノツガあつてわ……」

ナビは褒められたことでパアアツと顔を明るくさせて、言った。

「バケツを一つ用意してさ、汚れた皿を入れたやつ、隣りにはキレイな水を張ったやつ。どんどん洗つて、キレイな方に入れていけば、ゆすぐ時間も半分で済むんだ」

「へえ、ナビにしては随分効率的な方法思いついたね」

「ナビにしてはって、何だよつ！」

思わず本音が漏れたオーサーに向かつて、ナビは先ほどジービンに食らわせたのと同様の、水しづきの攻撃をお見舞いした。

「いやいや、でも物事を効率的に進めてくのは大事なことよ
「あいつも同じこと言つてたよー」「皿には『ナビヒヨン、頭使
いましょ「つ』って、生意氣に……」

すると、突然ナビがハツとしたように口を開いた。

「ん？」

気付いたオーサーが先を促す。

「……何でもない」

ナビはキュッと唇を結んで、オーサーから目を逸らした。
怒ったように、ガチャガチャと洗い物を続ける。

『『可愛い子には旅をさせよ』って諱、本当だつたね』

ジョビンがそんなナビをフォローするように、優しく微笑みながら言った。

『成長してくれて、俺は嬉しいよ』

ナビはわずかに頬を染めて、また忙しなく洗い物に没頭した。

*

「ナビー！ 飯にしよう

午後一時を過ぎてから、遅い昼食の準備を整えて、ジェビンがナビを呼んだ。洗い物の後、ジェビンに許可を得て、オーサーと一人でテントの前で自前のサッカー・ボールでリフティング対決をして遊んでいた二人は、ジェビンの声に一斉に振り返った。

「天気がいいから、たまには外で食べようぜ。景色もいいし」

そう言つて、ジェビンは簡単な折りたたみ式のテーブルと椅子のセットをテントの中から運び出してきた。

「やつたー、俺もう腹ペコペコ」

素早く駆け寄つたオーサーに、ジェビンが素つ氣無く言つ。

「あれ？ いつ先生もお呼びしましたつけ？」

「お前まで、つれないこと言わないでよお。老体に鞭打つて、ナビヤの相手してあげてたじやない」

「ナビの相手は、お前が好きでしてたんだろ？」

冷たいジェビンの言葉に、オーサーは大げさにうなだれてみせる。

「俺にも、メシー・ジヨビンのメシー」

「もう、分かつたよ。仕方ないな」

なぜかナビがそれに答え、オーサーの分の皿もテントの中から運んできてる。

みんなテーブルに着いたところで、ジヨビンに放つて皿で手を合わせる。

「いただきまーす！」

青空の下、郊外の澄み切った空氣の中で食べるジヨビンの手料理は最高だった。

ナビがジヨビンお手製のチャプチ^{朝鲜语: 카프치}（韓国風春雨の炒め物）を口に運びながら、ウーッと感嘆の声をあげる。

「やつぱつ、兄貴の料理は最高だねっ！ ほつれん草でしょ、にんじんでしょ、もやしでしょ、牛肉の千切りでしょ？ チャプチ^{朝鲜语: 카프치}は具が多いほど、高級感が増すでしょ？ あいつのチャプチ^{朝鲜语: 카프치}なんて、麺ぱつかで……」

言にかけたナビは、そこで再び口を噤んだ。

オーサーはニヤニヤ笑しながら、ナビを見つめた。

「あいつ……って？」

知つていながら、ナビの口から言わせたくてオーサーはその先を促す。

「刑事さんだろ？ あの、若い方の。えっと、名前は……」

ジエビンもオーサーのからかいに乗ってきた。

「……ミンホだよ。ハン・ミンホ」

ナビは「ヤーヤ笑う」一人から皿を逸らして、自棄になつたように吐き捨てる、チャプチエを口に運ぶ。

「あの刑事さん、料理なんかするんだ？　へえ、意外だなあ。ナビのために、作ってくれたりしたんだ？」

「だから、ジエビニヒヨンの料理に比べたら、全然美味しくなんかなかつたよ！　あいつ、大食いだから、量食べられればいいんだ。味オーンチなんだ」

「あんなにスマートなのに、大食いなの？」

二人が寄つてたかってミンホのことを聞いてくるものだから、ナビはついにチャプチエを全部かつ込んで、席を立つてしまった。

「『』駆走さまっ！」

自分の分の皿を持つて、逃げるようにテントに駆け込む。その時に、思わずテントの入口の縁に足を引っ掛けた。

ジエビンとオーサーは、そんなナビの背中を眺めて、二人で顔を見合わせて笑つた。

「……全く、素直じゃないんだから」

「そんなところが可愛いとか、思つてるんだろう？　ビウセ」

「あれ、バレたあ？」

ジエビンが「チンツとオーサーの頭を小突いた。

「痛てて……まあ、冗談はこれくらいにして」

ナビの背中がテントの中に完全に消えるのを待つてから、オーサーが口を開いた。

自然に低くなる聲音と共に、ナビと一緒に見せていたクルクルと良く動く切れ長の瞳からスッと色味が消え、鋭く冷たい光を宿す。

「コ・ジョンヒョンが殺された」

その言葉に、ジエビンが思わず振り返る。

「留置場でチョルスの上面を刺した、あの坊やだ」

『エデン事件』の時も、ペニーレインを使って学生とやりとりをしていたのはオーサーなので、ジエビンにジョンヒョンとの面識は無かつたが、その名前はよく聞き及んでいた。

「知ってるよ。新聞で読んだ。残った学生が、今回の一件でクスリのルートが途絶えたことを逆恨みして……」

「違う」

新聞記事から仕入れた情報を言い終わらぬ内に、オーサーは鋭く否定した。

「真相を隠匿するためのカモフラージュさ。拘留が解けたところを待ち伏せされて、狙撃されたんだ。あんな遠距離から一発で彼だけを仕留めるなんて、素人の腕じゃない」

「お前……」

「俺の目の前で殺されたんだ。奪われたと言つてもいい。どうして俺らに知られたくない何かを、彼は知っていた。だから、口を封じたのさ。騒ぎ立てる家族も居ない身の上だったしね」

声を潜め、代わりにオーサーはジョビンに顔を近づける。

「……この事件はまだ終わつてない。嫌な予感がするんだ。何か、もつと大きなことが裏で起こつてる」

普段はいい加減でどうしようもなく軽薄な男だが、彼が本来持ち合わせている明晰な頭脳と動物的と言つてもいいほどの“感”的力を、ジョビンも認めている。その彼をもつてして“嫌な予感”と言わしめる事の成り行きに、ジョビンも言つてのない不吉を感じていた。

襟元に垢の浮いた薄汚れたシャツを着て、男は地下鉄7号線清潭駅を降り、最近観光客の間でも話題を集めている高級ジュエリーショップが立ち並ぶ狎鷗亭エリアを歩いていた。

小奇麗な身なりの者が行き交うスポットで、何日も風呂に入った様子もない男の存在は異様で、道行く者たちは皆振り返つて男を見ていた。

だが、当の男の方は気に留める様子もなく、煌びやかなジュエリーショップの中でも一際高級感を漂わせた店の一つにズカズカと入つて行つた。

「いらっしゃいませ……」

入つてきた男に向かつて丁寧に頭を下げた女性従業員は、男の姿を捕らえて思わず顔を上げた。

「……あ、あの……何か、お探しで？」

女が動揺を隠しきれぬまま尋ねると、男は囁々しく店内をジロジロと眺め回しながら、女の元へやつてきた。

「ピアスを、作りたいんだ」

「ピアス……ですか？」

「デザインは、もう決まつてゐる」

男は思わず一步後ろに後ずさる女の前にグッと身を乗り出して、ポケットから取り出したクシャクシャのメモ用紙に、先の丸まつた鉛筆を取り出して絵を描きだした。酷い近視なのか、随分目を近づけて描いている。

「雨のカタチをした、ピアスだ」

「オーダーメイド、ですね？ お値段が少々張りますが」

遠慮がちに告げる女に、男は鼻を鳴らして言った。

「これで、足りるか？」

そう言つと、男は斜めに下げる布バックから、束にした一万ウォン札を何束も、自分と女の間のガラスのディスプレイの上に置いた。女だけでなく、後ろで控えていたスタッフたちも、息を飲むのが分かった。

男はニヤリと笑つて言った。

「一番高いダイヤで作ってくれ。右耳用だ」

白い門扉の合間から、手入れの行き届いた庭を眺める。決して大きくなはないが、二階建ての白いモルタル造りの家は、清潔感に溢れていて、そして、どことなく可愛らしかった。ソンがこの家を購入したのは三年前のことだった。

チョルスの愛称が『狂犬』なら、ソンの愛称は『野獸』。

まさにその名に相応しく、男ヤモメを地で行きながら、女の尻より犯罪者の尻を追うことには人生を賭けていた男に転機が訪れたのは、四十を目前に控えたある日のことだった。

汗まみれ、泥まみれになつて、追いかけるヤクザよりもヤクザ者らしい氣性と風貌でソウル市警の特攻を担つていたソンだったが、ある日を境に、仕事を終えるといそいそと一人で帰るようになつた。以前は一晩中張り込みをして疲れきった身体を引きずつても、チョルスを連れて飲みに繰り出していたのに、ピタリとそんな無茶をしなくなつた。

そのようなソンの様子に捜査課の面々が気付かない筈はなく、ある日、チョルスを初めとした捜査課のメンバー数名で、心配半分、好奇心半分で、帰宅するソンの後をつけた。

ソンは、豆タンクのようになに堅い筋肉が詰まつた重い身体をユサユサ揺らしながら、小躍りするように、ある花屋に入つていつた。

ソンに、花屋

豚に真珠。

猫に小判。

馬の耳に念佛。

どの諺じとわかいを持つとしても、その不釣合いさに勝るものはなかつた。何なら、往年の諺に加えてもいいくらいだ。

チョルスと一緒に、口ではそれらしく心配するような風を装いながら、その実、根つからのミーハー根性でついてきたクムジャは、ポカーンと口を開けたまま、呆気に取られてその場で固まつていた。

チョルスたちの視線の先で、ソンはその花屋の若い女の店員と、俯いたまま一言二言、ぶつきあはうに言葉を交わしていた。

ソンが見もせずに指差した花を女は丁寧に紙で包むと、ニッコリ微笑みながらソンに手渡した。

ソンは片手を伸ばして、無造作にその花を受け取る。

だが、俯いたその頬は、薄つすらと赤く染まっていた。

ソンはチョルスたちに見られているとも知らず、花屋を出ると、先ほどのぶつきらぼうで不器用な対応から一転して、嬉しさを隠しきれないというように、スキップでもしかねない、更に軽くなつた足取りで雑踏の中に消えた。

翌日、チョルスたち（主に、クムジャが中心となつて）は「証拠を掴んだ！」とばかりにソンに詰め寄つた。『野獣』の異名を取るソンも、取り調べのプロたちに囮まれたらひとたまりもない。まして、生まれて四十年近く、ずっと縁遠くあつた『恋』の分野で攻められては、早々に陥落するしかなかつた。

ソンの自供によると、『事件』が起つたのは、二ヶ月前。

露店を襲つたチンピラを追跡し、路上で取り押さえようとした時、そのチンピラは、隠し持つていたナイフをソンに向けて一払いした。すぐにチョルスが反応し、チンピラを地面に押さえつけたが、ソンの突き出た腹の辺りのシャツには見事な切れ目が入つっていた。

「皮下脂肪が多くて助かつたぜ。舐めときや治る」

そんな軽口を叩きながら、勧められてもろくに手当てもせずに帰路についたソンだが、地下鉄の駅を降りて歩き出す頃、着替えたシャツの腹回りは、染み出した血でベッタリと汚れていた。

まだ肌寒い春先だったので、着込んだコートで腹を隠しながら歩いても、傷口は時間が経つに連れて、ズクンズクンと脈を持つような痛みに変わつてくる。ソンはとうとう耐え切れなくなり、腹を押さえて道端にうずくまつた。

その時、鼻先を不意に甘い匂いが掠めた。

「……どうしたんですか？」

甘い匂いに負けないくらいの、甘い声が振つてくる。

「具合、悪いんですか？」

薄れゆく意識の中でソンが見上げたのは、花を抱いた天使の姿だった。

結局、ソンはその花屋の娘スンミが呼んでくれた救急車で病院へ運ばれ、事なきを得た。

それが、ソンと現在の妻、スンミの出会いである。それから毎日、ソンはスンミの花屋に通つた。

最初は、助けてくれた礼として。

次は、離れて暮らす母へ送る花を探していると言つ口実で。毎日毎日、何かにつけて理由をひねり出しては、スンミに会つために花屋へ通つた。

そんな男の無骨な愛情が届いたのか、遂にソンは十も年の離れたこの可憐な女性を妻に迎えることになる。

結婚してすぐに、娘のチエリンも産まれた。

ソンは愛する妻と産まれたばかりの娘のために、安月給の中からやりくりして、この可愛らしい郊外の一軒屋を建てたのだった。そこで親子三人、水入らずで静かに暮らしたいというスンミの願いとは裏腹に、結婚後も相変わらずチヨルスと一人で一年中検査に飛び回っていたソンは、折角建てたマイホームを空ける日も多かつた。それでもスンミは献身的に夫に尽くし、その帰りを待つていたが、隠し切れない寂しさはチヨルスにも伝わってきて、ソンとコンビを組む者として、妻よりも多くの時間を共に過ごし、大切な夫を仕事の中に奪わなければならぬ後ろめたさに、胸が痛んだ。

だから、今回合成ドラッグ『エーテン』の検査中にソンを襲つた不慮の事故は、不謹慎ながらも、ソンを家族の元へ返してやる良いきつかけとなつた。

ソンが麻薬中毒の学生患者に腰を刺されて重症を負つた時、チエリンを連れて駆け付けたスンミは血の気を失つた顔をしていたが、

病院で甲斐甲斐しくソンに近くするその姿は、ようやく自分の元に帰つて来てくれた夫の世話を焼ける喜びに満ちていた。

先日よつやくソンが退院出来た時も、迎えに来ていたスンミが本当に幸せそうな顔をしていて、チョルスは同僚から聞き及んでいた。

退院時には駆け付けられなかつたため、チョルスは今日、退院祝いと一連の『エデン』騒動の報告を兼ねて、ソンの家を訪れたのだった。

『何せつきからボーッと突つ立つてんだ？ 早く入れよ』

いつまでも庭を眺めて入つてこようとしないチョルスを部屋の窓から見ていたのか、突然インターほんの電源が入り、聞きなれたソンの野太い声が聞こえてきた。

『いやあ、可愛くつて爽やかで、何で先輩にピッタリな家なんだろうつて。やっぱり、独身時代の、あの薄汚いアパートは仮の姿……』

『バカ言つてないで、早く上がれっ！』

ブチッと音がして、インターほんの電源が切れる。チョルスは肩を揺らして笑いながら、手にしたケーキの箱を掲げて、青々とした芝生の庭に足を踏み入れた。

『いらっしゃい』

玄関のドアを開けてくれたのはスンミだった。足元には、チエリンが張り付きながら、チョルスを見上げている。

『お邪魔します。スンミさん、これ……』

そう言ってケーキの箱を手渡すと、スンミは「氣を使わなくていいのに」と微笑んだ。

「ほら、 チェリン。 チョルス兄さんに、 ありがとうは？」

スンミが足元のチェリンの背中を押すと、 チェリンは恥ずかしがつてスンミの後ろに隠れてしまった。

「いつも家では『チョルス兄さん、 チョルス兄さん』って騒いでるじゃない」

面白がつてスンミがからかうと、 チェリンは抗議するようにスンミの足をポカポカと小さな拳で叩いた。

「ハンサムすぎて、 照れてるのよ。 この子、 メンクイだから」「奥さんと違つて？」

「まあね」

「おい、 聞こえてるぞ！」

その時、 奥からソンの声が聞こえてきて、 スンミとチョルスは一人で顔を見合わせてフツと吹き出した。

ケーキの箱を抱えながらパタパタと奥の部屋へ走つて行くチェリンの後を追いながら、 チョルスも靴を脱いで家に上がる。

「全く、 玄関からここに入つてくるまで何分かかってるんだよ。 女みたいに、 ペチャくちやおしゃべりしゃがつて」

チョルスが奥のリビングに足を踏み入れた瞬間、 窓辺に止めた車椅子に乗ったソンの太い声が出迎えた。

「元気そづりじゃないですか、先輩」

ソンは器用に車椅子を操つて、チョルスの側まで来ると、少し背を屈めたチョルスの肩に両腕を回して抱きしめた。

肉厚の手で背中をバンバン叩かれる圧力に咽ながら笑う。

「全然、体力落ちてないですね」

「お前は、相変わらずモヤシみてえな身体だな。もつと食つて太れよ」

チョルスは背中を起こして苦笑する。

「モヤシは酷いなあ。俺、結構筋肉あると思うんですけど。それに、折角両親がくれたこの恵まれた体型を、崩したらバチが当たりますよ」

チョルスの軽口に、ソンが呆れたような声を出す。

「なあにが、恵まれた体型だ。お前の仕事は何だ？ あ？ モデルか何かでも、目指してんのか？」

「人が揃うと、いつもこんな調子だった。一月ほどしか離れていない筈なのに、妙に懐かしい気持ちになつた。」

「モデルって言えば……どうだ？ 新しく来た相棒は「クムジヤ姉さんに聞いたんですか？」

チョルスの予想は的中していた。

「電話がかかってきたな。聞いてもいらないのに、すごい勢いでいかにハンサムか、いかに足が長いか、そんでいかにお前と違つて面目で礼儀正しいか、捲くし立ててたよ。えつと……何て言ったかな？ //……」

「ミンホです。ハン・ミンホ」

ソンは思い出したのかポンと膝を叩いて頷いた。

「そう、そんな名前だった。で、どんな様子だ。そのハンサム坊やは」

ソンの言葉に、チョルスはしばらく考えるような素振りをしてから、真面目な顔で言った。

「意外に、骨のある奴です。まだまだ甘ちゃんですけどね。今回の『エデン』騒動でも、奴が解決に一役かいました」

「お前が褒めるんだ。本当に、見所のある奴なんだろうな。俺も、会つてみたいよ」

ソンはそう言つて微笑むと、チョルスの肩をポンポンと優しく叩いた。笑うと目尻に深い皺が寄り、岩石のようなゴツイ顔が途端に

柔和で愛嬌のあるものに変貌する。スンニもきっと、そんなソンの笑顔のギャップに惹かれたのだと、チョルスは勝手に思っていた。聞いたことはないけれど。

「……ホン・サンギョ 警査のことなんですけど」

不意に、チョルスが声のトーンを落として言ひにくそうに俯いた。

「……ああ、聞いたよ」

ソンも静かに頷く。

「俺、知りませんでした。先輩とホン警査は、陸軍時代の同期だったんですね」

明慶大学を舞台にした大掛かりな薬物売買の現行犯でホン・サンギョを逮捕した後、彼が拘置所内で自殺を図るまで、チョルスは改めてホンの身辺を洗い直し、その中で、自分の直属の上官であるソンとホン・サンギョが兵役時代の同期で、入庁も同じ年であることを見つけて知った。

「……すみませんでした」

「お前が謝らなきやならないことは、何もないだろ?」

おかしな奴だなど、ソンは困ったように笑った。

警察官として正しい選択をしたという自負はあっても、自分の尊敬する直属の上官の首馴染みを、結果的に自分が追い詰め、拳銃、死に追いやるようなことになってしまったのだ。チョルスの心中は複雑だった。

そんなチョルスの様子を察してか、ソンは続けて言つた。

「いい奴だったが、昔から気が弱いところがあつてな。特に、恋女房に逃げられてからは、生活が日に見えて荒んできた。段々疎遠になつていつたが、借金も相当膨らんでいたんだろ?」

ソンは眉間に皺を寄せながら、かつての仲間の姿に思いを馳せているようだった。

「先輩は、幸せですね」「ん?」

チョルスの言葉を、ソンが聞き返す。

「まだ、奥さんに逃げられてない」「こいつっー！」

ソンは車椅子に座つたまま、笑い転げるチョルスの額に、固いゲンコツをお見舞いした。

「それはそうとー。」

チョルスは額を押さえながら、顔を上げた。

「驚きましたよ。先輩がコ・ジョンヒョンの起訴を取り下げたなんて」

チョルスは身を乗り出してソンの膝を打つ。

「どうしてですか? 奴のせいで先輩は車椅子生活を余儀なくされてるのに。警官を刺すなんて、ふざけたガキは、一生牢屋にブチ込

んでやれば良かつたのに

ソンに代わってプリプリと怒り出すチョルスに、ソンは苦い顔で笑つた。

「奴だつてまだ若い、将来のある男だろ? これをきつかけにクスリをきつぱりと止められたら、早く社会に出てマトモな生活をした方がいいと思つたのさ」

「先輩は、顔に似合わず優しすぎます」

大真面目にそう告げるチョルスに、ソンは複雑な顔をした。

「おい。それは、褒めてるのかけなしてるのがどっちだ?」

「どっちもです。でも、結果的には、牢屋の中にいた方が良かつたなんて皮肉ですね」

チョルスに合わせて、ソンも顔を曇らせる。

「そうだな。聞いたよ。まさか、昔の仲間に襲われるなんて……俺が、奴を殺したようなもんだな」

「変なこと言わないでください! 奴らがバカすぎるだけですよ。先輩が責任を感じる必要なんてこれっぽっちもありませんから」

チョルスは力強くそう言つと、ソンの肉厚な両手を握り締めた。

「ジョンヒョンを襲つた学生は?」

「行方をくらましてます。だけど、そう長い間逃げられないでしょ。指名手配してますから」

「ジョンヒョンと一緒にいたのは……」

ソンの言葉に、チョルスが顔をしかめる。

「それが、あのオーサー・リーなんですよ。全くあの医者は、何にでも首を突っ込むんだから。最初は奴を疑いましたけどね」「何で、奴が一緒に？」

「それもふざけた理由でね。『恋のキューピット』を買って出たんだって言うんですよ。ジョンヒョンが憧れてたナ・ジスクも同乗してましたから。釈放されて一番に、会わせてやりたかったって」

ソンは割れた顎に手をやり、剃り残しのヒゲの感触を確かめながら何かを思案するように目を閉じた。その様子を見て、チョルスはハツと我に返った。

「先輩、もう疲れたんじゃないですか？俺、しゃべりすぎましたね。先輩は事件のことなんか考えないで、今はちゃんと休養取つてください。本当に仕事バカなんだから」「バカは余計だ」

薄目を開けて、憮然とした様子でソンは反論する。

「二人とも、お待たせ。ケーキの用意が出来たわよ」

その時、盆に一人分のケーキとコーヒーカップを載せてやってきたスンミが、一人の男の殺伐とした空気を華やかに解きほぐした。

カウンターに突つ伏した右肘に顎を乗せ、左手でマウスをイジりながら、ノートパソコンの液晶画面と睨めっこする。

カチッ、カチッ、クリックしては、スクロールを繰り返す。

目当てのものは、なかなか見つからなかつた。

右肘に乗つた華奢の造りの顎の上に乗る口元からは、先ほどから彼に似合わない溜息ばかりが漏れている。

「激写！ ナビのアンニユイバージョン！」

その時、パシャリという軽いシャッター音とフラッシュの光が、少しだけ開かれたドアの隙間から伸びた手に握られた携帯から発せられた。

「……先生」

ようやく画面から目を上げ、身体を起こしたナビの呆れた視線の先には、今日もからかつてやるつといつ氣満々の、いたずらっ子そのままのオーサーの顔があつた。

ナビはそんなオーサーを無視すると、パタンッとノートパソコンを閉じて、流しに向かう。

「あれあれ、つれないじゃない。何か飲む？ とか、聞いてくれな

いの?』

『じゃあ、『何か飲む?』』

面倒くせにナビがオウム返しすると、オーサーはパアツと顔を輝かせて、ナビに一番近いカウンター席を陣取つて座り込んだ。

『Hスプレッソお願ひー、ねえ、もうアンニコイヒに終わりなの?』『憂いナビヤパート』しか、携帯に収められなかつたんだけど』

『何だよ』『憂いナビヤ』つて、勝手に変なタイトルつけないでよ。そんで、知らない間に携帯に撮るのもいい加減止めてくれない?兄貴もたまにやるけどか、そつ言ひの『盗撮』つて言つんだって、知つてゐる?』

『えー? ! ジュビンのはただのブラコン。俺のはシャイが故に、好きな口の姿を面と向かつて見れなくて、こつそり撮り溜めした写真を代わりに見てる、純粹な乙女心じゃないか。一緒にしないでよ』『誰がブラコンで、何が純粹な乙女心だつて?』

外から酒の詰まつた箱を両肩に担いで入つてきたジュビンが、オーサーの言葉を聞き咎める。

ナビはすぐにジュビンの元へ飛んで行き、よろけながら箱の一つを受け取る。

『親心つて言つてほしいもんだね。ナビは一日一日、成長する』『うわあ、本氣で引くわー。ねえ、ナビ。ナビもやつ細つよね?』

カウンターの中に酒の箱を運び終えたナビは、中から顔を上げず

に答える。

『ジヒビヒヒンのは許せるよ。でも、先生のはアウト

「ひびこー！ ナビちゃん」

オーサーはカウンターに突っ伏して、ワッと泣くマネをした。

「勝負あつたな」

ジエビンがニヤリと笑しながら、ナビに続いてカウンターの中へ消える。

「はい、エスプレッソ」

素っ気なくコーヒーカップを差し出すナビの手に視線を落としたオーサーは、そこで初めて、ナビの指に巻かれた痛々しい絆創膏の数々に気がついた。

「ナビ、その指どうしたの？」

「こんなに傷だらけの手では、毎日の盥洗いでも染みて痛かつただらうに。」

「別に」

ナビはちょっと怒ったように唇を尖らせ、ブイツと横を向く。代わりにジエビンが話題を引き取って、カウンターの隅を親指でさした。

「鉛筆削りひとつして、自分の手を削りちまつたんだよ」

ジエビンの言つとおり、カウンターの隅の灰皿の上には、さんざん削られて吸殻のように小さくなってしまった鉛筆の数々が山積み

になっていた。

「何で急に鉛筆削りなんか？」

今の世の中、文字を書くにはシャーペンかボールペンが主流だし、鉛筆を使うにしても、立派な「鉛筆削り」という文明の利器があるので。

わざわざ、お世辞にも手先が器用とはいえないナビが、指を削りながらナイフで鉛筆を削らなければならない理由がオーサーにはさっぱり思いつかなかつた。

「僕だつて、そのくらい出来るんだ」

ナビものように拗ねた口調でナビは主張する。

「……僕だつて？」

オーサーの目がキラリと光る。

「ふーん、誰と比べてるの？」

その瞬間、ナビの頬がカツと染まったのをオーサーは見逃さなかつた。

「早く飲んでよつ！ いらないのつ！？」

怒ったナビが乱暴に、カウンターの上でオーサーに「コーヒー」カップを押し付ける。タップンと揺れた真っ黒な液体は、危うくオーサーの白いシャツの胸を汚すところだつた。

オーサーはこれ以上ナビを怒らせてもいけないので、渋々差し出

されたコーヒー カップに口を付ける。

恨めしげな目でナビを見上げて、一言。

「……苦い」

「エスプレッソだからね」

「怒ってるナビちゃんの味がする」

「気持ち悪いこと言わないで」

「だけどクセになる」

「人の話、聞いてる?」

噛み合わない会話なのに、オーサーは先ほどまでの渋い顔はどこへやら、嬉しくて仕方ないという表情をしている。結局、怒らせても困らせても、ナビと絡んでいることそれ事態が幸せなのだ。

ナビは、もう疲れたとでも言うように大きな溜息を吐き出してから、流しに山積みになつた皿を手に取り、タオルで拭き始めた。

「……また、戻しちゃつたんだね?」

「え?」

苦いと文句を言つていたエスプレッソを優雅な仕草で口に運びながら、不意にオーサーが咳く。顔を上げたナビに、オーサーは小首を傾げながら、視線でその意味するところを指し示す。

ナビは咄嗟に、濡れた布巾を持つた傷だらけの手で、自分の襟足に手を伸ばした。ナビの髪は、黒く染め直した前よりも、更に明るい金色に戻つていた。

「どうして? 可愛かつたのに」

先ほどまでのふざけた口調とは違い、オーサーの声はどこまでも深く柔らかく、それが余計にナビの動搖を大きくした。

「……可愛いって言うな」

それだけ言うのが、精一杯だった。
グーにした拳で、襟足で跳ねる髪を乱暴に撫で付ける。
オーサーに自分の心を見透かされそうで怖かった。

鏡を覗くたびに、大学生に変装していた頃のままの自分の姿が映る。

ここはもう、大学のキャンパスではないのに。
自分はもう、学生ではないのに。

『ペニー・レイン』のボーカル、ナビに戻り、日常の中へ帰つて来たというのに、鏡を見るたびに錯覚してしまつのだ。
まだ、あの日々の中にあると。
隣りに、ミンホはいないのに。

(……見るなよ)
(見えません)

ヒヨンスを見送ったラストダンスの時、堪えきれずに泣き出してしまつた自分を抱きしめたミンホ。

(……聞くなよ)
(雨の音で、聞こえません)

グッと力を込めて、押し付けられた広い胸。
雨の音よりも、ナビの耳を強く打つた鼓動の音。
思い出した途端に、ナビの胸も、一瞬ドクンッと力強い音を立てた。

ガシャーンッ！

盛大な皿の割れる音に、ナビがハツと我に返る。

手から滑り落ちた皿が、床で白い破片になつて飛び散つていた。

「…………あ…………めん…………ジーベンナビン」

「ナビ」

ジーベンはナビの手から濡れた布巾を取つてやりながら言った。

「お使い、頼んでいい?」

ジーベンは優しく微笑みながら、ジーンズの後ろポケットから財布を取り出した。

「皿もつしてから、大分経つだろ? お密は少ないけど、そろそろ食材も底をついてきたからさ。ひよつと遠いけど、市街まで頼める?」

「う、うんっ!」

「じゃあ、準備してきな

ジーベンはナビの背中を叩いて、店の奥へ向かわせた。

「お使い? ナビに、一人で?」

「店中の皿、割られる前にな

そう言って、ジーベンはカウンターの中のダストボックスを開いてオーサーに見せる。

中には、ここ向日かでナビに割られたおびただしい数の皿の残骸が納まっていた。

「…………ふふつ」

オーサーが口元を押されて笑う。

「何だよ？」

「いや……あんなナビヤを見るのは、一度目だなと思つてさ」

「一度目？」

怪訝な顔で振り返るジエビン、オーサーは意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「あれは、恋してる目だ」

オーサーとジョンの瞳がかち合つ。

「九年前……」

カウンターに肘を付いて、斜めの位置からジエビンを見上げるオーサーは、挑発するように続けた。

「覚えてるでしょ？」

オーサーの眼差しを受けたジエビンは、静かに口元だけで、ゾッとするような冷たい笑みを浮かべて言った。

「……お前、本当に性格いいね」

当直室のソファーの上で、タオルケットでくるまつて夢の中にいる

たミンホは、チョルスに荒っぽく身体を揺すりれて無理やり叩き起こされた。

「……何ですか？ 交代の時間はまだ先のはず……」
「寝ぼけたこと言つてんじゃねえ！ 緊急動員がかかってるんだよ！」

「！」

ミンホは大きな目をパチパチとしばたかせた。

「ハンナムダギヨ漢南大橋で、ダンプが横転したところに、後ろから来た車が次々に玉突き事故だ。橋は南北で封鎖中。警察も消防も総動員だ！」

端的に状況を伝えるチョルスの言葉で、ミンホは完全に目を覚ました。

「急げよっ！」
「はいっ！」

タオルケットを身体から剥ぎ取り、ミンホはチョルスの後を追つてすぐに当直室を飛び出した。

「……いやあ、参りましたね。お姫さん」

タクシー運転手は、遙か彼方まで連なるテールランプを眺めながら、後部座席に声をかけた。

「さつきから、全然動いてないね」

運転席と助手席の間に顔を挟むようにして、後部座席から身を乗り出したナビは、赤い提灯行列と化したフロントガラスの向こうを恨めしげに見つめる。

「何があったの？」

ナビの言葉に、タクシー運転手は車内無線の音に耳を凝らす。

「事故、みたいですね。漢南大橋ハンナムテギョが封鎖されてるやうです
「ええー? !」

ナビはタクシー運転手の耳をキーンと噛む大声で叫んだ。

「どうしよう? 僕、帰らなきやいけないの?」

「今夜は無理でしょ? 引き返そつにここんに混んでひや、ひタ

ーーーも出来やしない。どつかその辺りのホテルにでも泊まつた方が無難ですね」

「そんなお金、持つてないよお」

ナビは困り果てたという表情で頭を抱えた。助手席にも後部座席にも、ジョビンに頼まれた山ほどの食材が詰まっている。生ものも含まれてこらから、夜間とは言えこの陽気の中では一晩で腐つてしまふものも出でてくるだろう。そして、それらと引き換へに、ジョビンから預かつた財布の中身はほほ空っぽに近くなつてゐる。タクシー代を払つたら、ギリギリ電車賃があるかないかといつ具合だつた。

「運転手さん。いいで、降ろして」

決意を固めたナビは、顔を上げてキッパリと運転手に告げた。

「え? こんなところですか?」

運転手は驚いたようにナビを振り返る。

「歩いてだつたら、渡れるかもしれないでしょ? そのまま駅に行けたら、電車で帰れるから」

「え? ちよつと、無茶ですか? ……お密さんつー!」

慌てる運転手を尻目に、ナビはわざとタクシー代を手渡すと、大荷物を抱えて車を降りた。

「お密さんつー!」

運転手の叫びに振り返ると、ナビは一瞬荷物を地面に置いて、運転手に向かつて大きく手を振つた。

「ありがとう、運転手さん！」

そう大声で叫ぶと、再び下ろした荷物を抱え上げ、テールランプの海の向こうへと歩き出した。

両手に一つずつ抱えた紙袋の他に、手首と肘を使って片手に二つずつ下げたビニールの買い物袋を持って、ナビは何度も細かい休憩を取りながら渋滞した道路の端を歩いていく。

どのくらいそうして歩いたのだろう。

視線の先に、事故が起きたとい ハンナムテキョ 漢南大橋の入口が見えてきた。大勢の警察や消防隊が行き交い、担架に乗せられた怪我人などが、ナビの脇を通り抜けて言った。

ナビが想像していたよりも、大きな事故だったらしい。騒然とする空気が、離れた場所からも伝わってきた。

その時、不意に鋭い笛の音が、この生温い夜を切り裂いて鳴り響いた。

『そここの君っ！ 危ないから、下がりなさいっ！！』

遠くの方から拡声器を使って響き渡つてくる声は、明らかにナビに向けられていた。

「え？ 僕？」

分かつていても、ついキヨロキヨロと周囲を見回してしまつ。

勿論、こんな状況下でのこと道路を歩いているような人間が他に居るはずもない。見れば、テールランプを点けた渋滞した車中の人たちも、窓を開けてナビを奇異な目で見つめている。

逃げようにも、両手にこんな大荷物を抱えていては、逃げ出さることも出来ない。

『そこで、止まつなかつ！ 動かないでつー』

拡声器の声はさういつと、マイクのスイッチをバチンッと切る音が聞こえてきた。それから、アスファルトを蹴る靴の音が段々と近付いてくる。

「え、え……ドアノブ……」

咄嗟に頭を過ぎたのは、もしかして捕まつてしまつ？ ということだった。冷静に考えれば、封鎖される手前の道路を歩いていただけなのだから、奇妙ではあっても捕まるようなことはしていないのだが、近付いてくる足音にナビはすっかり動搖していた。

ナビがそうしてオロオロしている間に、細身の影はあつという間にナビの元へ辿り着いた。

「どこへ行く氣ですか？ この先は事故で封鎖中ですよ
「す、すみませんっ！ でも、僕急いで……」

ピョコンと勢いよく頭を下げる瞬間に、手にしていた荷物を全部取り落とし、足元でグシャツとタマゴの潰れる嫌な音がした。

「…………」
「え？」

頭上で震える声に、ナビは恐る恐る顔を上げた。

「つな？……お前つー……」

ナビは口をパクパクさせて、その警笛を指差す。

「何でいるの？！」

「あなたこそ、じたなとこりで何してるんですか？」

田の前に駐たのは、キャンピングカーの前で別れて以来の、ミニ
ホだつた。

「それに、何なんですか？」「の大荷物」

ミンホは無残に潰れたタマゴの黄身が染み出した袋を拾い上げてやりながら、呆れたように片手を細めて呟つた。

「ほ……僕は、お使い頼まれて……ジェベニヨンヒ

しふりもどりこなりながら、ナビが説明する。

「お前はつ？！」

動搖している自分を知られたくないで、ナビは呟ぶ呟ついた。

「僕は、事故の緊急動員に駆り出されたんです」

冷静に答えるミンホに、ナビは思わず悔しくなる。何だかこんなに動搖しているのは自分だけのような気がして、照れが勝つた怒りで頬が熱くなる。

「おおーーー！ミンホ」

先ほどのミンホが走ってきた道路の向こうから、聞きなれた声が聞こえてきた。

「チヨルスヒヨンッ！」「すですか！」

ミンホは後ろを振り返り、チョルスに向かって手を振った。

「チョルス？！」

ナビは夜の向こうに田を凝らし、こちりに駆けてくる人物を待つた。

「え？ ナビか？」

駆け寄ってきたチョルスは、ナビの顔を確認すると大きく目を見開いた。

「驚いたな、お前。何でこんなところ？」

「使いを頼まれたそうですよ
「こんなとここまで、一人でか？」

チョルスの言葉に、子ども扱いしないでよ、とナビが頬を膨らませる。

「それにしたって、今日はもうダメだぞ。これ以上、動きよがな
い」

「ええーっ？！」

ナビが頭を抱えて叫ぶ。

「お前ら、今どこにいるんだ？」

「北漢山の近く」

「北漢山？！」

ナビの答えに、チョルスは思わず素つ頬狂な声をあげた。

「呆れた……あなた、どうやって帰るつもりだったんですか？ まさか、歩いて？」

「違うよっ！ タクシーで帰ろうとしたら、この渋滞に巻き込まれて……だから、駅までは歩いて行こうって」

「その大荷物じゃ、駅に辿り着くのだって至難の技だぜ」

チョルスもつづくナビの無謀ぶりに溜息をつく。

「本当に仕方のない人ですね。しょうがないから、送つていただきます」「え？」

思わずミンホの申し出に、ナビがキョトンと顔を上げる。

「そうじゅ。駅までだつて、ここからじゃかなり距離があるぞ。パトカーに乗れるなんて、滅多にない経験だぜ。良かったな、ナビ」

豪快に笑つて肩を叩くチョルスに、ナビはされるがままになつていた。

「ああ、そうだ……ミンホ」

チョルスが不意にナビの肩を叩くのを止めて、パトカーの手配をしようと無線に手を伸ばしていたミンホを呼び止める。

「炊き出しの用意が出来たつて伝えに来たんだった」「炊き出し？」

聞いた途端に、ナビの腹がグーッと小さな音を立てた。

そう言えば、買い物に一生懸命で、昼間から何も食べていなかつ

た。

「……あなたも、食べていきますか？」

ミンホが静かに助け舟を出す。

「……いいの？」

「おお、知らない仲じゃないんだし、食つていけよ。ジョンの手料理には負けるかもしれないけど、警察の炊き出しあもなかなか捨てたもんじゃないんだぜ」

チョルスは気安くそう言つて、ナビの肩を叩いた。

「じゃあ、俺は戻るぜ。ミンホ、後でな

「はい」

チョルスはそう言つと、再び現場に戻るために駆け出した。

「チョルスヒョーンッ！」

その時、ナビがチョルスを呼び止めた。

チョルス兄貴ヒョーン と、きちんと呼ぶのは初めてだった。

今までは、オマワリさんとか、怖い人とか、まともに敬意を払つて呼んだことはなかった。

「またお店に遊びに来てよ。ジョンヒョンが寂しがつてるよー。」

するとチョルスは、走つたまま振り向いてヒリヒリと手を振つた。

「密としてなら行つてやるつて、ジョンに伝えとけ！ もつツキ

使われるの「メン」だぜ

そう言って、チョルスは豪快に笑いながら連なるテールランプのそ
の先へと姿を消した。

「……僕らも、行きましょうか？」

チョルスの姿が見えなくなると、ミンホがぎこちなく切り出した。

「う、うん」

ナビも頷き、荷物を持とうと屈んだところで、横から伸びてきた
ミンホの手が、一瞬早く荷物を奪い取った。

「つな……いいよ、僕の荷物なんだから、僕が持つよ
「僕の方が、腕力ありますから」

そう言つと、さつさと全部担いで歩き出す。

「……あ……ありが……」

「それに、これ以上タマゴ割つたら、お使いにやつた意味がなくな
ります」

折角礼を言おうと開きかけていた口を、ナビは慌てて噤んだ。

そうだ、こいつはこういう性格の奴なんだ。
しばらく会つてなかつたけど、やつぱり生意氣だ！

こんな奴に、ちょっとでも会えなくて寂しいなんて思つていた自
分がバカみたいだ。

ナビは前を歩くミンホの形の良い頭を、恨めしそうに睨みつけな
がら歩いた。

歩幅が違つから、必然的に小走りにならざるを得ないのも腹が立つ。

「……ヒョウ」

「何だよつー？」

思わず大きく刺々しくなつてしまつた声に自分が驚いたが、当のミンホは気付いていない様子だった。

「……元気、でしたか？」

遠くの方から聞こえる車のクラクションや、事故処理に当たる警察や消防隊のざわめきで耳を澄まさなければ聞き取れないような小さな声だったが、わずかに俯きながら尋ねるミンホの声音は優しかった。

「……まあね、お前は？」

「はい。見ての通り」

そこで、会話が途切れた。

いつもうるさいくらいにしゃべって、ムキになつて喧嘩もしていったのに、まるでお互いに言葉を忘れてしまつたみたいだつた。

何を話していいかも分からぬままに、ナビはミンホの後姿を見つめながらテクテクと歩き、やがて、炊き出しテントまで辿り着いた。

「お疲れ様です、ハン警衛」

ミンホの姿を見つけた警官の一人が敬礼のポーズを取る。ミンホもそれに応えるように敬礼を返す。

「ちょっと、待つて。君は？」

ミンホの後ろをチョコンと付いて歩いていたナビは、当然ながら呼び止められた。

「この人は大丈夫です。僕の連れですから」

ミンホが振り返つてナビとその警官の間に立つ。

「そうでしたか……それは、失礼しました」

警官が頭を下げる。

そう言えば、ミンホは警察大学校出のエリートなのだとチョルス

が話していたのを聞いたことがあった。今は学校を卒業し、兵役を終えたばかりの身で、急遽ケガを負ったチョルスの相棒のピンチヒッターという役目故に、先輩であるチョルスの方が指導係となつているが、本来の階級はミンホの方が遥かに上であり、いざれは警察幹部として出世が約束されている。

一人で大学に潜入していた時はそんなこと気にしたこともなかつたが、こうして警察組織の中に身を置いているミンホの姿を見ると、本当に自分とは住む世界が違う人間なのだと黙つことを改めて思い知る。

何だか、急にミンホが遠い存在のように思えた。

「どうかしましたか？」

「……別に」

急に黙り込んだナビを怪訝な顔で覗き込んでいたミンホだったが、やがて閃いたというよつこ、ニヤリと笑つて言つた。

「ちょっと、待つててください」

そう言つと、ナビを置いて炊き出しの列にならび。

やがてミンホは、両手に一つずつ、椀から溢れそうな雑煮を持つてナビの元に返ってきた。

「トック（韓国の餅）入り雑煮ですよ。腹持ちもよくて、なかなかいけるんです」

ミンホが炊き出し隊の人ごみから少し離れたところへ行こうと顎をしゃくる。ナビはその後に着いていく。

「あなた、お腹空いてたんですね？」いつもお腹空くと、電池

が切れたみたいに元気が無くなつて、不機嫌になつてましたもんね
「つな？！ それは、お前だろつ？！」

ムキになつて言い返すナビに、ミンホは肩を震わせて笑う。
やがて、一人が腰をかけるのに丁度いい大きさの縁石を見つけて、
ミンホはそこへ腰を下ろした。

「どうぞ」

ミンホは隣りにナビを促す。

「……うん」

ナビも言われるままに、ぎりぎりなくそこへ腰かけた。

「はい」

「……ありがとうございます」

ミンホに手渡されたトック雑煮は、夏の夜に食べるには熱すぎる
代物だったが、疲れた身体に染みて旨かつた。
しばらく一人は無言のまま、一心に雑煮を啜つた。

「あの……」

「ねえ……あのさ」

一人同時に顔を上げる。

被つてしまつた気まずさに、一人揃つて慌て始めた。

「あ……え？ 何？」

「いえ、いいんです。どうぞ、そつちから

ミンホがナビに先を促す。ナビはすっかり頭が真っ白になり、自分が何を言おうとしていたのか忘れてしまった。

「……あ、ヒョンスは……ビーハーるへ。」

咄嗟に共通の話題が思いつかず、思わずヒョンスの名前を口にした。

その時、ミンホの周囲の空気が一三度下がったような気がした。スッと皿を細めたミンホは、ナビの方へ向けていた顔を正面へ戻し、雑煮に視線を注ぎながら呟ついた。

「……保険申請が、イ・コリの父親から出来ましてね。だけど、それを本人が断りました」

「そつか」

ナビは線は細いながらも、意志の強い眼差しを持つたヒョンスの事を思い出していた。

「……ヒョンスは強いな。だけど、纖細なところもあるから、心配だよ」

「やうですね。誰かさんと違つて」

思わずミンホの口からこぼれ出た言葉に、ナビが敏感に反応する。

「誰かさんつて、誰のことだよ?」

「あなたしか、いないでしょ」

ミンホも負けずに、こつもの調子で応戦する。

「僕のどこが、纖細じゃないって？」「どこもかしこですよ」

ミンホは雑煮の椀を置くと、ナビの方へ身体を向け、一気に捲くし立てる。

「纖細な人は、脱いだ服を散らかしつぱなしにしません。他人にパンツ拾われても、平気な顔してません。ご飯をボロボロ落としたりしません。トイレを流し忘れたり……」

「もういいつ……」

ナビも雑煮を置いて、迫つてくるミンホの肩を押し返す。

「わざとじゃないもんっ！ それが僕なんだもんっ！」

「开き直りましたね。だったら、纖細だなんて名乗らないでください」

「お前も纖細なんかじゃないよ！ 纖細な人は、そんなにズケズケ言つたりしなもんっ！ 年上にもつと敬意を払うもんっ！」

「敬意を払つて欲しかつたら、もつと年上らしくしたらどうですか？」

？

止まらない二人の応酬を、道行く警察官や消防队员がチラチラ見ている。

「……あの、ハン警衛……大丈夫ですか？」
「大丈夫ですっ！」

見かねた警官の一人がミンホに声をかけたが、ミンホは噛み付くよつにそう答えた。

「 もへ、僕帰るつー 」

ナビが叫んで立ち上がる。

「 じゅさつー 『 元田 』 」

ミンホも勢い良く立ち上がり、近くにいた警笛の声をかけた。

「 すみません。車を貸してください 」

「 いいよつ。僕、歩いて行くから 」

歩き出すと、ミンホの襟首を掴んで、ミンホが引き止める。

「 一般人にこんなところをウロウロされたら、こいつらが迷惑なんですよ。いいから、最初からの約束ですか。駅までは責任持つて送ります 」

「 ハン警衛つー 」

投げられた車のキーを受け取ると、ミンホは炊き出しテントに預けていたナビの荷物を他の警官に頼んで取つてきもらつた。

道路上に横付けされたパトカーの助手席の扉を開けると、ミンホはナビに向かつて顎をしゃくつた。

「 早くしてください 」

ナビは憮然のとした表情のまま、ミンホの開けたドアの隙間から身体を滑り込ませた。

駅に向かう車の中でのナビとミンホはすすと無言だった。ナビは窓に顔を寄せ、反対車線を埋め尽くすテールランプの赤い明かりばかりを見つめていた。

駅に到着し、キュウッとブレーキの音をセセセセとミンホが車を止めた。

「……着きましたよ。終電には間に合ひでしょ。」

「……ありがとう」

「いえ」

車を降りるナビの後に続いて荷物を持ってやるために降りようとしたら、ナビに止められた。

「いいでいいよ。後ろ、車繫がつてるから」

確かにナビの言つとおり、バック//ラーからは遙か彼方まで続く後続車両のヘッドライトが見えた。

「じゃあ、ね」

「……ええ。さよなら」

呟いて、ミンホは口を噤んだ。

大荷物を抱えたナビの頬りない背中が、危なつかしい足取りで、駅の改札口へと向かう。

振り返れ。

ミンホは思わずそう強く念じていた。

もし、ナビが一度でも振り返ったなら、その時は後続車両のことをなど気にせずに、車を飛び出し、悪かつたと謝ひ。いつも、言い過ぎてごめんなさいと。

だが、ナビは結局振り返らないまま、改札口の中へと消えた。

その時、フロントガラスをポツリと一滴、雨粒が叩いた。ここ何日か無意識に、ミンホが待ち望んでいた雨だった。

雨が降らなければ、出くわすことのない『ペニーレイン』。

出逢うことのない、ナビ

不意に現れ、髪もスーツもグシャグシャに乱し、何事もなかつた
ように去っていく。

だがもう雨が降つても、いつして出逢えるとは限らない。

ミンホはハンドルの上に顔を突つ伏し、大きな溜息をついた。

後ろから鳴らされるクラクションの音も、ミンホの耳には入らなかつた。

*

雨が降りしきる日曜日の朝、ミンホは6時きつかりに目を覚まし、シャワーを浴びて朝食を済ませると、一人暮らしのアパートを出た。休みの日に寝坊出来ないのが自分の性質だ。

何も予定がない日でも、目覚ましの力を借りなくとも、いつも浮かび上がるよう自然に目が冷める。

非番の日が世間一般の休日にも珍しいので、傘を差して適当に街をぶらついてみたものの、すぐに飽きてしまい、結局向かつた先は学生時代によく通った図書館だった。

雨のせいか、そこそこ人は入っていた。

今日は一日じで過ごそう、そう思つてミンホは入口で傘を置む。

明慶大学へ潜入していた時も、大学の図書館をよく利用した。ナビと口論になつて、逃げ込んだ先も図書館だった。

あの時は、ナビに見つけられてしまつたんだつけ。

そこまで考えて、ミンホは頭を振つた。傘を差していくも横から入り込んできた雨粒で濡れた髪から、零がはねる。

いい加減、雨が降るたびにナビのことを思い出すのは止めよう。あのダンプ横転事故があつた夜も、折角再会できたのに、つまらない意地を張り、結局連絡先すら聞けなかつた。

神様が与えてくれたチャンスを物にできなかつた自分が悪いのだ。チャンスは一度、昔から、そう相場は決まつていて。

ミンホが図書館の中に足を踏み入れると、ヒヤリとした冷氣に身

体を包まれ、空調の効きすぎた室内は、雨に濡れた身体には少々寒く感じられた。

自分の肩を擦りながら、書架の間を移動する。

人が居ない、ガラガラの通りを選んで進んでいくと、田の前に脚立が現れた。ミシリと軋んだ音がして何気なく頭上を見上げると、不安定な体勢で本を取ろうとしている人影に気がついた。

「……うわっ！」

思わず声をあげたミンホに、脚立の上の人物が振り返る。その拍子に、大きくバランスが崩れる。

「う……うわあああああああっ！」

「あ、え？！ ちょっとっ……！」

何が起きたのか分からない。

しかしミンホは、咄嗟にその頭上の人物に向かつて手を伸ばしていた。脚立ごとグラリと倒れこんでくる相手を、身体全体で受け止める。

ガツシャーンッ……

図書館中に響き渡る大音量を残し、脚立が書架の間に倒れる。ミンホはその天辺に乗つていた人物を身体で庇つたまま、強か打ちつけた尻の痛みに顔をしかめた。

「……つ、痛い！」

なぜかミンホよりも痛そうな声が、腕の中から聞こえてくる。その時ミンホは、初めてその人物の顔を正面から見た。

「……ナビ…… ハンソ~。」

「……ミンホ?。」

腕の中のナビは、田をパチクリさせたミンホを見つめていたが、やがて大声で叫んだ。

「またお前がっ！」

「それは、こいつらのセリフですっ！」

その時、尋常ではない大きな音に集まってきた利用客に囲まれていることに気付いたミンホは、慌ててナビの手を掴んで立ち上がった。

「とにかく、こいつら！」

小声で囁くと、倒れた脚立を律儀に直し、書架の間を逃げるように移動する。ミンホはそのまま、地下にある食堂までナビを引っ張つて行つた。

「座つて」

ミンホに促されて、ナビが対面に腰かける。

「本当に神出鬼没な人ですね。あんなところで、何してたんですか？」

「べ、別に……僕が図書館利用しちゃ、悪いの?。」

「そんなこと、言つてないでしょ?」

ミンホは先ほど痛めた尻を底つこうとして、席に着く。

「市街に、いつ戻ってきたんですか？」

「……昨日の、夜遅く」

「雨、降りますけど」

「今日は夜からだから。午前の仕込みは一人でいいって、ジョンビン兄貴が

「……そうですか」

ミンホはテーブルの上で組んだ自分の手の甲に視線を落とす。

「……で？ 何か探し物でもあったんですか？ あんな高いところによじ登つて」

「……う、うん。まあ

ナビは気まずそうに皿を逸らす。

「何ですか？ 言ってくれれば、僕も一緒に探せるかも。あの辺、詩集のコーナーでしたよね」

その時、ナビは俯いたまま、小さな声で言った。

「……お前が、さ……

「え？」

ミンホがナビの顔を覗き込むように、テーブルに頬をつける。

「……お前が、あの時読んでたヤツ。ずっと、探してたのっ！」

一気に言いつぶると、ナビはブイッと横を向いてしまった。

「あの時、僕が読んでたヤツって……ヒューズですか？」ラングストン・ヒューズの詩集？」
「やう、そんなようなやつ！ 名前が分からなくて、ネットでも探しれなかつた」

ミンホの言葉に、ナビが膝を打つ。どうやら、本当に名前が思い出せなかつたらしく。

「ハーレム・ルネサンス時代の有名な詩人ですよ。アフリカ・アメリカンの……ブルースの名曲の原詩にもなつてゐる……」

ミンホの説明に、ナビは次第に身を乗り出し顔を輝かせてくる。

「気に入つたんですか？」

ミンホが問うと、ナビは恥ずかしそうに唇を尖らせて頷いた。

「うん」

「……貸して、あげましようか？」

「え？」

ナビがキョトンとミンホの顔を見ると、ミンホはカバンのポケットから、よく読みこんだ痕のあるボロボロになつた一冊の本を取り出した。

「……どうだ。良かつたら」
「何で？ いつも持ち歩いてるの？」
「そういうわけじゃ……」

今度はミンホがじぶんもどりことなる。

「……だって、あなたが、気に入つてたみたいだから」

「たびれた表紙を意味もなくペラペラと捲る。

「……いつ、雨が降りだすか分からないでしょ？」

その言葉で、ナビはようやくミンホの言いたいことを理解した。
いつ雨が降るか、分からないから？

いつまたナビに出逢うか分からないから、その時渡せるように、
ずっとヒューズの詩集を持ち歩いていた。

途端に、ナビの頬までカツと熱くなる。

「あ、ありがと」

「……え」

お互いに気まずさを隠す面の相手から目を逸らしながら、ミンホ
が思い切って口を開いた。

「あの時、言いかけてたのって、ひょっとして何の事ですか？」

「え？」

「炊き出しが時、何か言いかけてたでしょ？」

ナビはミンホに再会したあの夜のことを思に出していた。同時に
しゃべり出しつとして、気まずくなつたあの時のこと。

「……そうだよ。なの、あの時もお前がケンカ売るから」

「ケンカなんか売つてませんよ」

「ほり、またつー」

そう言つたところで、一人は顔を見合わせて思わずクスリと笑いをもらす。

「そんなに、氣になつてたなら、連絡先でも聞けば良かつたでしょ？」

「兄貴の方から聞けるかよ」

「プライドとそつぽを向くナビに、ミンホは呆れてしまう。何だ？ そのプライドは。」

「ねえ……だつたら今、連絡先教えてくれませんか？」

「何で？」

「……本、返してもらわなきゃいけないでしょ」

「……」
言つた途端に、ミンホは口元を押されて、横を向いてしまう。

「それに……まだ沢山あるんです。ヒューズの詩集」

「そう言つて、頬を染めるミンホの横顔に、ナビまでつられて赤くなつた。

*

帰り際、ミンホが買つて持たせてくれたビニール傘を差しながら、ナビは片手に持つた携帯を開けたり閉じたりを繰り返していた。

アドレス帳に登録された『ハン・ミンホ』の文字。

着信履歴には、登録のためにかけられた、1秒の短い不在着信が残っている。

発信履歴にも、同じ相手に同じ秒数の記録が残っている。

ナビは何度も何度も、携帯のボタンをいじっては、それらが消えてしまつていなか確認する。

別れる時、連絡先を交換しようと取り出したナビの携帯を、ミンホは横からスッと奪つた。

抗議しようとするナビの前で、ミンホは涼しい顔で長い指を器用に動かし、ナビの携帯を操作した。

（僕のメールアドレスは長いんで、僕が直接登録したほうが確実です。あなたは、間違えて打ちそつだから。）

そう言つて、今度はさつさとナビの携帯から自分の携帯へ電話をかけ、素早く自分のアドレス帳にもナビの連絡先を登録する。

（間違つて消さないでくださいよ。再発行は、有料ですから）

いつもの憎まれ口を叩くのも忘れない。

「……カツコつけちゃつて……フン」

そう一人呟きながらも、ナビは自然に頬が緩んでくるのを抑えられなかつた。

携帯の画面ばかり見て歩くナビは、その時正面から歩いてきた男とぶつかった。その拍子に、男の手から何か角ばつたものが零れ落ち、コロコロと車道の方へ転がつた。

一方ナビが落とした携帯は、反対側の植え込みの下に転がり込んでしまつた。

「あつ！ すみませんつ！」

ナビは自分の携帯よりも先に、危うく車道に転がり出るところだった男の落し物に手を伸ばした。

雨に濡れて泥まみれになつてしまつたその物体は、四角い小さな箱だった。プレゼント用なのか、キレイにラッピングが施されている。

「どうしよう……すみませんつ、僕が前を見てなかつたから……」

ナビは慌てて、ジーンズのパンツの脇で必死に箱に付いた泥を落とそうとした。

そのナビの手を、不意に伸びてきた手が掴む。

「……ハヌル？」

探るように囁かれた名に、ナビは驚いて顔を上げる。

男の顔を正面から捕らえた瞬間、ナビはヒクッと喉を鳴らして息

を飲んだ。

「アハ……アハハハハツ！ 本当にお前かよ？ どんな魔法だよつ
！」

ナビの手を掴んだ男は、急にけたたましく笑い出した。
逃げ出そうにも、ナビは足が竦んでその場から動けなくなつてい
た。まるで、石になる魔法でもかけられたようだ。

「……それ、まだ付けてたんだな」

男の視線が、舐めるようにナビの左耳のピアスに注がれる。その
瞬間、ナビは身体を強張らせ、手にしていた箱を男の胸に思い切り
押し付けた。

「何だよ、お前にやるために買つたんだぜ」

男は反対に、ナビの両手首を掴んで、箱」とナビの胸に押し
返す。

「きっと、そいつが呼んだんだよ」

男はナビの左耳で光る雫型のピアスを満足そうに眺め、口の端を
歪めて笑つた。

その時、植え込みの下で、ナビの携帯が光つた。
メールの着信を知らせる「EDOランプ」の下に浮かび上がつたのは
『ハン・ミンホ』の文字だった。

ミンホはアパートに戻つてから、自室のソファーに腰掛け、登録したばかりのナビのアドレスに向けて、初めてとなるメールを打つた。

どうせ、くだらない冗貴の意地で、自分からはメールも電話も出来ないだろう。短い付き合いでも、ナビのそんな性格をミンホは段々分かるようになつてきた。

なら、こちらから送るまでだ。
もう、待つだけなんてゴメンだ。

そう勢い込んではみたものの、いざとなると、何を書いていいのか分からぬ。ミンホはしばらく思案して、頭をクシャクシャに搔きPennでは、何度も書いては消し、書いては消しを繰り返した。やがて、書き終えた文章は、たつたの一行。
だが、ミンホは何度もそれを読み返し、送信ボタンに手をかけた。メールなら、これくらい言える。
面と向かつては、まだ無理だけれど。

その時、視界の隅で、部屋の空調にあおられた100体のテルテル坊主チラチラと揺れた。

結局、捨ててしまふには忍びなくて、クムジヤに処分される前に、ミンホはくたびれきつた彼らを自分の部屋に避難させてきたのだった。

その彼らが、今はジッヒミンホの様子を窺つている。

たつた一人で部屋にいるのに、本当は誰に見られているわけでもないと分かつてゐるのに、ミンホの頬は真つ赤に染まつていた。

「……ちょっと、失礼ですよあなたたち。ジロジロ見ないでください

」

ミンホは思わずそう咳いて、洗濯バサミでリースのように窓辺に吊つた彼らを、回れ右させてそっぽを向かせた。

気になる視線を外してから、ミンホはようやくソファーに腰を落ち着けて、大きく深く息を吸い込んだ。

中断していたメールを再開するため、決意するようにパクンッと音を立てて携帯を開く。

文章は、とっくに出来上がっていた。

親指に力を込めて、ミンホは今度こそ思い切って送信ボタンを押した。

「……会いたかったぜ」

男の手がナビの左の耳たぶに伸びる。

「また会えると思ってた。そいつが俺を呼ぶ。お前がどこにいても、何をしていても」

ナビはもはや声を発することすら出来ず、カタカタと小さく震えながら金縛りにあつたように男を見つめていた。

植え込みの下で、携帯が光り続ける。

『雨が止んでも、会いたいです』

ハン・ミンホ

第三章【雨が止んでも】完

おいで。

そう、言ってくれた人。

カタカタカタ……

古びたデスクが小刻みに揺れる。

チョルスは広げていた新聞から目を上げて、横を見やる。揺れの発信源は、隣りの席のミンホだった。

「おい」

「……はい？」

ミンホはキヨトンと顔を上げたが、まだ揺れは収まっていない。

「それ、やめろ」

「え？」

「それだよ、さつきから。貪りすぎりー！」

チョルスがデスクの下のミンホの膝を叩く。

「俺のデスクまで揺れてんの。気になつてしまふがねえよ」

「……すみません」

ミンホは俯いて、自分の膝を押された。

しかし、しばらくすると、今度はコツコツコツ……という、先ほどとは質の変わった響きが聞こえてくる。チョルスが再び目を上げ

ると、ミンホがデスクの上を爪でリズミカルに叩いていた。

「おこつー。」

再びチョルスが声をかけると、ミンホはハッとしたように手を止めた。

自分では全く気付いていないらしい。先ほどよりも小さな声で「すみません」と呟くと、貧乏ゆすりをしていた膝の上に、デスクの上で遊んでいた右手を重ね、ギュッと力を入れてパンツを掴んだ。しかし、三度、奇妙な音は隣りの席からチョルスを漫食する。

今度は、ギリギリギリ……という何とも不快極まりない音。

「ミンホッ！」

見かねたチョルスが新聞を置き去つて、椅子を回し身体ごとミンホを正面から見据えた。

「どうした？」

ミンホはギシッと音をさせて、よつやく歯軋りを止めた。

「イライラしてるな？ 何かあったのか？」

チョルスに覗き込まれて、ミンホが気まずそうに俯く。

「……いえ、大したことではないんです。すみません……仕事中に

ミンホは、パンツの尻ポケットに収まつたままの携帯に意識を向けながら言った。バイブ機能にしてあるから、着信があつたらすぐ分かるようになつていて。だが、この三日間、携帯は死んだよう

に大人しいままだ。

ナビと別れて、決死の思いでメールを打ったのが三日前。プライドを捨てて、自分の方からあんな恥ずかしいメールを打つたというのに、当のナビからは無しのつぶて。返信すら届いてない。

何度も何度もメールセンターに問い合わせをしても、ナビからのメールはなかつた。

「仕方ねえなあ」

チョルスは呆れたように溜息を吐く。

「飲みにでも行くか？　たまには、気晴らしに」

チョルスがミンホの頭をグシャグシャに撫でながら笑う。

「男だつたら、ウジウジ悩むな。酒飲んで、忘れちまえ」

豪快なチョルスの言葉に、ミンホはこの日初めて笑顔を見せた。

「……はい。お願ひします」

生真面目に頭を下げるミンホの髪を、チョルスは更に上からグシヤグシヤにした。

人気のない黒テントの店内で、ジェビンは一人カウンターに座り

帳簿の整理をしていた。

ドアベルの音がして振り向くと、オーサーが入口に立っていた。

「どう? ナビの様子は

オーサーが雨粒を払いながら店内に入つてくる。ジェビンはかけていた眼鏡を外してカウンターの上に置くと、首を横に振った。

「……奥で寝てるよ。相変わらずだ」

「何があつたか、やっぱり話してくれない?」

「……ああ

ジェビンが溜息をつきながら眉間に揉む。

三日前の夜、ナビは突然、傘もわざわざにびしょ濡れのまま帰ってきた。

帰ると約束した時間を大幅に過ぎていて、仕込みを全て終わらせてカウンターで一息ついていたジェビンは、ナビが帰ってきたら、一言ガツンと言つてやううと、こつものお玉を片手に待ち構えていた。

ドアベルとともに軋んだドアの開く音がして、ジェビンが立ち上がる。

「ナビツ! 遅いよ!」

そう大声を出した途端、ドアの隙間から身を滑らせるように入ってきたナビが、そのまま膝から崩れ落ちた。

「ナビツ!」

驚いたのはジョビンの方だった。慌てて駆け寄り、崩れ落ちる身体を自分の膝の上に抱えあげる。

ナビはびしょ濡れで、ジーンズや靴にまとうじゆうじゆに泥が付着して汚れていた。

まるで、地面を這つて逃げてきたような有様だった。

「どうした？ 何があった？」

ジョビンは、最近染め直したばかりの金色の髪が張り付いたナビの額をかきあげてやりながら問い合わせる。冷え切った唇は、青ざめて小刻みに震えていた。

「ナビ？」

口元に耳を寄せ、その小さい声を聞き取ろうと耳を澄ます。だが、結局ナビの声は言葉にならず、そのままガクッと身体が弛緩すると同時に、瞼が落ちた。

ジョビンはすぐさまエプロンのポケットから携帯を取り出すと、片手で短縮ダイヤルを押した。

「オーサー？ すぐ来てくれ」

駆け付けたオーサーによつて精神安定剤を処方されたナビは、キンピングカーの中で寝かされたまま、この三日間ずっと夢と現の間を行き来しているようだつた。

側で見守るジョビンの前で、ナビは何度もうなされ、聞き取れないうわ言を呟いていた。

「じゃあちよっと、様子を見てましょうかね」

オーサーはカウンターの中へ進んで、ジョビンの脇を通り過ぎた。キャンピングカーに繋がった店の奥へと入っていく。

「ナビヤー、入りますよー」

ドアをノックし、気輕な声をかける。

ナビはベッドの上に起き上がり、両膝をペタンと付く形で、こちらに背を向けて正座していた。

「起きてていいの? 大丈夫?」

そう言つて背後からナビを覗き込んだオーサーが、田を見開いた。

「何やつてるの?... ナビッ!」

ナビはオーサーの左手首を掴んで、左耳から引き剥がした。途端に、ポタポタと真っ赤な血が、洗いたての白いシーツの上に点になって零れ落ちる。左耳に爪を立てていたナビの指は、べつたりと血で汚れていた。

その時、オーサーが開いたキャンピングカーのドアの隙間から、灰色猫のオンマが飛び込んできた。

金属音のような甲高い泣き声を上げると、そのままナビのベッドに飛び乗り、痛々しく血を流すナビの左耳を、ザラザラとした舌で舐め出した。

「……「ひ、……ウッ」

呻いて泣きじゃくりながら、ナビはオシマの舌や手首を掴むオーサーから逃れようと身を捩る。

「ナビッ！ もう止めて」

ナビの細い両手首を片手で絡め取ると、オーサーは空いた方の片手でナビの肩を強い力で押さえつけた。

「大丈夫だから……ね？ 落ち着いて」

ナビの抵抗が止んだところで、オーサーは素早く自分のパンツのポケットをまさぐった。中から取り出した透明の小さなビニール袋を歯で千切ると、中に入っていた小さな錠剤を手のひらに移し、そのままその手でナビの口を塞いだ。

驚いて口を見開くナビの耳元で、オーサーは低い声で優しく呟いた。

「もう大丈夫……ゆっくり、噛まないで飲み込んで」

「ククリ……と音がして、ナビの喉が小さく上下する。涙に濡れた目を閉じ、ナビはグッタリとオーサーの腕の中で気を失った。

オーサーはそんなナビの背中を優しく擦つてやりながら、柔らかい髪を撫でた。

「今は眠つて……辛いことは、全部忘れて」

低く囁くオーサーの背後で、キャンピングカーのドアが開く音が

した。

ナビを抱いたまま、ドアの前に立つジョビンを見上げたオーサーは眉を寄せて苦笑した。

「そんな怖い顔しないでよ。いいから俺だつて、弱つてる子襲つたりしないよ」

つまらない冗談にジョビンが笑うはずもなく、その表情はますます凍えるように冷たいものとなっていく。

足元のオノ・マも、濁つた金色の瞳孔を煌かせて、まるで非難するような冷たい目つきでオーサーを見上げる。

「何飲ませた？」

「あれ？ 見てたのね」

オーサーが肩をすくめる。

「トライ・キライ・ザーだよ。ちょっと強めのね。ジョビンこなれ馴染みの薬じゃない？」

その途端、ジョビンの目が細められ、射るような眼差しでオーサーを見据えた。

「おお、怖っ！ 久々に見たよ。おたくのそんな顔」

言葉とは裏腹に、オーサーは口元に冷ややかな笑みを浮かべていた。

「昔は、雨が降る度にそんな顔してたよね？ 変わったのはさう…
…こつからだつけ？」

「…黙れ」

ジエビンは冷たく言い放つと、ツカツカとベッドに近づき、オーサーの手からナビを奪い抱え上げた。血で汚れていない、自分のベッドへとナビを移動させるつもりらしい。その後ろに、静々とオーマも歩いて歩き出す。

そんなジービンの背中を田で追いかがる、オーサーは挑発するよ
うに声をかける。

「久しぶりに、ジェビンにも処方してあげようか？」

肩越しに振り返つたジェビンが鋭い視線でオーサーを睨む。

はやくお風呂に入らせて貰おうと、お風呂のベビーベビートンナリを離さないで、お風呂に入らせて貰おうとした。

「お前、もう帰れよ」

「電話一本で「すぐ来てくれ」なんて呼んどいて、用が済んだら今度は帰れって？ 全く、相変わらずの『お姫様』つぶりだね」

その途端、オーサーの「メカミを掠めて、果物ナイフが飛んでき
た。今はナビが眠る、ジエビンのベッドの脇にあるロー・テーブルの
上に乗つっていたものだ。

掠めたナイフはオーサーの背後の壁に貼つたコルクボードを貫通して、深々と突き刺さっていた。

オーサーが静かにコメカミに手をやると、ほんの少し掠つた傷から血が滲んでいた。

フツと鼻から息を漏らすように笑つたオーサーが、口の端を吊り

上げて言つた。

「そんな顔したお前に、可愛いナビヤを預けていけると思ひへ。」

首を回して、背後に刺さつたナイフの柄に手をかける。

「俺なんかの軽口も流せなこいつなお前に」

力を入れて引き抜いたナイフをクルクルと手の中で回して弄びながら、ジェビンにゆづくつと近づいていく。

「ナビに引きずられて、簡単にフラッシュバックを起こしそうになつてゐる前に。しつかりしなりよ。お前は、ナビの兄貴だろ？」

ジービンの耳元に口を寄せ、低い声で言つて聞かせるよつと囁く。

（……………）（ひらりしゃい、ジービン）

（何、これ？ ちつちやい……やわらかい）

（お前の“弟”よ。抱いてみる？ 母さんが支えてるから、大丈夫

よ）

（…………ニヤアーニヤア鳴いて、猫みたいだ）

ナイフの柄でグッと胸の先を押され、ジェビンは我に返つた。

遠く掠れた幼い頃の記憶が、不意をついて鮮明に蘇り、ジェビンの足を竦ませた。

唇を噛み締め、顔を背けたジェビンの肩を優しく叩きながら、オーサーは跳るナビにも同じよつて、その肩にそつと布団をかけてやつた。

銀のスプーンで鍋を突きながら、チョルスは思わず溜息を零していた。

ちょっと今まで、その溜息は「美味いっ！」を代弁するものでしかなかつたのに、今はその質が変わつていて。

チョルスはもう一匙、グツグツ煮立つたキムチチゲを掬うと、そのままフウフウ言いながら口に運んだ。

やはり出てきたのは溜息で、チョルスはスプーンを咥えたまま首を捻つた。

「……おかしいな」

眉を寄せて、湯気をたててている鍋を覗き込む。

「なあんか、しつくりこない」

そんなチョルスの横で、ミンホは無表情のまま一心にスプーンを口に運んでいる。美味しいのか不味いのか、そもそも味わつているのかさえ分からぬ表情で、モグモグと無言で食事を進めていく。

「……味、落ちたか？」

思わずチョルスがそう呟いたとき、配膳をしていた店のオヤジに思い切り睨まれた。チョルスは慌てて口を噤んで、相変わらず横で

無心にスプーンを動かしてこる／＼インホに耳打ちした。

「お前、『』のチゲビリ思つ?」

「はい?」

面倒くさそうにミンホが顔を上げる。

「どうして、どういった事ですか?」

「だから、さ。前からこんな物足りない味だったかと思つてた」

眉を寄せたチョルスに、ミンホは冷めた声で囁く。

「チョルスヒヨンのお氣に入りの店だつて言つて、僕を連れて来たんじやないんですか? こここのキムチチゲが大好物なんだつて、さつき楽しそうに話してましたよね」

「やうなんだけよ……何て言つの? いや、隠し味的なモノが足りないつていうの? もつと、美味しいもん食つかけたせいか……」

そこまで言つて、チョルスはハツとして押し黙つた。

お気に入りの店の大好物のチゲより、更に上をいくチゲを食べた場所を思い出したからだった。

(ついで店のは、媚薬入りだから……)

舌が忘れられないあの味を思い出すのと同時に、脳裏にお玉片手に妖艶な笑みを浮かべるジエビンの姿が浮かんできて、チョルスは思わず、ブルツと頭を振つた。

そつか

『ペニーレイン』で食べたチゲの味が、忘れられなかつたんだ。
思い出したら最後、田の前のチゲが急に色褪せた物に思えてきた。

「食べないんですか？」

横からスプーンを伸ばして、ミンホが相変わらず無表情で鍋を突つぐ。

「お前つて、もしかして味オンチ？」

スプーンを咥えながら恨めしげにそう言つチヨルスを尻目に、ミンホは鍋をグチャグチャにかき回す。

「好き嫌いがないって言つてほしいのですね」

ミンホはそのまま自棄食いでもするかのよつに、ガツガツとチゲを食べ始めた。

「あーあ、ジエビンのキムチチゲ、食べたい」

スプーンを放り出したチヨルスに、ミンホがピクリと反応する。

「探すか？ もう一度。『ペニーレイン』」

「本当ですか？！」

食べるのを止め、急に乗り出してきたミンホにチヨルスの方が思わず仰け反る。

「何だ？お前も、ジェビンの料理食いたかつたのか？」

「探しましょ、チョルスピヨン！あ、ちょっと！天気予報にチャンネル変えてくださいっ！」

チョルスの問いにはまともに答えずに、ミンホは急に立ち上がる
と、店に一台しかないテレビのチャンネルを強引に天気予報に変え
させた。

＊＊＊

薄い布団からはみ出した足の先が凍えるように冷たくて、目を覚
ます。

小さな足を擦り合わせて暖を取るうとするが、隙間風のせいで外
と大差ない室温の中では、いくら冷たい自分の肌を擦り合わせても
到底身体が熱を取り戻すことはない。

寒さで目覚めた筈なのに、意識が覚醒するにつれて、耐え難い空
腹感も同時に襲ってきた。グーッと小さくなる腹を押さえて、布団
からそっと抜け出す。

台所とは名ばかりの、流しと小さなガスコンロが一つあるだけの
炊事場に立ち、一人暮らし用の小さな電気釜の蓋を開けた。

乾いてこびりついた米まで指の腹を使って一つ一つ丁寧に取り去
つて、欠けた茶碗に移す。少しでも量を取れるように。

コンロの上に乗ったままの、少し酸っぱい匂いを放つようになっ
たスープに手を伸ばして、冷たいご飯の上にかけて、それから一気
に立つたままそれを腹に流し込む。

冷たいご飯とスープが一塊になつて胃の底に落ちていく感覚がし
て、ブルツと身震いしながらも、ようやく空腹感がいくらか和らい

でいくのを感じた。

「……ハヌル？」

その時、先ほど自分が抜け出してきた布団の中から声が聞こえた。茶碗を流しに置いて、声のする方を振り返る。

「……何の音だ？」

声に答えて、窓の外を見てから静かに言った。

「雨の音だよ」

膨れた布団の中身は、ウーンと唸りながら、大きく寝返りを打つた。

「……仕事は？」

「今日は休みだる。この分じゃ」

尋ねると、短い答えが返りてくれる。

「お前、寒くないのか？」

布団の隙間から覗く一つの眼が、こわいをつかがいながら問いかける。

「……うん。寒い

「裸足だからだろ？」

「うん」

「バカ」

布団の中身は呆れたような声でそう呟くと、その汚れた薄い布団を捲り上げた。

「ほり、早く来い」

布団の端が捲くれ上がった途端、離れているのに嗅ぎなれた懐かしい体臭がした。一瞬躊躇して左足を引いたが、布団を捲り上げた男はポンッと気軽に自分の横を叩いた。

「早くしろ。俺も寒い」

その言葉に迷いを振り切り、布団の中へ滑り込む。

「朝までもう一眠りするだ
「……うん」

固い筋肉の腕枕に頭を預けて、目を閉じる。

どうか、雨が止まないようにな
そう、祈りながら。

「…………ナビ？」

何度も呼ばれて、ハツと顔を上げる。目の前には、心配そうな顔で覗き込んでいるジェビンの顔があった。

「大丈夫か？」

「あ…………うん、『じめん。ボーッとして』

ナビは慌てて、手にしていた皿拭きを再開した。

「具合良くないなら、無理するな。店の方は気にしなくていいから」「本当に大丈夫だよ。心配かけて『じめん。ジェビニヒヨン』

夢と現の間をさ迷つた三日間の後、ナビはジェビンやオーサーが止めるのを振り切り、店に出るようになった。

身体を動かして何かしていたほうが良かつた。そうでないと、すぐには思考は流れてほしくないところへと流れていってしまう。

カウンターのいつもの特等席にはオーサーが居座り、夜が更けると同時に強くなってきた雨脚に合わせて、店を埋める客の数も増えてきた。

その時、ドアベルの音が鳴り響き店のドアが開いた。

「あれ？ どうしたの？」

『口のところに今日もびしょ濡れで立つてゐる長身の男一人を見て、ジョビンが声をあげた。

「また事件？」

「違つて！」

チョルスはそう叫ぶと、濡れた身体のままズカズカと店内に入ってきて、ジョビンの前のカウンター席にドカリと腰を下ろした。

「今日は客として来たんだ。いいな？ 客・と・し・て・だ。働かないぞ！ 今日は食うだけつ！」

ナビとミンホが明慶大学へ潜入している間、『ペニー・レイン』を手伝わされたことで余程懲りたのか、チョルスは人差し指をジョビンの鼻先に向けて、そう宣言した。

「ここのキムチチゲが忘れられなかつたんだそうです」

「余計なこと言つなつ！」

横から口を出すミンホに、チョルスが顔を真つ赤にして怒る。

「それでわざわざ探したの？ こ苦勞様だね。素直に言つてくれたら、警察署まで出前したつて良かつたのに！」

ジョビンはそう言つて笑いながら、チゲの用意をするために奥へと消えた。

ミンホは、カウンターの隅でボーッとしたまま皿を拭くナビを横目で見つめた。自分たちが来たことにも気付いていないのか、ナビは焦点の合つていない目で床を見つめながら皿を拭いていた。

ミンホが座る席からナビまでの距離は少し離れていたため、ミンホは思い切って席を立ち、ナビの目の前のカウンター席に腰を下ろした。

「……何で、返事くれないんですか？」

恨めしげに呟いた言葉で、よつやくナビが顔を上げた。

「あ……れ？ お前、何で……！」

「さつきからいましたよ。チョルスピヨンと二人で、今日はお密として来たんです」

「……さつか」

ナビは手にしていた皿と布巾をカウンターの上に置いた。

「……ねえ。答えてください。何で、返事くれないんですか？」

ミンホが痺れを切らせてか、一度言いつて、ナビは怪訝な顔をした。

「え？」

「メールしたでしょ」

ミンホの言葉にも、ナビはキョトンとするばかりだった。

「何のこと？」

「何のこと？ じゃないですよ。あの後、別れてすぐに。どうせあなたからはしてくれないと思つたから、僕からメールしたんじゃないですか」

「来ないよ」

「送信履歴に残つてます！」

証拠を突きつけるように、ミンホは尻。ポケットから出した携帯をナビの田の前で開く。ナビは画面を覗き込みながら首を傾げる。

「だつて……本當だもん。僕、メールなんかもうつてないよ……」

ナビも慌ててポケットから携帯を取り出しつとじて、動きを止めた。

「……ない

「え？」

「……落とした

「はあつ?—」

途端に慌てだすナビ。ミンホは言つた。

「こつからですか?」

「多分……お前と別れて、すぐ」

「じゃあ、五日も?—」

ミンホは田を見開いた。

「あなた本当に、このインターネット大国の人間ですか? 携帯無しで何日も……しかも、落としたことにも気付かないなんて」

「ちよつと、待つて……あれ、どこで?」

その時、思いを巡らせていたナビの顔から一瞬で血の気が引いた。

「ヒョン? どうしたんですか?」

尋常でないナビの顔色に気付いたミンホも、ナビを見上げる。

「ヒョঁ?...」

立ち上がり、ナビの肩を掴もつとしたミンホの田の前で、横から現れた腕が、ナビを強く抱きしめてミンホから引き離した。

「ナビは調子が良くないんだ。責めるつもりなら、帰つてくれよ」

ナビを抱きしめたジェビンは、ナビの肩越しにミンホを冷たい目で一瞥をくれた。ナビは荒い息を吐いて、グッタリとジェビンの胸に顔を埋めている。

ジェビンはそのままナビの肩を抱いて、店の奥へと消えた。ミンホはただ黙つて、唇を噛み締めながらその背中を見送るしかなかつた。

「君の負けー」

いつの間にか隣りに座つていたオーサーが、枝豆を頬張りながら可笑しそうに言つた。

「酷なようつだけど、今の君じやあ、あの二人の間に入り込む余地はないよ」

カツと頬を赤くさせてオーサーを睨むミンホにお構いなしに、オーサーは余裕の表情で枝豆の皮を皿に投げ入れて遊びだした。

「……君は『痛み』つてやつを、どれだけ知つてる?」

まるで『海』つて知つてる? とでも言つよつた軽い口調で、オ

ーサーが尋ねる。

「……何ですか？」『痛み』って

眉を寄せてそう尋ね返すミンホに、オーサーは一瞬ニヤリと口の端を曲げて笑った。

「イエッス！ ナイシシュー！」

枝豆の皮を全て皿の中に命中させると、オーサーは一人でガッツポーズをして席を立った。

「さて、皮も全部入ったしー、ナビヤはないしー、俺も今日はもう帰るわーと」

「ちょっとー、話はまだ終わってませんよー！」

オーサーの肩を掴もうとするミンホに、オーサーはクイクイと親指でカウンターの隅を指した。

「君も帰ったほうがいいんじゃない？ 先輩、つぶれちゃってるよ

見ると、食前酒代わりのブランデーを煽ったチョルスが、へべれけになつてカウンターで潰れていた。

「チョルスヒヨンッ！」

ミンホが慌ててチョルスに駆け寄る。

「じゃあねえ。バイバイ！」

オーサーはヒツヒツと手を振りながら、出口へと向かった。

「 もうひー 何してるんですか。空腹のまま、こんなに飲むからですよー。」

ミンホは潰れたチヨルスの頭をペチンッと弾いてから、肩に腕を回し重い身体を持ち上げた。

「……あ……れ？」

浮き上がるよつこ意識が戻ると同時に、瞼の裏を刺す光が眩しくて、ナビは目を開けた。

「気がついたか？」

枕元から、聞きなれたジエビンの声が静かに降つてくる。

「……店、は？」

「もう閉めた」

「……ごめん」

「気にすんな」

クシャリと柔らかい額の髪を撫でて、ジエビンは微笑んだ。一見すると女性と見まじうような整った顔立ちに反して、ジエビンの指はゴツゴツと筋くれだつた、男らしい手をしてくる。

働き者の手だと、いつかナビが言つたとき、ジエビンは少し恥ずかしそうに笑つた。

頭の上でプチンプチンと音がして、ナビが首を上げると、ジエビンはナビのベッドの脇に置いた椅子の上で足を組みながら、マメを剥いて膝に抱えたボールに皮を入れていた。

「……兄貴」

「ん?」

田だけ上げてジョビンが答える。

「足、出して」

ナビはベッドの上から降りると、ジョビンの足元に腰を下ろした。広げた両足でジョビンの左足を挟むようにして脛から先をジーンズを押し上げて優しく擦つてやる。

「……今日も、痛む?」

「お前がそいやつてくれてる間は、全然忘れてる」

ボールに皮を落としながら、ジョビンは微笑む。キレイに剥けた一つをナビの口に持つていいってやると、ナビは嬉しそうに頬張つた。ボールがマメの皮で一杯になる頃、ジョビンの足元からはスースーと規則正しい寝息が聞こえて来た。

ジョビンの足にもたれたまま、ナビはいつの間にか眠つてしまつていた。マメの皮が入ったボールをサイドテーブルに置いて、ナビの身体を抱えあげようと屈みこんだ時、キャンピングカーのドアが開いた。

「痛いの痛いの飛んできーって?」

「……帰つたんじやなかつたのか?」

現れたオーサーに、ジョビンは呆れ顔でナビに伸ばした手を引っこめた。

「飲み足りなくてさ」

明らかに迷惑そうな顔をしているのに、全く怯む様子もなくオーサーはキャンピングカーの中に上がりこんだ。

「……ふふ。猫みたい」

ジョビンの足にもたれて寝るナビを覗き込んで、オーサーが笑いを漏らす。

「怒るぞ、きっと。動物と一緒にするなって」「最初に言つ出したのは、ジョビンだよ」

「俺？」

ジョビンが身に覚えのなことだと言つようこそ、キョントンとした顔でオーサーを見る。

「猫を拾つたつて、そつ言つた」

オーサーはジョビンと向かい合つてベッドに腰を下ろす。

「あの時、俺が何て言つたかも覚えてる?」「……いや」「やめとけって、言つたんだよ」

オーサーが真正面からジョビンを見据える。

「ぐびり殺しそうな顔してたから。生きてるもの、何でも」

オーサーの言葉に、ジョビンの目がスッパリと温度を無くして細められる。

「 セウセウ、 そんな日。 久しぶりにあげようか？ 昔の、 夜のお友達」

そう言つと、 オーサーはサイドテーブルに裸にした錠剤の山を置いた。

その途端、 ジョビンの手が伸び、 錠剤を全て床に叩き落した。 口口口と小さな音を立てながら、 叩き落された粒たちはベッドの下やテーブルの下に転がつて行った。

「 カリカリしないでよ。 折角のキレイな顔が台無じだよ。 セウセウ」と、 兵役の頃から本当、 変わつてないよね

「 どうこうところが？」

「 見かけはハチミツ、 中味は唐辛子」

「 上手い、 とでも言つと思つたか？」

ジョビンの冷ややかな視線にも負けず、 オーサーはへラへラと笑う。

「 まあ、 でもいいんじやない？ 見かけだけでもスイートでいてもらえれば取り敢えずは平和だよ。 あの頃は、 本当に酷かつたからね。 自覚あつた？」

オーサーの言葉に、 ジョビンは軽く舌打ちして答えない。 図星を指された証拠だった。

「 見かけも中味も、 荒みきつてたからね。 殺し屋みたいだつた」

ジョビンが弱つたのを見て、 一いじやとばかりにオーサーは面白がりながら攻め立てる。

「……だから、心配したんだ。手負いの子猫なんか、飼える状態じゃなかつたから」

オーサーはまだジョビンの足にもたれて気持ち良さそうに寝息を立てるナビの頬に手を伸ばした。

手負いの子猫

オーサーの例えは、いい得て妙だった。

九年前。

電気の通つていらないアパートの中は薄暗く、外からの明かりが届かない奥まつたキッチンの隅は、更に濃い闇に覆われていた。

先ほどから飽きもせずにザアザアと激しく降り続ける雨が、今も古びたアパートの粗末な窓を叩いている。

そんな雨の音と競い合うように、暗いキッチンの中には、脂を敷いたフライパンの中身を一心不乱に搔き回すジェビンの姿があつた。フライパンの中で奏でられる、雨の音そつくりな脂の音を聞いている間だけは、憂鬱な雨そのものを振り払える気がして、ジェビンの腕には、ますます力が入つていく。

季節は晚秋の頃だというのに、捲くり上げた黒い長袖のTシャツはグツシヨリと濡れ、白銀に近い金色の髪も、汗で額に張り付いていた。

ポタリ

ジェビンの高い鼻筋から一粒の汗が滴り落ちると同時に火が止められ、自棄になつたように搔き回されていたフライパンの中身が落ち着いた。

荒い息を吐いて、お玉を持つたジェビンの腕がダラリと垂れ下が

る。

火の音が止んだ途端に、外から響く憂鬱な水音がジェビンの耳を浸食し始め、料理中は忘れていた左足の傷が、ズクンズクンッと脈を打つて疼き出す。

「……また、作り過ぎちまつた

苦々しげに咳いて額の汗を拭うと、ジェビンは躊躇することなく、まだ湯気を立てている出来たてのチャプチエを、フライパンごとダッシュボックスの中に捨てた。

ズクンッズクンッ……

左足の痛みが増していく。

痛みに呼応するように、胸のムカつきが自身の空腹を訴える。だが、作りたてのチャプチエは、既にダッシュボックスの中だつた。ジェビンは痛みと胃の不快感を振り切るように、無造作にキッチン台の端に転がっていた缶詰の一つに手を伸ばすと、ジーンズのポケットからナイフを取り出した。

台に置いた缶詰に、そのままナイフを力いっぱい突き立てる。

ブシュッヒ音がして、缶詰の蓋に穴が開いた。刃こぼれを気にしそうなところだが、使い込んだナイフは元々刃がボロボロで、今更多少欠けたところで大差なかつた。

ギッ、ギッと金属が擦れる耳障りな音を立てて、ジェビンは缶詰の傷を広げていく。

丁度いい具合まで穴を広げたところで、開いた穴に刃を差し込んで、梃子の原理で蓋を開いた。

そのままナイフの腹で缶詰の肉を掬つて、口に運ぶ。形の良い唇から肉の油が零れて、暗闇の中でヌラヌラと光る。ジェビンは手の甲でそれを拭い去ると、赤い舌で唇を舐めた。

空腹を満たしても、足の傷の疼きは収まらない。

ジェビンはナイフを手にしたまま立ち上ると、窓に向かって歩き出した。飽きることなく降り続ける雨を恨めしげに横目で睨みつけながら、ジェビンは窓の横の壁に貼り付けた、一枚の写真の前に立つ。

それはもう、写真と呼べる代物ではなかつた。

首から下の広い肩幅で、その写真に写る人物が男であるということが辛うじて分かるが、首の上に乗つた顔は、無数のナイフの傷で覆われ、もはやそれが本当に人の顔であつたかどうかの判別も難しかつた。

ジェビンは手にしたナイフの先を、その写真の人物の、かつては目があつたと思われる場所に突き立てる。

ギギーッ

写真を貼り付けた壁もろとも、新たな傷を刻み付ける。

ギギーッ

ギツ、ギツ……

静かに、写真と壁を抉る音だけが、狭い部屋の中で響き渡る。

ガリッ

最後に爪で引っかくと、ジェビンは一瞬の鋭い痛みに顔をしかめた。

指先から血が滲み、唇を寄せると鉄の味がした。

ジェビンは刃の欠けたボロボロのナイフをジーンズのポケットに捨じ込むと、壁に掛けてあつた革のジャケットを引っ掛けて、玄関

へ向かつた。

途中、閉め切られた部屋の前で立ち止まり、そこへ頬を寄せてドアの向こうに向かつて小さな声で囁く。

「……兄貴は、出かけてくるよ」

ドアの向こうから返事はないが、ジョビンは確かめるようにドアを手のひらでそっと撫でると、身を翻してアパートを後にして、両手をジャケットの中に入り込んで、背中を丸めて廊の中を歩く。

ナア ナア

不意に、尾を引く、甘く媚びるような哀切な泣き声が路地裏から聞こえてきた。一瞬、赤ん坊の泣き声と間違えそうになるが、よく聞いてみれば子猫の鳴き声だと分かる。

そう言えば、昨日の夜からアパートの外でしきりに鳴いてジョビンの安眠を妨害していた。

ジョビンはジャケットの襟を立て直し、鳴き声から耳を塞ぐよう

にその場を立ち去った。

治安の悪さで知られるソウルの裏通りを迷いのない足取りで進みながら、ジョビンは雑居ビルの地下にあるバーへと下りて行く。

「よお！ ジョビンじゃねえか」

「久しぶりだな。調子はどうだ？」

ジョビンが店内に入るや否や、馴染みの客たちが声をかけてきた。ジョビンが口元だけで笑いながら店内を進んでいくと、スキンヘッドに丸めた頭にバラのタトゥーを入れた男が横から現れ、馴れ馴れしくジョビンの肩を抱いた。

「相変わらずつれねえな。すっかりご無沙汰だつたけど、何してたんだよ？ 寂しかつたんだぜ」

ジョビンは男を見もせずに店の奥のカウンター席に腰を下ろすと、低い声でボソリと呟いた。

「……新しい情報、入つたか？」

「ああ……あるぜ」

男はそう答えると、素早くカウンターの中のスタッフに目配せした。スタッフはジョビンに気付かれないよう微かに男に頷いて、制服のポケットに手をやつた。中から一瞬覗いたキーの柄がキラリと光つた。

「今度のは、確かなスジのとつておきの情報だ。」「じや ちょいと
言えねえから、場所変えようぜ」

男の手がジョビンの細い腰に回され、いやらしく蠢く。ジョビンは表情一つ変えずに男に促されるまま立ち上がった。

「……あつちく」

男はジョビンの耳に口付けせんばかりに唇を近付け囁く。男はさりげなくカウンターに合図を送つて、スタッフが滑らせたキーの上に隠すように手を重ねた。

その時だつた。

ダンツ!!

短く重い音が響くと同時に、キーの上に重ねた男の手の甲には、直角に突き出たナイフが刺さつていた。

「つぎやああああああああああつつ……」

店内を凍りつかせるような悲鳴を上げ、男はカウンターに手^さとナイフで縫い付けられたままガクンと膝を折る。

「……ジョ……貴……様……」

息も絶え絶えになりながら、冷たい目で見下ろす隣りのジョビンを振り仰ぐ。

「ガセネタで抱ひつなんて、団々しそぎないか?」

抑揚のない声でそう呟いてカウンターの中のスタッフに視線を移すと、スタッフはヒツと息を飲んで身をすくめた。

「相手して欲しけりや、いい加減まともなネタ持つて来い」

ジョビンは膝をつく男の髪を掴んで、引き上げた顔にその美しく表情の無い顔を近づけた。

「……また来る」

男の髪を掴んでいた手を離すと、ジョビンはポケットから取り出したウォン紙幣をカウンターに置いて、店を後にした。

親指で頬を擦ると、先ほど男の手を串刺しにした時に飛び散った返り血が、乾いてこびりついていた。

見ればジャケットにも転々と血の跡がついている。ジョビンはジャケットを脱ぎ去つて腰に巻くと、もう一度顔に血の跡がついていないか確認してから、煌々と明かりを灯すコンビニに入つていった。

数分後、コンビニの袋を提げて、ジョビンはアパートの前の道を歩いていた。

行きがけに聞こえていた路地裏の猫の鳴き声が今は止んでいる。ジョビンが鳴き声のした路地に入つていくと、湿つたダンボールの中で小さな小さな子猫が一匹、寄り添いあつたまま冷たくなつていた。

ジョビンは眉を寄せて、コンビニの袋の中に視線を落とした。

また今夜も鳴かれたら、適わないから

そう思つて買ったミルクのパックが、ズシリと腕の中で重みを増す。

そつと手を伸ばして小さな身体を人差し指で撫でてやると、雨に

打たれて固く冷たくなった毛並みがしつとりとまとわりついてきた。その瞬間、どこで見ていたのか、灰色の瘦せ衰えた猫がジョビンの前に降り立つた。毛並みの悪い全身を逆立て、威嚇の証である耳を小さな頭に張りつかせんばかりに倒しながら、金色の瞳孔だけをギラギラと輝かせてジョビンを睨みつける。

きっと、この子猫たちの母親なのであるうその姿に、ジョビンはそつと踵を返して、哀れな猫の親子たちに背を向ける。

無駄になつてしまつたミルクパックをその辺に捨てて帰ろうか、そう思った時、朝聞いたのとは質の異なる鳴き声が聞こえてきた。

……ツフ……ツフ

息を殺すよつこ、控えめに吐き出される音は、口元に手の甲を当てているのか、ぐぐもつて聞こえてきた。

ジョビンが声の在りかを求めて視線を巡らせると、悪臭を放つゴミの集積所のポリバケツの影から、骨と皮のよつな一本の素足が伸びていた。

死体か？

一瞬そう思つたジョビンだが、寒さに小刻みに震えているので、その持ち主がまだ生きていることが分かつた。

ジョビンは近付いていつて、その足の持ち主の身体を隠していたポリバケツの上に屋根のように被さつたダンボールを勢いよく取り払つた。

急に開け放たれた視界に、ゴミの影で蹲つていた少年は、ビクツと身体を震わせてジョビンを見上げた。

丸く見開かれた幼い瞳は、雨に濡れた路面のように濡れて光っていた。

その目が、つい先ほど人差し指で撫でてきた小さな生き物の姿に重なつて、思わずジェビンの口を突いて出た言葉は

「……猫？」

潤んだまま、更に怯えたように大きく見開かれる瞳に、ジェビンは無意識の内に手を伸ばしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9237m/>

ハルラン～雨を呼ぶ猫の歌～

2011年11月30日20時09分発行